
ユグドラシル

睦月レン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ユグドラシル

【Nコード】

N7522B

【作者名】

睦月レン

【あらすじ】

世界樹、別名ユグドラシルによって支えられている世界では静かな時が流れていた。しかし、一つの都市の虐殺事件を機に、世界は緊迫した情勢になっていく。その事件から七年。虐殺事件で妹を失った主人公ラフィストは、事件の真相を知る為に旅に出る事を決意。旅の途中で出会う仲間と共に、世界で起こっている出来事を解き明かしていく愛と友情の冒険ファンタジー。

一序章 一く予兆く（前書き）

作中に登場する通貨単位『ギル』は、1ギル＝1000円の感覚でお読み頂けると、分かりやすいかと思います。

一序章（予兆）

「おばあちゃん！おばあちゃん！どこ！」

人々の狂ったような声が響く中、少女はただひたすら叫んでいた。叫ばずにはいられなか

った。叫べば誰か助けてくれるかもしれない。いや、この街にはいなくとも大好きな兄が

きつと駆けつけてくれるはず。そう少女は信じ、はぐれてしまった祖母を呼び続けていた。

叫びながら歩き回っている間少女は多くの死体を見た。中には自分と同じくらいの少年の

死体もあった。顔を煤だらけにし、所々傷も出来ていたが、それでも少女は街の中を歩き続けた。

「おばあちゃん！」

「……おい、こいつか？」

「誰！？」

歩くのに精一杯だったせいかわりに背後に人がいる事に少女は全く気づかなかった。体に傷も無

く、鎧を身にまとっている事から侵略者である事は明らかに目に見えていた。とっさにそ

の場から逃げようとするが既に周りは侵略者によって囲まれていた。

「わからん。一応連れていくか」

「やだ！やだよう！！離して！！！！お兄ちゃん、お兄ちゃん！！！！」

兵の一人が少女を連行し、後には死体だけが残っていた。

その日は晴れた、これといっていつもとは変わらない日だった。ラフィストはふと北の空を見上げ愕然となった。妹がいるはずの街の上の空は、赤黒く輝いてた。その日こそ貿易で栄えた都、ランツフィートが落ちた日であり、またラフィストが妹を亡くした日でもあった。あれからもう7年が経った。今日も天気はよく晴れている。こんな日はつい亡き妹の事を考えてしまう。

「ラフィスト！」

「ラ…ラナか…驚いた…」

ラナは近所のパン屋の娘である。明るい性格の彼女は妹を亡くしてからというもの、よく俺の世話をやいてくれていた。

「またジュリアの事思い出してたの？…そうよね、忘れられないわよね」

ラナは綺麗に並んだ石畳の上を、軽快なステップで2、3歩歩き円のようなターンで振り返る。

「全く困っちゃうわよね…急にあの温厚な王が戦を仕掛けてくるんですもの。安心してらんないわ。…でも、何で急に戦争が起こったのかしら？私は王が変貌したのには何か理由があるからだと睨んでるんだけど…と！お使いの途中なんだ。じゃあね！あんまり落ち込まないで？…無理、か」

こう言って長い栗毛のお下げを二つ風になびかせながら走り去った。

「アンカースの王が豹変した理由、か…」

そんなの、何度考えた事だろう。それを考えると眠れなくなる日も

しばしばあった。しかし今はそれを調べる手立てが無い。結局は自分は無力なのだ、何も出来ないのだと思いきや、考えを改めていったってどうにもならない、仕方ないんだと思い、ラフィストは家路につく。通りの曲がり角を曲がろうとした時、家の近くに住む男達の話し声が耳に入ってきた。

「なあ、知ってるか？ ついにこのグラン王国からあのアンカース王国に調査団を派遣するらしいぞ」

「お前馬鹿だなー。調査団なんて表向きに決まってるだろ？ 本当はアンカース王暗殺が目的に決まってるじゃないか」

「！？ それ、本当なのか！」

「ラ、ラフィスト！……く、苦し……」

思わず掴みかかっていた事に気づき、手の力を緩め事の一部始終を教えてくれと頼み込んだ。街といってもそんなに広い訳ではない。皆ラフィストの妹がラッツフィートの事件に巻き込まれ、なくなっている事を知っていたので、わりとあっさりと教えてくれた。

「つまりだな。国力もついてきた事だし、アンカース王国に7年前の事だとか口実つけて攻め滅ぼしちまおう！ って考えさ。だが問題があつてな……国王が変な魔術を使うとか最強の魔導士がお抱えにいるとかで手が出せないらしい。そこで、世界中から腕利きを募集し、王やその周辺を一掃しようって腹さ」

「暗殺……」

「ま、まあ変な事考えずにお前は家に戻りな。そういった事は他の奴らがやってくれるだろうし、俺らには関係ない話、だろ？」

「調査団、か」

―夜、自分の部屋の寝台でラフィストは昼間の会話を思い返していた。

（本当は俺だって、殺してやりたいさ……でも）

“急に王が変貌したのには何か理由があるんじゃない？”

（アンカースの事だけじゃない、ランツフィートの事件の事もそうだ。今の俺は、何も知らな過ぎる……それでいいのか？）

気がついた時にはラフィストは寝台から立ち上がっていた。古びた木の机の引き出しを開

けてありったけのお金を革袋に入れ、着がえの荷造り、地図、方位磁石など旅支度を整え

ていく。両親が寝静まった頃を見計らい家を飛び出した頃には既に夜はとっぷりと更けて

いた。体には鎧を身に纏い、手には先祖から伝わる剣。少々重い気もしたがそんな事は気

にならなかった。10分くらい歩いたところで懐かしいように感じる我が家があるホール

ス村を見た。明かりなど何一つ見えなかったが、それでもラフィストには確かに自分の故

郷を感じ取っていた。

「父さん、母さん…ごめんよ。俺、行きたいんだ……ジュリアの為に、自分の為にも」

ホールス村から背を向け、ラフィストは歩き出す。その胸に妹のペ

ンダントを光らせて。

一序章 一く予兆く（後書き）

作者が運営しているサイトでも掲載している物ですが、少しでも多くの方に読んで頂きたくて投稿致しました。何か感想があれば、作者も喜びますのでよろしくお願い致します。

一章一（仲間）

「ひえー、やっぱ王都は違うよな。街とは比べ物にならない…」
空まで突き抜けそうな城を見上げて思わず呟く。

「それより早速王に会いに行かないと……うわっ！」

「きゃっ」

誰かとぶつかり（おそらく女性だろう）一瞬よろけたが、相手は転んでしまったようだ。ラフ

イストは相手を見やり、手を差し伸べると、おずおずとだが相手の少女はラフィストの手

を取った。はにかんだ笑顔が可愛い、ブロンズ髪の美しい少女だ。

「ありがとう。……！いけない！！そろそろ……」

城に掛かっている時計を見やると少女は足早に走り去っていく。そんな少女の後姿を眺め

ながらラフィストはしばしの間ぼんやりとしていた。城下の人々からの奇異の視線に気づ

き、城に向かって走っていく間も顔の火照りと彼女の面影は消えなかった。

「王、調査団希望者が来ましたぞ」

「うむ、ご苦労であった」

王への目通りが思いの外すんなりいった事に驚きつつも（希望者が少ないのかもしれない）、

ラフィストは王の御前で深々と頭を下げていた。

「ふーむ、ホールス街のラフィストか……剣士なのだな。して、参

加動機は？」

王の透き通るブロンズの瞳に見つめられ、戸惑ったが言葉は勝手に出てきた。

「…俺は、何も知らな過ぎるから…知りたいと、思ったんです。ラ
ンツフィートの事も、
アンカースの事も」

「ほほう……少々甘い性格のようだが、わしは嫌いではないぞ。よ
し！許可証を与えよ
う！！……許可証をここへ」

「はっ！」

「あ、ありがとうございます！」

俺をここまで案内した老将軍が一枚の紙切れのようなものと金貨が
入った革袋を俺に手渡

す。許可証があれば国境を渡る事が出来るとの事だった。

「おお、それと言い忘れておったが他に二人の志願者がおるからそ
の者らと一緒に旅立つ

がよい。んおっほん、では……」

「お父様！」

バンツと派手な音を響かせて扉を開け、ずかずかと入り込んできた
者の顔には見覚えがあ

った。さっき会ったあの少女だ。

「君は……」

「お父様お願いでございます！私も調査へ行かせて下さい！！城に
いるだけなんて嫌です
わ！！！！」

「何度言ったらわかるのだ！駄目だと言っているだろう！！」

どうやら俺の事は完全にアウトオブ眼中のようだ。そんな事を考え
ているうちに二人の口

論は終わりを迎えていたらしい。

「もういいです！お父様の馬鹿！！大嫌いですわ！！！」

「ガーネット！」

きた時と同じようにけたたましい音を響かせ、少女は王の間から走り去って言った。何と

もいえない沈黙がしばらく流れた後、バツが悪そうに王は口を開いた。

「ラフィストよ…恥ずかしいところを見せたな。だが親として娘を危険にさらす訳にはい

かん…そこら辺もわからんとはまだまだアレも子供じゃな。では後はよろしく頼んだぞ」

「は、はい！」

「ははは…王よ、若いもんは良いですのー。わしも後五年早ければ調査団に行っていたのだが…ま、わしの分まで頑張ってくれラフィストよ」

「うーん、悔しいですわ。やはりお父様に言ったのがそもそも間違いでしたわね。こう

なったら調査団の3人に紛れて旅立つ他ありませんわね！…旅支度も終わってる事ですし、

ばれない様に城を抜け出さなくては」

謁見の間を出たラフィストはその足で兵士の詰め所へ向かった。そこに2人の仲間（になる

であろう）人物がいるのだ。

「すみません…調査団に入られた方が2人いらっしやると聞いてきたのですが…」

ラフィストが部屋にいる数人の男に話しかける。すると奥の方にい

る紫髪の、大剣を持つ

た背の高い男がこちらへと向かってきた。年齢は20くらい、だろう。

「もしかして…あなた、が？」

しかしラフィストの呼びかけもそのままに、男はただ無言でラフィストの顔を見つめる。

「……ふざけるな……」

男はそう呟いて詰め所を出て行った。

「~~~~ッ…！何なんだよっ！！アイツ！！！！」

「もしかしてお前さん、調査団に入ったのか？」

一人の兵に尋ねられた。

「アイツの名はサードって言うのさ。他人とは自分が認めた奴としか馴れ合わない、一匹

狼な奴だ。お前さんも運が悪かったな〜！あ、確かもう一人は“つかれた”とか言って宿

に行ったようだが。元気な奴でよ、野生児〜！！って感じだったぜ」

「そ、そうですか…」

先が思いやられつつもとりあえず先ほど出て行ったサードを追ってみる事にした。ラフィ

ストが詰め所を出、謁見の間へ続く階段の前を通りかかったところで何やら揉めてる声が

聞こえる。……この声はさっきの男、サードだ。

「ただの筋肉馬鹿と田舎の甘ちゃんと一緒になんて冗談じゃない！俺はあんな連中と行く

なんてごめんです！！足手まといだ！！俺一人で行かせて頂く！！！！」

全く、酷い言われようだ。ラフィストは物陰に隠れ会話を盗み聞きながらそう思っていた。

「サード。2人と協力できない場合は許可証を剥奪させてもらう。

……いいな」

「!?! 失礼します!」

王の言葉に信じられないといった顔つきをし、叫んだ後謁見の間を飛び出してきた。隠れていたラフィストは慌てて去ろうとしたがサードに気付かれ、胸倉を掴まれる。

「…不本意だがお前達と一緒に行く。俺には目的があるからな……アンカースへはどうしても行かなきゃならん。だが馴れ合うつもりは無い!……さっさと宿へ行くぞ! 明日の予定はもう決まっている」

そう言ってサードは返事も待たずどんどん先を歩いていく。

「ま、待てよ!!」

もう一人はせめてまともな奴であるようにと祈りながらラフィストはサードの後を追いかけていった。

宿に着くと受付の娘は宿の中で一番いい部屋を王からだ、といって案内してくれた。

「こちらとこちらの部屋でございます。お連れの方が先に201にいらっしやいますよ。」

それでは失礼いたします」

「俺は2人部屋なんて御免だ…202へ行く」

そうサードは言うのと部屋に行こうとした、が

「……いや、やはり先に酒場に行ってくる」

と言い、一人酒場に行ってしまった。(何なんだよ、一体…) ラフィストはとりあえず荷物を

どうにかしたかった為201に入る事にした。ドアをノックすると中から元気な声がする。

どうやら兵士が言った通りの人物らしい。

「入ります」

そう言ってドアを開け、中に入りラフィストは自己紹介しようとした。

「俺はラフィ……あ、お……お前もしかして！ニックス！？な、何でここに！」

「えーッ！！？じゃあ……お前まさかラフィストオオオオオー！？」

「俺、てっきりお前はホールスにいると思ってたぜ！」

「ちよつと理由があつてこの調査団に入ったんだ……家出してきてね」

「うげえええ！い、いえでえええ！？お前、ジュリアちゃんはいいかよ、ほつといて」

「ジュリアは……もういないよ。死んだんだ、7年前に」

「ッ！？わ、わりい……」

ニックスは聞いてはいけない事を聞いてしまった気がした。ラフィストが妹の事を大事に思っていたのを良く知っていたからだ。

「ごめんな……」

ラフィストに聞こえない小さな声でポツリと呟いた。

サードは酒場で1人酒を飲みながら情報収集をしていたが誰も彼も大した情報は持っておらず、サードのイライラは増すばかりであった。

「……役立たずどもが」

チッ、と舌打ちして金を払い部屋へ戻ろうとする。と、ドン！という音と共に誰かがサードに倒れ掛かってきた。

「誰だ！……っ！？」

目の前の人物を見て思わず声を失う。そこにいたのはぐでんぐでん

に酔っ払ってはしまっているがグラン王の娘、ガーネット姫であったからだ。

「ふにゃあぁ……もう、駄目え……うにゃ」

意味不明な言葉を最後にガーネットはサードの腕の中で爆睡してしまった。

「ななな…何で姫がこんなところにいるんだー！！！」

とりあえず201号室にいるであろうラフィストとニックスに後のことを押し付ける為、

ガーネットを負い上への階段を上り始めた。

ところ変わって201号室。ベッドに腰を下ろしているニックスとラフィスト、ソファア

に踏ん反り返っているサードと、やっと目を覚まし、サードが持ってきた酔い醒ましの水

をグビグビと飲み干すガーネットがいた。微妙な沈黙と空気が流れ、何とも気まずい感じ

である。

「ふう、すっきりしましたわ」

「ったく！フラフラになるまで飲むからだ！！」

緊張感の無いガーネットの言葉にさらに不機嫌になるサード。

「あのさ、お父さんも心配しているし城に帰りなよ」

姫の事を心配しているであろう王の事を思い、ラフィストはガーネットに帰るように促す。

ニックスもそうだと言わんばかりにうんうんと頷いている。

「わたくし貴方方にお願いがあって参りましたの！お願い、私も――

――！！！！」

「駄目だ」

間髪いれずにサードが答える。

「ま、まだ何も言ってますんわ！」

「聞くまでも無い。十中八九『私も旅に加えて下さい』に決まっているからな」

「~~~~ッ!!」

サードに言いたかった事を言われ、顔が赤くなっていくガーネット。言い詰まったのか、

助けを求めるかのようにラフィストとニックスの方に視線を向ける。

「んー、サードの言い方はキツイけどやっぱり駄目だよ」

「そーだぜ姫さん。旅ってのは楽しいんじゃないって辛いんだからさー」

「そ、そんな事言われなくてもわかってますわ！私は何もしないでいるのが、無責任に見えるだけなのが嫌なんですの！！私にだって出来る事ぐらいあります！！！」

机を叩いたショックでコップの水が零れてしまっている。ガーネットの気持ちは痛いほど

わかるがやはり危ない事には巻き込めない。

「俺たちは君を守る事が出来るほど強くは無いんだ…だから、本当に一緒に来る事は危ないんだよ……」

「…お前達と一緒にするな」

「じゃあ貴方達！回復魔法は使えますの？私は攻守両方の魔法が使えますし、後方支援も

得意ですから絶対、ぜえーたい役に立ちますわ！！」

「うひゃー！魔法使えんの！？スッゲー！！！」

そう叫んだニックスをサードとラフィストがどつく。ニックスの言葉にガーネットは満面

に得意そうな笑みを浮かべている。

「確かに回復魔法は出来ないが、薬草でも回復できる」

「そ、そうだよ！だから…ね？」

何とかガーネットを説得し、諦めさせようとするが得意そうなガーネットを前にしては無

理なような気がした。

「あら、戦闘中に薬草煮詰めてる時間なんてないんじゃないくて？」

「……………」

誰ともなしにため息が漏れ、結局旅の仲間にガーネットを加える事が決まった。

「はぁ〜〜えらい事になっちゃったな〜」

「その代わり！我儘言ったらその場に置いて行くぞ！！いいな」

「はい！ありがとうございます。これからよろしくお願い致しますわ、ラフィー、ニックス、サード

ん♪」

「さ、サードんんんん！？」

ガーネットに“サードん”何て言われ青筋を立てるサード。

「サードでいい、サードで！！」

「まあ、何はともあれよろしくなガーネット、サード！」

「おいおい…ラフィースト、俺にはー？」

「ああ、ゴメンゴメン…ニックスもな！」

ある事に気がついたらしいサードがはっと顔を上げ、深刻そうな顔をして呟いた。

「おい…部屋、どうするんだ…………？」

「あゝっ！」

「女の子に床で寝ろとは言えないし…それに男と一緒にの部屋って言うのも拙いよな」

「んじゃラフィーストとサードと俺の3人で一緒に寝るか！だから姫さんは202号室を使

つてくれよー！！」

「…………先が思いやられるぜ」

「まあまあ、いいじゃないか、サード…」

「皆様、本当にごめんなさいね…それじゃあ明日に備えてもう寝ま

すわ。おやすみなさい」

「お。お休み…」

どうやらとんでもない旅になりそうである。

——翌朝。

「おっつはようございまああーす！元気ですか！？私はとっても元気ですわ♪さあ！夢

と未知の旅へ旅立つのですよ！！」

物凄い勢いでドアを開け、大声でラフィスト達を起こしたのは城出娘のガーネット姫だ。

「…おい、まだ4時だぞ」

サードが布団の中で呟く。

「私！今日は3時から起きていましたの！！」

「……早いだね」

「当ーッ然ですわ！さあ、ニックス！起きてくださいまし！！」

毛布の中で丸まって爆睡しているニックスをガーネットが激しく揺さぶる。その勢いに負

けたのか観念したようにニックスが毛布の中から顔を出した。

「…こんな早くから一体どこに行くってんだよー、姫さーん」

「ニックス！姫さんではなくガーネットですわ！！」

サードは布団の中で着がえた後、眠そうに立ち上がり

「今日はまだ旅には出ないぞ。作戦を立て、情報を集めないといけないからな」

と言う。するとガーネットの顔がみるみるうちに曇っていく。

「早く…この城下から出たいんですの見つかったら私…きつと連れ戻されてしまいます

わ！！」

そういつて泣き崩れるガーネットに3人は眉間に皺を寄せながらも

顔を見合わせ、頷きあ

う。早く立つ事でガーネットの気が収まって大人しくなるのならという事での決定事項だ。

「……分かったよ」

「じゃあとりあえず近くの村か街に行くか!…どこに行く?」

ニックスがラフィストの荷物をあさって地図を取り出し、それをベツドの上に広げる。

「あのうー…私…ココがいいですわ」

そう言つてガーネットはグランの南西を指差す。そこは紛れも無くラフィストの故郷、ホールスだった。

「だっ…駄目!そこは絶対に駄目!」

慌てて叫び、ガーネットの言葉を制す。

「何でですか?何か都合の悪いことでもおありになって?」

目を点にしながらガーネットが尋ねる。本当の事を言い辛いラフィストはしどろもどろな状態で焦り始める。

「あー…いや…その…あの…」

「あのさー、そこラフィストの故郷なんだよ。コイツも家出してきたから拙いんだって、ソコ行くの」

「ニックス!」

ニックスがペラペラと喋ってくれたお陰で、俺は少し恥ずかしくなつてしまった。もう何

て言ったらいいかも分からない状態だ。

「あら、そうでしたの?ならこっちの方にしましょうか?」

こういうガーネットに対し

「早くお前もお家に帰ったらどうだ?パパとママが恋しいんじゃないか?」

と言うサード。何て素晴らしいパーティーなんだ、と顔を引きつら

せて思わず笑う。

「あー、えーっと…俺の事はいいだろ！じゃあ魔道の都カダンツに行く事に決定！！異議は無いよな！？」

「……ラフィスト、変わったな」

「ラフィー、遅しくって素敵よ♪ガーネット、ときめいちゃった」

「…はは、ありがとうガーネット」

「おい、そろそろ行くぞ！」

話している間に準備したのか、出立の準備が出来た姿でサードが叫ぶ。少し不機嫌そう

ところからして実は朝は弱いかもしれない。

「ああ、行こう！」

「うーし、目指すはカダンツだー！」

「……その前に着替えたらどうですの、ラフィー、ニックス」

寝巻き姿の二人を見てボソリと呟くガーネット。

「早くしろよ」

さらに眉間に皺を増やしたサードが一言付け足す。俺達の着がえを見ないようガーネット

を部屋の外に追いやりながら。

一二章一〇魔導都市カダンツ

机に向かっている人物は、何かに苛立った様にペン軸の先を羊筆紙に叩きつけている。今

日はこの人物にとって何もかも上手いかない日であった。仕事の一つである古文書の解

読もまったく進まない。このままいつそ知らない振りをして仕事を放りだしてどこかに行

くかと思っていた矢先である、タイミングよくノックの音が響き渡った。

「坊ちゃんま…少し休憩にしてお茶に致しませんか？」

「ジャンク、良いタイミングだよ。ちよつと休憩したいと思つてたんだ」

そういうと彼は机の上に散らばった紙を片付け始めた。お茶の準備をしているジャンクと

呼ばれた執事がふとそちらに目をやる。いつもらしくない紙の上の様子に幾分か驚きを込めて口を開いた。

「珍しいですね…坊ちゃんまが全然仕事はかどつてないのは」

執事にまで心配される自分に対して情けなく思つたのか、彼はふうと一つため息をついた。

「まあ、ね…何かちよつと嫌な予感がするんだよね。大体こういう時ってさ、良い事無

くつて。あー…現実にならなきゃ良いけど」

ここはカダンツ、魔導の都。これまでの道中ラフィスト達は何度か

魔物に遭遇したが、こ
こ周辺の魔物はあまり強くなく（むしろ弱かった）ラフィスト達は
苦労もなくカダンツにつ
く事が出来た。

「ステキ！ここがカダンツですのね！」

周りでは色々な店が出ているようだ。話を聞くとここに出ている店
の約8割は魔導に関する
店らしい。実質的自由都市に近い形を取っているので色々な国の
人が往来を行き来して
いる。その様子をガーネットが見て感動顫わに叫ぶ。そしてそれに
つられる様にニックス
もはしゃぎ出す。

「おーい！転ぶなよー！！」

とラフィストが言うや否や、ガーネットがもの凄い音でこけた。何
かを踏んで滑ったのだ。

「————っ！いったーい！！何ですの！？」

ガーネットが自分の足元にある物を思いっきり引っぱり出す。それ
は上品な色合いのショ
ールだった。自分が転んだのが恨めしいのかショールに向かってガ
ーネットは涙目で睨ん
でいる。その様子をサードがやれやれといった顔つきで見やり、大
きくため息をついた。

「とにかくさ、折角拾ったんだしこれ届けてあげようよ」

「それもそうですわね…さぞや困ってると思いますわ。そうよ！こ
れを私たちで届けて差
し上げましょう！！」

ラフィストがガーネットをなだめている間にニックスがガーネット
の手の中にあるショ
ールを受け取り、表や裏をチラチラと見た後、一点を凝視する。

「んー、何て書いてあるんだろ？名前…だよな、これ」

そう言って文字が書いてある部分を指差しながらラフィストを手招きする。ラフィストが

覗き見ると明らかに公用語で書かれた文字であった。一同はニックスの言語力に呆れながら流麗に書かれた名前を読み上げる。

「これは……リ……サ……ドウェー……」
「リーサルミッドウェー」だな」
サードが読み上げ名前にガーネットが首を傾げ、口を閉ざす。何か記憶を巡らしているよ

うだがラフィスト達は彼女の様子に気づいてはいなかった。

「とりあえずさ、これ届ける人と宿の予約取る人で別れようか」

「あゝ、絶対このショールの持ち主は若い美人で年は……そうだなあ……20〜28ぐらいとみた！うゝん、楽しみだぜ〜！な、ラフィーー！！」

「おい、ちゃんと前見て歩けよ……それに50ぐらいのおばさんでも嫌な顔するなよ、ニックス」

ショールを持ち鼻歌交じりに歩くニックスに半分呆れつつ、この組み合わせで行く事になった事に後悔していた。このニックスの浮かれ調子では何かトラブルを起こすかもしれない、と思ったからである。そうこう考えているうちに目的の場所に着いたようだ。道行く

人に場所を聞いたらこの道をまっすぐ行けば直ぐにわかると言われたが、彼らの目の前に

あるのは通り2、3個分の幅を取るような城のような豪邸であった。

「す……凄いな……確かにこれなら直ぐわかるっていうのも頷ける気がする……」

「ま、まあとにかくこれ届けようぜ！ごめんくださー！いつっ！」「ベルがあるのにベルも押さず、ニックスが大声で叫ぶ。あまりの大声にラフィストもとっ

さに耳を塞ぐ。すると家（？）の中から、一人の熟老の執事が猛ダツシユで飛び出してきた。

「五月蠅いわ貴様！一体何者だ！！」

「おいおい：貴様はないだろう、執事さんよ」

明らかにこちらが悪いのにニックスがつっかかり始める。

「ニックス！止めるよ……すみません、このショールを道で拾ったんですが、ここに書いてある『リーサミッドウェー』さんってここの家の方で合ってますよね？届けにきたんですが……」

「ああ、それは確かに奥様の……しかし今家に奥様はいらっしゃらないので坊ちゃまに確認して頂きましょう」

先ほどと全く変わらず真っ白な状態の羊筆紙を眺めてため息をついているとノックの音が響き渡る。

「あの、坊ちゃま……」

「何？」

お茶はさっき済ませたはずだ、お茶ではないだろう。いささか恐縮したような執事の態度に一体何の用か疑問だけが湧き上がる。部屋には極力入らないように言っているし、長年一緒に居るこの執事は自分の邪魔になるような事はしないように気をつけてくれている。

その彼が恐縮してはいるが自分呼びにくるとは客人でも来たのだ

ろうか。

「今：奥様のショールを届けて下さった方がいらっしゃって……申し訳ないのですが奥様

の物かどうか、確認して頂きたいのですが」

告げられた内容を聞き、本日数十回目の溜息がこぼれた。要するに、変な物取りか何かか

も知れないから自分を呼んだのだ。これが多分今日感じていた厄介事なのだろうとペンを

放り投げ、階下へと向かう為席を立った。

ラフィスト達を玄関先の広間に案内して執事は奥にある階段を登っていった後、ラフィス

トは悪戯っぽい笑みを浮かべて『奥様の、だって』と残念がっているニックスに声をかけ

た。その後、暫く座り心地のいいソファでくつろいでいると足音が響き始める。どうやら

呼びに言った執事と、もう一人の人物がやってきたようだ。

「おっと、着たみたいだなラフィー」

ああ：そうだな：と言いかけて言葉が止まるラフィスト。目の前に居るのはどうみてもお

坊ちゃまというよりお嬢様に近かったからだ。

「ふうくん：で、何のよう？」

「は？」

彼の第一声を聞いてラフィストは思わず困惑する。用件は執事から聞いているはずなのに

いまさら何を言いたいのか解らないからだ。

「もしかしてお金？ま、そうだよね：ただでそれを返したくないもんね」

これには流石のラフィストも相手が何を言いたいのか、理解する事が出来た。届けに来た
シヨールと引き換えに金を強請りに来た物取りと勘違いされているのである。

「——っ!? ああ! 俺達そんなつもりじゃ——」

「まあとにかく座って話そうよ: 僕が疲れるし」

こちらの言い分を遮りどっかりとソファに座り執事に何か言いつけている姿を見て、隣に

居るニックスは怒りの限界点がかなり近くなっている。かくいう自分の限界も近くなって

いるのだがニックスは明らかに自分以上に腹を立てているようだ。

ブツブツと生意気なヤ

ツだと悪態をついている事からもその様子が窺い知れた。サード以上の生意気且つ自分勝

手振りにラフィストは内心大きな溜息をついた。

「サード! こちらの方がいいんじゃないかって?」

あちらこちらをウロウロ行ったりきたりしていたガーネットが少し離れたところに居るサ

ードを呼ぶ。宿の予約を済ませた二人は旅に必要なものを買出しに來ているのだ。

「馬鹿! 値段を良く見てみろ!! 安すぎるだろ!? そういうもんは大抵すぐに駄目になる

んだ!! だから多少値がはっても高い方がいいんだよ...ああ、あいつらとお前だけでは絶

対買出しに出せないな……」

「そこまで言わなくても……」

「ガーネット様? もしかしてガーネット様ではございませんか!？」

サードに痛いところをつかれ、ガーネットは涙目になりいじけ始める。そんなガーネット

の背後から女性の声がかかる。

「ほえ？えっと……」

「私です、リーサですわ。ああ、前にお会いした時はまだ7歳でしたものね」

「あ、あー！聞き覚えある名前だとは思ってましたけど……あのショールはリーサのだった

のね！！町であなたのショールを拾ったのよ。それでさっきラフィーとニックスに届けに行ってもらったの」

「……もっと早く気づけよ……」

はしゃいだ様子のガーネットにサードがボソリとつつこむ。

「まあ……それではガーネット様家にいらして下さいな。お友達もそこに居ることでしょう

し……お礼も兼ねてお茶をお出し致しますわ。さ、参りましょう」

買い物……と文句を言うサードを引きずる形でガーネットとリーサは馬車に乗り込み、ミ

ッドウエー邸へと向かった。

「ちょっと！早く言ってくれない？僕だって暇じゃないんだから！」

「だーかーらー金是要らねえつつってんだろ！？」

その頃ミッドウエー邸ではニックスと少年が激しく口論している。

もういい加減にしてく

れと思っても全くその討論は止む気配がない。溜息をひっそりとつき、横に控えた執事の

方を見ると彼も同じように溜息をついていた。かれこれ一時間以上もこうしていてよく息

が切れないものだとは半ば感心するほどである。そんな事を考えていた時、玄関の方で鐘の音が聞こえた。

「ただいま。……あら？ジャンクいないの？ジャンク!？」

「坊ちゃんま…奥様がお戻りになられましたので少し向こうに行って参りますね」

自分の名前を呼ばれ、この場から解放されるからか足早に去っていた。

「もう!すぐに出てきなさいと言ったでしょう?…お客様はこっちかしら」

そう言いながら入ってきた夫人は若いとは言えないがなかなかの美人だ。そしてその後ろから最近では見慣れた者が入ってくる。

「ガーネット!それにサードも!?!どうしたんだ、二人共!?!」
入ってきた者を認識し、思わず叫ぶラフィスト。どうやら驚いたのはラフィストとニックス

スだけでなくあの少年も驚いているようだ。

「ガーネット姫!?!何でこんな所に!?!……城出されたという噂は本当だったのか」

「あらあら……ティーシエルじゃない、御久し振り♪前に会った時よりも女の子らしくな

ってきましたわね。……男のく・せ・に!」

「……っ!それを今度言ったら魔法をお見舞いしてやるからな……っ!」

ガーネットにティーシエルと呼ばれた少年は何やら嫌そうな顔をする。そんな二人のやり

取りを気にせずに夫人はラフィストとニックスの近くに近づいてくる。

「貴方方ね、ガーネット様のご友人で私のシヨールを届けて下さったのは」

物腰豊かに話しかけてきた夫人に少し緊張しながらも手に持っていたショールを手渡す。

「……お前達、お金が欲しいんじゃないのか」

「ティーシエル。もうちょっと素直になりなさい……さ、お茶にしましょう！喉が渴いた

でしょう？ジャンク、お茶を入れて頂戴」

「僕はティーシエル、ティーシエルⅡミッドウエーだ。性別はこれでも男だからね！」

「誕生日は5月24日で双子座のA B型なのよね。それで歳は18歳！私と最後に会った時

は160cmくらいでしたけど……あれから背は伸びまして？」

母親に自己紹介を促され、無愛想に答えるティーシエルの言葉に楽しそうにガーネットが

付けたしを加える。しかし見れば見るほど女の子に見えるほど華奢で可愛い顔をして

いる。しかも彼は俺より一つ年上だったという事に驚きを隠せないでいた。

「165cm！……チッ！そんな調子で旅に出るの？さっさとお嬢様は城に帰りなよ！！」

飲んでいたお茶を机に叩きつけてティーシエルがガーネットに罵声を浴びせる。その横で

執事が慌てて布巾を取り出し、こぼれたお茶を拭いている。

「ティーシエル！行儀が悪いですよ！！それにアンカース王国の事は国全体の問題！それ

を解決なさろうとしている立派なガーネット様に対して何て事を言うの！？謝りなさ

い！！」

息子の態度に対して厳しい言葉を浴びせるが、ティーシエルは謝るところかさらに続ける。

「だいたい、魔法だって誰にも負けない、って言えるのは回復と光魔法くらいじゃないか！

しかも全部ミッドウェー家受け売りの魔法だぞ？……ふんっ！よくそんな実力で旅に出よ

うなんて思ったもんだよね………」

完膚無きところまで言われて、流石のガーネットも言葉を返せないでいる。そんなガーネ

ットの様子を見て満足そうな表情のティーシエルに向かって、夫人が口を開く。

「あら？そこまで言うのなら…ティーシエル、貴方も調査団に加わりなさい」

「なっ！嫌ですよ！！何でこんなやつらと………」

「これは母親命令です！いいですか！！」

ティーシエルの反論も夫人にかかつては意味がないものになっていた。結局ティーシエル

は渋々ではあるが俺達と共に行く事となった。俺達の意見はそこには皆無だったが、新た

に仲間が増える事は心強い事なので仲間になってもらう事に依存はない。

「僕は司祭レベルの魔導士だ。まあ、魔導士の中のトップクラスに位置している、って事

だね。魔法は全般使えて苦手は無いし、魔力も高い。だから精々足を引っ張らないでよね！

……ったく！！」

「息子は此処の司教であり、父親であるアルベルトよりも魔力があるんです。だからきつ

と皆さんのお役に立ってますわ。特に水を中心とした負属性が得意で………そういえば主人の

教え子で火とかの正属性が得意な子がいたわねえ…今はもう居ないのだけど確か……」

「…ナディア・メイカーでしょ？確か。僕の嫌いなタイプだから良く覚えてる」

ああ、そうですか…と思いながらラフィスト達は彼の言葉を聞いていた。

「そろそろ宿の方へ戻るぞ…買出しも終わってないしな…」

サードがラフィスト達に声をかけ、帰ろうと挨拶している時夫人に呼び止められた。

「今日は是非うちにお泊りになって。主人にも会わせたいし、主人ならアンカースについて多少なりの知識があるはずだからきっと役に立つわ」

アンカース王国と聞いているのは流石のサードもここに厄介になる事を決めたようだった。まあ、

情報はあった方が良くから正しい判断だろう。魔導都市カダントの、日が暮れようとしていた。

一三章 一く消えた島く

「ささ……皆、遠慮せずに食べなさい」

そう俺たちに促したのは司教、アルベルトⅡミッドウエーである。そして、テーブルの上

には今まで食べた事もないような物がずらりと湯氣を立てて並んでいる。

「そういえば……ラフィスト君達は調査団に入ったのだったね。テイーシエルもこれから

君達の仲間になる訳だが……ご覧の通り自分勝手な所があつてね」

「父上！」

「こんな息子だが……呪文に関してはかなりの使い手だ。役に立つ事を祈っている」

「当ったり前じゃないかつ！ 全く……。こんな奴ら、足手まといなだけだ！！」

と、不機嫌そうに料理を頼張るテイーシエル。

「でもさ！ 誰にだって良い所はあるんだから、きつとお前みたいな奴でも良いとこ位ある

よな！！」

何かを悟ったかのように輝いてニックスが言う。そんなニックスの視線を受け、テイーシ

エルは心底気持ち悪いといったように顔を歪める。

「そういえば、さっきナディアオールメイカーの話が出ましたのよ。あの子、今頃はどうして

るかしら……ね、あなた？」

「そうだなあ……『探したい物がある』と飛び出していったきり、だものな。見つかった

のだろうか、『探し物』とやらは」

「フンッ！ナディアの探し物なんか、タカが知れているさ！それに、そんな物嘘かもしれ
ないじゃないか！そうさ、きっと練習が嫌になったんだ！」

手に持ったナイフとフォークを音を立てて置き、ティーシエルが怒鳴り散らすと、アルベ

ルト卿がティーシエルにきつい視線を向ける。

「ティーシエル、そんな事を言うもんじゃない！……ナディアは確かに自由気ままな子だ

った。しかし、嘘をつくような子じゃない。それはお前も解っているだろう？」

「……」

「それに、お前の腕前も素晴らしいが、あの子の腕前も大したものだった。……今は、どの位強くなっただろうか……」

「……ま、僕には適わないだろうけど」

何やら激論している親子に、ラフィストはナディアについて尋ねると、五年前に出て行っ

たかつての教え子だという事を教えてくれた。ティーシエルがあれだけくっつくかかるとこ

ろを見ると、この家に深く関わっていたのだろうという事を感じられた。

「……悪いが、ナディアとかいう奴に興味はない」

我慢の限界だったのか、ちっとも本題に入らない様子にきれたサードが口を挟む。あまり

のサードの態度に、ラフィストはアルベルトに向かって頭を下げる。
「す、すみません……アンカース王国について、何か知っている事はありますか？」

「ああ、そうだったね。……アンカース王国、か。あそこは今酷い状態だ……民は酷く苦

しんでいる。一刻も早く助けてやりたいが、それには国のトップを

まずどうにかしなければならん」

「だけどよー。王さんが変わっちゃっただけで、そこまで酷くなるものなんか？」

自治区に住んでいるという事もあり、国の事情について実感がわかないニックスが、アルベルト卿に尋ねる。

「国だけならば、ありえる話だろう……しかし、事が世界全体に及んでいる所を見ると、どうもきな臭い感じがする」

「何か、変わった事はありませんでしたの？」

ガーネットの問いに、アルベルト卿はしばし考え込む。暫くして、そういえば……と何か思い立ったかのように顔を上げる。

「アンカース王国とは国交が途絶えてしまって、あの国の事を知るのは今や非常に困難だ。

そんな中、人伝に聞いた話で信憑性は薄いのだが……アンカースの位置する大陸の北西にある島が、王が変わる前に起こった大きな地震と共に沈んだというのだ」

「し、島が沈んだーっ！？……って、え？それだけ？？」

「それだけならまだ良かったのだが、その島には聖なる樹があつてね。それだけに、少し気になっているのだよ」

「世界樹」

「え？」

アルベルト卿の言葉が終わるか終わらないか位の時に、さっきまで黙って話を聞いていたティーシェルがポツリと呟く。

「何だ、それは」

「神話に出てくる聖なる樹の名前だよ……別名ユグドラシルとも言
うらしいけど。世界樹

は、この世界の全てを支えている……もし無くなっているのなら、
この世界も消え失せて
いるはず。きっと今頃、海の中でいきづいているんだね」

「あら、随分詳しいのね。ティーシエル」

「前にちよっと調べた事があってね。何せ世界樹の葉は不滅の肉体
を与え、樹の上にある

とされる雫は無限の魔力や力を与えてくれるらしいし。……でも、
世界樹に入るには資格
が要るんだ」

「入る……？ 資格……？」

「世界樹は生きている。それゆえ、自分と関わる人間を選ぶ。そし
て、その選ばれた者の
みを世界樹に取り込んで……つまり、その中へ入る事を許す、とい
う訳さ」

「あー、俺難しい話なんてわっかんねーよ！」

ニックスがティーシエルの話にうーとか、あーとか奇声をあげなが
ら頭を悩ませている。

「簡単に言うと、沈んだ島にはこの世界の元があったんだよ」

ニックスのあまりの煩さに、サードが投げやりにニックスに返す。
それではあまりに簡単

過ぎるような気がするが、何故かニックスはそれで納得していたの
で、良しとしよう。

「もし、次に向かう当てがないのなら商業が盛んなルネサンスに行
ってみるがいい。あそ
こなら、色々な情報が集まりやすいしな」

アルベルト卿のアドバイスを元に次に向かう場所を商業都市ルネサ
ンスに決めると、旅支
度をきちんとする為に出立を一週間後にする事に決めた。

「ラファイ、お隣の部屋ですから一緒に参りましょう」

と、ガーネットに腕を引っ張られ、ラファーストはガーネットと共に長い廊下を歩いていった。

二人で喋りながらその突き当りのテラスを通り過ぎようとした時、テラスに一人佇んでいるティーシエルに気が付く。

「どうしたんだい、ティーシエル。眠れないのか？」

俺の問いには答えず、ティーシエルは腕の中に顔を埋める。何か、考え事でもしていたのか、心なしぼんやりしているようにも見えた。

「ティーシエル……あなた、ナディアの探し物を知っているんじゃないくて？」

じつとティーシエルを見ていたガーネットが口を開く。

「確か六年前……でしたわね。アルベルト卿があなたとナディアを連れて、城にきたのは。」

そしてナディアは世界樹について情報を求めた……」

「……」

「ティーシエル、とぼけようたって駄目ですわよ！幼馴染なんですから、嘘は無しですわ！」

ガーネットの勢いに観念したかのようにティーシエルは一つ大きな溜息をつき、顔を上げ、

視線をずっと俺達へと向ける。背後にある月の明かりによって光を称えたティーシエルの

瞳は、どこか鋭利な刃物を思わせた。

「……推測は当たらずとも遠からずって所かな。ナディアは、世界樹の葉を求めているんだ。」

七年前、ランツフィートで亡くした弟を生き返らせる為にね。ナディアは七年前、世界樹の根元に行ったが……」

「認められなかったのね」

小さくティールシェルは頷くと、さらに続けた。

「ナディアは足りないものは力だと思った……そして、ここに來た。でも、僕がナディア

と戦わされた時、感じたんだ。足りないのは力じゃない、精神の部分だと」

「……ちよつと待ってくれよ!」

ラフィストが突然叫んだ事で、二人の視線が俺に集まるが、そんな事はお構い無しに言葉を続ける。

「アルベルトさんは“王が変わる前”に島が沈んだって言ってたじゃないか!ランツフィートが滅ぼされたのは王が変わってからなんだぞ!どういう事なんだよ!」

「……つまり、地震のせいで島は沈んだんじゃないって事さ。これは僕の推測だけど、島

はアンカースの者の手によって沈んだんだと思う。そうする目的はわからないけど、そん

な奴がいるんなら……そいつはとてつもない力を持っている事になるね」

「そんな相手がアンカースにいますの!??」

「多分……だけどね。でも、もし世界樹が海の中だとしても、水中に入る方法はあるんだ。

僕の使える禁呪法……でね」

「なら、行ってみる価値はありそうだな」

「アンカースが絡んでいるのなら、世界樹に行く事で答えが見つかるかもしれない。……」

ラフィスト、もし君も何かの答えを求めているのなら、世界樹に行く事が一番なんじゃないかな？」

「そう、なのかな……そういうえば、何だかんだ言ってティーシエルって優しいよな」

「はぁ!？」

俺の言葉に驚いたのか、はたまた照れたのかは解からないがティーシエルがすっとんきょんな声を出し、俺に何故だと詰め寄る。

「だって、ナディアさんの事にしろ、俺達の事にしろ結構考えてくれているじゃないか」

「あらー、ティーシエルは昔っからそうですわよ。素直じゃないだけで」

ね、とティーシエルを指で突付きながらガーネットがからかっている。顔を真っ赤にして口をパクパクさせている所を見るに、誰かにつっこまれたりするのには慣れていないらしい。

「あ、明日は早く起きて特訓するんだろ!早く寝れば!」

苦虫を噛んだように、顔をしかめながらティーシエルが足早に俺達の横を通り抜けていく。

ガーネットの言う通り、素直じゃないがティーシエルの一面を見たような気がして、思わず小さな笑みがこぼれた。

心地良い日の光が庭一帯に差し込む。庭では、ラフィストとサードが手合わせをしており、剣の交わる音が辺りに響き渡っている。近くでニックスが鍛錬しており、ガーネットも皆

の様子を眺めて応援している。そしてそこから少し離れたところで、ティーシエルが椅子

に座り、魔道書を読んでいる。

「もう、あれから五年経つのか……」

ぼんやりと、魔道書から目を移し、庭にいる彼らの姿を眺めながら五年前のあの日を思い起こしていた。

「ティーシエル！……そこにいるのよね、出てきて頂戴！」

物凄い大声で叫ぶのは勿論ナディアだ。司教の息子呼び捨てにするのは奴しかないし、

何より窓の外から大声で叫ぶなんて恥ずかしい真似をするのも、ナディアだけだ。

「……何？」

窓から下の様子を伺うと、髪の毛ボサボサ状態で下から僕の部屋を見上げているナディ

アの姿が目に入った。仮にも女だろう、と文句の一つも言いたくなりティーシエルは口を

開いた。

「ナディア、君ね……髪の毛ボサボサ。それに、こんな朝から何考えてるの？ 全く、これ

だから無教養な奴は困るんだよね。第一……」

「いいから！ 出てきなさい！！」

「……」

何を言っても無駄だと思い、ティーシエルは黙って下に下りて行く。庭に下りて、ナディ

アの目の前に立つと、ナディアが物凄い形相でこちらを睨んできた。

「何だよ、一体」

「……我、神々の力を使わんと欲する者……」

「！何やってんだよ！それは……」

ティーシエルの問いかけを無視し、ナディアが言の葉を紡いだ瞬間、辺りの景色は赤く燃

え、地鳴りと共に雷が鳴り始める。ナディアが紡いだのは、呪文だ

——そう思ったティ

ーシエルはとっさに自分と辺りの物にシールドを張った。流石に辺り一帯全てを守るのは

難しく、ティーシエルの体に限界が近付く。そして、崩れ落ちそうになったその時、先に

崩れ落ち、膝をついたのはナディアの方だった。

「……イ、イヤ……」

「な、何言ってるんだ！それはこっちの台詞だよ！こんな余計な仕事させて……ちよつと、

おかしいんじゃないの！？」

荒い息遣いで、ティーシエルが叫ぶ。術者が呪文の行使を止めた為、辺りから完全に魔道

の波動の余波が消える。そして、それを感じたティーシエルが結界を解いた。

「……私は……オカシイノ……？オカシイ？私……私、が？」

その時、ぶつぶつ呟くナディアに何が起こっていたのかティーシエルにはわからなかった

が、とりあえず事情を知る為にナディアを問い詰める。

「当たり前だ！もう少しで罪もない人々を殺す所だったんだぞ！あれは、禁呪じゃない

か！……って、どうしてお前があれを知ってるんだ？」

「……」

「だんまり、か。……とにかくこの事は父上に報告しておく」

そうしてティーシエルが立ち上がろうとすると、急にナディアが立ち上がった。

「いいわよ、そんな事しなくたって。私、出てくから。私には探す物——うん、見つかるべき物がある。それには時間もかかるし、何よりここにいては見つからない物なの。」

だから……ティーシエル、二年間ありがとう」

そう一方的に告げて、ナディアは走り去って行った。

「ま、待てよ！」

さっきの疲れが抜けきらない重い足を引き摺りながら、ティーシエルがナディアを追いかける。しかし、ティーシエルが門まで辿り着いた時には、既にナディアの姿はどこにもなかった。

「探し物って……何なんだよ、ナディア」

そうポツリと呟いたティーシエルの言葉は、風にかき消されていた。

ティーシエルが一番気にかかっているのは、ナディアが途中までとはいえ禁呪を唱えた事だ。禁呪なんてナディアに唱えられるはずがないし、ましてやあの時ならば尚更だ。ナディアは強くなりたいと二年間やってきた。それが、ティーシエルによって壊されてしまったとまでは言わないが、自身の力という物を自覚したのは確かだろう。そして、世界樹の葉に変わる物を探していた彼女。おそらく、ここを出て行ったのはそれが見つかった、もしくはその手掛かりを手に入れたという事なのだろう。それは即ち死人を生き返らせる術、

という事。ティーシエルにとってそんなのは冗談じゃない、と言いたい事である。

「『自然の摂理に逆らう事は、アンタが男顔になるのと同じ位難しいのよ』なんて言ってた

っけ。……逆らおうとしているのは、そっちじゃないか。腹の立つ」再び目を魔道書の方に戻し、適当にぱらぱらとページをめくり始める。その時、あるペー

ジに目が留まり、過ぎてしまったそのページまで、本をめくって戻す。このページは一般

的に言う、注意書きに当たる所だ。そこには“神々との契約無き者が呪文を唱える事、そ

れ即ち死である”と書かれていた。世界樹に拒絶されたという事は、神々に拒否された事

に等しい。つまり、あのままナディアが呪文を行使していたら……

――

「死んで、いた」

あれは僕の魔道書でも盗み見たのだろう、注意書きのページも読まずに。ただ、強い力が手に入ると思って。

「何て危ない事をするんだ……」

「あら？それって禁呪じゃないのですの？」

いつの間にか後ろに来ていたガーネットがひょっこり顔を出し、ティーシエルの手元にある魔道書を覗き込む。

「禁呪まで勉強するなんて勉強熱心ですわね、ティーシエルは」

いつまでも無遠慮にジロジロと本を見ているガーネットにじろりと一瞥し、ティーシエル

は本をぱたりと閉じる。

「勉強じゃない、調べ事だ。それに、僕は使えるんだ……禁呪」

「ええ！アルベルト卿でも使えないのに！？……って事は」

「確かに、僕はもう父上よりも強い……だけど自惚れてなんかはいないさ。そこで満足したら上を目指せないからね」

「ふーん、そんなもんなのかな」

サードとの訓練が終わり、休憩しに戻ってきたラフィストがティーシエルの前の椅子に腰

をかける。そんなラフィストに、ティーシエルが黙ってお茶をよそってやり、ラフィスト

の目の前に滑らせる。

「あ、ありがとうティーシエル。サードってば手加減無しでやってくるから体の節々が痛

むよ。本人は至って元気で町に買出しに行ってるし……はあ、やっぱ実力の違いかなあ」

ガーネットの回復魔法で傷を癒してもらいながら、ラフィストがぼやく。手はマメを潰し

た後が硬くなっており、よく努力しているのがはっきりとわかる。

「初めはそんなものですよ。最初から何でも出来たら、誰も努力なんてしなくなってしまう

いますもの。頑張ってこそ力を実感できると思いますわ。」

「それに、あのサードって人……旅の経験が相当長いんでしょ？　そう簡単に君に追いつか

れちゃ、彼だって面白くないんじゃない？」

「そっか……そうだね。よし！　俺もっと頑張るよ！」

そう言うラフィストはカップに入ったお茶を一気に飲み干し、勢いよく立ち上がる。再

び庭に戻ってきたラフィストに、一人で訓練していたニックスが話しかけ、一緒に組み手

を始める。さっきまでラフィストが座っていた椅子にガーネットが座り、ラフィスト達の

様子を笑みを浮かべて眺めていた。

「それではアルベルト卿、リーサ……今までどうもありがとう。次会う時も必ず元気な姿

を見せて頂戴ね」

「姫も……そして皆さんも、お気をつけて。ティーシエル、お前も頑張れよ」

「はい……では父上、母上お元気で」

「アルベルト卿、リーサさん……長い間御世話になりました」

世話になったミッドウェー夫妻に礼を述べ、俺達はカダンツを後にした……が。

「だーかーらー！あそこでお前が立ってて、その後ろに魔物が行っただよ！な、分かつ

とけ！それを殴りにかかったんだ！それを、お前が避けるから……！——！」

「はあ！？じゃあ何！僕が悪いって言うワケ！っていうかさー、あの程度の魔物の攻撃位

避けられるから、余計な事はしないでもらいたいね！お陰で痛い思いをしたじゃないか！

「まったく、これだから庶民は……」

そう、それは数分前の戦闘中に起こった。ティーシエルを後ろから狙っていた魔物を倒そ

うと、ニックスが殴りかかろうとした、その瞬間。ティーシエルは魔物に気付き、避けた

所をニックスが……——ボカン。

「本来は痛い思いをするはずのない相手との戦闘なんだから！……ニックスー10点」

「————っ！！」

やはり、誰にもティーシエルに口で勝つ事なんか出来るはずがない。

そして、サードのイ

ライラも頂点に達しようとしていた。

「大体ね、ニックスは——」

「うるさい！ 黙れ！」

サードがついにブチ切れ、声を荒げる。隣で見ているガーネットもやれやれといった表情だ。個々の能力は高いはずのメンバーなのに、どうもチームワークというか、結束力が足りない気がしてラフィストから溜息がもれる。

「……仕方ありませんわね。ここら辺でちょっと休憩でもしましょうか」

「そ、そうだね。じゃあ一緒にお茶の準備でもしようか、ガーネット」

ガーネットの言葉にラフィストは同意し、早々ととぼちちりを受けないようにお茶の準備を始める。その様子に気付いたサードが敵が来たらどうするんだ、と囁み付く。

「じゃあ、僕が結界でも張ってあげるよ……と、その前に」
ニックスの後方に向かって、ティーシエルが杖を向ける。それと同時に、そこから敵がいきなり飛び出してくる。

「……コイツが邪魔だね。ちよつとさがってて。『炎の精霊よ、我に無限の火の力を授け、

禍の者に裁きを与えよ！ フレイム！』」

ティーシエルが何やらブツブツと唱え終わった後、敵が炎に吞まれる。次の瞬間には、既に敵を焼き尽くしていた。

「ひえええええー！これが魔法かよ！？ スッゲーー！！」

一番目の当たりにする事となったニックスが、黒焦げになった敵を見て唸る。ニックスの

様子に満足そうに鼻を鳴らし、辺りを確認した後、ティーシエルが周囲に結界を張った。

「それにしても、さっきの……フレイムだっけ？ 凄かったよなあ！
なあ、ラフィスト！！」

ガーネットと共に入れたダージリンを飲みながら、ニックスがさっきの魔法について興奮
気味に語っている。きつとこの様子では、さっきまでティーシエル
と口論になっていた事
など綺麗さっぱり忘れているのだろう。

「そういえば……フレイムって何クラスでしたっけ？」

「中級。わざわざあの程度の敵に、上級魔法使うまでも無いと思っ
てね」

ティーシエルの言葉にニックスが反応し、こういう所が自信過剰っ
つか、何ていうかな

んだよなあ……などと呟いている。それよりも、二人の話で気にな
った事があったので、
ラフィストはそれについて聞いてみる事にする。

「中級……上級？ どう違うんだい？」

「魔法の威力によって、普通はランク分けされてるんだ。例えば、
火で例を挙げると、一

番下級であるファイアーの威力を1として、それよりどの位威力が
上かによってランクが

決まる。1～5までが初級、6～10までが中級、11～15まで
が上級……といった風

にね。因みに最上級クラスはその魔法の属性と正反対の属性を持つ
者には使えない……僕
の属性は水属性だから」

「火属性の最上級は使えないのか」

「……悔しいけど、そういう訳だね」

「でも、大魔法や禁呪文は使えるのでしょうか？」

空になったコップにお茶を注ぎながら、ガーネットが横から口を挟む。

「使える事には使えるけど、反属性だからね……結構威力は落ちてしまう。だから、属性

に適した魔法が一番威力もあるし、効率的なんだよ」

「じゃあ、火属性に関してはナディアの方が得意分野なのですわね」
♪

ナディアの名前が引き合いに出され、少し機嫌を損ねたかのように見えるティーシェルが更に続ける。

「まあ、魔力にもよるけど……一応そういう事になるかな。だけど！ そんじょそこの魔

導士には例え属性が不利でも負けないけどね」

「自信たっぷりなこと……」

ニックスの様子からして、いい加減聞き飽きてきたようだ。サードなんて我関せずと言わんばかりに、さっさと荷物を纏め始めている。ラフィストは皆を促し、再びルネサンスに向かつて歩き始めた。

一四章一（沈黙の町）

「……ここが、ルネサンス……ですの」

「へ……へえー……」

ガーネットとニックスがポカンとした顔で感想を漏らす。二人がこんな風に漏らすのも無理は無い。アルベルト卿から聞いた話では、商業都市として栄えて

おり、多くの人や情報

が行き交う場所だという事だったからだ。それが今眼前に広がるこの都市は、人影もまばらで、活気が無い。

「私、もつと垢抜けた都会的雰囲気漂う、エレガントかつエッセンシャルな所とばかり思っておりましたのに！」

エレガントやらエッセンシャルやらは意味不明だが、ガーネットが落胆の色を隠せないで

いる事だけは良く分かる。この町の様子には、いつも冷静沈着なサードも驚いているよう

で、町の様子を見て眉を顰めていた。

「それにしても……何か変だ。俺が前に来た時と、大分違っている」「え！？サード（ん）、ここに来た事が！？そ……そうでしたのね」

ガーネットのサードに対する呼び声の微妙な空白と、眉間の皺を一層深くしたサードの様

子が気になったが、あえて気が付かなかった振りをしておく。とりあえず町の入り口にこ

のままいてもしようがないと言うティーシエルの意見に賛同し、町の中に入り、宿を目指す

す事にした。歩き出そうとしたその瞬間、辺り一帯に女性の悲鳴が

響き渡った。

「キャアアアーツ！」

「悲鳴！？行ってみよう！」

「ああーん！待ってえー」

「おいおいおい！置いてくなくてえー！」

「……下らん」

「サードの言う通りだよ！悲鳴に関わるとロクな事が無いなんて、子供でも知ってるよ！

どーせ、魔物とかいるんだろ？こんな所。ありきたりなんだよね。それに昔から言う様に、

君子危うきに近寄らずって諺があって……」

「……ティーシエル、舌咬みますわよ」

ラフィストが真っ先に駆け出し、声のした方へと向かう。それに勢いよくニックスとガー

ネットが続いて走り出す。駆けて行った皆の様子を見て溜息をつき、いかにも面倒臭いと

ばかりにゆっくり後ろからサードとティーシエルが小走りで続く。

真っ先に悲鳴の場所に

着いたラフィストが目にしたのは、二十歳位の女の人が数人の男に囲まれている所だった。

「助けて！」

そう叫ぶ女の瞳が一瞬鋭く光ったような気がしたが、まずは女性を助けるのが第一な為、

女性を庇う様に彼女の前に剣を構えて踊り出る。続いてこの場に現れたニックスとガーネ

ットが、女性に怪我はないかと尋ねる。

「何だ貴様！俺達の邪魔をするなら容赦はせんぞ！！」

「それはあんた達の方だろ！女性に手を上げようとして何て事を言うんだ！」

「……女性？貴様、そいつは——……」

「ラフィストー！警備隊相手に何やってんの！」

やっと追いついたティーシェルが、ラフィストに向かってぜいぜいと息を切らせながら叫ぶ。

その後ろにはちゃんとサードも着いてきている。女性の顔をじっと見ていたサードが、

不機嫌な顔をより一層不機嫌にし、女性を睨み付ける。

「こいつ……血の臭いがする」

視線を女性に据えたまま、サードが呟く。

「当たり前だ！そいつは、ヴァンパイアだ！」

「ええええー！ヴァ、ヴァンパイアー！？」

ラフィストとガーネットとニックスの三人が顔を見合わせ、大声を上げる。すると、再び

女性の瞳が不気味に光り、みるみるうちに姿が変わっていく。

「ふ、あはははは！何だ、もう少しだったのに！そうさ、私はヴァンパイアさ。だが考え

てごらん？人間は生きる為に獣を殺すのに、なぜ私達はそれをしてはならないのだ？……

人間はつくづくおかしな生き物だ。……ふん、もう用は無い。今日の所は引き上げてやる」

そう言い残すと、ヴァンパイアはフツと姿を消してしまった。俺とガーネットとニックス

は未だに顔を見合わせて目を点にしている。

「あいつが現れてから、活気が無くなっていったのか？」

サードの言葉に対し、警備員はこくりと頷き、今のルネサンスの現状について語りだした。

「あの女も元は人間だったんだ……だが、ルネサンス市長に夫を殺され、恨みに恨んでヴ

アンパイアになってしまったのだ。そして、市長に復讐しようとしてルネサンスを……」

「いっその事市長の首差し出せば？楽になるんじゃない？」

ティーシエルは無関心といった感じで、ぶっきらぼうに言い放つ。

それは流石に拙い、と

ガーネットやニックスが必死に口を塞ぐ。

「君達も襲われないように気をつけるんだぞ」

そう言っただけ警備隊は忙しそうにその場から立ち去っていった。警備隊の人達は僕たちが巻

き込まれないようにと気にかけてくれたのかもしれないが、あのヴァンパイアは元々は人

間。俺には放っておく事が出来そうに無い。

「ま、確かにわざわざ巻き込まれる事も無いし。さっさとこんな町出てくに限るよね!」

「……」

「ラフィスト、お前何黙りこくって……」

ニックスが怪訝そうな顔つきで黙りこくっているラフィストの顔を覗き込む。

「どうやら……そのまさか、のようですわね」

「この事件ッ！俺達に出来る事は無いかな!」

——と、皆が予想していた通り、ラフィストは目を輝かせて言い放った。

「嘘だろ……」

その日の夜、他に泊まっている客もいないのか人気の無いホテルの一室で、作戦会議を開

いていた。そこには至る所に魔除けが施されている。そして何故かニンニクまでもが部屋

にぶら提げられていた。あまりの臭さにティーシエルが顔を顰め、ハンカチで鼻を覆う。

ガーネットも、ニンニクを部屋に吊るした張本人のニックスを、涙

目で睨んでいる。サー

ドは流石に鼻を覆ってなどはないが、眉間の皺がいつもより深い事より、やはり臭いが

きついのかもしれない。吊るした本人であるニックスは、至って平気な顔をしているが。

「く、臭いけど……まずは作戦を立てよう！」

この異様な臭いにより、一向に誰も口を開かなさそうな雰囲気だった為、ラフィストが先

陣を切って会話を切り開く。

「だがどうする？力づくでヴァンパイアを倒す事は容易いが、お前はそれでは不服なのだろう？言いだしっぺはお前なんだ。責任もって作戦を考えろ、いいな」

サードはこんな所で足止めをくらった事もあり、非常に機嫌が悪い。にべも無く言い切られてしまった為、彼の助言は当てにしない事にした。

「市長がキーパーソン、ですわね。でも……なんで市長は彼女の夫を殺したのでしょうか？」

「確かに……まずは情報を手に入れるのが、先かもしれないな。それに、ヴァンパイアの

目的を知っておいた方がいいと思う。被害が大きくなる事を、防ぐかもしれない」

「なら、やっぱり市長に事情を聞くのが一番だね」

「流石に……この人数で追いかけるのは迷惑ですわよね」

「だ、そうだ。……後はラフィスト、お前が適当に決めろ」

「じゃあ、俺とガーネット、ティーシエルの三人で市長の所へ行こう。ガーネットやティ

ーシエルが頼めば、話だけでも聞いてもらえそうだし。ニックスとサードは悪いけど、図

書館で事件についての記事とかないか調べてみてくれ。夕方の六時

にここに戻って、それ

から集めた情報を纏めてみよう！」

「なら部屋割りは、明日行動を共にするメンバーでいいよね？……

ガーネット、まさか“男

とは一緒の部屋に寝れない”なんて、言わないよね？」

「あ、当たり前ですわ！」

そう言うときガーネットはさっさと隣の部屋へ、荷物を持って歩いていく。まあ、男と二人

つきりじゃないし、いつヴァンパイアが出るか分からない中で一人って言うのも、逆に危

険だしな……そう割り切ってラフィストもティーシエルを連れ立って隣の部屋に行く事にした。

「ニックス、サードおやすみ。明日はお互い、頑張ろうな！」

「ラフィストー、俺を置いていかなくてくれー……」

「五月蠅い、もう寝るぞ！」

サードと二人なのが嫌なのか、ニックスがラフィストに泣きついてる。それをサードが

乱暴に引き剥がし、ラフィスト達に早く行けと促した。ラフィストが部屋に戻ると、疲れ

ていたのかガーネットは既に夢の中だった。ベッドの横に荷物を置き、整理していると隣

のベッドに腰掛けて、同じく荷物整理していたティーシエルが喋りかけてきた。

「明日は六時に起きて、僕が市長にアポイントとってくるよ……ガーネットはどうせ使え

ないだろうしね。ラフィストはガーネットと一緒に、質問する内容でも考えという」

「悪いな、ティーシエル……じゃあ、今日はもう寝ないとな」

ラフィストはベッドの横に剣を立てかけると布団に潜り込み、眠り

についた。

「ラファリスト、ガーネット！アポイントとってきてあげたよ！」

質問する内容を紙に書き出し、ああでもないこうでもないと言っていた俺達の所に、ティーシェルが戻ってくる。

「まあ、ティーシェル！素晴らしいですわ！……でもよくそんな簡単にいきましたわね？」

「ふふ……“市長”なんて弱みだらけだからね」

妖しげにティーシェルがクスリと笑う。その笑みは、何かいけないものでも見たような気がするくらい、少し怖かった。

「時間はいつなんだい？」

「昼の一時。まだ時間もあるし、町でも見てこない？」

「そうですね、何か分かる事があるかも……」

紙を折れたたんでポケットにしまい、念の為にと武器を手に取り部屋を後にした。

「ラファィー、まずどちらから行きましようか？」

ガーネットがアイスクリームを美味しそうに食べながら言う。いつの間にか買ったんだろう、と思ったがとりあえずガーネットの問いに答える為、そうだなあと考える。

「……っていうかさ、そのアイスなんだよ。それに、大丈夫な訳、それ！屋台のなんだろう？」

腹壊しても僕は知らないからね！」

考えているラフィストの横で、ティーシエルが信じられないといった顔でガーネットに食って掛かっている。ガーネットは美味しいですわよ、と至って暢気だ。その様子に呆れて声も出ないのか、ティーシエルは眉を顰めて黙りこくってしまう。「まあまあ、二人とも……。まずはあの女の人の家に行くのが、良いと思う。近所の人にも何か聞けそうだしね」

「彼女の家……。どこなのかしら？」

「まずはそこからか……。あ」

こそこそと道の端を歩いている人を見つけたので、ラフィストはその人に聞いてみようと思いをかける。一瞬ビクツとしたが、ラフィスト達がヴァンパイアでない事が分かると、彼女の家について教えてくれた。その人に聞いた通りに行くと、ちょうど町の裏に当たる所に出た。表通りよりも暗く、治安も悪そうだ。

「……あそこか？」

「そうらしいですわね」

ラフィスト達の視線の先にあるその家は、小さな家だった。辺りは全くといっていい程、人影がない。見えていても埒があかないので、閉じこもっている隣家の人に話を聞く事にする。

「あの、すみません……」

家の住民はドアを少しだけ開け、中からチラッとこちらを伺う。そして返事と共に、ドアが開かれ中へ入るように促された。ラフィスト達を招き入れてくれたのは五十代半ばの女性だった。すすめられた椅子に腰掛け、ラフィストは話を切り出す。

「あの……隣の家の人の事、何かご存じないでしょうか？」

相手は暫く黙っていたが、悲しそうに目を伏せた後ゆっくりと口を開いた。

「ヴァンパイアになった、あの子の事……だろう？」

「はい」

「あの子は優しい子だったよ……見ず知らずの人でも放つとけなくて助けちまうくらい。」

それが市長に殺された旦那さんだけど、それはもう仲が良くてね。なのに、どうして

こうなっちまったのか……」

「……」

「あんた達、旅の人だろう？行きずりの人にこんな事頼むのは筋違いかもしれないが、お

願いだよ！あの子を……エミリを助けてやっておくれ！」

そう言うとその人は顔を伏せ、わっと泣き出した。この町には悲しい想いが渦巻いている。

これ以上、こんな想いをする人を増やしてはならないと、そう思った。

今三人は市役所の市長室の前で、約束の時間になるのを待っている。時間になり、通され

た部屋は正しく豪華絢爛で、少しばかり成金趣味であった。だが、趣味はともかく調度品からは、かつてのルネサンスの繁栄ぶりが伺え知れる。

「いやはや……私が市長を務めさせて頂いております、ラドルフⅡアルティムです」

ゆったりとした、大きな椅子に座っていたのは、背は小さいが、腹の出た六十代後半男で

あった。何かに緊張しているのか、冷や汗をかきまくりである。

「早速だけど、僕達の質問に答えてもらおうよ……市長？」

ティーシエルが市長に向かって、ニッコリと言ひ聞かせるように言葉を発する。そのティ

ーシエルの表情を見た市長は、一瞬体をビクツと揺すり、こくこくと何度も頷く。

「あ……あの。エミリさんのご主人の事について知りたいのですが」ラフィストの言葉を聞いた市長が、みるみる顔を青くしていく。：

…やはり市長は何か隠

していると確信したが、市長はなかなか口を開こうとはしなかった。返事の遅さに焦れた

ティーシエルが市長をジロリと睨み、さっさと言えとばかりに机を蹴る。

「……あれは、アンカースの近衛隊長だった。だが、王のやり方についていけず、城を抜

け出したらしい。……さ迷い歩き、このルネサンスの近くの森に倒れていた所をエミリに

助けられたのだ」

「それで？殺した理由にはなってませんわよ」

「彼は、アンカース王国について詳しい内部情報を知っていた。だからアンカース王国は

彼を殺せと言ってきた。……勿論最初は断った。だが……」

「さしずめ“ランツフィートの二の舞になる”とでも言われて、脅されたってどこかな？

大量の金貨と一緒に、ね」

市長は驚いた形相で、ティーシエルの顔を凝視する。

「……そうだ。民の命には代えられないし、何よりその時は金が欲しかったのだ。……今

思えば、酷い事をしたのかもしれん」

「今、後悔しても……遅いんです」

確かに民の為、という気持ちもあったのかもしれない。けれど、一時の欲によって人の命

を奪った事実をラフィストは許せなかった。その想いを込めて、じつと市長の目を見つめ

ると、市長は視線から逃れるようにフツと目を伏せた。

「……私がこんな事言えた義理じゃないが、エミリを助けてやってはくれないか？それが

私の命と引き換えになろうとかまわん。頼む……」

「あーあ、また振り出しですわぁ……」

市庁舎からの帰り道を、三人はのろのろと歩いている。

「でもエミリの夫が、アンカースの者だって分かっただけでも収穫だね」

「結局、エミリの目的って何なんだろうな……」

「知りたいか？」

「え？」

返るはずの無い返事に驚き、後ろを振り返る。そこにいたのは、まぎれもなくエミリだった。

た。三人は急いで相手と距離を取り、戦闘体勢に入る。

「別に構える必要は無い。お前達とやりあおうなんて思ってなどいないからな。私は、夫

を生き返らせる為に悪魔と契約をした。仲間になって、大量の贄を捧げれば生き返らせて

くれると、奴はそう言っていた。……あの時お前達が間に入らなければ、贄は集まった！」

「まさか……これから」

「生贄になった人の家族はどうするんですの！そんな事して、あなたの夫が喜ぶとは思え

ませんわ!」

ガーネットの言葉に、エミリの姿が人間に戻っていく。その目から涙が一筋頬を伝い、地面へと吸い込まれる。

「そんな事……わかってる。だけど、愛してるの……彼を」

それだけ言うと、エミリは苦しみだし、その姿は再びヴァンパイアへと戻っていた。

「だから、今度は邪魔をさせない!」

「……ラフィスト、事が事だ。放っておいたら大勢の人が死ぬかもしれない。悪いけど、やらせてもらうよ!」

「ティーシエル、やめろ!」

ラフィストの静止より早く、ティーシエルは杖を向けて炎の塊をエミリへと放つ。しかし、

炎の中に人影は無く、エミリは既に逃げた後であった。エミリは無事だ……そう確信し、

ラフィストは思わず安堵の息が漏れた。

「……ラフィスト。言っとくけど、僕は間違った事をしたとは思ってないよ。いつ町の人

が生贄にされても、おかしくないんだから」

「わかってる。……でも、出来れば彼女を人間に戻してあげたいんだ」

ラフィストの言葉にティーシエルが諦めたかのように溜息をつくと、頭を振った。

「ふう……甘いね、君は。まあ、いいや……乗리카かった船だし、彼女を人間に戻す呪か

何か、探してあげるよ」

「すまない」

「とりあえず、宿に戻って二人に報告しませんこと?」

自分一人放っておかれた事に腹を立てているのか、少し不機嫌な顔

をしたガーネットが二

人の腕を引っ張る。分かりやすいガーネットの機嫌に、ラフィストとティーシエルがプツ

と噴出すと、ますますガーネットはぷくーと頬を膨らます。

「何だか二人とも、感じ悪いですわ……」

そう言うのと、ガーネットはくるりと背を向け、ずんずんと宿へと戻っていく。そのガーネ

ットの後ろをラフィスト達が小走りに歩き出す。宿に着き、扉をノックしてサードとニッ

クスの部屋に入ると、二人はもう既に話し合いを始めていた。ラフィストとガーネットは

サードとニックスが話し合っている近くに行き、話し合いに混じる為その場に腰を下ろす。

ティーシエルだけは一人皆から離れたところに座り、本を開き読み始める。

「何か、わかったのか？」

「おう！図書館での調査と、聞き込みのお陰でな！ヴァンパイアの夫の名前はセクルード

ってんらしいんだが、どうやらこいつ元アンカースの野郎らしくてな。んで、どうやら手

記を残してるらしいんだ！……どこにあるかまではわかんねえけどな」

「きつと、エミリが持っているんですわ」

「……エミリ？」

誰だと言わんばかりに、サードがガーネットに問いかける。ヴァンパイアの名前だと説明すると、納得したのか、はたまた興味が失せたのか適当な相槌だけを返してきた。その頃になって漸く一人本を読んでいるティーシエルの存在に気が付いたのか、ニックスが大声

を張り上げる。

「ティーシエル！お前も本なんか読んでないで、話し合いに加われよ！」

「う・る・さ・い・な！……あのね、そのエミリを人間に戻す呪文を覚えてるの。邪魔し

ないでよ！それに、会話の内容なら頭にちゃんと入ってるから心配は要らないよ」

「人間に戻すって……マジか！？」

「俺がティーシエルに頼んだんだよ。それが、一番いいと思ったから」

本を閉じ、ティーシエルが皆の輪に近寄ってくると徐に口を開いた。
「……馬鹿はほつといて。彼女を元に戻すには、まず彼女を使役しているヴァンパイアを

倒さなければならぬ。勿論、その場に彼女がいられても困る」

「つまり、囃役と戦闘役か」

「ふふ……サードは話が早くて助かるね。どっかの馬鹿と違って」

「おい、さっきから聞いてりゃ人の事、馬鹿馬鹿って……っ！」

「否定はしませんのね……ニックス」

ニックスがティーシエルの毒舌にむきになり、その隣でだから付け込まれるとばかりにガ

ーネットが呆れ返る。

「なら俺とティーシエルで誘き寄せよう。その間に三人で使役しているヴァンパイアを倒

しに行ってくれ。倒したらティーシエルがエミリを人間に戻すから、

直にこの爆弾で合図

を送って欲しい」

「おそらく、そいつはエミリの家のどこかにいると思う……大抵は契約を交わした所に潜

んでいるからまず間違いない」

「なら後で、場所を確認しなければな」

「あら、私が覚えてますから大丈夫ですわよ？」

だから不安なんだと言わんばかりに、サードがガーネットの方を見る。確かに、ガーネット

トはエミリの家に行く時はアイスを食べるのに夢中になっていたし、その気持ちは分から

なくは無い。ほぼ十中八九覚えていないだろう。サードは既に覚えていないものとみなし、

部屋の引き出しから町の地図を取り出して、ティーシエルにエミリの家への道筋を聞いて

確認している。

「あ、ラフィスト」

「何？」

サードと地図を眺めていたティーシエルが、ラフィストにこいこいと手招きする。

「明日、僕はエミリを誘き出さなくちゃいけないだろ？そこで！

明日はこの広場で、君

に芸をしてもらうから！！」

「げ、芸だってー！？」

「エミリが言ってたじゃないか、まだ贅が必要だって。だから、芸をして人を集めて、エ

ミリを誘き寄せる……ふふ、完璧だね」

「でも……そんなに上手くいくの？」

「いく！っていうか、いかせてみせる！」

「ティーシエルも……芸をするんだよね……？」

流石に一人で見世物をするのは避けたい。そう思い、ラフィストは恐る恐る伺う。そんな

ラフィストに、ティーシエルはまさかとばかりに目を見開く。

「何言ってるの？僕はパンピーを守るっていう使命があるの。呪文も大変なんだ。あの呪

文は弱すぎても駄目だし、強いと本体を消してしまうからね！……

と、言う訳で呪文に集

中したいから一人でよろしくね」

「ラフィー……芸なんて出来るんですの？」

「まさか……」

「全く使えないね……よし、歌だ。歌でいく。適当に武勇伝でも語
つとけ！」

拒否は許さんとはかりに、ビシツと言いつ切れ、ラフィストは観念
したかのように溜息を
つく。

「それより、一つ気になる事がある」

サードの言葉に皆の視線が彼に集まる。

「エミリの夫、セクルードの葬式がまだだと町で聞いた……未だに
葬式が執り行われてい
ないなんて、おかしくないか？」

「確かに……これは、何かあるかもな」

市長はセクルードの事を殺したと言っていたが、実際に死体を見た
訳ではなかった。もし

かしたら、人々の与り知らぬ所で、何かが起こっているのかもしれ
ない。

「なるほど……」

「ん、何か分かったのか？」

ティーシエルの呟きを聞き取り、ニックスがティーシエルに話しか
ける。

「別に。何でもないよ」

訳知り顔だが、追求を許さないといった雰囲気を放ちながら、ティ
ーシエルがさっさと部

屋を後にする。その後につき、ラフィストとガーネットも部屋へと
戻っていった。

次の日の朝、ラフィストはティーシエルに朝の四時に叩き起こされた。本人は事前の確認

をする為だとか言っではいたが、ラフィストの歌がどんなものなのか気になった、という

のが本音だろう。それというのも、さつきから何回もティーシエルの前で歌を披露してい

るからだ。しかし、歌えど歌えどティーシエルは顔を顰めるばかりなので、ラフィストと

しても何と言ったらよいか分からないでいた。

「……ラフィスト。君って奴は、満足に歌の一つも歌えないの!？」

「し、仕方ないじゃないか!……俺だってまさか、こんな事をする羽目になるとは思って

も見なかったんだから!」

自分の歌の下手さ加減は自分で良く分かっている。そこに更にこてんぱんに言われ、ラフ

イストはすっかり弱腰になってしまっていた。

「だ、大体……人の事を言う前にティーシエルの方はどうなんだよ」

「……ティーシエルは、武術以外はパーフェクトですわよ」

ベッドからもぞもぞと顔を出したガーネットが、眠たそうに呟く。

どうやらラフィストの

声によって、起きてしまったようだ。

「まあね。だてに司教の息子なんかやってないって」

ほら、さっさと続けると言わんばかりにティーシエルが練習を催促するが、ガーネットが

これ以上聞かされては堪らないとばかりに耳を塞ぎ、口を開く。

「ですけど、歌がこんな具合でしたらエミリだけではなく、市民まで逃げていくような気

がしないでもありませんわ……」

ガーネットの止めと思われる言葉に、歌うのを止めラフィストは一

人いじけ始める。その

様子に流石のティーシエルも諦めたのか、別の打開策を考えてる。

「うーん……ラフィスト。君、何か特技って無い訳？」

「いっその事、サードかニックスと交代させてはいかが？」

「サードに特技があるとは思えないし、ニックスは個人的に嫌。つていうか、絶対に作戦に支障をきたす」

「困りましたわね……」

二人が真剣に悩み、相談している間ラフィストは必死になって、故郷でやっていた事を思い出していた。妹のジュリアと一緒に遊んだ日々……町の仲間と夢中になってはまった事。これらの思い出を思い出すうち、一つ思いついた事があった。

「あ……あったかも」

「え、何！？何でもいいから言ってみて！」

ラフィストの言葉にティーシエルが必死になって食いついてくる。ガーネットの方も興味津々といった感じだ。

「昔さ、俺の町に旅の一座がやってきて、マジックがはやってさ。友達と専門分野を決めて、マジシャンの真似事なんかやったりして……——」

「あのね、昔話なんかどうでもいいから。で、何が得意なの？」

昔の思い出に浸りかけていたラフィストを、ティーシエルが現実へと呼び戻す。

「俺の専門はカードでさ！あ、今ちょっとやってみるな！」
うきうきと懷から、ラフィストがカードを取り出す。

「何だか随分と準備がいいですわね……」

ラフィストの浮かれた様子に気味悪がっているティーシエルに、ガーネットが耳打ちする。

「ガーネット、悪いけどカード切ってもらってもいいかな？」

不思議そうにカードを切るガーネットを、ラファストは満面の笑みを浮かべてみている。

その笑みに、ティーシエルが更に顔を引きつらせた時、カードを切り終えたガーネットが

ラファストへとカードを渡した。

「カードには、何の仕掛けも無いよな？——…いくぞ！」

バラバラに投げたカードが、ピンと一直線上に空中を浮いている。ガーネットは驚きの

あまり、目を丸くしてその光景を眺めている。

「す、凄いですわ！ラファィー！」

「まあ、こんなもんかな。……どう、ティーシエル？」

ガーネットの反応にやった、と思いながらもいまいち反応の薄いティーシエルの顔色を伺

うように、ラファストはティーシエルの顔を覗き込む。

「……ラファストにしては、まあまあなんじゃない？とりあえず、これでいこう」

「じゃあ、予定通り八時に作戦開始だな」

「じゃあ、それまでカードの練習でもしててよ。……僕はちよつと出かけてくる」

「どこに行くんですの？」

「ま、ちよつとね。七時半には戻るし、心配しなくていいよ」

と言うと、薄手のマントを羽織り、杖を手に取るとティーシエルは部屋を出て行った。

「確か、この辺りだったかな？」

サードの話を聞いた後、こっそり宿を抜け出し調べた場所にティーシエルは立っていた。

ここはセクルードと親しかったという、友人キルギスの家だ。こういう時は存分に社会的

地位を使うところだよね、と一人考えながらドアをノックする。

「——ごめんください。カダンツの司祭の者ですが」

思った以上に素性を名乗ったのが功を奏したのか、扉はあっさりと開かれた。

「入るなら、早くお入り下さい」

こそそと、何かを隠すような態度にこれは何かあると直感する。

相手の反応を鋭く観察

し、色々な事態に備えたが、結局テーブルにつくまで何も起こらなかった。わざわざお茶

を入れてきたキルギスが、テーブルについたのを見計らって話を切り出す。

「聞きたい事がある……君、セクルード將軍を匿っているんじゃない？」

秘密の確信に触れられ、動揺したのかキルギスの肩がほんの少し揺れる。

「安心して。僕は敵じゃない……彼を、セクルード將軍を助けるために来た」

ティーシエルの言葉に、キルギスがばつと勢いよく顔を上げる。

「じゃ、じゃあ！彼を助けてやって下さい！彼は……」

「それは構わないけど、まずは彼の元に案内してくれるかな？」

意を決したようにキルギスが立ち上がり、部屋にある棚をずらす。

すると、そこから地下

への階段がのびていた。

「こちらです」

キルギスに促され、ティーシエルは杖を手に取り、地下への階段を下っていった。

一五章 闇の影

「はい。寄ってらっしゃいみてらっしゃい！世にも不思議なマジックショーが始まるよ」

こんな事を言いながら客寄せしている自分の姿が映っているショーウインドを見たラフィストの口から、思わず溜息がこぼれる。アンカースの調査の為に旅立ったはずの自分……

それが何故、今こんな事をしているのかと思うと何やら切なくなってくる。

「ラフィスト！まだ全然集まってないじゃないか！もっと声出して！」

人の気も知らず、ティーシエルは暢気なものだとラフィストは思う。ラフィストがどんな

に恥ずかしい思いをしようが、所詮は他人事なのだ。だからそんな事が言えるんだろう、

とやり場の無い怒りすら感じる。

「そんな事言ったって……やっぱり恥ずかしいし……」

「今は、そんな事言ってる場合じゃないだろ？ったく。……もう、しょうがないな。ちょ

っとは手伝うか」

そう言うと、ティーシエルはスタスタと歩き出し、どこかへ行ってしまった。暫く、客引

きをしながらラフィストが待っていると、ティーシエルが大勢の男を連れて戻ってきた。

勿論芸を見に来てくれたらしいが、可愛い子に頼まれちゃ断れないなどと口走っている事

から、何やら不穏なものを感じる。

「――……ティーシエル、何言っただよ？」

「ふふ……どうせ引っかけらるなら、どうでもいい男共の方が万が一の事態になっても大丈

夫だと思っただよ。ちよつと上目使いで、観に来てくれますか？って言っただけだよ」

などと、髪をかきあげながら平然と言っただけ。その様子に、ラフィストはとてつもない

く恐ろしさを感じ、冷や汗をかく。

「とりあえず、作戦を開始しよう。よろしくね、ラフィスト」

ラフィストに声をかけた後、ティーシエルは集まった人の中に紛れ込んだ。ラフィストが

カードショーを始め、初めは静かだった人達が賑やかになった頃、影が一つ広場に向かって歩いてきた。

「……ここか」

エミリの家へと向かった三人は、エミリの家に入るとエミリが使った契約の道具などを探し始めた。家はずつと誰もいなかったからか埃っぽく、それらしき物を探すのに難航する。

エミリの部屋の一角を調べていたサードが、部屋の隅の埃が比較的小さい事に気付く、他を探していた二人を呼び寄せる。

「どうしたんですの？」

「ん、見つかったのか？」

「見る……ここだけ埃が新しい。おそらく……」

サードが手を伸ばし、そこに触れると少しずれたような音がする。

サードとニックスの二

人で床の石を外すと、下り階段が現れた。

「多分ここだ……かすかに邪念が感じられる」

明かりを持ってしようと、サードが台所へ向かおうとするが、それをガーネットが静止す

る。何やら呪文を詠唱し、掌大の大きさの光を出した。

「この程度の明かりなら、呪文で何とかありますわよ」

「なるほど……便利だな」

サード、ニックス、ガーネットの順に、狭い階段を一人ずつ慎重に下る。すると、小さな

小部屋に辿り着いた。小部屋の隅に何かの台があり、その上に何やら光る物がある。

「契約の石って、これか？」

「おい、待て！」

ニックスが光る石に触ると同時に、眩しい光が迸り石から何かが飛び出してくる。光が止

んだ後に三人の視界に飛び込んできたのは、エミリではないヴァンパイアであった。

「ようこそ。君達が次の餌……かな？」

「……お前が、エミリの使役者、か」

「くく……まあ、そういう事になるかな。おっと、まずは活きのいい餌は大人しくさせね

ばな！……闇の使者が見せるは汝が為の墓標なり……故に汝、美の幻影の中で永遠の時を

過ごすがいい……ダーク・イリュージョン！」

すると、辺り一帯に黒い湿ったような重たい霧が立ちこめる。サードはとっさに口を塞ぎ、

霧を吸わないようにすると二人の姿を確認する。ニックスやガーネットの瞳は心なしかと

ろんとしており、視点はどこか違う所を彷徨っている。

「うふふ……美味しそうですわ」

「――！幻を見せる呪かつ！おい、しっかりしろ！」

サードがガーネットやニックスの頬を何度か叩くが、二人の反応は無い。それどころか、

毒気を持つ霧にやられてみるみる顔色が悪くなっていく。

「心地良い幻を見ながら死ぬ。痛い思いをするよりはいいだろう」
僅かに吸ってしまった霧で朦朧とする意識の中で、ヴァンパイアの気を何とかそらそうと

サードが渾身の力を込めてヴァンパイアを狙う。それがかすり傷程度だが、ヴァンパイア

に当たった事で霧が弱まると、他の二人が正気に戻る。

「あ、あら？……シヨコラは？」

「に、肉！俺の肉が！」

「馬鹿、戦闘中だ！」

サードの言葉にハツとし、ガーネットが慌てて回復魔法をかける。

すると、ほのかに暖か

い光に包まれ、毒によって奪われた体力が戻ってくる。

「よっしゃー！次はこっちの番だぜ！……いくぜ、閃光八卦拳！」

ニックスがヴァンパイアとの間合いを取り、技を放つと無数の閃光が当たり一面に迸る。

それはヴァンパイアに直撃したらしく、ヴァンパイアは苦しそうによろめいている。

「やったぜ！」

「……っ！いや、まだだ！」

突如ヴァンパイアの手が伸び、ニックスの首を掴みあげる。サードが剣でヴァンパイアの

手を切り落とすが、支えを失った形になったニックスが、地面に叩きつけられるように落

ちる。ガーネットが急いで回復を施すが、まだかなり苦しいらしく咳き込んでいる。片や

ヴァンパイアの方は既に切り落とされた腕まで回復しており、ダメ

ージらしきものを感じられない。

「……くそ、キリが無いな」

ヴァンパイアの様子を見て、ガーネットが二人を呼び寄せ囁く。

「あれじゃ、いくらやってもキリがありませんわ……ですから、光魔法のオーラを使おう

と思うんですの。ヴァンパイアは闇の眷属……きっと効果がありますわ」

「よし、俺達であいつをかき回す！ガーネットはその間にそれを使え」

一斉にソードとニックスが飛び出し、ヴァンパイアへと切りかかる。ヴァンパイアの集中

が二人に言った事を確認し、ガーネットは呪文を詠唱し始める。

「無数の叫びは光の中で神への祈りに変わるだろう。光の十字架が今、汝を切り照らす：

…オーラ！」

手で切った十字が光を放ちながらヴァンパイアに向かって放たれる。

「そ、それは……ぐ、ぐあああああ！」

「よし、今度こそやったぜ！」

ヴァンパイアが灰になった事を確認し、ニックスが喜びの声を上げる。ソードが光を失っ

た契約の石を手に取り、剣で石を叩き割る。叩き割られた石は、鈍い音を立てて割れたか

と思うと、あっという間に砂へと変化した。

「これでいいですわ。早速合図を送りましょう」

エミリの家の外へ出て、合図を送ると三人はラフィスト達がいる広場へと走り出した。

「！」

三人の合図に気が付いたティーシエルは、ラフィストに合図を送る。しかし、ラフィスト

は気付いていないようだ。

「な、何やってんだよ！——…でも、ここで民衆が騒ぐよりはいいか。——我奏で

るは天からの旋律、その軌跡は死魔の呪縛から汝を解くだろう……」
きよろきよろと辺りを見回り、エミリの姿を探す。すると、人ごみの後方にエミリらしき

人影がみえた。民衆を一気に贅にしようとしているのか、手に力を集約させているようだ。

あまり時間がない事を悟り、詠唱しながら人ごみをかき分け、ティーシエルはエミリに気付かれないよう近づいた。

「ふふ……これで、彼が戻ってくる。——っ!？」

エミリは自分の体の周りに光が集まっている事に気付き、光を振り払おうとする。そのエ

ミリの眼前にティーシエルが現れ、杖をエミリへと向けた。

「エクス！」

ティーシエルの言の葉と共に、光が集約しエミリの体を包み込む。

エミリは甲高い叫び声

を上げて、もがき苦しみ地に伏した。エミリの声に周囲の人が異変に気付き、何だと集ま

ってくる。その間をすり抜け、ラフィストがティーシエルに駆け寄ってきた。

「ティーシエル!……どうだ!？」

「……力加減も、これで良かったはずだ」

エミリを包み光が弱まるほどに、エミリの呻き声が弱まっていく。そして光が完全に消え

た時、人間の姿に戻ったエミリが倒れていた。ピクリとも動かない

エミリを心配して、ラ
フィストが駆け寄り、抱え込んだエミリの頬を軽く叩く。

「エミリ……エミリ」

「……………ん」

エミリの瞳がうつすらと開かれ、視線が周囲を彷徨う。まだ現状が
良く分かっていないら
しく、少しぼんやりしている。

「わたし……し？」

「大丈夫？」

「え、ええ」

「ふう、もう大丈夫だよ」

エミリの様子を見て、ティーシエルが断言する。最初は事情を理解
できていなかったよう

だが、ラフィスト達のやり取りでエミリがヴァンパイアから人間に
戻ったという事が理解

できた周囲から、どっと歓声があがる。観客の向こうから、ラフィ
スト達を呼ぶ声が聞こ

える。おそらく別行動していたガーネット達が戻ってきたのだろう。

「どうですの！上手くいまして！？」

「ああ、見ての通り大成功だよ！……………それより皆、怪我はな
いかい？」

「ふん、当たり前だ」

「ふふ……素直じゃないね。つと、そろそろかな」

ティーシエルの謎めいた言葉に疑問を感じた一同が首をかしげた時、
一人の男が走りなが
ら駆け寄ってきた。

「エミリ、エミリ！」

「え……セク、ルード。セクルード……なの？」

死んだはずの彼が現れ、エミリは戸惑いの色を隠せない。だが、嬉
しさのあまり顔を真っ

赤にしてぼろぼろと涙を流している。

「そうだよ。もう、君を一人にはしないから……」

ひしと抱き合う恋人達をみて、一同は良かったと呟く。ニックスなんかは感動して、もらい泣きまでしてしまっている。

「あ、でも一体どういう事なんですか？」

「簡単な事だよ。彼は、セクルードは死んじやいなかったのさ。セクルードの処刑は石化

し、粉々に叩き割った後アンカースに送るというものだった。だけど石化させられて粉々

に叩き割られる寸前だったセクルードの石像を、こっそり隠した人がいたんだよ」

「ふん」

ニックスだけが納得した顔をする。後は、如何にも不服そうな、納得していないような顔でティーシエルの方を見ている。

「というか、何でティーシエルがそんな事知っているんですの!」

「処刑方法なんて、市長さん言ってたっけ？」

「誰だ、その隠した人間とやらは」

と、各々が疑問に思っている事を矢継ぎ早に口に出す。

「蛇の道は蛇ってね。こんぐらいの事、いくらでも調べる方法はあるのさ。因みに、セク

ルードの石像を隠したのは、友人のキルギスって人だよ。彼は役所勤めだし、そういった

事も隙をみて出来ると思ったからね……ちょっと問い詰めたら、あっさり教えてくれたよ」

彼のちよつとはちよつとじゃない気がしたが、彼がそういうのだから取り合えずそういう

事にしておこう。

「あ、じゃあもしかして今朝出掛けたのって……」

「ふふ……ご想像にお任せするよ」

スタスタと、エミリとセクルードの方に向かって行ってしまったので、言いたい事はまだ

まだあったが、それらは飲み込む事にした。

「本当、自己ちゅーなんですから!」

「チームワークってもんが、欠けてんだ!」

「どうか、勝手だな」

多分ティーシエルもこの三人に、こんな事は言われたくないだろうなあとも思ったが、今

回ばかりは彼らと同意見なのでラフィストは苦笑いを浮かべた。ラフィスト達もティーシ

エルに続き、エミリ達の所へ行くとラフィスト達に気が付いたエミリが頭を下げる。

「事情はお聞きました……本当に、ありがとうございました」

「はじめまして。私はアンカース王国元近衛隊長の、セクルードです。皆さんが私やエミ

リを助けて下さったそうで……ありがとうございます」

「いえ、いいんです。僕達がしたくて、した事ですから」

「いや、お礼がしたい。ですから明日の夜、一緒に夕食をとりませんか?」

セクルードの申し出をありがたく受ける事にして、セクルード達と別れたラフィスト達は、

食料などの買出しに行く事にした。エミリが元に戻ったという知らせはもう広くに広まっ

ているらしく、少しずつ商店などが開き始めたからだ。カダンツの時はサードが勝手に買

出しに行ってしまった為、こうして皆で一緒に買出しに行くのは初めてだ。大人数で買い

物に行くのは初めてらしいガーネットなんかは、既にはしゃぎまわっている。

「きゃー、みてみてサード。この店、安いですわよ!」

ガーネットに御指名されたサードが近付き、ガーネットの手の品を見る。

「安すぎる!……ほら、こことか見ろ。こういう品が悪いのは駄目だ!」

ガーネットは一瞬しゅんとなったが、もう次の瞬間には違う店ではしゃいでいる。色々と

珍しいのかな、とラフィストとニックスは二人で笑う。ガーネットは暴走してるし、サー

ドやティーシエルはそのフォローをしているので、ラフィストとニックスは置いていかれ

たような状態だ。ちょうどいい機会だったので、ラフィストはニックスにホールスを出た

後どうしていたのか聞いてみる事にする。

「ニックス、お前トラートに引越してから大分経つよな……今まで何やってたんだ?」

「んー、学生かなあ」

「学生!? な、何の!」

「格闘技だよ、格闘技。トラートは村だけど武術が盛んだろ? 俺さー、トラートに着いて

ピンときたんだよ! 俺にはこれしかないって!」

「へ、へえー……」

「そういうラフィストこそ、何やってたんだ?」

「家事手伝い」

「プッ! アハハー! 何だよそれー!」

ひとしきり、大きな声を上げて笑った後、ニックスはあつと声を上げてラフィストの腰の

剣に目をやる。

「そういえばよ、お前その剣で大丈夫なわけ? 何も考えずに出てきたんだろ? 自分に合っ

たの、買った方がいいんじゃないのか？ほら、サードに見てもらうとかしてさ！」

「……そうだな」

家に置いてあった祖父さんの剣を勝手に持ってきたものの、ラフィストにとつては少し大

きめで重たい物であった。例えるならば剣を扱っている、というより剣に振り回されている

といった感じだ。

「ラフィスト、剣買うの？」

二人の間からひよっこり顔を出したのはティーシエルだ。さっきまではサードやガーネツ

ト達と一緒にいたのでは、と突然の出現に驚く二人だが当の本人は構わず話を続ける。

「確かにこれじゃ、ラフィストの体格にはあってなさそうだね……

よし、僕も一緒に見て

あげるよ」

「……ありがとう、ティーシエル」

「な、何だよ……どうしたんだ？」

「やっぱ、優しいなー、と」

ラフィストの言葉にティーシエルが顔を真っ赤にし、な、な、としどろもどろになる。

「つかお前、いつもそんな風なら良いんじゃないか？ツンケンしないですよー」

「う、五月蠅いよ！ニックスの癖に！——……あーもー、とにかく見るよ！」

前に行くサードの元にティーシエルが駆けて行き、何やらサードと話している。黙って話

を聞いていたサードが二、三回相槌をうつと、ラフィストの所へやってきて腰に差してあ

る剣を手に取り眺め始めた。

「成る程……確かに名剣だが、お前には合っていないな。確かあつちに武器屋があつたはず

……よし！ラファリスト、買いに行くぞ」

「じゃあ俺とガーネットは、他の買出しに行ってるわ」

「あ、おい！余計な物まで買うなよ！」

サードの忠告を聞く前に、ニックスとガーネットは広場へと走っていく。二人のはしゃいだ様子を見て、残された形になった三人は示し合わせたかのように同時に溜息をついた。

「いらっしやい！何にするんだ？うちはいい品ばかりだよ！」

威勢のいい主人がラファリスト達を出迎える。その勢いに、ラファリストはおろか、サードや

ティーシェルまでも完全にひいてしまっていた。

「こいつに合う剣はあるか？」

サードがラファリストを指で指すと、主人がまじまじとラファリストの方を眺め始める。

「ふーん……あんさんがねえ」

「あ、あの……これが前に使ってたやつなんですが」

「……あんた、今までよくこれで戦ってきたねえ」

武器屋の主人ともなれば、武器を見る目は一流なのかラファリストと剣の不釣り合いをすぐに

見抜き、変に感心していた。

「あんさんに合いそうない剣が、ちょうど入ってきたんだ。ちょっと持ってみるかい？」

武器屋の主人はそう言うとかウンターの裏に引っ込み、何やら一振りの剣を持ってきた。

その剣を手に取り、ラファリストが剣を振るってみるとちよūdいい

重さで、とても手に馴

染む物であった。

「どうだい？ 限定品だから多少値は張るけど、少しでも良いもん持っていた方が良いぜ」

「因みに、いくら位なんですか？ これ」

「うーん……ざっと“5000ギル”といったところだな……—」

「ご、5000ギルー!?」

それだけあれば、一年は充分余裕で諸国を旅する事が出来るほどの金額だ。王から幾分か路銀を貰っているとはいえ、そんな金あるはずがない。

「この町に活気が戻ったのは兄さん達の活躍のお陰だし、出血大サービスで2500ギルまでならまけても良いぞ？」

こんな所で人助けが役に立つとは思ったがそれでも2500ギルという金額は、おい

それと出せる金額ではない。ラフィストはどうするべきか悩み、サードの方を伺うと、サ

ードもまた顎に手を当てて考え込んでいるようだ。

「2500ギルか……これでいい？」

後ろで黙って見ていたティーシエルが懷から財布を取り出し、主人にお金を払う。

「ティ、ティーシエル!……ごめんな。俺の剣なのに」

「お前、金を持って出てきたのか？」

ラフィストはティーシエルに払わせてしまった事を気にしていたのだが、サードとしては

ティーシエルにお金を払わせた事よりも、そっちの方が気になるらしい。

「当たり前じゃないか。取り合えず50000ギルと宝石があれば、旅に困らないだろ？」

「50000ギルも!?!?!?!?!同じ金持ちでも、どっかの誰かとは大違いだな」

サードが裸同然で城出てきたガーネットに、嫌味を言う。

「ティーシエル、本当にありがとな。大事に使うよ」

新しい剣を腰にさし、その上に手を重ねる。これからも頑張れよ、という主人の声を後に、

ラフィスト達は店を後にした。

「ラフィスト、お前本当に嬉しいんだな」

「うん。ティーシエルの優しい一面も見れたし」

「金は出世払いかい?」

「出世、は無理かも。でも、これで俺の剣の腕がもっと上達して、皆を守る事が出来たら

な……とかって思ってたさ!」

「そうだな!」

「で、次はどこに行くの?」

ティーシエルが心なしか顔を赤らめて、皆がいる真ん中にばさっと地図を広げる。

「そうですね……流石に情報も無いまま、アンカースという事はありませんしね。サード、どこか良い町はなくなってます?」

「そうだな」

地図を覗き込み、サードが考え込む。そしてサードが地図のある場所を指し示そうとした

時、ニックスが横から遠慮気味に口を挟んだ。

「あ、あのよ……」

「何だ」

皆が地図から顔を上げ、視線をニックスへ向ける。

「思っただけ、さー……次の大陸とか行く前に、この大陸でやり残した事とか、結構あると思わないか？」

「確かに……」

サードが頷く。

「で、さ……俺、この大陸離れる前に、忘れ物を取りに行きたいんだ！」

「はぁあー？忘れ物ー？」

「そ、そうなんだよ……無くちゃならないんだ」しゅんとするニックスに、皆困惑する。

「お前の故郷は、どこなんだ？」

サードの問いかけに、ニックスはトラートだと答える。

「トラートといえば大図書館で有名な所だね」

あそこの書物はまだ網羅してないから興味深いんだよね、とはティーシェルの弁。

「トラートってどこにありますの？」

ガーネットが尋ねると、サードがルネサンスの北東を指し示す。そこはちょうど山岳地帯

に当たる所だ。その山岳地帯はあまりの難所な為、侵略価値が無いとされて自治を認められていたという場所だ。

「ここからですと、結構ありますわね。ですけど、行ってみてもよろしいんじゃない？」

「本当か!？」

ガーネットの言葉にニックスが喜ぶが、サードやティーシェルは渋い顔だ。

「ま、確かにあそこの蔵書には興味あるけど、ここからだ結構距離もある。僕達は仮に

も調査団なんだし、一個人の事情で時間を浪費するのは良くないんじゃない？」

「確かにな。それに、セクルードの話如何によつては、急を要す必要があるかもしれない」

「出来れば……行つてやりたいんだけどな」

ラフィストが呟く。――それというのも、実は昨日の夜にニックスの話を聞いたからだ

った。宿に人が泊まっていなかった事もあり、大浴場ではラフィストとニックスの二人し

かいなかった。最初は他愛も無い話をしていたが、次第にニックスの歯切れが悪くなり、

しまいにはニックスはもごもご喋り始めた。

「……なあラフィー。その……」

「何だよ？」

「ラ、ラナは元気！……か？」

「ラナ？ああ……それが？」

「……ならいい。あの町も変わったんだろ？」

そこまで言うとなニックスははー、と息を吐き出す。

「何だよ急に……何かあったのか？変だぞ、お前」

ラフィストが問うと、ニックスは所在無さ気に視線を彷徨わせ、しばらく黙りこくつてい

たが、意を決したのか視線だけをラフィストに向けて尋ねた。

「お前、さ……好きな子とか……いないの？」

ニックスの突然の思いがけない問いに、ラフィストは思わず浴槽で溺れそうになった。

「ゲホッ！し、死ぬかと思った……」

「わ、悪りい」

「好きな子、ねえ」

一瞬、頭の中にある人物の顔が浮かんだが、振り払うようにブンブンと頭を振る。ニックス

はそんなラフィストには気付かずに、話を続ける。

「俺さ、トラート出てきたの、一緒に格闘技習ってる奴の勧めがあ

ったからなんだ」

「そいつって。もしかしてお前の……」

ニックスの意外な話に、ラフィストの顔がにやける。そんなラフィストの視線から逃れる

様に、ニックスは水面をじっと見つめながら言った。

「実は、村を出る時に渡したい物があつたんだ。……でもその日の限って、そいつ稽古休

んでさ。結局、別れの挨拶もしてないんだ」

「心残り……なんだな？」

「まあ、な。……でも、仕方ないよな！」

気持ちに誤魔化すかのように、ニックスは手で水飛沫をあげる。

「お前……本当にそれでいいのか？もう、二度と会えないかもしれないんだぞ！」

「……」

「俺も応援するからさ！……言うだけ言ってみないか？次はトラートに行こうって！」

「だけど、よ！私情挟む訳にはいかないだろ。……俺達には大事な役目があるんだ。……」

あ、俺もうあがるわ！——……言つとくけど、今の話内緒だぞ！ニックスが勢いよく湯船から飛び出し、脱衣所の方へ向かっていった。

次の日の夕暮れ時、ラフィスト達はエミリの家へと向かった。エミリの家の前に辿り着くと、セクルードとエミリが仲睦まじくラフィスト達を出迎えてくれた。セクルードにすめられて家の中に入ると、テーブルの上には美味しそうな料理が湯気を立てて、立ち並ん

でいた。

「うわお！うつまそー！」

「たいした物じゃないですけど、召し上がって下さい」

頂きますと大きな声で叫ぶと、ニックスは早速目の前の料理に手をつけ始める。ラフィス

トも折角だから頂こうとした時、料理をまじまじを眺めていたガーネットとティーシエル

の二人に声をかけられた。

「これ、何？」

二人が同時に指差したものは、一般的に味噌汁と呼ばれるスープであつた。

「それは、ルネサンスの近くにある島国で飲まれている、味噌汁という名のスープですよ」

ラフィストの代わりにセクルードが二人に説明を施す。

「二人とも、飲んだ事無いの？」

正体を知った後も眉を顰め、訝しげな顔で匂いをかいだり、じっと眺めたりしている二人

にラフィストが問いかけると、驚いたような声で答えが返ってくる。

「当たり前じゃないか」

「私はキャビアのスープ以外、飲んだ事ありませんから……」

世間知らずという面ではそっくりなんだなあ、と思わず感心する。

二人はひとしきり眺め

た後、味噌汁に口をつけると、存外気に入ったのか美味しそうに飲んでいた。食事が終わ

り、食後のお茶を飲み始めた時、話題はついにアンカース王国の事になった。

「例の沈んだ島は、アンカースの誰かの仕業なんですよ？……誰？ティーシエルの問いに、セクルードは姿勢を正し話し始めた。

「……まずは、順を追って話そうか。ある日、アンカース王国に三人の兄弟がやつ

てきた。一番上の兄は政治や武術の心得があり、歳からすると二番目に位置する女は美しい美貌の持ち主だった。一番下の弟はとても魔術に長けていた。王は女を気に入り、この

兄弟も王の片腕として仕える事となった……。女は、王との間に一人子を儲けて死んだ。

それから月日も経たない内に、女の兄弟も流行り病で亡くなってしまった。王は愛する妻

と、信頼の置ける部下を同時に失い嘆き悲しんだ。王の側近であった父が、自分は無力で

あると、まだ幼かった私に愚痴を零したほどだ……。そんな時だった、あいつが現れたのは」

「あいつ……？」

「あいつはダグラスと名を名乗り、巧みに王に取り入った。……。そして、生まれたばかり

の王子と死んだ三兄弟を融合させたのだ！」

「死んだ人間と融合させるなんて……」

「しまいには王を洗脳し、ダグラスは自らの手で王子を育て上げた。

——…王子が十

三歳を迎え、全ての準備が整った時が、ちょうど今から七年前……

これが、何を意味する

かわかるだろう？」

「ランツフィート……侵略」

「その目的は、何かに必要だったらしい“特別な乙女”を手に入れる事だった……。その子

はまだ、たった7、8歳位だったらしい」

7、8歳という言葉にラフィストが反応する。当時のジュリアもその位の年齢だった、と

ふと思ったからだ。

「次に奴がした事は、世界樹の封印だ。こちらの目的は解からない

が、恐らく島に近付かれてはまずい事があったのだろう。自らが育て上げた王子を使って、島ごと海に沈ませた。

……ダグラスの力は、今や恐ろしいまでに増大している。私は国を憂い、同士と共に奴を

倒そうと試みたが……結果は言わなくてもわかるだろう」

「話は大体解かりました……それで、そのダグラスを倒すにはどうすればいいんですか？」

ラフィストが質問すると、皆に緊張が走ったのがわかった。

「私と、同志達が奴と戦ってわかった。——……奴に並の攻撃は効かない」

セクルードの答えに、しばし沈黙が流れる。

「しかし、トラート村の大図書館に、幻の鉱石の在り処を印した地図があるらしい……それ

れから作った武器ならば、おそらく……」

「こりゃ否が応にも、トラートに行かなきゃならなかったな！」
ニックスを思い、ラフィストが声をかける。

「私が君達に教えられるのは、ここまでだ。大して役に立てなかったかも知れないが、君

達の旅の無事を祈っているよ。それと、これを持って行くがいい」
そう言ってセクルードがラフィスト達に差し出したのは、手記のような物だった。

「ここにはアンカースの城内図も描いてある。——きっと役に立つだろう」

「セクルードさん……ありがとうございます」

宿に戻ったラフィスト達は、明日に備えてミーティングをしている。
トラートに行く事が

決まったせいかな、やけにニックスが嬉しそうな顔をしている。

「そういえばトラートは山の方でしたっけ……ティーシエル、ワープは出来ませんか？」

「トラートなんていった事ないし、無理だよ」

前はニックスのトラート行きに賛成していたが、かなりの難所だとニックスから聞いたガ

ーネットが嫌そうな顔をしている。しかし意外にもティーシエルに嫌がっている様子は無

かった。

「ティーシエルは嫌ではありませんのー……山登り」

「嫌？何で？？未知の魔道書に出会えるかもしれないだよ！それなのに嫌な訳ないじゃないか！！」

心はすっかりそちらに飛んでいるのか、ティーシエルは目をきらきらと輝かせている。

「おい、早く寝るぞ！……山は寒いから、各自しっかり準備しておけよ」

サードに部屋を追い出され、ラフィスト達は部屋に戻った。ガーネツトやティーシエルは

早々に眠りに着いたが、ラフィストはセクルードに聞いた少女の話が気になって、なかなか

か瞳を閉じる事が出来なかった。ジュリアはもしかしたら生きているのかもしれないと、

とうの昔に諦めた希望を抱いて……――

一六章 一ノナイトメア

「ああー、きついですわ……」

きつい山岳地帯を長時間かけて歩いたせい、ガーネットはよろよろとしている。しかし、

行けども行けども見えるのは急斜面や鬱蒼とした木々ばかりなので、いい加減ラフィスト

も弊壁してくる。元気なのは故郷に戻る事を喜んでいるニックスと、書物に目を輝かせているティーシェル位だろう。

「私、こんなに歩いたの……初めてですわ。――……ティーセルも体力無いくせに、よく平気ですわね」

「ふふ……オートマで回復魔法かけてるからね。行つてすぐ書物を読む為にも、体力は残しておかないと」

「ず、ずるいですわ!」

「無駄使いは止める。地図通りならば、もうじき着く」

私も、とばかり回復魔法を使おうとするが、横からサイドに止められる。暫くの間は黙々

と懸命に歩いたが、結局サイドの励ましも効果は無かった。もう駄目、と声を上げてガー

ネットがその場にしゃがみ込んでしまう。

「ニックス……一体いつ着きますの?」

んー、と目を細めてニックスが先を見渡す。

「一本杉が見えたらすぐなんだけだよ……あ、あった!皆、着いたぞ!」

ニックスが指差した先には、他より大きな目の杉が立っている。さら

に先には小さくだが、
集落のようなものも見えた。

「……それでも遠いですわよ。あうー……着く頃には夕暮れですわね」

目的地は見えたが、リアルな距離にガーネットががつくりと項垂れる。一方、トラートが見えた事に興奮したのか、ニックスは一人駆け出して行ってしまった。

「お、おい！ニックス！」

ラフィストが慌てて止めるが、ニックスが止まる様子は無い。結局、ラフィスト達を残し

一人先に行ってしまったようだ。完全にニックスの姿を見失い、一同に溜息が漏れる。勝

手な行動にいらついたのか、サードはチツと舌打ちをすると、ニックスの行った道を歩き出した。ラフィスト達も遅れないよう、サードの後を歩き出す。

「ガーネット、大丈夫？」

少しでも楽になればと思い、ガーネットに手を差し出すと、ガーネットは少し躊躇した後
にその手をとった。

「ありがとう、ラフィー。……ええ、もう少しですもの。頑張りますわ」

「ラフィスト。ニックスの奴、何か妙にはしゃいでたけど……どこに行くつもりなのか知ってる？」

一番後方を歩いていたティーシエルがラフィストの隣に並び、ニックスの行方を尋ねる。

「まあ、多分」

「多分？」

煮え切らない、中途半端なラフィストの答えに違和感を感じたのか、

ティーシエルが怪訝

そんな顔つきでラフィストを見る。

「学校に行ったんじゃないかな」

と、ここまで話してニックスが『この事は内緒だ』と言っていた事を思い出す。しまった

と思っても、時は既に遅く、言ってしまった事は取り返しがつかない。どうかばれませんか

ように、とティーシエルの様子を伺う。最初は先ほどの顔のままであつたが、ピンツと何

か感じ取ったような顔をし、クスリと笑ってラフィストに言葉を投げかける。

「そうだよねー、学校は色々あるからねー。会いたい相手もそりゃいるよね」

と意味深に言った後、ティーシエルはさつさと先方を歩くサードの元へ行く。ばれてしま

ったなど露とも思っていないニックスに心の中ですまないと謝りながら、不安定な足場の

注意を促す為にガーネットに視線をやる。すると、何やらガーネットが考え込んでいた。

「ガーネット、どうかしたのか？」

気になって声をかけてみるが、反応は無い。

「ガーネット？」

「………ラフィー、さっきの話は何だったんですの？」

ガーネットの思わぬ返答に、拍子抜けする。しかし正直に答えてやる訳にも行かず、ラフ

ィストは懸命に言い訳を模索した。

トラート村に着いたニックスは、すれ違う村人と挨拶しながらもあ

る人物を探して走り回

っていた。しかし、どこを探してもニックスが求める姿は無く、山道を駆けてきた体に限

界が来たのかその場にしゃがみ込んでしまう。

「く、くそ……何であいついないんだよ」

「ん、あれ……ニックス。何でここにいるんだ？」

上からふってきた声に顔を上げると、学校の恩師であるガレレオⅡガレレイ先生が立って

いた。ニックスが調査団に参加する為に村を離れていた事は皆知っていたので、村にいる

はずのないニックスにガレレオも驚いているらしい。

「せ、先生！」

「……あー、さては君、マキノだろ。別れの挨拶出来なかったものなあ。……確か彼女は、

普段なら森に訓練に行ってる時間だが……多分森にはいないだろう」

「え、どうしてですか？」

あいつが訓練をやらないなんてありえないとニックスは思い、ガレレオに詳しい事情を聞くようにする。

「実はね最近元気が無くてね。ちょっと様子もおかしいし……正気はあるのだが、何かを

ブツブツ唱えたり、夜中に歩き回ったりとかもする」

「確かに、あいつらしくないな」

「一回ちゃんと神父や司祭などに見せた方が良いのかもしれないが、生憎ここにはいないか

らな。仕方が無いから様子を見てる状態なんだよ」

「神父や司祭、ねえ……あー！いるいる！俺の仲間にいます、先生！」

ニックスの頭に、ティーシェルの顔が浮かび上がり、嬉々としてガレレオにその事を告げ

る。きっと彼ならばマキノを何とかしてくれるに違いない。早速テイーシエル頼まなきゃな、と勝手な事を考えていた。

「なら一度、彼女を見てももらえないかね？」

「はい！」

善は急げとばかりにニックスは宿に戻ると、気の知れた宿の主人に仲間が泊まっている部屋を聞きだす。大急ぎで階段を駆け上っていき、とっている部屋の

一室を空けると、そこには誰もいない。なら隣だな、とニックスが隣の部屋のドアを開けると、部屋の中には探

し人であるテイーシエルと、サードがいた。テイーシエルはベッドの上で本を読んでおり、

サードは仮眠をとっているようだった。テイーシエルは、ドアの音に気付いてチラリと視線を送るが、入ってきた人物を確認すると、すぐに本に視線を戻す。

しかしニックスはそんな事には気付かず、テイーシエルに詰め寄る。

「なあ、テイーシエル！頼みがあるんだけどよ……」

「嫌。他当たって」

本を読んでいる所を邪魔されて機嫌が悪いのか、にべも無く切り捨てる。それでもニックスは他当たれたら頼まねえよとばかり、くいさがる。

「あのね、僕達疲れてる訳。わかる？君が勝手な行動した後、僕達は疲れた足を引き摺って、大図書館まで鉱石の場所探しに行ってるの。……やっと宿に戻って魔道書読んでる所

なんだから、頼みごとならラフィストにでもしてよ」

「だからよー……」

「ただいま」

続く押し問答に嫌気が差し、ティーシエルがニックスを手に持つ書物の角で黙らせようと

した時、ラフィストとガーネットの二人が戻ってくる。ガーネットが手に何か持っている

所を見ると、図書館の帰りに小物か何かを見るのにラフィストが付き合っていたのだろう。

「二人とも、何やってるんですの？——…：…：…というか、ティーシエル。いくらニックス

でもそんなので殴ったら、重症ですわよ」

「大丈夫だよ。もしかしたら、ちよつと賢くなるかもしれないし」

「や、止めろって！」

慌てて書物を取り上げ、傍にあった机に置く。二人を落ち着かせた後、ラフィストは椅子に座り、ニックスに調べてきた鉱石の事を話す事にした。

「鉱石のある洞窟内部の地図は見つけたんだが、その洞窟の場所まではわからなくなってるな。

村の人に聞いてみたら、マキノって子がたまたま洞窟を見つけたって言うてて……」

「あ、会ったのか!？」

どれだけ探しても見つからなかったマキノの話題が出た事で、ニックスが凄い勢いでラフィストをガシッと掴む。

「あ、ああ。何か様子が変だったけど。急に倒れたとかで、俺達が見たのは学校の医務室

だった。……まあ、あの様子じゃ案内は無理だろうな」

そこまで聞くと、ニックスは首だけぐるりと勢いよくティーシエルの方に向け、その勢いのまま捲くし立てる。

「ティーシエル、俺の頼みってのはそのマキノの事なんだよ! あいつ最近様子が変らしい

んだ。村には神父とかいないから、お前が頼りなんだよ！頼む、診てやってくれ！……洞

窟の場所解かんないのは、困るだろ？な、な？」

「……仕方ないなあ。分かったよ、明日な！……はあ。明日は一日図書館に籠ってようと思っただけ」

翌朝、ラフィスト達は学校の医務室に向かった。その前に寄ったマキノの家で、昨日倒れてから念の為動かさない方がいいと、医務室に寝かせたままだという事を聞いたからだ。

医務室のドアを開き中に入ると、中では保健の先生と思われる人が何やら慌しくしていた。

「何かあったんですか？」

「あ、あら昨日の……それにニックスも。実はね、マキノがいないのよ」

「え！」

ニックスが保健の先生に駆け寄ると、保健の先生はニックスに落ち着くように促す。

「ニックス、落ち着きなさい。朝、様子を見たらいなくなってたの。ベッドはまだ暖かい

から、そんなに遠くへは行ってないと思うわ。今、皆で探してる所だから直に見つかるわ」

「皆で？そんなに心配する事ですか？」

「あの子、洞窟を見つけた日から何だか様子がおかしくって……だから皆ちょっと、神経質になっているのよ」

「そのマキノって子が寝てたのはここ？」

ティーシエルが近くにあるベッドを指し示すと、保健の先生が頷く。
その答えに考え込む

素振りを見せたのが気になったのか、ニックスがティーシエルを問
いかける。

「何かあったのか？」

「……マキノって子、魔法は？」

「い、いや。からっきしだけど……」

「そう……」

「とにかく、俺達も探そう」

ここで話していても埒があかないので探しに行こうとする。ニッ
クスが先生にまだ探して

いない所を聞きだし、探しに行こうとドアを開ける。しかし、ティ
ーシエルだけはなぜか

ついてこようとしなない。

「ティーシエル？」

「悪いけど、僕は後から行くよ」

「ティーシエル！また団体行動乱す気ですの！？」

「おい、この俺まで探しに行くのに後からだ？ふざけるな！」

「ティーシエル、お前がいてくれなきゃ困るだろうが！」

各々口々に文句を並べるが、ティーシエルは気にせず、ラフィスト
の耳に耳打ちする。

「ベッドに残る魔力の残り香といい、嫌な感じがする。……これか
らこの残り香から、嫌

な気配の正体を探る。だから彼女の事はよろしく頼むよ」

「皆に言わないのか？」

「こんな事言ったら、皆して残ろうとするだろ？集中しなきゃ探知
できないし、居られて

も邪魔なんだよ」

「確かに……そうかもしれないけど」

皆の性格を考えながら、ラフィストは頷く。サードだけはお構い無

しにやると思うが、ニックスやガーネットは間違いなく協力すると言うだろう。だからといって、わざわざ憎まれ役を買わなかったっていいだろうにと思いながら、いきり立つ皆を促してマキノを探しに

外へ駆け出して行く。渋々ながらも、探す事に専念する事に決めた面々はニックスが指し

示す方に向かうと、森の入り口に辿り着いた。

「まだ、ここは探してないらしい。……あいつ、いつもここで訓練とかしているし、いる可能性は高いと思う」

入り口には古ぼけた看板が立っており、擦れた文字が綴られている。目を凝らして読もう

とすると、ニックスが右手の方が学生などが使う訓練コースで、左手の方が地元の人でも避

ける危険地帯だと教えてくれた。どちらに行こうか迷っていると、

サードが左手の道に入っていく。

「おい、サード！何で左手に行くんだよ！いつもあいつが使っているのは……」

「あそこを見ろ」

サードが指差したのは、人の丈ほどの所にある枝だ。

「枝が折れている。誰かがこっちの道に入っていたのは確かだ。

……それに」

サードが地面に視線を移す。そこには、人の物と思われる足跡が一つだけ残されていた。

「大きさからして間違いなく女だ。状況から考えて、マキノとやらの可能性が高いんじゃないのか？」

「確かに……よし、こっちに向かおう！」

左手の道に入って暫くすると、道らしい道は無くなって、木々の間を通り抜けながら進む事になった。森の中は暗く、かつマキノの進んだ道を探しながらなので、不安と疲れだけが一方的に蓄積される。しかも危険地帯だというだけあり、幾度と無く魔物が現れてはラフィスト達の行く手を塞ぐ。今も突如目の前に現れたグリズリー二体を、ラフィストとソードで切り伏せたが、さっきから何十体も相手をしていた事もあり、剣を振るう腕も鈍り始めてきていた。

「流石に、この数はきついな……」

「しかもほぼ間髪入れずにくるなんて、どれだけ魔物さんは暇ですよ！それよりも、女の子一人にこんな道これて!？」

「うーん……」

皆の不安がピークに達し、口々に不安をもらし始める。すると、辺りを見回していたソードが口の人差し指を当て「しっ!」と、声を発し、木々の先を指差す。そちらに視線を向けると、人影のような物がちらりと見えた。

「誰だろう……マキノかな?」

「わからない。それに、ここからじゃ人か魔物か区別出来ん。慎重に……」

「きっとマキノだ!」

慎重を期するべきだというソードの意に反して、ニックスが飛び出していく。待て、と慌てて声をかけるが、もうニックスは人影の方に行ってしまった。仕方なくラフィスト

達も後に続くと、そこには女の子が一人立っていた。ニックスが声

をかけている所をみる

に、彼女がどうやらマキノらしい。

「おい、マキノ！大丈夫か！それにこんな所で何やってんだよ！」

「……何も知らなければ、よかったのに」

「！？」

それだけ言うと、彼女はドサツとその場に倒れこむ。

「マキノの体が心配だ。一旦マキノを負ぶって、医務室に戻ろう」

ラフィストのその言葉にニックスが頷き、マキノを負ぶる為近付く。

そしてマキノの腕を

取ろうとした時、マキノを中心とした辺りに突風が巻き起こった。

あまりの凄まじさに腕

を前に翳して、目を閉じる。

「な、何だ！」

「……何も知らなければ、穏やかに過ごせたものを。だが、知られたからには生かしておけない。勿論それを邪魔するお前らも同じだ！」

吹き荒れていた風が止み、目を開けてマキノを見る。さっきまで地に伏していたはずのマ

キノの体は、宙に浮かび上がっていた。そして、向けられた掌から、掌圧のような物が放

たれた。

仲間と別れた後、魔力の残り香を感知していたティーシエルは今、大図書館に来ていた。

机に分厚い辞典を置き、物凄い速さでページをめくっていく。

「あの魔力の種類と属性からして、恐らくナイトメアだな。……徐々に精神を喰って殺す

ついでに、自らの餌にするつもりだったんだろう。――……まず

は身体からナイトメアを追い出さないと、ね」

ナイトメアの性質や弱点が書かれた部分に目を通すと、辞書を閉じて元の場所に戻す。足

早に魔道書が置いてあるコーナーに行き、本棚から無造作に本を取り出してページを捲り、中を確認していく。

「確か、憑依された人物と切り離す呪文があったはずだけど……と、これか？」

そのページを見ると、スターリフレクションと書かれており、憑依した者にのみダメージを与え、切り離すとあった。

「光属性か……力加減が上手くいくか心配だな。下手したら、憑依された相手まで傷付け

ちゃうし。——っ！魔力の波動が……ちょっと急がなきゃね」

魔道書を手に持ち、窓から外へ飛び出すと、ラフィスト達のいる森へと急いだ。

放たれた掌圧により、木に叩きつけられたラフィスト達は大ダメージを受ける。ラフィス

トやサード、ニックスはよろめきながらも立ち上がるが、ガーネットは気絶してしまっ

ていた。こうなっては体力の回復も出来ず、また攻撃する訳にもいかない

ので、一方的な防

戦を強いられていた。

「マキノ！目え覚ませ！」

「ふ……無駄だ」

再びマキノの手がこちらに向けられる。衝撃波が与えるダメージを

思い、身構えて防御体

勢をとる。手が微かに震え、衝撃波が放たれる。しかしラフィスト達に届く前に、後方から吹き荒れた風によって掻き消された。

「な、何だ？」

「……待たせたね」

声をした方を振り向くと、呪文を使った名残なのか、風をまとったティーシエルが立っていた。ティーシエルはニコリと笑い、ラフィスト達の隣に立つと怪我の具合を確かめる。

「全く、酷いもんだね……傷つきし全ての者に、癒しの水を降り注げ——ヒール！」

言の葉が紡がれたとたん、ラフィスト達の体が青い光に包まれ、みるみるうちに傷が癒えていった。

「さて、お次はコイツを何とかしないとね」

「そうは言うが、あいつの体の中にいる以上、打つ手が無い」

「それは僕に任せてよ。それより、体からナイトメアが飛び出してきたら頼むよ」

ティーシエルが詠唱を始めると、不穏な物を感じ取ったのかマキノの手がティーシエルの方に向けられる。

「死ね、小娘！」

「誰が小娘だ！——……スターリフレクション！」

圧縮して放たれた衝撃波をヒラリとかわし、ティーシエルが杖を掲げる。杖から光が生じたかと思うと、それは一筋の光となりマキノにささる。

「グッ……こ、これは！」

光に包まれるマキノから、一つの黒い物が飛び出していく。その瞬間、マキノの体が宙を

舞い、落下し始めた。慌ててニックスが飛び出し、落ちてきたマキノをキャッチする。

「今だ！………火炎剣！」

飛び出したナイトメアに、真っ先にサードが殺到する。剣に炎をまとわせた魔法剣がナイ

トメアを切り裂くが、すぐに傷口が塞がってしまう。マキノを地に下ろしたニックスが、

気孔弾を放つが結果は同じだった。

「なっ！」

「サード、無と光属性以外の魔法剣は駄目だ！……それと、生命力が停止しているナイトメアに気孔弾は効果ない。皆、物理攻撃でやるんだ！」

「わかった！」

ラフィストは、殴りかかったニックスのパンチを受けて、ナイトメアがよろめいた所を狙

って剣を繰り出す。その攻撃は上手くナイトメアの腕を捉え、切り落とした。反撃に衝撃

波を繰り出してきたが、先程までの威力や正確さは無くラフィストは難なくそれをかわす。

サードも剣を繰り出し、ナイトメアにダメージを与えていく。

「この、ちょこまかと……！」

ありったけの力を振り絞るかのように、大きく体を震わせて炎を吐き出してくる。迫って

来る炎に対し、ティーシエルがサツと印を切り炎の前に結界を張る。

炎が結界によって弾

かれて掻き消えると、ラフィストは剣を握りなおし切りかかった。

「止めだ！」

肩から胴にかけて切り裂くと、ナイトメアの体は土の様になり、崩れ落ちていった。崩れ

落ちた土は砂となり、風に流されていく。

「やっと倒したな！」

「よっしゃー！」

ラフィストとニックスが手を叩いて、喜び合う。ティーシエルはマキノの具合を確かめ、

サードは気絶したままのガーネットを揺り起こす。意識を取り戻したガーネットと共に、

マキノの所へ駆け寄ると、マキノはまだ目を閉じたままだった。

「ティーシエル！マキノの奴、どうなんだ？」

具合を見ていたティーシエルが、抱えていたマキノの体をニックスに渡す。

「普段鍛えてたおかげか、ナイトメアに憑かれた事による後遺症もなさそうだし、大丈夫

だよ。じきに目を覚ますさ」

「そっか……よかったー」

その答えに安心したのか、ニックスがマキノをギュッと力を込めて抱きかかえる。その感

触で、意識を取り戻したのかマキノの目がうつすらと開かれる。

「いやあああー！痴漢！変態！」

誰かに抱きかかえられているという状態に気づき、ハッと目を見開いたマキノが平手打ち

を放つ。それはニックスの頬を直撃し、ニックスが後ろにぶっ倒れる。

「痛えー！何すんだ、マキノ！」

起き上がりながらマキノに抗議するが、マキノはそれに気付かない。それどころかラフィ

ストやサードの方を見て、ウツトリしている。あまりの態度に切れたニックスがマキノの

頭にチョップすると、マキノが怒った顔で振り向いた。

「ちよっと、痛いじゃないアンタ！……って、ニックス！？」

「やーっと気付いたか……この様子じゃ、大丈夫そうだな」

「そうみたいだね」

ラフィストも笑って頷く。

「じゃあ、この人達はニックスの仲間かー。可愛い子二人に囲まれて、幸せ者ねアンタ！」

「馬鹿！アイツは男だ！」

ガーネットとティーシエルを見た後にマキノが大きな声で言ったので、ニックスは焦って

耳打ちする。しかし、元来大きな声なのが災いし、ばっちり筒抜けになっていた。本日二度目の間違いに、ティーシエルの額には薄っすらと青筋が立っているように見えた。

「えー！嘘ー！こんなに可愛いのに……勿体無ーい」

「しかもお前より二つも年上だぞ！」

「悪かったね、年上な男でさ」

眉間に皺を寄せたティーシエルが杖でニックスの頭をぶん殴り、ぼそりと呟く。

「とりあえず、マキノの無事を知らせる為にも一度医務室に戻ろう」
そう言って立ち上がり、元来た道を歩き始めた。

一七章 幻の鉱石

「ああー、そうだったの……大変ねえ。ニックスったら、ご存知の通りアホでしょ？ いや

はや、苦勞をおかけしまして……」

「あ、こ……こちらこそ、ご丁寧に」

「ア……アホかー！」

「ちよつと、静かにしてよニックス」

マキノに言いくるめられるラフィストに、顔を赤らめながらニックスが突っ込む。一同は

まだ村へ帰る森の中だ。ティーシエルが魔物を気にして注意するが、ニックスの突っ込み

は森の中に木霊していた。サードがニックスを殴り、静かにしろと短く言うときつと周囲

を確認する。あれだけの大声だったのにもかかわらず、幸い魔物が寄ってくる気配は無か

った。ほつと息を吐き、サードが結界を強くするように言うと、ティーシエルが周囲に薄

く張った結界を強めた。流石にこの疲れきった中で戦闘するのは、確かにごめんだ。

「ところで、マキノは何でナイトメアなんかにとり憑かれてましたの？」

「それがさ、私にもよく分かんないの。洞窟を見つけて、一歩足を踏み入れた所までしか

覚えてないんだよねー」

「じゃあ、昨日私達にあった事も？」

「ゴメン、全く覚えてないんだ」

「そうだったんですのー」

ガーネットは同じ年頃の女の子と話せるのが嬉しいらしく、はしやぎ気味になっている。

「それにしても、ナイトメアが言っていた“何も知らなければよかった”とは、どういう意味だ？」

女の子達の後ろで、サードがラフィスト達に話を切り出す。それが耳に入ったのか、マキノが後ろを振り向いて答えた。

「ああ、アレ？ 実はあの時、ナイトメアの意識っていうのかな……そういうのが私を支配してたでしょ？ だからか、アイツの気持ちとかが、少し体に残ってるんだ。で、あの意味は多分……何も知らずに平凡に暮らしていれば楽に死ねたのに、って感じだと思う」

「何も、知らずに？」

「マキノの行動を考えると、洞窟の事をさしているのかな？」

「そ。多分、だけど。それとあのナイトメア、誰かの部下みたいな感じだったかなー。そこで、私は一つの結論に辿り着いた！」

「な、何？」

思いがけないマキノの言葉に、皆の足が止まる。

「中間管理職は大変だ」

「……何でそうなんねん！」

気の抜けるような答えに、思わず一同はずっこける。ニックスがワンテンポ遅い突っ込みを入れると、マキノが頬をプクーと膨らませる。

「そんな事言われたって、あくまでモヤモヤした霧みたいな意識なんだもん！ ナイトメア

の親玉が私を殺そうとしてたのかな、位のもんよ！」

マキノがニックスと言い合いを始め、ずんずんと先を進んでいく。

その気楽な様子に苦笑

し、ラフィスト達も歩き出すとティーシエルが何やら考え込んだような仕草を見せる。

「どうかしたのか、ティーシエル」

「……ラフィスト、僕達は何の為にここにきてる？」

「それは、鉱石を手に入れる為……」

ラフィストの答えを聞いたサードがハツとしたような顔をする。

「なるほど……アンカースの魔導士か」

「ご明察。そもそも僕らは、セクルードさんからダグラスとか言う奴に、並みの攻撃は効

かない、っていう話を聞かなかったら、鉱石を採りにきている訳が無い。つまり……」

「鉱石を手に入れられては困る人物……アンカースの魔導士が、裏にしている可能性がある」

「そういう事」

こんな山奥の平和な村にまで、魔導士の影が及んでいるのだと実感する。思った以上に世

界は深刻な状態なのかもしれないと、ラフィストは改めて思った。

こう頭の中で考えてい

ると、いつの間にか医務室についていたらしい。中に入ると、保健の先生がマキノに事情

を聞いている所だった。ニックスも一緒に説明したのが良かったらしく、保健の先生は大

分落ち着いてきているようだ。

「そう、そんな事がねえ……ああ、村の皆にも説明しなきゃ」

「そうなんですよ！もう大変！つつーワケで、私、ラフィストさん達について行く事にし

ました！」

「ええー！」

これには医務室を出掛かった先生も、入ってきたばかりのラフィス

ト達も驚く。

「どこかに必ず私みたいに困ってる人がいると思うんです。だから、私行きたいんです！」

「でも……ラフィストさん達は……」

先生は困惑の色を隠せない。

「別にいいよな、皆！」

ニックスが純粹に喜び、皆に賛同を促す。ガーネットは喜んでいるし、ラフィストも構わ

なかったが、サードとティーシエルの二人は渋い顔だ。

「ふざけるな！俺達は人助けをしに行くんじゃない！」

「サードの意見も、一理あるよ。どちらかというと、人助けじゃなくて人殺しに行くんだ

し？ま、僕はマキノにその覚悟があるなら構わないけどね」

「……マキノ、どうだい？」

一緒に旅をする以上、バラバラの意見のまま仲間にする訳にはいかないの、ラフィスト

はサード達の賛同を得る為にもマキノの考えを聞く。

「あのね、学生とはいえ私だって武闘家よ！それ位の覚悟は、常に持ってるわ。でもその

過程の中で、人を助けたいと思う事位はいいでしょ？……お願い！」

ラフィストが目配せすると、やれやれといった感じながらも二人が了承してくれた事が解

かった。その様子に一安心し、ラフィストがこれからよろしくとマキノに手を差し出すと、

マキノの顔に笑みが浮かぶ。

「こちらこそ、よろしくね。ラフィスト、ガーネット、サード、ティーシエル、それと……」

……ニックス！」

「な、何で俺が最後なんだよ！つか、そのついで感は何だ！」

「何でそんな事に拘んのよー。大体、アンタは昔からそう！」

ぎゃいぎゃい言い始めた二人に、選択誤ったかもな……とこっそり思う。結局、ニックスが負かされたらしく、マキノにのされていた。

「とにかく、洞窟に行くんでしょ？明日早起きしていくわよ、いいわね！」

ボコボコにされた挙句、ニックスがお尻までマキノに蹴られる。今日の所はそろそろ解散

しようというフィストが言うと、ニックスががばっと起き上がって遠慮がちに口を開いた。

「今日一日だけでいいんだ。俺、実家の方に泊まってきてもいいかな？」

いつものニックスらしからぬ態度に、思わず笑みがこぼれる。

「何今更遠慮してんだよ！俺達に遠慮せず、行ってこいよ」

「そうですね。家族との御食事を、お楽しみになって」

「ああ、別に気にする事無いよ。だって、君いない方が静かだからね」

「……勝手にしろ」

「皆……ありがとな！朝七時に宿の方に行くからさ！じゃ、おやすみ〜！」

嬉しそうに家路につくニックスと、途中まで一緒に行く事にしたマキノを見送った後、ラ

フィスト達も宿の方に戻り始めた。

次の日の朝、宿の方に来てきたニックスとマキノと合流したラフィスト達は、昨日マキノ

を探す際に足を踏み入れた危険地帯の森の中を歩いていた。ティーシェルが薄く張って

くれた結界のおかげで、昨日はどうじゃうじゃ敵は沸いては来ない。

それでも道程はきつ

く、多少の敵は出る為疲労は溜まっていく。

「マキノ、後どれ位でつくんだい？」

「んつとねー、もうちょっとだったと思うけど。……あ、ここ右に曲がって」

「マーキノー。いい加減、俺あ疲れたんだよー……まだかー？」

愚痴をこぼすニックスに、サードの鋭い視線が突き刺さる。あまりに情けない様子に、マ

キノもニックスにおかんむりのようだ。

「んもう！本当にあと少しなんだから我慢しなさいよね！」

「全くだよ！ちよつとは静かに出来ないわけ？」

「ねえ、マキノ。あれではなくて？」

マキノとティーシエルのニックスへの文句が続きかけた所に、ガーネットが口を発する。

ほら、とガーネットが指差した先を見ると、大きな洞窟の入り口があった。

「あ、そうそう！これこれ。さ、入るわよー」

「ちえっ！調子のいい奴ー」

入口に着き、中を覗くと真っ暗で先が見えない。サードが図書館で見つけた地図を開き、

ガーネットに明かりを頼む。

「ティーシエル、出番ですわよ」

「頼まれたのは君だろ！っていうかさ、何で僕がわざわざ使わなきゃいけないわけ！？」

「何でって、魔力が高い方が使うのは当然ですわ！それに、私は仮にも姫なんですから、
気を使ったらどうですの！？」

家出中のくせにとブツブツいいながらも、どっちでもいいから早くしろというサードの言

葉に、ティーシエルが魔法を使って辺りを灯す。洞窟内部に足を踏

み入れると、中は鍾乳洞のように湿り気の多い場所だった。暫く進むと、先を歩くサードの足がピタリと止まる。

「……くるぞ」

そのすぐ後に、魔物の攻撃がニックスに襲いかかる。ニックスは間一髪の所で避け、敵に對して戦闘体勢をとる。物陰から出てきた魔物は、ドラゴンゾンビだ。攻撃力が高く、当たると洒落にならない。詠唱を始めるガーネットとティーシエルを庇うように、二人の前に立ち塞がって敵を攻撃しにかかった。

「たああ！」

「うりやあああ！」

マキノの三節坤が敵の首にヒットし、よろめいた所をニックスが仕掛ける。その後ろから、サードとラフィストが続いて飛び出す。

「紅蓮剣！」

「連続剣！」

サードの魔法剣によって紅蓮に包まれた敵を、ラフィストが二重に切り刻む。

「二人とも下がって！……オーラ！」

「シャイニングライト！」

止めと言わんばかりに、ガーネットとティーシエルの魔法が放たれる。これには堪らず、

ドラゴンゾンビは断末魔の叫びを上げて、崩れ落ちていった。

「ふふ、やっぱりこの手の敵には光魔法が有効だね」

「それにしても、強い敵が出てきたな。……鉱石に近付くにつれ、強くなっていくのかも。」

皆、気を引き締めて行こう！」

武器を収めると、ラフィスト達は再び先を進み始めた。

「まったくよー、どうやってたらかここ開くんだよ！」

数多の戦闘の末、洞窟最深部と思われる所まで進んだのはいいが、目の前にある扉が開か

ない。さっきから何とかしてあげようと、ニックスなんかは体当たりまでしている。

「ねえ、サード。これ分かる？ね！ね！」

「……知らん」

「うーん、困りましたわ」

「そうだね」

皆の視線が、後ろで休憩していたティーシエルに集まる。

「え！もしかしてよく考えもせずに、僕に考えろっていうの！？冗談やめてよ！僕だって、

休憩したいんだから！」

「そう言わずに頼むよ、ティーシエル」

「だから嫌だってば」

「あ、もしかしてお前もわかんないんだろ？それならそうと、正直に言えよー」

ニックスが茶化していうと、カチンと来たのかティーシエルが立ち上がり、つかつかと扉

の方に向かう。暫く扉と向き合っていると、ニックスに向かってフンと鼻を鳴らして笑った。

「これは恐らく、呪文によって封印されてる。だけどこれ位、訳ないよ」

ニックスが苦い顔をしたのを見ると、ティーシエルは扉に向き直り何やら唱える。すると

音を立てて扉が開いた。

「やったな！」

一行が足を踏み入れたとたん、何かの気配を感じる。一行の間に緊張が走り、それぞれ武器に手をかける。物陰から何かが飛び出し、身構えた一行の視界に入ったのは小さなドラゴンだった。

「あー！プギューじゃない！」

「な、何じゃそりゃ！」

とりあえず敵じゃないとわかり、脱力する一行。そのプギューについてニックスがマキノに突っ込むが、マキノは全く聞いていない。

「どうしたの？何でこんな所にいるの！？」

「プギュー……」

ドラゴンはマキノの周りを、ふわふわ浮いている。

「ま、まさか……そのドラゴンの鳴き声が、プギューだから……」

「あ、ティーシエル！よく分かったね！そんなティーシエルには賞品をあげよう！」

がつくりきっているティーシエルに、マキノがポケットを弄って何やら取り出す。ラフィス

ト達が覗き込むと、色々な種類のガムがマキノの手に広げられている。ガムの種類について

ではしゃいで説明する様子から察すると、どうやらマキノは無類のガム好きのようだ。サ

ードはそんなマキノを無視し、ドラゴンに近付いてじっと見ている。

「……こいつは、ドリームドラゴンの子供だな」

「ドリームドラゴン！？」

ラフィストが珍しそうにプギューを突付くと、プギューはくすぐったそうに身をよじる。

「あ！マキノ、あなた。洞窟の前でプギューを見かけて、ついて行ったのでしょうか？」

「よく分かったね、ガーネット！出血大サービスでガーネットにも

……」

ティーシエルにガムを押し付けたマキノが、再びガムを手を広げる。

「あ……いえ、け……結構ですわ」

「でも、何でついてたって思うんだ？」

「このドラゴン、口からガスを吐いて名前の通り、相手を眠らせてしまいますの。それで催眠状態を、ナイトメアに狙われたのではと思って……」

「え……じゃ、こいつ……またスリープガスをだすんじゃない？」

「マキノに懐いている所を見ると、大丈夫だと思いますけど……多分」

こっそり付け足された部分に脱力しつつも、とりあえず奥で光っている鉱石を採る事にした。間近で見ると、その光は七色の様に見える。おもむろにそこらに転がっている石で叩

いて鉱石を採りだそうとすると、慌てた様子のサードに止められる。「な、何やってるんだお前は！採り方があるんだ、採り方が！大体、どれだけの鉱石が必要だと思ってるんだ！それに、それをどうやって持ち帰るつもりだ！？」

「え……その、皆で引っ張って？」

ラフィストの答えにサードが呆れて溜息をつく。

「ラフィスト、そんな採り方じゃこの鉱石は、ただの石と変わらなくなってしまうんだよ」

ほら、とティーシエルに指し示された先を見ると、光を失った石の破片があった。

「あ……本当だ。でもじゃあ、どうやって？」

「必要な分だけ結晶化させる。そうすれば軽く持ち運べるしね」

みてて、と言うと皆を後ろへ下がらせティーシエルが詠唱を始める。

「古より語られる数多の伝承、原子を変える礎となりし呪法にならん。天の煌きは覇者の

紋様、夢幻の力を示す天の印……リスターフォース！」

鉱石の一部がカッと光、消えていく。完全に光が消えた時、ティーシエルが結晶化された

鉱石を皆に見せた。

「ま、ざっとこんなもんだよね」

「すっげー！ティーシエルの魔法にはびっくりだぜ！今度、俺も呪文習ってみようかな！」

「君が魔法覚えたとしても、絶対スカートめくりにはまるから、やめた方がいいよ」

「全くもってティーシエルの言う通りよね」

ニックスとティーシエル、マキノの会話に笑いが起こる。目的は達した事だし、ひとまず

村に戻ろうと呼びかけると、洞窟から出る為にテレポートした。あれだけ大変だった道程

も、戻るのにはテレポートとワープによって一瞬だった。改めて魔法の便利さに感心する。

宿屋に戻って部屋に入ると、ラフィスト達はこれからの事を話す事にした。しかし、一人

魔法を連発する形となったティーシエルだけは、ぐったりとベッドに横になっている。顔

だけはこちらを向いているので、とりあえず話だけは聞こえているらしい。

「鉱石手に入れたのはいいけどさ、これどうすりゃいいんだ？」

「確かにそうよねー。名工とかいれば、何とかなるとは思うけど……」

「……」
そう言うと、ニックスとマキノが考え込んでうーんと唸る。

「名工か……当てが無い訳ではないな」

サードの言葉に、一同の視線が集まる。サードはさっと地図を広げると、とある場所を指差した。

「ここは……？」

「フォートレスだ。ここにそいつがいる。……アンカースとは別大陸だな」

「あら？もしかしてそこ、武の国フォートレスの首都ではなくって？」

「ガーネット、知っているのかい？」

「ええ……ちよつと。前に一度だけ、お父様とティーシエルとで行った事が……」

「ガーネット！それは誰にも言わないって言っただろ！」

ティーシエルがベッドから飛び起きて怒鳴りつける。いつもの様子と違った余裕の無さに

疑問を持ち、ラフィストがガーネットに問いかける。

「何かあったの？」

「何せフォートレスには、いやーな想い出がありますから……」

「おい、フォートレスにワープで行けないのか」

サードに問い詰められ、ティーシエルは視線を泳がす。正直に答えるべきか、迷っている

のかもしれない。しかし、結局行けると答えたようだった。

「ねえ、本っ当に行くの？」

「当然だ」

最後の希望までに何も無く切り捨てられ、ティーシエルはがっくりと肩を落とす。諦めた

のか一つ溜息をついた後、布団の中に潜り込んでしまった。それを見たガーネットが、ラ

フィストにボソボソと耳打ちする。

「ラフィー、あのね。フォートレスの王子がティーシエルの事を女の子と勘違いしていま

して、ティーシエルにベタ惚れですの。名前はディレス王子というのですけど、彼があま

りにも人がいいものですから……——」

「本当の事、言えないんだね……」

返事の代わりにコクリと頷くと、ガーネットは同情を含んだ目でティーシエルを見る。

「可哀想ですわ……」

「た、確かに」

男としての自尊心の高いティーシエルにとって、何よりの苦痛なんだろうなと思い、ラフ

イストも同情を禁じえなかった。次の行き先も決まった事で作戦会議を終了すると、各自部屋に戻って体を休めた。

朝、なるべく広い場所の方でワープした方がいいという意見のもと、六人は村の外に集ま

っていた。一晩経っても、相変わらずティーシエルは元気が無く、俯き加減だ。そんなテ

ィーシエルを、何も知らないマキノが元気付けようとする。

「ティーシエル、頑張れー！あ、そうだ。景気付けにガム食べる？今日のお勧めはキムチ

でね！この辛味が疲れを……——」

「……いないよ」

「ふふ……ならば応援しかないね！ガーネットも一緒に応援しよ！」

「OKですわ！せーの……っ」

後ろでどんちゃん騒ぎ始めた二人に、集中力を欠かれたのかティーシエルが青筋を立て始

める。その時、ニックスの頭の上を跳ねて、何かが皆の前に躍り出てきた。

「プッ……プギューッ」

「あー！プギュー！」

「あらあら、寂しいんですの？よしよし」

皆の前に突如現れた物体、プギューはマキノに擦り寄っていく。そのプギューの頭をガー

ネットが撫でてやると、気持ちよさそうに一鳴きする。

「おいおい、マキノー！すっかり懐きまくってんじゃねえか！」

女性陣に可愛がられるプギューを見て、ニックスが慌てだす。

「えー、いいじゃん。プギュー、可愛いし。見るからに、役立ちそうだよ！……そーだ！」

今日から一緒にお風呂入ろう！」

ねー、とプギューに言ったマキノに、ガーネットが私も一緒に入りますわ、などと言って

いるが、ニックスには全く聞こえていないようだ。物凄いショックを受け、フラフラとラ

フィストに近付いてポツリと言った。

「ラフィスト……俺、こんな間抜け面に負けちゃった」

「ニックス……大変だな、お前も。まあ、元気出せよ。ガーネットも一緒みたいだし、何

より相手はドラゴンじゃないか！お前は人間だろ？」

「そ、そうだよな……っ！」

わいわい騒ぎ出した一行から少し離れた所で、ティーシエルがしゃがみ込む。何やらブツブツ喋る様子からは、絶望感が滲み出ている。

「………っていうかさ、僕の負担、また重くなった訳？………そもそも行きたくすらないのに、何で僕ばかりこんな目に」

「お前も、何だかんだ言って苦労性だな」

ティーシエルの頭にポンと手を置き、サードが同情を帯びた目で見える。その行動は思いの

外、ティーシエルの心に響いたらしい。

「サ……サード！……でも、いいんだ。——…もう僕、諦めて

るから」

「そうか」

どこか遠い目をしたサードがフツと笑う。二人の視線の先には、出
発前だという事を忘れ

きっている四人十一匹の姿があった。

一八章 一〇名工

ここはフォートレスの城下町。至る所に商店が立ち並び、常に人で賑わっているようだ。

武の国という名の通り、特に武具の店が多く立ち並んでいる。今までラフィスト達がいた

グラン大陸と比べても、武器の質は遙かに高い。ここならば確かに、鉱石の加工も期待出来るであろう。

「ここは国土の狭い国ですけど、代わりに良質な鉄が沢山取れます。その鉄を使って、これらの武具を作っているんですよ！」

「そうなんだ……ところでサード、その名工に会うにはどうしたらいいかな？」

「その名工は今、国のお抱え技師だ。頼むなら、まず王に謁見しなければならん」

「あ、僕は宿にいるよ……」

こっそり逃げ出そうとするティーシエルの服の裾を、ガーネットが掴んで引き止める。

「そんな事を言ったら、ディレス王子が悲しみますわよ」

「だから行きたくないんだよ！」

「でも、ティーシエルがいないとつまんないよ！ね？皆！」

「そうだぜ、ティーシエル！」

何も知らないマキノとニックスが能天気言い放つ。

「つべこべ言わずに行くぞ！」

サードが無理矢理、ティーシエルの服の首根っこの部分を持って引き摺る。ティーシエル

は最後まで抵抗していたが、力の差には敵わず、あっという間に城

の前についてしまった。

ここまでくると、流石に諦めたのか、ティーシエルが抵抗をやめる。それを見て、サード

がティーシエルを離れた。

「へえ、ここがフォートレスのお城なんだな」

いかにも軍事国家と言わんばかりの城を見て、ラフィストが唸る。

「ここには騎士団もあるんですわよ」

「ふーん、騎士団か……」

城の中に入り、謁見の受付を済ませてから暫く経つと、一人の兵士がラフィスト達を王の間へと案内してくれた。

「やっぱり……僕帰っちゃ……」

「ダメ！」

「……だよ、ね……」

王の間への扉が開き中へ招かれて入ると、鎧姿の出立ちをしている王がラフィスト達を歓迎してくれた。

「ようこそ、ラフィスト君。それにガーネット姫とティーシエル司祭、久しぶりだな」

「はい、王様。この度は、王様をお願い事があって……」

「ティーシエル！」

ラフィストの言葉が、何者かの声によって中途半端にさえぎられる。「げっ……デイレス王子」

条件反射と言わんばかりに、一步引き下がったティーシエルにつかつかと歩み寄るこの人

が、どうやら噂のデイレス王子らしい。そのデイレス王子は嬉しそうにティーシエルの手を取って、ウツトリとした顔をしている。

「本当に久しぶりだね……髪の毛は切ってしまったみたいだけど、短い髪の君も可愛いよ」

「はあ？」

ディレス王子の様子に、事情を知らないサード、ニックス、マキノが首をかしげる。

「まあ、可愛いこたあ可愛いけど……」

「え？ え？ ティーシエルって、女じゃなくて男よね？ もしかしてそういう趣味だったり？」

ラフィストとガーネットは言ってしまったか、と言う顔をしてディレス王子の顔を見る。

ディレス王子にもニックスとマキノの声は充分届いていたらしく、ショックを受けていた。

「……男？ ええっ！ ティーシエル、君は女の子だろ！？」

「何っ回も、違うっつってんだろー！ こんなボケがー！」

掴まれた手を乱暴に振り払い、ティーシエルがショックを受けた王子に止めを刺す。言葉

遣いもいつもより乱暴な事から、相当きていたんだろう。

「そうか……男なのか。ティーシエルは、私の初恋だったのに……」

がっくりと肩を落とすディレス王子が流石に可哀想になり、一同の同情が集まる。

「何だよ、この空気！ それじゃ僕が悪いみたいじゃないか！ 可哀想なのは僕だろ！」

「ところで、ラフィスト君。君達は何の用で、ここにきたんだね？」
フォートレス王が、ディレス王子を退出させ、ラフィストに尋ねる。

「実は僕達、トラートの森の洞窟で鉱石を採ってきたんです。それをこの国のお抱え技師

である名工の方に、加工して頂きたくて……」

「それは、ディーテークレーディの事だな。うむ、わかったぞ。…

…おい、ディーテをこ

こへ呼んでまいれ」

「ははっ！」

側にいた兵士の一人が足早に王の間を退出する。王は話す事が好き

なのか、ディーテを待

っている間、今までどんな旅をしてきたのかなどを聞いたり、自分の武勇伝を話したりし

た。そうこうしていると、先程の兵士が一人の老人を連れて戻ってきた。

「うむ。お前に用があるのは、こちらの方々だ」

王に目で促され、ラフィストはディーテに事情を話し始めた。

「僕ら、トラートの森の洞窟で鉱石を採ってきました。加工して頂けないでしょうか？」

「何！？トラートの森の聖地で！？……で、その鉱石は？」

「これです」

「お、おお……美しい」

ディーテが鉱石を手に取り、じっと眺めている。

「どうでしょうか？」

「ああ、勿論加工させてもらうよ。こんな良い材質を加工できる機会なんて、滅多にない

からの。じゃが、早くても一ヶ月位はかかるが、それでもいいか？」

「い……一ヶ月！？」

「当たり前じゃ。こんな老いばれ急かすと、ロクなモンが出来んぞ」

「一ヶ月……少々長いですわね」

「そうじゃ！」

どうするべきか悩む一行に、王が口を挟む。

「ディーテよ、キキナナ湖にある加工場に行ってみてはどうじゃ？」

この者達は一刻を争っ

ておる。あそこならば、最新の設備が揃っておるから、二週間もあれば充分じゃろう？」

「……確かに。ですが王よ、あの辺は最近グールが出ますよって……」

「グール？」

サードが興味深そうに耳を傾ける。

「そう、あの人食い鬼じゃ。あやつらが、キキナナ湖の聖水を狙ってやってくるんじゃないよ。」

流石に命の危険にさらされと思うと、集中できん」

「そういう事なら、私達が！」

マキノが得意げに言うが、ディーテはまだ不安な事があるのか暗い顔のままだ。

「じゃが、あのグールに術は効かんぞ。手練れとはいえ、これはきつい」

「ちょっと待って！あいつらは攻撃力と防御力が高い代わりに、術の耐久は殆ど無いだろ」

「リフレクションじゃ……」

王が重い口調で話し始める。

「数年前に、キキナナ湖周辺で暴れ始めたグールに討伐隊を送った時、兵士の使った呪文

が全て跳ね返ってきたらしい。……この事から考えると、恐らく何者かによってリフレク

ションをかけられたのじゃろう」

「リフレクション！？そんな……それでは魔法を解く呪も、跳ね返されてしまいますわ！」

「プギュー！」

緊迫した空気の中、プギューの鳴き声が王の間に響き渡る。

「どうしたの！？大人しくしてなさいって言ったじゃないの！」

「プ……プギュー」

マキノがきつく言うのと、プギューが少し寂しそうに鳴く。じっとプギューを見ていた王が、

何か閃いたのかポンツと手を打った。

「そうじゃ！ドリームドラゴン……こやつのがスで！」

「グールを眠らせてしまえば、問題はありませぬね！……ディーテさん！」

ラフィストの熱意に折れてディーテが了承した事により、一行はキ

キナナ湖へ向かう事と

なった。ラフィスト達は早速ディーテを連れて、キナナ湖に向かい始める。フォートレ

スから二、三刻ほど歩くと目的地であるキナナ湖が見えてきた。

「ほれ、あそこがキナナ湖じゃ」

一行が辿り着いたキナナ湖の水はとても澄んでおり、湖の底まで見えるほどだった。湖

には橋が架かっており、どうやら加工場というのは湖の中に建っている、橋の先にある建物

物のようだ。

「じゃあ、早速ここ一帯に結界を張るよ……プギューも、頼んだよ」

「プギュー」

プギューはティーシエルの周りを一周し、了解と言わんばかりに一鳴きした。

「ディーテさんの安全の為に、念の為に二手に分かれようか」

バランスを考えた結果、最初に武器を作ってもらったラフィストと、マキノとテ

イーシエルが中に入る事となり、サードとニックスとガーネットがグールに備えて外にい

る事になった。ニックスは半強制的にマキノに外に追い出される形になったので、ぶつぶ

つと不満を漏らしている。

「ふむ、剣が二本と杖が二本、それにナックル、三節坤……か。わかったぞい！このディーテが腕を振るって作ってやろう！」

「おい、じいさん……俺は大剣で、こいつは中剣だからな」

「おお、わかったわかった」

ディーテに行くぞと促され、ラフィスト達は一先ずサード達と別れて加工場の中へと入っていった。

「ディーテさん。悪いけど、僕の杖にこの宝玉使ってくれないか？」
加工場の中に入る階段を下りながら、ティーシエルがディーテに話しかける。

「ふむ、これか？」

杖を眺めていたディーテが、なら預かっておくぞとティーシエルから杖を受け取る。階段

を下りきると、思った以上に広い空間に出た。そこはテーブルやキッチンがあり、一種の

ダイニングのようだ。そしてその左側には同じようなドアが並んでおり、右側には更に

通路がのびている。ディーテは左の真ん中のドアの前で立ち止まると、その扉を開いた。

「ほれ、ここが加工する場所じゃ」

「わお！ 凄い！ ここが最新！」

知らない加工設備の前で、マキノがはしゃぎまくっている。ティーシエルは加工場の中で、

結晶化した鉱石を元に戻す。それからダイニングに戻って話した結果、ラフィストはディ

ーテの作業を手伝う事にし、マキノとティーシエルは最初に出た広い空間の所で、思い思

いに過ごす事に決めた。ここならば何かあっても、すぐ対応する事が出来るからだ。マキ

ノは今晩寝る部屋までもう勝手に決めたらしく、右側の通路の先にある仮眠部屋のドアに、

それぞれの名前が書かれた紙をペタペタと貼り付けている。その時、上の方から物凄い音

が聞こえて、地響きがした。

「グ、グールじゃ！」

「グールが……でもディーテさん、大丈夫です。きっと彼らが食い止めてくれます」

「そうじゃな……では、早速作業に取り掛かるぞ!」

「はい!」

ラフィストとディーテが加工場の中に入り、扉を閉め切る。ティーシェルとマキノの二人が広い場所にとり残される。暫くして、ティーシェルはテーブルの近くに置かれたソファに横になった。

「こんな時に悪いけど、やる事も無いしちょっと休むよ」

「んー、私は……そうだ! 皆が戻って来た時の為に、お風呂沸かして夕飯作ってよっと!」

「……マキノの料理? ガムは嫌だからね」

「あ、馬鹿にした! 私これでも料理はマトモなのよ!」

「あ、そうなの? ふふ……じゃあ、ちよつとは期待して待ってるよ」
そう言うと、ティーシェルは完全に寝る体勢に入る。マキノもまずはお風呂を洗ってこようと、その場を離れた。

加工場内に物凄く地響きがした時、キキナナ湖の湖畔に待機して待っていたサード達も同じ振動を感じていた。おそらくこの地響きの元凶が、キキナナ湖の聖水を狙っているグールなのだろう。

「おそらくこれは、グールですわね。――……あっちの方からですわ!」

「あーっ! どんな奴なんだー! くそー、マキノの奴! 俺にこんな役回りばかり押し付けやがって! ……あ、でもそれって結局俺の事頼りにして!」

「何ブツブツ言ってる! ―――……くるぞ!」

色が黒く、目が一つの巨漢の生き物が、のっそりと現れる。それぞれ武器を構え、戦闘態

勢に入ったとたん、グールの腕が三人に襲い掛かってきた。サードがガーネットを抱えて

横っ飛びし、ニックスがヒラリと宙返りして攻撃をかわす。三人がいた所には、大きな窪

みが出来ている。あれを食らったらひとたまりも無いだろう。

「きゃっ！あ、危ないですわー……」

「物凄い攻撃力だな……やはりさっさと眠らすに限るか」

プギュー、と声をかけるとプギューは了解とばかりに一鳴きし、グールの前に躍り出る。

グールは動きが鈍いのか、まだ攻撃の態勢を整えているところのようだ。

「今だ！いけ！」

サードが叫ぶとプギューは思いっきりスリープガスを吐き出した。

辺り一面にピンクの靄

がかかり、三人はそのガスを吸わないように息を止め、しゃがみ込む。グールは力をため

ようと大きく息を吸った為、このスリープガスを思いっきり吸い込んだ。ガスが効いてき

たのかグールは大きい巨漢をフラフラさせ、やがてその場に倒れこんだ。プギューも息が

切れたのか、徐々にピンクの靄が晴れてくる。

「……効いてる、みたいだな」

ニックスが眠っているグールをツンツン突付き、確認する。相当深い眠りに陥っているら

しく、グールが起きる気配は全く無い。

「よし、眠っている間に少しでもダメージを与えるんだ！」

サードがグールに切りかかる。しかし、元来の高い防御力のせいで、皮膚を切り裂く程度

のダメージしか与えられない。ニックスも負けじと拳を連弾で炸裂させるが、結果は同じようだ。

「おいおい、こんなんでも本当に倒せるのかよー……」

「泣き言を言うな、ニックス！倒すまで技を繰り出すまでだ！……炎烈斬！」

「二人共、頑張っ……！」

「プ……プニュー……」

ガーネットはプギューを抱え、離れた位置で二人を見守る。プギューはさっきのスリープガスで、疲れきっているらしい。

キキナナ湖の湖畔での戦闘中、マキノは鼻歌まじりに料理を作っていた。疲れきって帰っ

てきた皆に美味しい物を食べてもらおうと気合が入っているらしく、マキノの手によって

かなりの量が作られていく。

「えっと……ここで片栗粉を入れて――……キャツ！」

マキノが片栗粉を入れた瞬間大爆発が起こり、ソファで眠っていたティーシエルも飛び起

きてその場に駆け寄った。

「何やってるんだよマキノ！料理得意なんだろ！？」

「わ……私のせいじゃないわよ！」

これよこれ、とマキノがズイツと差し出した袋には、片栗と書かれている。袋をマジマジ

と見つめていたティーシエルが、中をあけて匂いを嗅ぐと、顔を顰めて溜息を吐いた。

「これ……中身片栗粉じゃなくて、爆薬の一種だよ」

「げ、嘘……だ、誰よ！こんな所にそんな物置いた奴は！」

この加工場は国が管理する特別な場所だ。そんな所を使用できる人間など、極一部に限られている。十中八九、ここをよく使うディーテさんがポンツと置いた物だろうと思ったが、

言ったら大変な事になりそうなので、それはマキノに言わない事にする。ティーシエルは

気をつけて料理しなよと言い残すと、再びソファにねっころがって眠りについた。暫くう

とうとしていると、自分を呼ぶ聞き覚えのある声がする。

「――シエル、ティーシエル」

懐かしい――……この声の主に対してそう思った。しかし、寝ぼけているせいか、誰なのかはつきりわからない。

「誰……？」

「誰って失礼ね！このナディア様に向かって！！」

ナディアだ。そう思った時、はつきりと意識が覚醒する。しかしナディアが話しかけているのは、自分であって自分ではなかった。自分の意識は上にあるの

に、自分とナディアが

下で会話をしているからである。過去の事を夢に見てしまったのだろうか、そう思いつつ

これはいつの事だろうと考える。

「ティーシエル。また魔力・魔法攻撃威力共々トップだったんだってね、おめでとう。このままいけば、アルベルト様を抜かしちゃうんじゃない？」

「さあね。でも、やっぱり反属性の威力って弱まるんだって、実際の数字見て思ったよ」

「フフ……あんたなら絶対そう言うと思ったわ」

ナディアが腰につけた袋から、ゴソゴソと何かを取り出そうとして

いる。

「な、何だよ！悪かったね、わかりやすくって！」

「別にそんな事言ってるんじゃないの……はいっ！」

ポンッといきなり投げられた石を慌ててキャッチする。一見すると、ただの赤い石のよう

に見えるが、この石には魔力が込められている。

「魔法玉よ。主に炎とかの威力が上がる宝石、大事にしてね」

「ナディア……」

溜息交じりにティーシエルが呟く。

「な、何よ！何か変な事でもした!？」

そうじゃない、そういう事が言いたいんじゃない。自分の予想が間違っていないのなら、

これはトップだった記念などではないはずだ。今日という日と照らし合わせてみても、間違

い違いと確信を持てるからこそ、女としてのナディアに悲しいものがあつた。

「あのさ、もうちょっと女の子らしい贈り物は出来ない訳?……これって、僕の誕生日プレゼントのつもりだろ？」

「悪い?誕生日プレゼントがそれで!他のもんだったら、魔道書か古文書位しかないじゃない!」

「はいはい」

そんな会話をしながら、屋敷の中へと二人が入っていく。ティーシエルはこの夢が、杖の宝玉をナディアから貰った日の事だと気付いた。そして、その年のナディアの誕生日に真似をして、水属性が上がる魔宝玉がついた青い羽根飾りを、彼女にプレゼントしたのだ。

そこまで思い出し、自分の行動に笑いがこみ上げてくる。何かと反

発しつつも、そのやり

取りを楽しんでいた自分に気付いたからだ。心地良い気持ちのまま、意識が覚醒していく。

すると良い匂いが鼻に香ってきた。何の匂いだろうと、ティーシエルがうつすらと目を開

けると、マキノが出来上がった料理をいそいそとテーブルに並べている所だった。

「あ、ティーシエル。起きてたの？」

テーブルに向かって歩いてきたティーシエルに気付き、マキノが声をかける。しかし、テ

ィーシエルの返事はない。どうやら、テーブルに置かれたある一つの物をじっと見ているようだった。

「……もしかして、これが気になってる？これ、クレープっていうの。デザートにどうか
なって思ってたんだけど、知ってる？」

「うん……ナディアが好きで、よく食べてたから」

「ナディア？」

普段とは違う優しい笑みに、ナディアという人物が気になる。まだ短い付き合いに過ぎな

いが、ティーシエルは普段こういった表情をする事は、滅多にないはず。それがマキノな

りの、ティーシエルという人物の認識だったからだ。

「ナディアは、家に居候していた父上の教え子だよ」

「へえ、私初めてティーシエルのお家の事聞いた！」

「えっ……そうだった？」

「そうよう！だって私ってまだ、仲間になったばかりじゃない！」
マキノの反応に、ティーシエルが笑う。マキノも、仲間になったばかりだと忘れるくらい、

仲間だと受け入れられているような気がして、嬉しく思った。ティ

ーシエルにも手伝って

もらい、料理を並べ終わると、そこに一振りの剣を持ったラフィストが飛び込んできた。

「見てくれ！俺の剣が出来たんだ！」

彼の手握られた剣は、あの鉱石と同じく美しい輝きをしていた。鋭い刀身と、眩いほど

の刃の照り返りはラフィスト自身のように思えるほどだ。これほどの剣が出来上がったのも、ディーテの仕事が良かったからだろう。

「凄い！キレーねえ……」

「意外と早かったね。それで、ディーテさんは？」

「今向こうで休んでるよ。もう少ししたら、こっちへくると思う。」

……ティーシエル、結

界を強力にしてガーネット達を呼んでくれるかい？」

「わかった」

階段を駆け上って、キキナナ湖の湖畔にティーシエルが向かった。

その後ろ姿を見送った

後、ラフィストも疲れていたのかソファに腰を下ろした。

「あ、そうだ。ラフィストさん」

「ラフィストでいいよ、マキノ。……何？」

「次は誰の武器作ってもらうの？」

「一応……ティーシエル、ニックス、ガーネット、マキノ、サードの順でってディーテさ

んと話してるんだけど、どうかな？」

「ふーん、なるほどね。私は別にそれでいいと思うよ！……あ、戻ってきた！」

疲れきっている三人十一匹を出迎えに、マキノが階段の所まで駆けに行く。ニックスなん

かは口々に疲れた、などと言っているが全く声に力が入っていない。「おかえり、皆！ご飯出来てるよ！」

「まあ！美味しそうですわ！」

ガーネットが嬉しそうに席へついた。ソファに座っていたラフィス
トも、結界を張って下

りてきたティーシエルも、加工場にいたディーテも席に着き、皆が
一同にこの場に揃う。

「えへへ。沢山あるから皆どんどん食べて！」

「いっただっきまゝす！」

「プギュー」

余程お腹が空いていたのか、皆かきこむように並べられた料理を食
べている。ゆっくり手

を動かしているのは、サードとティーシエルの二人くらいだ。それ
でも、取り皿にちゃっ

かり自分の分を確保している辺り、サードもお腹を空かせているの
だろう。

「そういえば……グールの奴はどうじゃった？」

ディーテの問いに、湖畔に出てた三人の空気が微妙なものになる。

「全然駄目だな。……ある程度のダメージは与えたが、魔法や決め
技が効かないんじゃないや倒

すまでにはいかない。俺の魔法剣でさえ、跳ね返される恐れのある
技は、殆ど使えないに

等しいからな」

「でもプギューのガスは物凄い効果がありましたのよ。こちらに下
りてくる前に、念の為

にもう一度ガスをかけてきましたけれど、あの様子ならば一晩は眠
りこけていそうですわ」

「そーいや、武器の方はどうなったんだ？」

ニックスが口の中一杯に料理をほうばりながら喋る。喋る際に口の
中の食べかすが辺りに

散っている。隣に座っているマキノが嫌な顔をし、箸を握るニック
スの手をパチンと叩く。

「俺の剣はさっき完成したんだ」

ほら、と剣を立てかけて置いた壁を指差す。まだ剣を見ていなかった三人が、食べる手を止めずに視線だけそちらへ向ける。

「良い剣だな」

サードが剣を検分すると、ディーテが満足そうに頷いた。

「そうじゃろう。わしも久々に良い仕事が出来て、大満足なんじゃよ！……あの鉱石は、

どうやら魔道の力を切り裂く力を持っておるようじゃ。あの剣ならば、グールにかけられたマジックシールドを何とかできるぞ」

「本当か！ じいさん！」

どうしようもない状態だった所に、一縷の光が差し、ニックスが大きな声を出す。他の皆も、ニックスのように大きな声を出したりはしていないが、グールを何とか出来そうで内心ほっとしている事だろう。

「じゃあ、明日グールに一斉攻撃かけるのはどうかな？」

「そうだな……でも、念の為にここに誰か残しておいた方がいいかも」
「ディーテさんの安全も、ありますしね」

話し合った結果、境界を張らなくてはならないティーシエルが中に残り、他の全員でグールと戦う事にした。まずはラフィストがグールに攻撃を仕掛け、傷を負わせてマジックシ

ールドを解除する。そこを皆で一斉攻撃、と作戦の確認をすると、サードが席を立った。

「俺はもう寝る……お前らも食べたらさっさと寝ろ」

壁に立てかけて置いた自分の剣を手に、さっさと仮眠室の方へ行ってしまう。

「チッ……相変わらず勝手な奴だなー」

あくまで自分のペースを貫き通すサードに、ニックスが悪態をつく。もうそろそろ慣れて

もいい頃なのに、ニックスはよほどサードと馬が合わないらしい。これだからスカした奴

は、と悪口を続けるニックスをマキノがたしなめる。二人のかけ合いに苦笑していると、

ティーシエルが席を立とうとしているのが目に入った。

「どうかした、ティーシエル？」

「あ、いや……僕も疲れたから寝ようと思って。……御馳走様」

歯切れの悪い返事が気になったが、ニックスがラフィストに話しかけてきたので、結局何

も聞けないうちにティーシエルは食器をさげて、部屋に戻ってしまった。

「何か、ティーシエル……メランコリックじゃない？ あんまり食べてないしさ」

どうやらマキノも気になっていたのだろう。ティーシエルの後ろ姿を見て、こう呟いた。

「確かに、元気ないよな」

「そうかあ？」

「あんたみたいに鈍感な奴には、わからないのよ！……さっきも起きたかと思ったら、ナ

ディアがどうのクレープが好きでどの、言ってたのよねー……――」

ニックスはマキノに一蹴され、一人蚊帳の外状態だ。マキノの話を聞き、ラフィストは妙に納得する事が出来た。

「ああ、そうか。――……ナディア絡みか」

「きつと昔の事でも思い出して、ノスタルジックにでもなっていたんですわ」

ガーネットもラフィストの言葉に同意する。

「……ふーん。ティーシエルって、もしかして……？」

マキノが言外に、含みを持たせるように言う。しかしガーネットはうーんと唸るだけで、

肯定はしなかった。

「あの二人の場合、そういう関係って言うにはちょっと微妙なんですよ」

「へえー。あたしはてっきり……」

「まあ、ティーシエルは優しいからなあ」

素直じゃないけど、と心の中で付け足しながらラフィストが言う。そんなラフィストに、

そうではなくて、とガーネットは言いながら話を切り出した。

「……私、五歳からの付き合いなんですけど、ティーシエル昔はあんなんじゃなかったん

ですの。初めてアルベルト卿に連れられてやってきたティーシエルは、大人しい女の子の

ようでしたわ。私は初めて出来たお友達が嬉しくって、ティーシエルを連れて城を抜け出

したりしていましたの。ですけどある日、探検気分で森の中に入った時に、私は木の根に

足を挟んでしましまして……私は足の痛さと森の暗さに、わんわん泣き喚きましたわ」

「え、それで……どうしたの？」

「ティーシエルは、誰か大人を呼んでくると言いました。私は、一人になるのが怖くって、

行かないでと泣きましたわ。そんな私に、覚えてた魔法で小さな明かりを灯してくれま

した。これがあるから、大丈夫、怖くないと」

「ふうーん……ティーシエルもいい所があんだな！」

見直したぜ、と言わんばかりに言うニックスに、マキノがあんたが言うなど、どつく。

「それにガーネットとティーシエルも、俺とニックスみたいな事や
つてたなんて驚きだな」

「あ、いえ……実はまだ続きがありました。――……あの後、お
父様達が助けに来てく

れたんですけど、ティーシエルの姿が無いものでどうしたのか聞い
たら、城に着いて事情

を説明したとたん、倒れたらしくって。……しかも体が弱かったも
のですから私と森の中

にいた時から具合が悪くって、城に着いた時には肺炎一歩手前だっ
たそうですの」

ガーネットの話にシーンと静まり返る。

「おい、なかなかバイオレンスだなラフィー……」

「ああ……」

「それなのに、ティーシエルったら自分が姫を連れ出したなどと、
私を庇うんですのよ！

……いつも相手の事ばかりで、自分の事は二次。体は昔より健康
になって、ズケズケ物

を言うようになって、そこだけは変わらない所でしたわ。……ナ

ディアはそんなティー

シエルに、肩の力を抜く事を教えてあげた存在なんですの。友達と
か、恋人とかそういうっ

た言葉でくくる様な関係以上に、大切なのだと思いますわ」

「そうか……何かそういう関係って、いいなあ」

マキノが恋人っていう響きもいいけど、そういう感じも素敵と瞳を
輝かせる。ニックスは

今の話で心が昔にトリップしているのか、うんうんと大きく頷いて
いる。

「ガーネットの話聞いてると、何だか昔を思い出すぜ！なあ、ラフ
イー。……ほら、昔よ

く爆竹で遊んだろ！」

「ああ、そうだな！楽しかった。……そういえばお前、爆竹尻の下に踏んでんのに気が付

かなくって、爆竹破裂した事無かったか？」

「あー、あったあった！あん時はマジびびったぜー！」

「アホか、ニックス。全く、ラフィーとは大違いね！」

マキノの突っ込みに、笑いが巻き起こる。

「ホオッホオッホオッ……お主等はなかなか面白い連中じゃの。」

もう少し話を聞いてい

たい気もするが、年寄りの夜更かしは堪えるでの。わしもそろそろ休ませて貰うぞ……」

「あ、はい！おやすみなさい、ディーテさん」

ディーテも部屋に帰った事で、そろそろお開きにしようとラフィスが促す。しかし、ガ

ーネットが寝付けないと言った事で、もう暫くここで話しをする事に決める。皆で食器を

片付けた後にお茶を入れ、他愛の無い話を続けた。

一九章 一〇古の伝承

「ふう……まあ、こんなものか……——」

ランプの明かりしかない薄暗い部屋の中で、サードが愛用の剣を磨いている。長年使い込

んでいるのがわかるほど、立派な剣だ。ディーテほどの名工に、新しい剣を打ってもらえ

るのは嬉しい。しかし、愛用の剣を振るう機会が無くなると思うと、サードは少し寂しく

思った。手入れ道具をしまった後も、サードはじっと剣を見ていた。「お前とも、もう七年になるのか——……アデル、俺は強くなっただろうか」

こんな事を言っても、答えが返ってくる訳ではないと頭を振り、サードは剣を収めて壁に

立てかけた。感傷的な気分を追い払おうと、いつまでたっても同室のニックスが戻ってこ

ないから眠れないんだ、と八つ当たりめいた事を思う。ぼんやりとそんな事を考えている

と、かすかにドアを叩く音が聞こえた。一瞬ニックスだろうか、と考えたがニックスなら

ばドアを叩かずに、平気な顔でズカズカと入ってくるだろうと考え直す。

「誰だ？」

サードがドアを開けると、見慣れた人物が立っていた。

「何だ、ティーシエルお前か。何か用か？」

「関係者のあなたなら……きっと、私の言う事をわかってくれる」

「私？——……おい、どうしたんだ？」

肩に触れようとすると、その姿がかき消える。どこに行ったと、辺

りを見回すと、サード

の部屋の中にその姿はあった。

「私は、あなたの仲間ではありません……ただ、この姿を借りているだけです。――」

「話を、聞いてくれますか？」

「――……話せ」

その返事にうつすらと微笑を浮かべると共に、開いていたドアが自動的に閉まる。サードがベッドに腰をかけて、話すよう促すとティーシエルの体がふわりと浮いた。

「今からおよそ一億年前、二人の覇者が争いを繰り広げました。名はグレイスとフレッド。」

彼らは兄弟であったけれど思想も力も相反したものでした……」

「世界創世の話か……それくらい知っている」

世界創世の話は、親が子供に必ず語り継ぐ有名な話だ。サードがつまらなさそうに、フン

ツと鼻を鳴らす。

「ふふ……やはり、人間ではこのように語り継がれているんですね」

「当たり前だ。最後はグレイスが死に、平和を愛するフレッドが、創世の剣を手に勝利す

る。そしてフレッドの元、世界が平和であるよう見守られるようになった。そんな事、子

供でも知っている事だ」

「それは、時を経て捻じ曲げられた伝承に過ぎないとは思いませんか？」

「いや。……何だ、何か言いたいのならはっきりと言え。伝承なんぞに興味は無い」

相手の焦らすような口ぶりに、サードがイライラを募らせる。

「ならば単刀直入に言いましょう。この一億年の間、この世界に創

世神は存在しませんで

した……この世界は、非常に危ういバランスの元に成り立っていたのです」

「なっ……！——……何故、この一億年の間不在だったんだ……？」

「その間、この世界に降りかかる災悪を防ぐ為です」

「創世神の不在によって、災悪を防ぐだって……？普通は逆ではないのか？」

「そうしなければ防げないほど、大きな災悪だったのです。……彼は、二つの魂が地上に辿り着く一億年という時間を待った。……それが最後の希望だったから」

「彼？二つの、魂？」

「それについて、今は話す事は出来ません……世界樹の元に行けば、自ずとわかります。」

その時をお待ちなさい」

相手の濁すような言い方が気になったが、聞いても答えてくれるとは限らないので、サー

ドはあえて無視する事にする。

「一億年が経った今、希望も絶望も全てが目覚めた。——……世界樹、創世神グレイス、

そして闇の災い。この三つの存在によって、今のこの世界は大きく動いています。闇の災

いについては、貴方は既に見た事があるはずです……」

「まさか……アンカースの魔導士、なのか？」

コクリと頷く。数年前、一度だけ見たあの姿は、確かに災い以外何者でもなかった。アイ

ツによって、自分も、そして他の連中の人生も大きく狂ったからだ。「グレイスと闇の災いは、アンカースにいる。……全てを知りたいと思うのなら、まずは

仲間を集めて世界樹へお行きなさい……そこに行けば、ある者が貴方達を導いてくれる」

「ちょ、ちょっと待て！ 伝承では死んだとされるグレイスの名が、何故今更出てくるんだ！

いや、それより一体グレイスは何をしようとお……！」

サードの問いに答える前に、ティーシエルの体がガクンと揺れ、床に倒れこんだ。

「これは、アンカースだけの問題ではないのか？……一体、何が起こっていると言うんだ」

ティーシエルを担ぎ上げ、自分のベッドに横にさせると、足早にラフィスト達がいるダイニングに向かって行った。

「ラフィスト、いるか」

マキノとニックスの学校の話で盛り上がっていた時、サードがダイニングに入ってきた。

「サード？ 寝たんじゃなかったのか？」

「いや。……それより聞きたい事がある。ティーシエルの事なんだが……」

「ティーシエル？ ティーシエルがどうかしたのか？」

「……あいつ、何者なんだ？」

「え……？ 何者って、カダンツの司教の息子ではありませんの」

サードの思いもよらぬ質問に、ガーネットが首をかしげる。

「何言ってるんだ、サード。おめえ、変だぞ」

「ニックス、お前に言われたくは無い」

「……なっ！」

「サード、何かあったのか？」

ラフィストはニックスを宥め、サードに尋ねる。いつまでも言い合いを続けられても、困

るからだ。

「さっき、あいつの体に“何か”の意思が乗り移った……」

「何かってまた、中途半端だなあ」

サードはニックスを一睨みした後、話を続ける。

「そいつが言うには、アンカースにはあの魔導士の他に、世界創世の話に出てくる創世神

グレイスも絡んでるらしい……」

「それ、本当ですよ!？」

ガーネットが驚きのあまり身を乗り出す。それはそうだ。アンカース調査の旅が、まさかそんな大事になっているとは、思っても見なかっただろう。

「他にも色々言っていたが、その事については俺の口から説明するより、世界樹に行った

方が早いらしい。後で一応話そうとは思っているが、俺も頭の中でついていけない部分

が多いから、詳しくは期待するな。……それと、仲間を集めると、言っていたな」

「つまり、他にも仲間になるべき人間がいるって事か……」

そう考えた時、ラフィストの脳裏に一つの名前が浮かぶ。その人は世界樹にも深く関わっ

ている、決して無関係な存在ではないと、確信めいたものがあつた。

「仲間を集めろって言ったって、誰でもって訳じゃないんですよ?」

手当たり次第仲間についていうのも違うんだろーしなー、とマキノが呟く。ニックスも珍し

く考え込んでいるみたいだ。

「もしかしたら……その一人は、ナディアじゃないか?」

「え、何ですか?」

「ナディアは元々世界樹を調べたりしてたんだろ? 拒まれたとはいえ、一時は世界樹の元

まで行った……仲間の身近にそんな人間がいるのに、無関係とは到

底思えない」

「確かにな……探してみる価値はあるかもしれん」

「そうと決まれば、ティーシエルも呼んでこないとね！……あれ？
ところでサード、ティ

ーシエルは？」

サードが、話し終わった後ぶっ倒れたからベッドに置いてきたと言
うと、ニックスが立ち

上がりティーシエルを起こしてこようと走り出そうとした。ラフィ
ストは慌ててニックス

を制止し、自分が行くと告げる。少し気になる事があったからだ。

ニックスは納得して引

いてくれたが、サードが気になる事があるから自分も行くと言う
途端に不満を露わに

する。再び喧嘩腰になりかけたニックスを、サードの目の前で起こ
った事だからと何とか

宥め、ラフィストはサードと共にティーシエルを起こしに向かった。

サードと二人で通路

を歩き、目的の部屋の前に辿り着きドアを開ける。そこにはベッド
に横になったティーシ

エルがいた。早速起こそうとベッドに歩み寄ると、それをサードに
止められる。

「どうかしたのか、サード？」

「……何故、こいつだったと思う？」

「それって、メッセージを伝えるのに何故ティーシエルを選んだの
かって事？」

サードが頷く。ラフィストは偶々ティーシエルに乗り移って、サー
ドがメッセージを聞いた

のだと思っていたが、サードはそう思っていないらしい。偶然で
はなく必然。何か、そ

う思うだけの理由があるのだろうか。

「……何か、気になる事があるのか？」

その問いに一瞬、サードの目が逸れる。何か聞かれない事情でもあるのかもしれない

が、ラフィストは逃げ道を用意してやる気は無かった。仲間として、ここはキッチンと話を

聞いておくべきだと思ったからだ。

「他の奴に聞かれたくない事なら、俺の心に閉まっておく。だから話してくれ、サード」

「……乗り移った何かは、俺がアンカースに深く関わっている事を知っていた。ア

ンカースの魔導士を見た事も。そしてそれを理由に、話す相手に俺を選んだと言った……

だから、コイツもそうなのではと思ったただけだ」

「……そうか」

サードが言った事は、ラフィストにとって衝撃だった。まさか、アンカースにサードが関

わっていたとは思わなかったからだ。しかし、ここは黙って事実だけを受け入れようと、

ラフィストは驚きを声には出さなかった。サードも機会が無ければ決して口にしなかった

だろうし、彼にとって触れられたくない話題だと思ったからだ。

「確信もないし、漠然としたものだが気になった……それだけだ。

……とりあえず、

コイツを起こすか」

「ああ」

ラフィストがティーシエルを揺さぶり起こそうとした時、彼の口から微かに寝言が聞こえてきた。

「うっ……ナディ、ア。それは、使っちゃ……君、が……使ったら、君も僕も……姉、さ

んも……」

「姉さん？ ティーシエルに姉さんがいたのか？」

「まだ誰のか決まっていらないだろう」

「そ、そうだな……しかし、このタイミングでまたナディアの夢か」
本当に仲間の一人はナディアかも、と思いサードに話しかけようとした時、突然ティーシ

エルが叫び声を上げて飛び起きた。先程は気付かなかったが、顔は真っ青になっており、
凄い汗をかいている。

「ティーシエル、大丈夫か？」

ティーシエルの酷い様子に声をかけるが、心ここに在らずといった様子で返事が無い。ま

だ、夢と現実の狭間に取り残されているのだろうと思い、ラフィストが肩を掴んで揺さぶ

ると、漸くティーシエルの視点が定まったかのように見えた。

「あ……ラフィスト。僕は……」

「夢を見てたのか？」

「……まあ、ね。……昔の夢、よく見るんだ」

「ティーシエル、君お姉さんいるのかい？」

ラフィストの言葉に、ティーシエルはキョトンとしたような顔をする。顎に手をあて、考

える仕草を見せる所から、いつ話したか必死に記憶を手繰っているのだろう。

「結婚して、グレミアの町にいるけど……言ったかな、そんな事」

「たった今、うわ言でな。それよりも、話がある……立てるか？」

ティーシエルは頷くと、ベッドから降りる。何だかんだ言いつつも、
こうやって相手を気

遣っている所を見ると、サードも根は良い奴なのかもしれない。今日
は仲間の新たな一面

を沢山知る日だな、とラフィストは感慨深く思う。そして、仲間の

待つダイニングに移動する為、部屋のドアを開けた。

「ティーシエル！」

ガーネット、ニックス、マキノが一斉に立ち上がり、ティーシエルに駆け寄っていく。

「大丈夫ですか？」

「大丈夫って言われても、何も覚えてないんだよ」

廊下を歩いている時、ティーシエルに何かが乗り移っていた事と、突然倒れた事を伝えたが、その時の事は何も覚えていなかったらしい。

「キオクソーシツってヤツか？」

「ニックス……それ、違うと思う」

ラフィストに突っ込まれ、ニックスが何やらショックを受ける。マキノが小さく馬鹿、と

言った後にティーシエルに椅子に座るようすすめる。そして、さっきの事をもう一度話そ

うと言い出した。全員が席に着いたのをみて、サードが話を始める。

「さっきティーシエル、お前に乗り移っていた奴は、俺にこの世界が創世神不在で成り立

っている危うい世界であると告げた。大きな災悪から世界を守る為らしいが、それがどの

ような事かは聞いていない。最後の希望の、二つの魂を待っていたとも言っていたな。…

…そして今、この世界は世界樹と創世神グレイス、闇の災いによって動いているらしい」

「後、アンカースには例の魔導士と、グレイスという神様がいて…
…全てを知るには、仲

間を集めて世界樹へ、でしたっけ？」

ガーネットが断片的に思い出すように喋る。サードはその言葉に頷き、闇の災いがアンカ

ースの魔導士であると告げる。そして、闇の災いについて何か知っている事はないかと、

皆に尋ねた。

「それは多分……神話に出てくるダークエビルの事じゃないかな」

「ダークエビルって、創世神フレッドに倒された、あの？」

ティーシエルやガーネットが言うには、一億年前にこの世界を飲み込もうとした暗黒の竜

の名前が、ダークエビルというらしい。その竜は創世神フレッドに倒され、その体は世界

樹に封印されているらしいが、何しろ神話の話なのでこれ以上の事はわからなかった。

「とにかく、まずは仲間を集めて世界樹に行くのが先決だと思う。

……そこで、ナディア

を探そうと思っているんだ」

「ナディアを！何で！？」

「今日一日で、こんなに彼女の話題があがった事、元々世界樹に係っていた事……そして

何より、俺達にとって身近な存在だ。それに彼女に会う事で、何かわかる事があるかもしれない。

探してみる価値はあるよ」

「ティーシエル。私達は何度かナディアについて話を聞きましたけど、彼女はあまりに謎

が多すぎますわ。……ラフィーの言う通り、一度彼女に会うべきですわ」

ラフィストとガーネットの言葉に、ティーシエルが下を向き、黙り込む。その沈黙を破る

ように、ティーシエルの口からポツリと言葉が漏れた。

「ナディア、か。……確かに謎は多いよ。僕だって、ナディアの家族構成すら知らないし、

父上の所に入門した理由すらはっきりとはわからない」

「探し物の為じゃねえのか？」

「多分、心の奥にはもつと別の理由があったと思う。今までは、世界樹に認められる為に

父上の元を訪れたと思っていた……けど、はっきりとそう言っていた訳じゃない。弟を生

き返らせたい、って言った事はあった。だけどこれも、世界樹の葉でとは言ってなかった」

「だとすると、最悪の場合……全て作り話と言う事もあるな」

サードが痛い一言をティーシエルに突きつける。

「とにかく……ナディアを探そう。話はそれからだ」

現時点では、ナディアが嘘をついているかどうかはわからない。でもナディアが見つけれ

ば、真実がどうであれ本当の事を聞く事が出来る。そうラフィストは思い、ティーシエル

の肩をポンツと叩いた。ラフィストの気遣いに、ティーシエルが微笑を浮かべる。ティー

シエルの顔を見た時、先程のサードとの会話をふと思い出す。サードの疑問の糸口になれ

ば、とティーシエルに乗り移った相手について何か知っている事は無いのか、聞いてみる事

にした。

「そういえば……ティーシエル。君、乗り移った相手とか、世界樹とか、創世神とか何で

もいいんだ。何かそれらに関係する事で、知ってる事はないか？」
ラフィストの言葉にティーシエルは首を振る。その反応にラフィス

トは勿論、サードも大

きな落胆の色を見せた。しかし、ティーシエルは小さくあつと言う

と、顔を胸元に向ける。

そして、首にかけていたペンダントを外して、テーブルの上に置いた。

「関係あるか、わからないけど……これ、生まれた時から持ってたらしいんだ。何なのか

は調べた事ないんだけど……——」

「綺麗な色……」

マキノが頬杖をつきながら、うつとりとペンダントを覗き込む。サードも見た事が無い石

らしく、とても珍しそうにしている。エメラルド色したペンダントは、角度を変えてみる

と光を違った色に反射させる。吸い込まれるような色だな、と思いついストはペンダン

トを手にとって眺めていた。すると、石の中に何かの模様のような物が見えた気がした。

「ん、何だ……これ？ 模様、かな」

「見せてみる！」

サードがラフイストの手からひったくる様にペンダントを取り、それを光に透かすように

して眺める。模様が何なのかわかったのか、サードがペンダントから顔を離す。その顔は、

信じられないと言っているように見えた。

「これは……これは！ 古代ルーン文字じゃないか！」

「ル、ルーン文字ですって！？」

ガーネットが思わず声を上げる。ペンダントの所有者であるティール自身でさえも、

サードの言葉には驚いているようだ。サードにルーン文字について尋ねると、遙か昔に存

在しなくなった文字だと言う事を教えてくれた。今ではその存在を知っている者の方が少

ないとまで言われていると付け足すと、そういえばと言葉を続けた。
「…………聞いた事があるな。世界にたった一つだけ、ルーンに加護を受けた聖石がある。そして、その石には人を生き返らせる程の力があるらしい。……あくまで、伝承に過ぎないがな」

「なにいいいいっ！」
あまりの事に、皆目を見開いて驚く。ニックスなんかは驚きすぎて、口をあんぐりと開けている程だ。

「成る程な……ナディアの探し物はおそらくこれだろう」
サードがペンダントの紐を掴んで皆の前にちらつかせる。

「ど……どういう事？サード。僕にはいまいちよく分からないんだけど……」

「お前の話によると、ナディアは世界樹に拒否されて、葉を手に入る事が出来なかった。

……………そうだな？」

「う……うん」

「その後、色々調べるうちにこのペンダントの存在を知ったんだろう。まあ、伝説の石だ

し、誰も見た事が無いから気付かなかったんだろうが……魔道の都カダンツなら修行にも

なるし、その手の石の情報も手に入りやすい」

「だから、うちにきたのか……ナディアは？」

「ま、十中八九間違いないだろう」

そこまで言うときサードは、大事に持っておけと言ってルーン聖石をティーシエルの手に渡し、
「ティーシエルはその言葉に頷くと、ペンダントを首にか
けなおした。

「それにしても、ティーシエルってやっぱお坊ちゃまだったんだ

ねー！ねね、他にも何

かすっごーいお宝とかってあるの？」

「マキノー！お前何してんだよー！」

「そうだな……ニムブルの腕輪、とかなら」

「キャー！うっそー！素早さが上がるって言うあの！？すっごーい！超、欲しい！」

ティーシエルにすり寄るマキノに腹を立てたのか、ニックスがマキノにくっつくが、

マキノは眼中に無いかのように会話を進める。

「おい！シカトすんなよ！——……大体、お前なんかにお宝くれる訳が……」

「一個あげようか？父上に三つ位貰ったし、戦闘にも役に立つだろうから」

「な……なにー！？」

無視されたのが癪に障ったのか、ニックスが皮肉を言う。しかし、逆に思わぬ言葉にシヨ

ックを受ける形になった。ティーシエルが懷から一つの腕輪を取り出し、マキノに差し出

すとマキノが目を輝かせながら受け取った。

「キャー！ありがとうティーシエル！超、嬉しい！」

これ以上ないマキノの喜びっぷりに、ニックスが更に打ちのめされる。余計な一言は好感

度下げるだけと言う事にいつ気が付くんだろうな、と呆れ果てたらフィストであったが、

とりあえず話を進めようと机に地図を広げた。

「とりあえず、どこにナディアを探しに行こうか」

「いや、探すよりも誘き寄せた方が早いだろう」

「で、でもサード。どうやって——……？」

サードはティーシエルのペンダントを指差し、これを利用すると言い、話を続けた。

「ルーン聖石を賞品にした武術大会を、王に頼んで開いてもらう。勿論賞品は、贖物を使うがな」

鉱石を使って、ディーテにそれっぽい物を作ってもらえば大丈夫だろうと言葉を足す。

「な……なるほど！じゃあ、明後日の朝に俺とガーネットの二人で城に行つて、王様に頼んでみるよ！」

「開催日は武器が仕上がる二週間後だな！」

「もしや……ニックス、あんた出る気？」

やけに気合の入ったニックスに、マキノが問いただす。ニックスは当たり前だと、今から

やる気に満ち溢れていた。これに、ガーネットが賛成の意を唱える。

「それ、いいアイデアですわ！ラフィーやサード、ティーシエルも出場して腕試しなさ

つてみてはいかがでしょう」

「えっ……あの、ガーネットが出て欲しいって言うなら」

「別に、構わん」

「僕パス」

「うふふ、ありがとう二人とも。そして、いい根性ですわね、ティーシエル」

ラフィストとサードが参加する事に決めた事を、ガーネットが諸手をあげて喜ぶ。ティー

シエルが出ない事に対して、少し腹を立てているようだが、それ以上二人が出る事にな

ったのが嬉しいのか、しきりに二人に頑張つて下さいねと言っている。

「何か、恋の混戦模様って感じよねー！」

マキノが楽しそうにニックスとティーシエルに耳打ちする。ニックスはマキノの態度に面

白がるなど注意するが、ティーシエルは二人とも何でガーネットなんかがいいんだ、など

とブツブツ疑問の声を漏らしている。ティーシエルの弦きを耳に留めたのか、マキノがそ

う、そうよね！と、意見を述べる。

「私もティーシエルに賛成！だって、ガーネットの他に私という女の子がいるのに！」

「そりゃあ、どっかの田舎娘より、姫さんの方が可愛いからなあ」

「ひっどーい！ニックス、最低ー！」

だから女の子にもてないだの、デリカシーがないだの言うマキノにニックスが文句を言お

うとするが、ティーシエルに肘でどつかれ、謝った方がいいと目で諭される。結局、助言

通り謝る事に決め、ニックスがマキノに頭を下げた。

「わ、悪かったな……」

「ホーホッホッホ！それでいいのよ、ニックス！」

「ち、ちくしょー！」

「明日はグールを倒さなきゃならないし、今日はもう寝よう」

ガーネットと話していたラフィストが、話し合いは終わりにしようと切り出す。ラフィス

トの言葉を皮切りに、皆が部屋に戻ろうとするがティーシエルがそれを引きとめ、馬車を

買ったかどうかと提案する。その意見に皆賛成した為、明後日フォートレスに行く際に注

文してくる事にした。一緒にフォートレスに行くガーネットは、今からどんな馬車にしよう

か考えているみたいだ。そんなガーネットに変な物を買ってくるな、とサードとティー

シエルが釘をさす。

「まあまあ、俺も一緒に選ぶし大丈夫だよ。……それより、部屋に

戻ろう」

「はぁ、何で俺ばっかサードと……」

「クジ運が悪いだけだ、お前が」

ニックスが部屋割りに対して最後まで愚痴愚痴言っていたが、それぞれ部屋の前で別れた。

そして、今日一日の疲れきった体を休めた。

一十章一（武術大会開幕）

次の日の朝、ラフィストはいつもより早く目が覚めた。大きく伸びをし、ベッドから起き

て隣を見る。隣のベッドではティーシエルが寝ているはずだが、既にその姿はベッドには

無かった。随分早いな、と思いつつラフィストは服を着替えて部屋の外に出た。流石に昨

日の今日だったので、ティーシエルの調子が気になったのだ。その姿を探すと、ダイニン

グで見つける事が出来た。いつもと変わった様子は無く、元気そうなので一先ず安心する。

ティーシエルがラフィストに気付いたのか、ラフィストの方を振り向いた。

「おはよう、ラフィスト」

「ああ、おはよう。随分早いな」

その場に突っ立っているのも何なので、ティーシエルの方に歩いていく。ティーシエルが

いるのはキッチンだ。何も無いところから、これから何か作ろうとしているのだろうか。

何する所なのか気になり、聞いてみる事にした。

「何か、作るのか？」

ラフィストの言葉に、少し照れたような顔をしてティーシエルがごによごによと喋る。

「あ、いや……昨日は皆に迷惑かけたなって思っ……今日は僕、結界張るだけだし、

朝の軽食でも作ろうかと」

「ティーシエル、迷惑なんて言うなよ。俺達、そんな風には全然思

ってないんだからさ。

……でもそうか、軽食作るんなら俺も一緒に作ってもいいかい？」

「ラフィストが？」

ラフィストが料理と一緒にする、と言い出した事に驚いたらしく、意外そうな顔をする。

ラフィストとしては、純粹培養のお坊ちゃんのティーシエルが作れる方が驚きなのだが、

それはあえて言わないでおく。嫌かい？と聞くとティーシエルが首を横に振ったので、ラ

フィストと一緒に作る為、エプロンをつけた。取りあえず簡単なものにしようと言う事で

サンドイッチを作る事にし、二人は料理を始めた。

「まさか、ラフィストが料理できるとは思わなかったよ……」

ゆで卵を作りながらポツリと言ったティーシエルの言葉に、ラフィストは苦笑する。ラフ

ィストの反応に気付いたティーシエルは、だってニックスは料理できないだろ、と言い訳

するかのように早口でまくし立てる。

「確かに、ニックスは料理できないな」

「でしょ？ やっぱりそうだと思った。……ああいうタイプには、向かないんだよ。現に、

ガーネットやナディアも料理の方はからっきしだしね」

まあ、サードはどうか知らないけど、とティーシエルは言っているが、ラフィストとして

は出来るイメージが想像できない。それ以前に、エプロンつけたサードの想像イメージが

不気味だった。耐え切れなかったのか、体から変な汗が流れる感じがする。

「からっきしって、そんなに酷いのかい？」

ラフィストの言葉に、嫌な事を思い出したのかティーシエルが眉を

顰める。

「酷いなんてもんじゃないよ……あれで、何回死にかけた事か！ガーネットは、新種の変

な物体を生み出そうとする！ナディアは湯銭するのに、魔法で直火焼きにしようとする！

……あいつらにとって料理は愛情じゃない、戦争なんだよ」

お陰で毒物の耐性はついたよ、とフツと遠い目をして語るティーシエルに同情する。この

間ガーネットから聞いたバイオレンスな過去から、新種の料理の実験台になっていた事は

容易に想像がついたからだ。

「……あつ、と。そろそろいいんじゃないか？」

「……そうだね」

半ば現実逃避気味に、料理に集中する事にする。元々二人とも手際が良かった事もあり、あつという間にサンドイッチが完成した。テーブルに並べていると、マキノがダイニングにやってくる。

「あー、私が一番だと思ったのにー！早く起きて、朝食作ろうと思ってたのになあ……これ、二人が作ったの？」

「まあね」

マキノは、料理作れたんだ、と呟くと、皿に盛られたサンドイッチを一つ口に運ぶ。

「……美味しい」

「はは、ありがとう」

取りあえず手分けして皆を起こしてこくる事にし、まだ夢の中であろう三人とディーテの元に向かった。

朝食を終え、キキナナ湖の湖畔へ向かうとグールはまだ眠っていた。その隙に、ティーン

エルが結界を張りなおす。そして、これで派手にやっても大丈夫だよと言に残すと、加工

場の中に戻っていった。それぞれ武器を構え、戦闘体勢をとったのを確認し、ラフィスト

が眠っているグールに切りかかった。新しい剣はグールの皮膚を深々と切り裂いたかと思

うと、ピキィインと弾けるような音がした。今のはきつと、リフレクションが解けた音

だろう。切り裂かれた痛みで気が付いたのか、グールが目を覚ましラフィスト達に襲い掛

かってくる。

「皆、くるぞ！」

先程の傷がかなり痛むのか、グールはブンブンと腕を振り回してラフィスト達を攻撃して

くる。直接の攻撃を避けても、拳の拳圧が更に襲い掛かってくるのでなかなか近付く事が

出来ない。攻撃手段を遠距離に切り替え、グールに反撃を始めた。

「閃光八卦掌！」

ニックスとマキノが同時に気孔拳を放ち、グールに命中させる。よろめいた所に、ガーネ

ットが詠唱した呪文を放った。

「グランツ！」

光の玉は、弾かれる事無くグールにダメージを与える。元々グールは魔法が苦手という事

もあり、かなりのダメージを与えられたようだ。今のチャンスに一気に片をつけようと、

サードとラフイストが殺到する。

「ライジンググロット！」

剣にバチバチと激しい雷鳴を纏わせ、サードがグールの腕を切り落とす。そのまま刃を返

し、腹に大きな傷をもつけた。激痛にのた打ち回るグールに、続いてラフイストが刃を繰

り出し、肩から下を一気に切り裂く。これが止めとなったのか、グールは断末魔の声を上

げ、その場にズズンと大きな音を立てて倒れた。

「やった、のか……」

渾身の力を込めて大きなグールを一気に切り裂いた事もあり、ラフイストが肩で息をして

呟く。それでも、技ではなく普通に剣を振るっただけであれだけの威力になるとは、と思

うと、ラフイストはディーテの仕事振りに改めて感謝した。マントで剣に付いた血を拭っ

て、剣を鞘に収めたところに仲間達が駆け寄ってきた。

「ラフイー、すげーじゃんその剣！……くー、俺の武器の完成も楽しみだぜ！」

「あれだけ苦戦したグールも、あっけなく倒せましたわ」

「連携も上手くいったしね！」

「まあまあだな」

皆、ラフイストの剣の威力を見て思う所は同じらしい。ニックスの言う通り、武器の完成

が改めて待ち遠しくなったという所だろう。

「早速ディーテさんに、グール倒した事教えてあげよう！」

そういつて加工場にマキノが駆けて行き、ニックスが待てよと言いながらその後が続く。

ラフイストも加工場に戻ろうとしたが、それをガーネットに引き止められる。

「どうかしたのか、ガーネット」

「いえ、余り疲れていませんし、今日フォートレスに行ってきたせん事？　こういう行事ご

とのお願いは、早い方が良いですわ」

「確かにそうだな……今日のうちに行ってきたらどうだ、ラフィスト」

「ん、そうしようか」

では早速ティーシエルに送って頂きましょうと、ガーネットが加工場の中に入っていく。

王様の所に行った後に、馬車を買に行くのを忘れないようにしないとなあ、と考えながらラフィストも後に続いた。

「――、という訳なんです。大会を開いてもらえませんか」

ラフィストとガーネットは今、王の間にいる。謁見したいと申し出たら、あっさりと通し

てもらえた。どうやら優先して通すよう、取り計らってくれているのだろう。

「よし、武術大会を開催すればよいのだな。世界の命運がかかっているのなら、わしも喜んで協力しよう！……大臣、世界中にこの事を伝えよ！　日付はそう

じゃな……一カ月後だ。

それまでには武器も完成しておるし、遠い所にいる者も参加しにやっつてこれる頃じゃ。出

場者の受付は明日午後一時からで賞品はルーン聖石……ラフィスト君、これでいいかな？」

「はい、ありがとうございます！　何てお礼を申し上げればいいか……」

「ははは、良いのじゃよ」

王の笑い声に安堵感で一杯になる。

「あ、そうですわ王様。出場者の名簿、よろしければこちらに回して頂けません？」

「ああ。……ちとお主等が有利になるやもしれんが、事情もある事だし仕方あるまい」

「ふふ……ありがとうございますわ」

「それでは王様、僕達は戻ってディーテさんの手伝いをしたいと思っています。大会の方、よろしく願います」

ラフィストが深々とお辞儀をする。その隣でガーネットもスカートをつまんで会釈する。

「大会の方は任せておきたまえ。ではラフィスト君、健闘を祈っておるぞ！」

「ありがとうございます！」

二人は王の間を後にし、馬車を購入する為市場に向かって歩き出した。市場は活気に溢れ、

物凄い人が行き交っている。その人波をぬいながら、ラフィストとガーネットは馬車を売っている店へと歩いた。

「ラフィー」

「何？」

「物凄い人ですわね」

「……？ そうだね。どうしたの？」

人波に飲まれないよう、ガーネットの手を引いて誘導しながらラフィストが答える。

「私達が並んでいると、こういう風に見られているのかしら？」

「……ど、どうだろう？」

ラフィストが少し顔を赤らめながら、そっけなく返事をする。その時、手の力が少し強く

なった気がして、思わず握られた手をラフィストは見た。

「私は――……」

「え？」

瞳と瞳がぶつかる。騒がしい市場の中が、一瞬静まり返ったような感じがした。どれだけ

の間、そうしていたのだろうか。じっとラフィストを見ていたガーネットの瞳がフツと逸

らされ、辺りに喧騒が戻った。

「何でもありませんわ。あ、あそこの店で頼むんですわよね！さ、行きましょう」

「う、うん」

ガーネットに引っ張られながら、ラフィストはさっきのガーネットの言葉が忘れられなかつた。自分とガーネットはどういう風に見えているのだろうか、もし

かしたら恋人同士にでも見えているのだろうか。こんな事を考えているうちに、いつの間にか店についていたら

しい。結ばれた手が離され、ガーネットが先に店の中に入っていく。「いらっしゃい」

ラフィストも中に入ると、背の低い少し太った五十代の男性が二人を出迎えてくれた。

「あの、馬車が欲しいんですけど」

「二人かい？」

「あ、いえ。えーっと……今は六人なんですけど、これからもう少し増えるかも」

「大所帯だねえ……旅用だろう」

「はい」

ここまで言うと、店の主人は条件にあった馬車のリストを、ラフィスト達に渡してくれた。

どうやらこの中から選べということなので、リストをみることに

にする。そこには超豪

華な物、ピンクの物、普通の物、カボチャの形をした物があつた。

「ラフィー！私これかこれが良いですわ！」

ガーネットが指差したのは、宝石が散りばめられた超豪華な馬車と、ピンクの馬車だった。

サードとティーシエルの懸念は当たったな、と内心溜息をつく。こんな宝石まみれの馬車

では物取りに巻き込まれる可能性があるし、どピンクの馬車に乗りたいたとは誰も思わない

だろう。何より、お金を出してくれているティーシエルが怒髪天になりそうだ。

「駄目だよ、高すぎる。それにこっちはちょっと、派手で目立ちすぎるよ」

「うー。そうですわねえー……」

最もらしい事を並べ立ててガーネットを説得にかかる。渋々だが、ガーネットも解かってはくれたらしい。

「おいおい兄ちゃん。恋人にそんな顔させちゃいけないよ！」

「！そっ……そんな！」

「私達、恋人同士に見えます？」

「ああ、違うのかい？」

店の主人の答えに、ラフィストは顔に熱が集まったような気がしてならなかった。それを

誤魔化すように、馬車選びに話を逸らした。

「まあ、いいや。で、どれにするんだい？」

「じゃあ、これにしましょ。流石にカボチャは遠慮致しますわ」

結局、ごくごく一般的な馬車に決め主人に注文する。馬は力強い物を選び、きつい旅に耐えられるようにした。

「じゃあ、以上で10000ギルでどうだい？」

「10000ギル……ラフィー、ティーシェルからいくら位貰って
きたんですの？」

「20000ギル……」

財布の中身を確かめ、ラフィストが言った。

「それだけあれば大丈夫ですわね！おじ様、これ下さいな」

「あいよ！旅を楽しめよ、兄ちゃん！」

そんな楽しい旅じゃないんだけどね、と苦笑しつつ金を払うラフィ
ストに、店の主人が何

か思い出したかのように語りだした。

「そういえば兄ちゃん。もう一年ぐらい前の話なんだがよ……この
嬢ちゃんも可愛いが、

うちに美人な姉さんが来てなあ。ルーン聖石、とかいう石について
聞いた事がないかって

言ってた事があつたんだよ。いい女だったぜ、あれは」

「ルーン聖石だって！？」

床にお金の音が響く。ラフィストが床に財布を落としたのだ。落ち
た財布もそのままに、

その事を詳しく知ろうと店の主人に詰め寄った。

「それ、どんな女性でしたか！？」

「え……えーと、確か銀髪の……あ！そうそう、何かイヤリ
ングつけてたっけ、羽

根飾りのイヤリング！」

ラフィストがガーネットの方に振り返ると、ガーネットがラフィス
トの考えを肯定するよ

うに頷く。やっぱり、ナディアの目的はルーン聖石だったのか、な
どとラフィストが考え

こんでいる間に、ガーネットが床に落ちた財布を拾い上げる。

「でも今は出来る事をしなければ、ね？」

優しく微笑みながら、ラフィストに財布を手渡した。ガーネットの
微笑みに、暖かくなる

ものを感じ、思わずラフィストからも笑みが漏れる。

「そうだね、ガーネット。……おじさん、この馬車一ヵ月後に取りに来るから」

「わかった。それまでは、うちの方で預かっておくよ！はい、領収書」

今出来る最善を尽くす為にもまずは皆の所へ戻らなくてはと、二人はキキナナ湖にいる仲間間の元へと戻った。

「ええっ！ナディアを見た人がいるって！？」

ワープするアイテムでキキナナ湖へと戻ったラフィストは、残っていたメンバーを呼び集

めて話し合いを始めた。大会と、馬車の話が終わったのでナディアの話に移った時、この第一声が上がったのだ。

「ああ。でも、一年前の話だけど……ルーン聖石を探しているのは確からしいんだ」

皆の視線がペンダントに集まる。その視線を受け、ティールがペンダントをギュッと握り締めた。

「それはそうと、ちゃんとリスト回してもらえるように、したんだろうな？」

サードがラフィストに念を押すと、任せてとばかりにガーネットがラフィストに代わってばっちりだと答えた。

「そうか……それならいい」

「さっすがー！」

納得するサードの肩越しから、マキノが褒め称える。サードが不快

な顔をし、その手を退

けろと言うとマキノは軽い調子で誤ってその手を退けた。このじゃれる様なやり取りに、

ニックスが一人恨めしそうにしている。

「大会まで時間もあるし、今から修行しようかな！……サード、付き合ってもらっても良いかな？」

「わかった……」

ラフィストとサードが修行しに、加工場の外へと出て行く。ガーネツトは部屋で読書をする事に決めたらしく、本を持って部屋に戻って行った。

「ニックス、私達も修行するわよ！」

「おう、手加減しねえからな！」

「マキノ、ニックス」

残っていたティーシエルが二人に声をかける。

「僕に護身術を教えてくれないかな？ いい機会だし、ちょっと位覚えておきたくて」

「いいんじゃない。ね、ニックス教えてあげようよ！」

「あ……ああ、うん」

快い返事をしたものの、マキノと二人つきりになれずニックスは内心がっかりし、肩を落とす。そんなニックスの内心に、マキノが気付いた様子は全くない。

「じゃ、湖畔に出て早速やろう！ ニックス、行くわよほら！」

ティーシエルと、マキノと、マキノに引き摺られたニックスも修行をする為、加工場から外の湖畔へと向かった。

「おお！ ラフィスト！ 武器が出来たのじゃな！？」

「はい、王様……」

大会三日前となり、キキナナ湖での修行を終えてフォートレスに戻ってきたラファリスト達

は、まずは報告をと思い、王への謁見に向かった。王は武器が完成した事を、我が事のように喜んでくれた。ラファリストは王に完成した武器を見せようと、

腰に差した剣を王に差し出した。

「ああ、そんなに畏まらなくてよい。……ふむ、良い出来だ。ディーテ、良い働きをしてくれたな」

王の賛辞に、ディーテが平伏する。王が、大会の賞品用に用いるルーン聖石についてどう

したのかとラファリスト等に尋ねると、ディーテが懷からトラートの鉱石から作った宝石を

取り出し、王に献上した。ディーテの仕事ぶり、ティールが刻んだ魔法印のお陰で、

作られたルーン聖石は美しい輝きを放っている。

「おお……美しい輝きじゃ——……」

「あの、王様……」

「ん、何じゃ？ ガーネット姫」

ガーネットが立ち上がり、王の傍に歩み寄る。

「少々、内々のお話がありますので……すみませんが、他の者に席を外すよう仰って頂け

ませんか？」

王はあい分かったと答えると、他の者を王の間の外へと退出させた。扉が閉じられた事を

確認すると、王はラファリストの一つに纏められた紙を手渡した。

「これは……」

「参加者リストじゃ。後でじっくり見るが良い……で、お前達の話

とは？」

「ルーン聖石の事なんですが……」

「ん、わかっておるぞ。贋物だという事は百も承知じゃ。ルーン聖石など所詮古の伝承に

存在する物であって、実際に在るはずが無いからの」

「いえ、そうではなくて……」

「ん、何なのだ？」

「本物のルーン聖石がここにあるんですの」

「な、何じゃと！どこにあるのじゃ、それは！」

驚きの余り、王は玉座から立ち上がり辺りをキョロキョロ見回す。

ティーシエルが黙って

王の前に行き、胸にかけられたペンダントを外して王に渡した。

「まさか、これが？——……美しい。これと比べたら先程の宝玉も、ただの石ころじゃ。」

ティーシエルよ、一体この石をどこで？」

「わかりません……その、生まれた時から持っていたもので」

「ほう……生まれた時からとな。それは興味深い」

王は暫くルーン聖石を眺めていたが、大切に持っていなさいと言い、それをティーシエル

の首にかけ直してやる。そして、ラフィスト達に大会まで城に部屋を用意したからそこを

使おうと良いというと、先程下がらせたうちの一人を呼び寄せた。

「今日はもう疲れたであろう……ゆっくり休むがいい」

衛兵にラフィスト達を部屋まで案内するよう、王が命令する。衛兵に案内され、ラフィス

ト達は王の間を後にした。

「うわお！このベッドふかふかだぜ！スッゲー！」

ゴージャスなベッドに感動したニックスが、ベッドの上で飛び跳ねながら叫ぶ。今は、寝る前のミーティングの最中で、ラフィストとサードの部屋に皆が集まっている。

「ニックス！それラフィーのベッドでしょ！？やるなら自分のベッドでやんなさい！」

「おい、あったぞ！」

騒ぐニックスを完全に無視し、一人黙々と出場者名簿を見ていたサードが、見ていたペー
ジを皆に見せてその部分を指差す。ガーネットとティーシエルが名前を読み、ナディア本人であると確認する。どうやら思った以上に、作戦が上手くいったらしい。

「これで、準備OKですわね！」

ガーネットの言葉に、皆が頷く。後は全て武術大会の開催を待つだけだ。ナディアを見つ
け、彼女の話聞く為に。

「ダメ、ボツ、クズ。見るからに弱い」

フォートレス城から城下町に続く橋の上で、何やら呟いている女性がいる。

「あいつは筋肉ゴリモリだけど、力ばっか強くてスピードや戦略弱そうだからダメ。あの

術士は見た目賢そうだけど魔力、カス」

銀の髪の女性は橋の手すりに腰かけて、どうやら大会に出る者の品定めをしているらしい。

しかも、かなり酷評だ。今日開催されるという事もあり、参加者がここを通っていくので、

ここでどんな者が出るのか見ているのだろう。

「フン！どいつもこいつも弱そうね。大した事ないわ。――……ま、こんなチャチな大会であれが手に入るなら……あはは、こんな楽な事って無いわ」

「よう、姉ちゃん」

女性が声のした方に視線を向けると、そこには先程女性にダメと言われた出場者と、カスと言われた術士が立っていた。

「言いたい放題じゃねえかよ。アンタだって大した事無いんだろ？拳の方が、術の発動より早いんだからよ！」

「そ、それに私の術だって決して弱くはありませんよ、ハイ！」

格闘家は今にも女性に掴みかかりそうな勢いだ。術士の方も、眼鏡をクイツと上げながら、精一杯主張している。

「強いかわいかなんて見りゃわかんのだよ！っていうかさっさと退いてくれない？邪魔なのよね。それにさ、何って言うの？アレよ。筋肉系特有の汗臭さ？あと眼鏡系の特に暗い分

類の放つ湿り気？あんたら二人並ぶと、相乗効果でマジキモイのよ」

「なっ……て、テメェ！」

「あー、やだやだ。怒ると余計汗かくわよ。湿り気で汗が余計臭くなるのよね」

「さっきから言わせておけば、失礼ですぞ！」

「構わねえ！大会前に力つっもんを身をもって教えてやる！」
格闘家が女性に殴りかかり、術士が術の詠唱を始める。

「バカみたい」

「ぐがっ！」

拳が女性の体に触れる直前、バチツと言う音が鳴り響き、男が五、六メートルほど吹っ飛

ばれる。

「か、体に帯びた魔力で吹っ飛ばしたのか!？」

「だ、大丈夫でありますか!おろおろ……」

女性は手すりにつかまったまま、指でサッと印を切る。

「ファイアー!」

指先から炎が現れ、二人に向かっていく。二人に呪文が直撃すると辺りにズガンと派手

な音が響き、煙が巻き起こる。煙がはれたところで、女性が二人の下へ歩み寄り、倒れて

いる二人を見下ろした。

「れ、レベル1のファイアーでここまで……しかも、詠唱なしとは……」

「魔力の差、分かったワケ?」

「ハ、ハヒ……」

「全く、これだから身の程知らずは……」

それだけ言うと、女性はその場を立ち去っていった。

「いよいよ今日だな。皆、準備は出来てるか?」

「勿論!……あー、緊張するぜ!誰と戦うんだろうなー!」

ニックスが騒ぐ。大会前というのに、やたら元気だ。

「本当に頑張ってるね!サード、私期待してるよ♪」

「マキノ!……俺は?」

「ニックス?……あー、精々頑張れ」

「な、何なんだよその差は!」

扱いの酷さにニックスがマキノに文句を言う。

「何って、決まってるじゃん。優勝候補と、バカ」

「バ、バカー!?!」

「あはは、うそうそ!ニックスも頑張ってるね」

マキノに応援してもらえてニックスは相当嬉しかったのか、余韻をかみ締めている。

「皆、頑張っ！私応援していますわ。……でも、決して無茶はしないで」

「うん、分かってるよ。ありがとう、ガーネット」

サードと、顔がにやけたままのニックスもガーネットに返事を返す。そんな中、ティーシ

エルだけ黙りこくっていた。

「……ティーシエル。緊張してるのか？」

「少しはね。でも、ナディア見つかるかな……」

「大丈夫だって、絶対」

ラフィストの言葉を受けて、ティーシエルが少し笑顔を見せるが、それでもやはりどこか

俯き加減だ。そんなティーシエルを見て、マキノがポツリと呟く。

「……やっぱ、可愛いわ。うん」

「え？」

「いや、何でも！ヲホホ、ヲホホホ！」

呟きを聞き取られたからか、視線を逸らし、明らかに不自然な笑みを浮かべる。

「あ、サード、ニックス。俺達試合だから、先に受付に行かないと……」

ラフィストが上にかかっている時計を見て、二人に出発を促す。後から会場に向かうとい

うガーネット達と別れ、ラフィスト達は会場に向かった。城から会場に向かおうと橋を渡

ろうとするが、何やら人だかりが出来ていて通る事が出来ない。一体何なんだろうと思

ながら、その人だかりの中に割って入ると、男が二人黒焦げになっていた。

「……これは、魔法？——……レベル3並の威力だが、怪我の具

合といいこれはファイ

アーだな」

サードが火傷の具合を見て眩き、何かの石を取り出した。

「キュア……」

石が光ったかと思うと、みるみるうちに男二人の火傷が治っていき、完全に回復する。

「サード、それは？」

サードの手の中にある石を指差すと、サードは魔石だと簡潔に答えた。ニックスはそれだけでは分からなかったらしく、魔石って何だとすつとんきよんな声を上げている。

「簡単に言うと、魔法を使えない者が魔法を使う為の石だ。あまり数や種類もないし、使うには訓練がいる。……まあ、能力増強系の物は、持っているだけで効果が得られるが、そういったのは稀だな」

懐に使った魔石をしまうと、男二人にサードが誰にやられたと問いかける。

「銀髪の……長い髪の女だ……——」

「!?」

ナディアを知る二人に聞いた特徴と、合致する。三人はお互いの顔を見合わせ、大きく頷いた。

「どうやら、ビンゴだな」

「いいか、二人とも。もしナディアに会っても、知らない振りをしろ！」

俺達が知っているのは不自然だからな、とサードが念を押す。二人は頷き、再び会場に向かって歩き出す。晴れ晴れとした空に無数の花火が鳴り響き、武術大会の始まりを国中の

人に告げていた。

一十一章 求めるもの

「L a d y s a n d G e n t l e m e n ! これよりフオートレス武術大会を、始めます!」

司会者の宣言と共に、会場中に大きな歓声が巻き起こる。観客席は多くの人で賑わってお

り、ほぼ国中の人全てが集まっている位だ。アンカースとの対外問題などで暗い話が多か

った中、国一帯で盛り上げられる企画という事もあり、フオートレスの人々も案外喜んでい
るのかもしれない。

「えー、早速一回戦を始めさせて頂きたいと思います! Aブロック一回戦第一試合は、サー

キュラーII スチュアート選手対サードII ソーリユア選手です!」

アナウンスが流れると、コロシアムの中央にサードと対戦相手が出てくる。サードが出て

きた途端、会場中から黄色い歓声が巻き起こり、サードを応援する声で会場が一杯になっ

た。会場の様子に、サードの相手である背の高い格闘家のようなゴツイ男は、サードに敵

意の目を丸出しにする。

「まったく、うるさい外野だ」

相手のそんな様子もまるで気にも留めず、サードが剣も抜かずに不快そうに呟く。サード

の完全になめた態度に、サーキュラーが顔を引きたらせる。

「おい、色男! 俺はあんたみたいなけ好かない奴が、一番大っ嫌いなんだよ!」

嫌味を言い終える前に、サーキュラーがサードに殴りかかる。その

途端、サードに拳が当

たるところだった会場から悲鳴が巻き起こる。

「それは好都合だ」

しかしサードは軽々と攻撃を避け、突っ込んできたサーキュラーの足を払い場外へ吹っ飛ばす。

サードの華麗な勝利を見た場外から、再び黄色い声が巻き起こった。結局サードは

腰に差した剣を抜く事無く、相手に勝利して早々と入場口に戻っていった。

「あのサードとかいう男、準決勝で当たるわね……要注意だわ」

試合を見物していた銀髪の女性が、額から汗を流す。顔に厳しい表情を浮かべ、彼女は出

場選手の控え室に向かった。

「おい、戻ったぞ」

入場口に姿を消したサードが、ガーネット達が見物している観客席まで戻ってきた。席に

座ったサードに、ティーシエルが飲み物を手渡すと、サードは少しだけ中の飲料水を口に

含む。

「ところで、ラフィー達は？」

「奴はCブロック、ニックスはDブロックだ。勝ち進めば準決勝であたる。ナディアとか

いう女は、Bブロックらしい……つまり、俺の準決勝の相手になる可能性がある、という事

だ。……ブロック毎に試合を進めるから、ラフィストとニックスの試合はまだまだ先だな」

そうこう話しているうちに、Aブロックの一回戦の試合全てが終わったらしい。Bブロック

の試合開始のアナウンスが場内に流れ、一同の視線が場内に集まる。そこに、銀髪の女性

が現れる。

「あ、あれはナディアですわ!」

ガーネットが会場にくだいるように、前のめりになって叫ぶ。柵から転げ落ちそうなガー

ネットを見て、サードが慌てて後ろから支える。その時、試合開始の鐘の音が響き渡った。

試合が始まると同時にナディアが印を切り、腕を上上げる。

「アンタなんか詠唱は必要ないわ!……ファイアーアロー!」

掲げられたナディアの手から放たれた炎は、あっという間に相手を包む。どうやらほんの

一瞬で、勝負はついてしまったようだ。ナディアの強さに、場外から歓声が起こる。しか

し異変を感じ取った会場が、次第にどよめきに変わった。相手選手を包んだ炎が、いつま

で経っても消えないのだ。それどころか、どんどん威力を増しているように見える。

「あのままでは、相手の方が死んでしまいますわ!」

「ね、ねえティーシエル!何とかならないの!?!」

ガーネットが悲鳴に近い声をあげ、マキノも慌てふためきながらティーシエルの方に視線

を向ける。

「……わかった。ここから魔法を使ってみるよ。我誘うは、均衡の破壊……その外力を持

って静寂に波紋を引き起こし……」

ティーシエルが杖を掲げ、呪文の詠唱に入る。

「おい!違法が出来ないよう、会場にはマジックシールドが張っているんだ!……それを

破るなんて危険だ、やめろ!」

サードが呪文を止めに入るが、ティーシエルは一向に止めようとはしない。

「汝の全てを飲み込むだろう……ウォール・グラビティプレス！」杖から魔法が巻き起こり、それが会場を包んだマジックバリアにぶつかる。その衝撃によ

って、術者であるティーシエルの体は吹き飛ばされ、床に叩きつけられる。しかし、魔法

はバリアを抜け、男を包んだ炎をかき消した。そこに炎によって近づけないでいた救急隊

員が男の元に駆けつけ、男を担架で運んでいった。

「やったあ！」

「いけませんわ！すぐに傷の手当てを……キュア！」

ぐったりとしているティーシエルに、ガーネットがすぐさま回復を施す。そのお陰か、体

に大したダメージは残っていないようだ。サードがティーシエルを抱え上げ、観客席に横にする。

「無茶苦茶な事をするな」

「分かっている……でも、放っておけなかった」

そう言うと、ティーシエルが瞳を閉じる。体力を消耗した形になり、疲れたのだろう。静

かな寝息が聞こえ始め、ガーネットやマキノがほっと息をつく。

「なっ！マジックシールドの外から！？……一体誰がそんな真似をする！」

未だ場内に残っていたナディアが、魔法が起こった方向へ顔を向ける。そこには昔何度か

会った事のある、ガーネット姫の姿があった。光魔法専門のガーネット姫に、あんな芸当

が出来る訳が無い。ナディアの脳裏に、ガーネット姫の幼馴染である彼の姿が過ぎる。

「まさか……ティーシエル？」

ティーシエルと別れたのは、今から五年前だ。その頃はまだ、マジ

ツクシールドを打ち破るほどの力は、彼に無かったはずだ。しかし、彼ならばそんな無茶な芸当もやってみせるという確信が、ナディアにはあった。ティーシエルが、ここに来ているかもしれない。そう思うと、急に昔が懐かしくなる。ナディアは控え室に戻った後も、想い出の海に沈んでいた。

会場のざわめきも静まり、武術大会の試合が再開される。丁度Bブロックの試合が全て終わり、これからラフィストの試合が始まるところだ。アナウンスでコールされ、ラフィストが場内に出てくると、ガーネット達がそれに気付き応援の為に声を張り上げる。

「きゃー！ラフィーですわ！頑張ってー！」

「ラフィー！頑張ってねー！」

女性二人が大きな声で応援している傍らで、サードが腕組みをして試合を観戦している。

ティーシエルはまだ、ぐったりして横になっているようだ。試合開始の鐘が鳴り、両選手が武器を構える。ラフィストの相手は槍の使い手らしい。それも、かなり腕に自信があるようだ。連続して槍が繰り出され、ラフィストはそれを間一髪でかわす。

「俺だって色んな魔物と戦って……」

防戦一方だったラフィストが地を蹴り、一気に間合いを詰める。

「強くなってる！」

急に間合いを詰められ、対応に遅れた相手の槍を剣で吹き飛ばす。そしてすかさず構え直す、技を繰り出した。

「天烈破！」

相手に技が直撃し、場外へ吹っ飛ばした。ラフィストの勝利に、ガーネットとマキノがき

やあきやあと声を上げて喜ぶ。ラフィストがガーネット達のいる観客席にやってくると、

ガーネットとマキノが興奮した面持ちで駆け寄り賛辞を送る。

「おかえりなさい、ラフィー。凄かったですわ！」

「ラフィーも強いのね！格好良かったよ！」

「あ、ありがとう……」

テンションの高い女性陣に揉みくちやにされながら、ラフィストは先程控え室にいる時に

聞いた大きな音を思い出す。あれは一体なんだったのか気になり、場外にいた彼らに聞こ

うとした時、アナウンスが鳴り響いた。

「いよいよ一回戦も最終戦となりました！Dブロック一回戦第四試合、ニックスⅡエント

ルード選手対ゴモダバール選手！」

始めの合図と共に、ニックスの試合が始まる。とりあえず聞くのを後回しにし、ラフィス

トはニックスの試合を見る事にした。しかし試合が始まっているのに、ニックスはチラチ

ラと観客席の方ばかり見ている。どうやら、マキノが試合を見てくれているか気になって

いるらしい。試合相手の方に向き直ったかと思うと、今度は突然押忍と叫び、何故か自己

紹介を始めた。

「オッサンさ、柔道やってんの？強そー！俺、ニックス！よろしく

！」

「は……はあ」

相手はいきなり何なんだと、いった顔でポカンとしている。対戦相手の名前など、先程ア

ナウンスされただろうが、とも言いたいようだ。ニックスのあまりにお馬鹿な行動に、観

客席で見えていた一同は愕然とする。

「アホか、アイツは……」

「っていうかニックス……あれ、柔道じゃなくて空手よ」

一同に呆れられているとは知らず、ニックスはまだ延々と喋り続けている。

「柔道、俺少しだけ知ってるぜ！」

「あの……どーでもいいが、拙者の技は空手なのだが。……それより、そろそろ試合を始めても良いだろうか？」

「だから、柔道の技でもかけてみよっかな！」

ニックスは相手の言葉などハナっから総無視だ。

「対戦者が可哀想だな……」

サイドが同情する。

「じゃあよ、オッサン！始めよーぜ！」

ニックスが相手とのリーチを一気に縮める。そしてそのまま体ごとぶつかり、相手に体当

たりした。ニックスが相手の服を掴み、組み合う形に持っていくと、相手もかなりの力があるのか、膠着状態になる。

「なあ、オッサンよー！あんたさ、結婚してるだろ？」

「ぬ！そ、そうだが……」

お互い組み合ったまままでの小声の会話なので、観客席からはそのやり取りは伺えない。ニ

ックスはニヤリと笑うと、次の言葉を呟いた。

「アンタ、奥さんに内緒で浮気してっだろ？」

「!？」

相手の体に動揺が走り、力が緩む。そこをすかさず狙い、ニックスが一本背負いを決める。

ドスンという音が響き渡り、相手選手が床に叩きつけられる。衝撃と、シヨックで気絶してしまっているようだ。

「イ……イッポン！ニックス選手の勝利です！」

会場から歓声と、大きな笑い声が響く。ニックスは大きく両手でピースをしながら、退場していく。それを見て更に一同は呆れ返り、ガックリと肩を落とした。

「イエー！サード、見てたかよ！俺、ちゃんと一回戦勝ったぞー！」
ニックスがかなりご機嫌な様子で帰ってくる。サードはチラリとニックスを一瞥すると、溜息をつき視線を逸らした。他の面々も何ていったらよいか、といった感じで呆れと苦笑が入り混じった顔をしている。

「そ、それよりも！そろそろ本当の目的のナディア探し、始めませんこと？」

ガーネットの提案により、目的のナディア探しへと動き出す事にするが、ラファスト、ニックス、サードはまだ試合があるのでナディア探しはガーネット達に任せる事にする。じ

ゃあ、早速探しに、と言って席を離れかけると、ガーネットのマントを掴んで誰かが制止をかける。ガーネットとマキノが振り返ると、先程まで席で寝ていたティーシエルがマントの端を握っていた。

「あら、ティーシエル。どうかいたしまして？」

「……悪いけど、僕一人で行かせてくれないか？」

「けど、まだ休んで無くて……大丈夫ですよ？」

ティーシエルは黙って頷く。引く様子の無い態度にガーネットは溜息をつく、くれぐれ

も気をつけて行って下さいましと言って、離れかけた席に戻る。ティーシエルはヨロヨロ

と立ち上がると、会場の通路口へと消えていった。

「一人で大丈夫かな？……この人だからだし」

「出場者の控え室もある事だし、何とかなるだろう」

通路を通って、一回会場の外に出て控え室に向かうと、ティーシエルが通路を抜けた時、

誰かがティーシエルの名を呼ぶ。振り返った先にいたのは、探し人であるナディア本人だった。

「本当は、会うつもりなんか無かったんだけど……大会出てる事もばれちゃってるし、い

ずれは会う事になるのかなって思って」

「ナディア……」

「私の事、覚えててくれたのね。……久しぶり」

「……今まで、何してたんだよ」

「んー、探し物」

「それは、分かってる！」

はぐらかす様なナディアの態度に、ティーシエルが怒鳴る。

「何よ。これじゃ、満足できないってワケ？」

「いつもそうだ！肝心な所を誤魔化す！」

ナディアはいきり立つティーシエルの頭をポンポンと撫でる。

「あんたは、知らなくていいのよ」

「そういうとこ、全く変わってないんだな。……そうやって逃げたってどうにもならない

事位、ナディアが一番良く分かってるじゃないか！」

「……そうね。逃げた、か。確かに、私は逃げてるかもしれない。

……で？あんたは何が

言いたい訳？」

「……」

「言いなさいよ！言わなきゃ分からないわ！」

「一体、何を隠してる？」

「別に」

「とぼけるな！……それとも、また逃げるのか？」

ナディアがティーシエルから視線を逸らそうとするが、ティーシエルがナディアの腕をぐ

っと掴み、視線を逸らす事を許そうとしない。ナディアはその手を

乱暴に払いのけると、

絞り出すように声を出した。

「……なんで、アンタはいつでも他人の事に一生懸命なの！別に、

私の事なんてどうだっ

ていいじゃない。アンタに関係な……」

「なくない！ナディア、僕は……」

聞きたくないというかのように、ナディアが急に後ろを向く。

「アンタは、優しすぎるのよ。……わかったら、とっとと行きなさいよ！」

ナディアの声が、少し震えている。ティーシエルはナディアの腕を

掴み、ナディアを振り

向かせる。

「……何で、泣いてるんだ？」

「さあね」

「訳を言わなきゃ、この腕を放すつもりはないよ」

じっとナディアを見つめる。すると、ナディアが聞こえるか聞こえ

ないか位の声で呟く。

似てるというナディアの答えに、ティーシエルが驚く。そして、一体誰が誰と似ているのかと気になっていると、ナディアが言葉を続けた。

「アンタ、七年前のあの時に私の代わりに死んだ弟に、そっくりなのよ」

「ナディアの、代わり？」

ナディアの腕から手を離す。もう腕を掴んでいる必要はない。

「あの子……とても優しい子だった。いつも皆にお節介ばかりやいててね。……アンカー

スにランツフィートが攻められた時、私はあの子と一緒に隠れたの。でも、私……立ち

やったの、物音。兵士に気付かれて、二人とも殺されるって時に、あの子が飛び出して……

……それで……っ！」

その時の事を思いだしたのか、ナディアが感情を高ぶらせて喋る。

「私、何も出来なかった……目の前で殺される弟を見ても。……

だからせめて……弟を

生き返らせえたかった。世界樹がダメだと分かった後に、色々調べてルーン聖石に行き着

いた……」

咄嗟にペンダントを握り締める。彼女が求めている物は、やはりこれだったのだ。ナディ

アが話してくれた以上、自分も話さなくてはならないと思い、意を決してティーシエルが話し始めた。

「……ナディア、僕は今ラフィストやガーネット達と一緒に旅してるんだ。旅には世界樹も大きく関わっている……だから君も、一緒に来ないか？僕は君の力になってあげ

たい。……それに、君が求めている答えを、僕達は知ってるから」
ナディアが驚きを含んだ顔でティーシエルを見る。

「どういう事？」

「ナディア、君がルーン聖石を探している事……何となくだけど知ってたんだ。だから、

王に頼んでこの大会を……」

「っ！じゃあ、嘘なのね！？ルーン聖石、偽物なんですよ！」

ティーシエルが言い終わらないうちに、ナディアが激昂して叫ぶ。
対するティーシエルは

その反応が分かってたと言わんばかりに、落ち着き払っている。

「嘘じゃないよ」

「知ってて開いたって事は、あたしを誘き寄せる為じゃない。そんなの、嘘に決まってる

わよ！」

「確かに……あのルーン聖石は偽物だけど、本物がちゃんとあるんだ」

「本物ですって？どこ、どこにあるの！」

ナディアがティーシエルの肩を掴んで揺さぶる。肩を掴んだ手を優しく剥がすと、かけて

いたペンダントを外してナディアに手渡す。ナディアは何気なく見
ていたペンダントを手

渡され、驚きで言葉に出来ないでいた。

「仲間の一人が気付いたんだ。僕は当たり前のように持っていたから、全く気にした事が

なかったんだけどね……」

「フフ……答えはずっと前から目の前にあった、なんてね」

少し悲しげに笑みを漏らす。まるで、今までの自分を嘲笑するように。ティーシエルが心

配して声をかけると、ナディアは大丈夫と首を振る。

「そんな顔、しないでよ。——……わかった。私、あなた達につ

いていくわ。……ルー

ン聖石の使い方もまだ分かってないし、何より一緒に行く事は答えを見つける近道だと思

うから」

「ナディア……それと、一つだけお願いがあるんだけど」

「何？」

「もう一人で悩んだりするのは、やめてほしいんだ。今のうちに、君の力になってあげら

れる事だって、きっとあると思うから」

この言葉を聞いたナディアは、乱暴にティーシエルの頭を撫で回した後、これからよろし

くねと嬉しそうに笑った。ティーシエルもナディアの笑顔に笑みを見せ、彼女の手を握っ

て引っ張る。

「行こう、皆を紹介するから」

「ちょ、ちょっと！ ゆっくり走りなさいよ！」

二人は手を繋いだまま、会場の中に入る通路を走っていった。

一十二章 新たな仲間

「と、いう訳でよろしく。ナディアさんとかじゃなくってナディアでいいから」

ティーシエルに連れられてラフィスト達の元にやってきたナディアが、これから一緒に旅する意を伝え、自己紹介する。

「うおー！美人さんだー！俺、ニックス！よろしくお願いします！」
ナディアの斜め前にいたティーシエルを押しつけ、ニックスが我先にと自己紹介をする。

そんなニックスの頭にマキノが踵落としを決め、沈める。マキノはデレデレしてこの馬鹿、

と言った後に自己紹介もついでに済ませた。床に顔がめり込んでいるニックスをティーシ

エルが突付いている傍ら、ガーネットがナディアに抱きつき喜びを露にする。

「ナディア！久し振りですわね！」

「ガーネット姫！」

「ナディア、ガーネットですわよ！」

「ガーネット、あんまり怒るなよ。……ナディアだって、悪気があった訳じゃないんだから。な？」

姫付けしたナディアをガーネットが叱咤し、そんなガーネットをラフィストが諫めるよう

に、頭に手をポンツとのせた。その瞬間、ガーネットの頬が少し赤く染まる。ナディアは

ガーネットの変化に気付き、おやつというような顔つきをする。

「あ、自己紹介まだだったね。俺はラフィストⅡブレッセント。ラ

フィストでもラフィー

でも、好きなように呼んでくれて構わないから」

「わかったわ、よろしくラフィー。ところで、あそこにいる無愛想なのは？」

ナディアが指し示した人物を見ると、そこにいたのはサードだった。恐らく、後で適当に

名前を名乗っておけば良いと思っているのだろう。関係ないとばかりに、場内の試合をじつと見ている。

「ああ、彼はサード。サード＝ソーリユアっていうんだ」

「ふうーん……さしずめ、サードん？」

「あ、それ禁句！」

バッチリ聞こえていたのだろう。サードが場内から目を外し、ギロリとナディアを一睨みする。睨まれた方のナディアは全く気にしていないようだが。

「ナディア、私と同じ事を言ってますわ……」

思考回路が似ているのか、はたまた何かの共通語なのかと、ガーネツトとナディアの二人

以外は頭の中で考える。どちらにしろ、サードは人の名前で遊ぶな、いい迷惑だという事に間違いないと思う。

「ところでナディア、ルーン聖石は見つかりましたけれど。……これから、どうするんですの？」

「そうね。ルーン聖石の使い方を見つけるのは勿論だけど、世界樹に認めてもらうのも目的の一つかしら」

「そうなんだ」

ラフィストが少し驚いたような口調で言う。

「だって、あなた達の旅に参加した以上、私も頑張らなきゃいけな

いでしょ？……まあそ

の時は、ルーン聖石は必要無くなるけど。私は、今の自分が認めてもらえるなんて思っていないわ」

「そっか」

「あ、それとサード。このまま勝ち進んでいけば、準決勝で貴方と戦う予定だったけど：

…私、この大会棄権するわ」

突然のナディアの言葉に、皆が驚き声を上げる。サードが簡潔に、理由はと言うと、ナデ

ィアはそれに答える為喋りだす。

「だって、もうこの大会に出る理由は無いじゃない。もうこれ以上疲れるのも、私、嫌なのよね」

「出た……ナディアの高飛車」

「なんですってー！」

「別に」

「っ——！あんたのこういう所が気に食わないわ！」

一同はそういった態度をとるから、そう思われるのではと思ったが誰も口には出さなかった。

何となく、言ったらどうなるか感じ取っているのだろう。ナディアは今のうちに棄権

してくる事にしたらしく、受付に行ってくるわと言う。ナディアが一人で行くとした所

に、ティーシエルと一緒に行くと言い出した。最初は断っていたが、結局二人で一緒に行

ってくる事にしたらしい。

「じゃあ、ちょっと行ってくるよ」

「また後で……ってあら？ティーシエル、杖変えたのね。それにこの杖、ガーネットとお

揃いじゃない」

「な、何だよ！その目は！」

「こ、これは！杖のデザインが気に入ったから、真似しただけですわ！」

「ふふっ！別に気にしちゃいないわよ、そんな事。二人とも、相変
わらず可愛いわねー！」

からかわれていた事を悟り、二人は顔を真つ赤にする。これ以上突っ込まれたら堪らない

とばかり、ガーネットが早く行ってくるよう急かし、ティーシエルがナディアの背を押す。

マキノが茶化して、迷子にならないでねと言つたのに大丈夫だと返事をすると、二人は通

路の奥に姿を消した。二人の姿が見えなくなったのを確認すると、まずはマキノがきやあきやあと騒ぎ出した。

「ねえねえ、何かすごい仲良しじゃない!？」

「そうですわね。ティーシエルも、前より刺々しさが消えてきましたし」

「――…：そういう俺らがアイツと初めて会った時、酷い言われようだったもんなー。

「……なあ、ラフイスト！」

「そうだな」

「何ていうか……かわいー！」

ガーネットとマキノが声を揃えて叫び、これは将来期待大ねと騒いでいる。そんな二人を

横目に、ニックスがでもよーとラフィストに話しかける。

「俺ら、絶対人目引いてるよな！。悔しいがサードもモテ型だし、姫さんも可愛いだろ？」

「そうだなあ……今の二人なんか特に、な——」

「おい、見ろよ！男装の可愛い子と、ナイスバディの姉ちゃんだぜ！」

どこからとも無くそんな声が幾度と無く聞こえてくる。ラフィスト達と一緒にいる時は、

ここまで露骨な事は無かったと思う。きっと、ナディアと二人なのが目立っている要因な

のだろう。しかしそう頭で理解していても、我慢できるかどうかは別問題だ。

「僕をまた女の子扱いして——っ！」

「まあまあ、ティーシエル。世の中には可愛くなりたくても、なれない人だっているんだから！大事になさい」

「そ、そういう問題じゃ……」

「あら、だってそうじゃないの！可愛いのが、得よー。つい可愛がってあげたくなるわ」

「……そんなの、初めて言われたよ」

ティーシエルとしては、別に可愛がって欲しくなど無い。それにこれは、男としてどうか

とも思う。確かにナディアの言う事も一理あるのかもしれないが、それは男として見られ

ていないという事だ。そんなティーシエルの心など、お構い無しにズケズケ物を言うナデ

ィアにこっそり溜息をつく。いつの間にか受付に付いていたらしく、ナディアが受付に駆

けて行く。棄権の手続きをしている後姿をぼんやりと眺めていると、手続きを終えたナデ

ィアが戻ってきた。

「これでオッケーね！ちょっと小腹が空いたわね……どう？お茶で

もしない？今なら空い

てるし、特別に奢ってあげるわよ」

「うん、いいよ。――……ナディア持ちか、何食べようかな。朝、あまり食べてないんだよね」

「――ま、いいわ。思う存分食べなさい。……とりあえず、会場近くの店に入りましようか」

「あ！あそこは？」

キヨロキヨロと辺りを見回し、店を探していたティーシエルが一軒の店を指差す。どれどれ、とその店の看板を見たナディアがギョツとした顔をする。

「最高級な品揃えしてます！アンティール……って一流料理店じゃない！何考えてんの

よ！こっちにするわよ！」

その店の隣にあったカフェテラスへと、ティーシエルを引き摺っていく。引き摺られてい

るティーシエルは、何が悪かったのかいまちよく分かっていないようだ。ドアを開ける

と鐘の音が鳴り響き、店員が出迎えてくれる。店員に勧められた席に座り、ナディアはさ

つさと注文を済ます。一方のティーシエルは、なかなか注文が決まらない。

「ナディア」

「何よ？」

メニューと睨めっこして何やら考え込んでいたティーシエルが、考えるのを諦めたのかテ

ーブルにメニューを広げる。そしてナディアに質問の嵐を浴びせた。

「ローズマリーの紅茶は無いの？ここには、紅茶としか書いてないんだけど……」

「そんなの、私に分かる訳ないじゃない。……どうなの？」

チラッと店員に視線を向けると店員は、うちはダージリンを使用しておりますのでローズ

マリーは、と答える。まだ分からない事があるのか、ティーシエルの質問は止まらない。

「じゃあ、このフレンチトーストって何？」

「……パンに卵つけてバターで焼いたヤツ」

「アイスクリームってジェラードと似てるけど、何が違うの？」

「あんた、いいアイスしか食べた事無かったのね……」

「だったら、この……」

「あー！もう、ウザイ！……店員さん。この子のは何か、適当に持ってきてくれればいいから！」

「あ、か……かしこまりました」

店員が店の奥へと引っ込んでいく。ナディアが勝手に決めてしまった事に、ティーシエル

は不満だったらしく、折角選んだのにと文句を言っている。遅す

ぎるアンタが悪いと、

血管が浮き上がるほど怒るが、ティーシエルには効果が無いようだ。

しかもメニュー表示

が悪いと、文句を文句で返してくる。そのそんな二人を店の奥にさがった店員が、仲間と

共に眺めていた。

「ね、あの窓際の子！すっごく可愛いでしょ！」

「どこどこ？」

「ほら、あの銀髪のお姉さんの連れ」

「いやーん、可愛い！……女の子かしら？」

「でも男物の服だし、僕って言ってたから男の子だと思うわ。……それで、その子のは何

か適当に持ってきてくれて言われたんだけど、何がいいかな？」

「じゃ、うちのお勧め品出したら？」

「あ！それいい！」

「……………遅いね」

店の奥でこんな会話が繰り広げられているとは露知らず、ポツリと呟く。既にナディアが

注文した物は運ばれており、ナディアはそれを食べ終えて、食後のコーヒーを飲んでいた。

「変ねー、普通はもっと早いはずなんだけど……」

「おまたせしましたー！」

「あ、きた！」

机の上に置かれた物は、ハンバーグやコロッケなどとりどりの物がこれでもかってほど入

っており、一目で力が入っていると分かるような物だった。あまりのボリュームの多さに、

食べるであろうティーシエルは目が点になっている。

「当店人気メニューのDX版です！あ、このケーキはサービスですので！」

「……」

勿論この店にはDX版など存在しない。ぼーっと料理を見ていたティーシエルにナディアが

食べるよう促すと、ティーシエルが一人黙々と料理を口に運び始めた。テーブルの周りに

女性店員が集まり始め、ティーシエルにちよっかいを出し始める。

「ねえ、君いくつ？何て名前？」

「やっぱり男の子よね？いやーん、肌白いー。柔らかくってスベスベだわ！」

「ちよっと！静かにしなさいよね！」

ナディアが店員に文句を言うが、店員は耳も貸さない。そんな店員の勢いに、ティーシェ

ルはタジタジになってしまっている様だ。騒いでいる店員と、何だ

かんだ質問に答えてい

るティーシエルの律儀さに、ナディアのイライラは頂点に上る。

「ティーシエル！そんな事律儀に答えてないで、さっさと食べちゃいなさい！」

「いや、でも——……」

「何？」

ティーシエルが言いにくそうに、もうお腹が一杯だとナディアに告げる。

「そういえば、あんためっちゃ少食だっけ。ならさっさと出るわよ！こんな店！」

ナディアがティーシエルを引っ張り、店員の群れから引きずり出す。店員はもう行ってし

まうのかとブーブー言っていたが、それを振り切り会計を済ませて外に出る。

「もう絶対ここにはこないのよ！いい、わかった！？」

ナディアは一人できれている。

「でも、思っただけど——……」

「何？」

「サードもいたら、もっと凄い事になってたよね……」

その光景を想像し、確かにと思う。今の倍はギャラリーが増えているかもしれない、とゲ

ツソリしながら二人はラフィスト達が待つ会場内へ戻って行った。

会場内に戻ると、ガーネットとマキノの二人がそこにいた。他の三人は控え室にいるのだ

ろう。試合はどうなったか聞くと、三人は順調に勝ち進みブロック優勝を決めたようだ。

ブロック優勝者による準決勝と、決勝は明日行われるらしい。

「結局サードなんて、一回も剣使わなかったよー」

「ふーん……やっぱりサードって、強かったのね。明日の相手、ご愁傷様っていったところかしら？」

「あ、ラファイ達ですわ！」

通路から、ブロック戦を全て終えたラファイト達と一緒に戻ってくる。流石に連戦で、少し疲れているようだ。

「三人とも、お疲れ様」

「あ、ティーシエル。ナディアも。戻ってたのか」

「あー、マジ疲れた。今日はもう帰って、ゆっくり寝ようぜー！明日は……ラファイト、お前との勝負だもんな！」

「ニックス……そうだな。お互い頑張ろう！」

「おう！」

「それにしても、困りましたわ。準決勝も決勝も、仲間同士で戦う事になりますし、どちら

らを応援すればよいのかしら……」

皆を応援したいのか、ガーネットは真剣に悩んでいる。逆にマキノはその時その時で応援

すればいいじゃん、と気楽な様子だ。

「そういえば、あなた達どこに泊まってるの？」

「俺達は王様に、グランドベイサイドホテルに部屋を用意して頂いたんだけど……ナディアは？ 違うホテル？」

「ええ、ニューフォートレスホテルなのよ」

それを聞いたマキノは、残念そうな顔だ。せっかく女の子三人とプギューで楽しく寝れる

と思ったのに、とブツブツ言っていると、マキノの呟きを聞いたナディアが不思議な顔を

する。

「プギュー？」

「ん、ドリームドラゴンの子供なの」

「ド、ドリームドラゴン！？き、危険よ！小さくてもドラゴンなのよ！」

慌てふためくナディアに、マキノが人懐っこいから大丈夫だと笑う。そしてガーネットに

同意を求めると、同意の意を示したガーネットと一緒に、プギューの可愛さについて延々

と喋りだした。二人の話を聞いている間も、ナディアはまだ信じられないといった顔つき

をしている。ラフィストが止まりそうに無い二人を制止し、次の日の予定について話を切

り出す。試合にでるラフィスト達三人は別として、九時半にこの場所で落ち合う事にガー

ネット達観戦組は決めたらしい。

「じゃあ、明日はホテルから直接ここにくるわね」

ナディアが時間に遅れないようにしなうと言っている横で、マキノがどこからともなく

紙とペンを取り出して、雪ダルマを描き始めた。描き終わると、それを観客席にペタッと

貼り付ける。

「何だそりゃ？」

「これ？席確保用の目印よ！」

何で雪ダルマと問うと、一身上の都合と返ってくる。雪ダルマなのは、そんなに意味は

無かったのだろう。しかし、もう殆ど人のいない観客席にポツンと雪ダルマが座っている

のは、目立つのか目立たないのかイマイチよく分からない。

「そんな事はどうでもいい。早く帰って寝るぞ」

付き合ってられないとばかりに、サードが一人とつと先を歩いていく。ラフィストも疲れていたのは同じだったので、皆を促すと会場を後にした。

「四人とも、いいですわね……」

「ああ……」

グランドベイサイドホテルの一階で、真剣な顔のラフィストとニックス、馬鹿馬鹿しいといった風なサードとティーシェルが、ガーンネットを中心に円になっている。

「さ、一斉にお引きになって」

そう、本日の部屋割りを決めているのである。ニックスが文句を言う為、公平を期す為に部屋割りなくじ引きで行うようになったのだ。

「あー、でも俺クジ運悪いんだよなー」

「……うるさい、馬鹿」

「バ……バカー!?!」

「ニックス落ち着けて! ほ、ほら……皆疲れてるし、さっさと引こう! な?」

一斉の、の掛け声とともに四人がクジを引く。クジを確かめている間、辺りにしばしの沈黙が流れた。

「301号室は……」

ニックスが恐る恐る尋ねると、ティーシェルが、あ、僕だと言って手を上げる。それを見たニックスは思いつき叫んだ。

「いよっしゃああ! サードじゃねえ!」

傍から聞くと、非常に失礼極まりない事を言っているのだが、ニッ

クス本人はその事に気

付いていないでただ喜んでいる。これにはサードも腹が立ったのか、うっすらと青筋を浮

かべていた。見かねたラフィストがニックスを諫める。

「ニックス、サードに失礼だろ」

「これだから馬鹿は……おい、ラフィスト行くぞ」

「バ……バババ……バカー!？」

大声を上げるニックスを無視し、サードはさっさと階段を上っていく。サードに言われた

ラフィストもその後が続いた。ティーシエルも、騒ぐニックスを五月蠅いな、フロントの

人に迷惑だろと一喝し、ニックスを置いて部屋に向かう。マキノとガーネットも不貞腐れ

るニックスを引っ張りながら、彼らに続いた。

302号室。ラフィストとサードの部屋だ。部屋では二人とも、剣の手入れをしている。

「ラフィスト」

「ん、何？」

視線は剣に落としたまま、急にサードが喋りだす。

「今日の試合、よかった」

「……あ、ありがとう」

いつも厳しい評価のサードの、意外な一言にラフィストは驚く。

「十中八九、明日はお前と当たるだろうな……」

サードの中では、自身の準決勝も、ラフィストとニックスの試合も無いに等しいらしい。

だがラフィストは、顔を引き締め、答える。

「でも、ニックスも結構やり手だ……油断は出来ないよ」

ラフィストの答えにフツとサードが笑う。剣の手入れを終え、ラフィストは剣を鞘に収めた。それをベッドの横に立てかけると、喉が渴いている事に気付き、お茶を入れ始める。

その時、会場で聞きそびれた事を思い出し、そういえばと呟く。ラフィストの呟きはサードに聞こえていたらしく、サードが返事を返す。入れたお茶をサートはソファに座った。

「――…：昼間、Bブロックの試合の時、凄い音がしたよな？…：あれ、一体なんだったんだ？」

サードが、ああ、あれかというラフィストに事の顛末を話した。控え室に在る間にそんな

な惨事が起こっていたとは思わず、そんな事が、と驚いている。

「マジックシールドの上からなんて、ティーシェルってやっぱ凄かったんだなあ」

そういえばカダントの司祭なんだよな、と改めて思う。ラフィストが感心していると、サ

ードがただの呪文じゃないがなと付け加える。

「ただの呪文じゃないって？」

「恐らく合成魔法のような物だ。…：それも、その呪文の特性を生かした、な」

「へえー、そんなものもあったんだな」

魔法については殆ど知識が無い為、ラフィストは感心しきりだ。しかしサードは、いや、

無いとラフィストの言葉を否定する。

「俺も魔法剣士として、呪文については知識を色々会得してきたが、あんなのは始めて見た…：。あれはマジックバリアを破る為に、思いつきでやった呪文

だろう」

「わ、悪い……いまいち意味が分からないんだけど」

話が深いところに入っているいき、付いていけなくなったラフィストが目をパチパチさせる。

「つまりだな、ティーシエルが使ったのはウォールグラビティプレスという、水と重力圧の合成なんだ」

普通、水は均等に圧力がかかる。そしてマジックシールドは、圧力がかかった所に力を集

中させ、防御する。そこで、グラビティプレスによって人工的に重力圧をかけ、マジック

シールドの手薄になった所に穴を開け、ウォーターを通したと、サードは呪文の構造をわ

ざわざ図に描いて説明してくれたが、ラフィストは殆ど理解が出来なかった。とりあえず、

理解できたのは理論的に難しい事だけだ。サードはもういいだろうという、ベッドに潜

り込み、寝る体勢に入る。電気を消し、ラフィストもベッドに入ると、あっという間に眠

りに落ちた。その頃、隣のマキノとガーネットの部屋ではとある出来事が起こっていた。

「ありり？プギューがいない……」

さっきまで一緒にじゃれていた筈のプギューが、いないのだ。二人が風呂に入っている間

に、どこかに隠れてしまったのだろうかと思い、二人は先程から懸命にプギューの姿を探していた。

「んんー……いない。って、窓開いてる！」

マキノが窓に駆け寄って叫ぶ。

「どうしますの？」

「きつとお腹空いたら帰ってくるよ。ほっとこー」

「い、いいんですの……？」

「だいじょーぶ！プギューはそんな奴よ！」

若干樂觀的なマキノに、幾ばくの不安が無い訳ではなかったが、マキノがそういうなら、

とガーネットはそれ以上口出しするのはやめる。そして、女の子同士の会話に花を咲かせ始めた。

「我に終焉の炎をもたらさん……ダークネスブレイズ！」

杖の先から赤黒い炎が大きく渦を巻き始める。しかし、渦はみるみるうちに萎んで無くな

っていった。ここはフォートレス城の地下。この城の地下には剣の修行場や、魔法の修

行場がある。武術大会の間、王が特別に一般開放してくれた為、この修行場は使用者で賑

わっていた。だが今は、今日が使用日の最終日であり、時間も遅い為ここにはナディアし

か残っていない。

「新しい魔法作るってのも、楽じゃないわ……。けどティーシエルも頑張ってるみたいだ

し、私も負けてらんないわ！さって、次の試そっと」

魔道書と睨めっこしていたナディアが、杖を持って再び立ち上がる。「汝が見るは光の幻。デイドリーム！」

辺りに紅色の靄がかかり始める。ナディアは成功かどうかしばらく見ていたが、いつまで

経ってもその靄が消える気配は無い。おそらくこれも失敗だろう。度重なる失敗で集中力

が切れたのか、ナディアはああもう、と大きな声を上げてその場に寝転んだ。

「疲れた！——……でも、久し振りにティーシエルと一緒に頑張れる……って！」

がぼっと上半身を起こし、両手で顔をつまむ。

「何ニヤけてんのよ、私ったら！……嬉しい、んだよね……。で、でもあの子はまだガキ

だし！あーもう、私何ムキになって否定してんのよ！——……変。私……」

両手の力を緩め、じっと床を見つめる。床にティーシエルの顔が映っている感じがしてき

て、床を見ているのも段々恥ずかしくなっていく。その時、まだ消えない靄の向こうから

何かの影がナディアに向かって突進してきた。聞かれた、と思い一瞬身構える。しかし、

ナディアの前に現れたのは人ではなかった。

「プギュー！」

「きやああああ！ド、ドドド、ドラドラ……ドラゴン！」

物凄い悲鳴が修行場に響き渡る。その悲鳴で、プギューがビククリしてしまったようだ。

一方のナディアも、パニック状態に陥っていた。苦手なドラゴンが突如目の前に現れた事

に、気が動転してしまったのだ。パニックになりながらも、ナディアはこのドラゴンが、

マキノの言っていたドリームドラゴンである事に気付く。

「プ……プギュー……ちゃん？」

ナディアは何とかプギューに和解を求めようと、懸命に話しかける。しかし、プギューは

先程の悲鳴でもの凄く興奮してしまっていた。

「ど、どうしよう……」

プギューの様子に、ナディアはまたもやパニックに陥る。一生懸命、マキノは大人しいって言ってたから大丈夫だと自分に言い聞かせるが、杖を持つ手が汗ばんでくる。その時、その事実が間違っている事に、はたと気付く。マキノは人懐こいと言っただけで、大人しいなどとは一言も言っていなかったのだ。ナディアが逃げ腰になった次の瞬間、プギューは大きく口をあけ、スリープガスを吐き出した。

「い……いやあああ！」

正面からまともに浴び、ナディアがその場に倒れこむ。

「プギューン」

スリープガスを吐き出した事で落ち着いたプギューは、修行場から姿を消した。その数分

後、修行場管理のおじさんが、鍵の束を持って近付いてきた。使用時間の終わった修行場

の戸締りをする為だ。おじさんはサツと中を簡単に確認し、中に人がいないか呼びかける。

プギューのガスによって眠っているナディアに気付く様子は全く無い。そのまま鍵をかけ、

廊下を歩いてその場を立ち去っていつてしまった。

「え？一カ月後まで開かないんですか？」

「はい。あそこはよく、ホームレスが寝泊りするんです。だから、使用する予定が無い時

は、鍵をかけておくんですよ。次の使用予定日は一カ月後ですので、それまでは一切開きません」

少し魔法の練習をしようと修行場にやってきた方がいいが、ティーシエルは地下への入口の前で兵士の一人に止められてしまう。その兵士によると、もう修行場の扉は閉まってしまったらしい。後ろ髪を引かれつつも、ティーシエルは諦めて再びホテルへと戻っていった。

一十三章 一〇 閉幕

翌朝、支度を済ませてニックスの部屋を叩くと、ニックスが眠そうな顔をしたまま出てき

た。支度が済んでいる所を見ると、相部屋のティーシエルにでも起こしてもらったのかも

しれない。中を覗くと、案の定ティーシエルがニックスとは正反対にスッキリした顔で、

本を読んでいた。朝の挨拶をすると、食事だけでも一緒に行こうとティーシエルが言った

ので、男四人一緒に下に下りた。下りる前に女性陣の部屋をノックしたが、まだ寝ている

らしく反応は無かった。もしかしたら遅くまで話していたのかもしれない。食事を終え

と、ラフィスト達は観戦組のティーシエルと別れてホテルを出た。

会場までの道を黙々と

三人で歩いていると、ニックスがポツリと呟いた。

「なあ、ラフィスト」

「ん？」

ニックスにしては珍しく、声に覇気が無い。

「俺、何かお前と戦うの……嫌っつか、気が引けるっつか……」

「何で？」

「……何となく」

武術大会とはいえ、仲間同士の戦いだ。やり難さを感じているのかもしれない。ラフィス

トはニックスとはお互いベストを尽くして戦いたいと思っていたので、彼に向かって檄を

飛ばす。

「何言ってんだよ、お前らしくないぞ！お互い、頑張ろうぜ！——
……マキノに、いい
ところ見せたいんだろ？」

「そうだ。馬鹿はまず自分の心配をしろ」

「バ、バカって言うんじゃないよ！」

いつも通りの会話に、ニックスも元気が戻ってきたらしい。ニックスの様子にラフィスト
は安心しながら、会場へ入っていった。

「あ！あった、あった！ここだよ、雪ダルマ」

「ホントですわー」

昨日ナディアと約束した時間になり、観戦組の三人が昨日居た場所
へとやってきた。しか

し、ナディアはそこにはきていなかった。どうしたのかと三人は辺
りを見回すが、ナディ

アらしき人物は見当たらない。ティーシエルが心配して探しに行こ
うとするが、それを入

れ違いになったらまずいとマキノが引き止める。そうこうしている
間に、準決勝の始まり

を告げるアナウンスが入ってしまった。

「今日はいよいよ準決勝と、決勝を行います！まずは、Aブロック
優勝者サードⅡソーリュ

ア選手対Bブロック優勝者バギトⅡヘクター選手！」

大きな歓声とともに、両者が入場してくる。始めの合図に鐘が鳴り
響くと、相手選手が斧

を振りかざして迫ってくる。しかし、サードは難なく相手の腹に回
し蹴りを入れ、場外へ
と吹っ飛ばした。

「何と、何と！サード選手、ここまで腰に差している剣を一度も抜いておりません！圧倒的に強い！強すぎる！」

サードの圧倒的強さに、アナウンスも興奮気味になっている。サードが控え室に戻ったのと入れ替わりに、ラフィストとニックスが場内に入ってくる。

「続いてはCブロック優勝者ラフィストⅡブレスント選手対、Dブロック優勝者ニックスⅡエントルード選手！彼らはどんな戦いを見せてくれるんでしょうか！」

ラフィストは剣を、ニックスはナックルをそれぞれ構える。それに伴い、会場にも緊張した空気が流れる。試合開始の合図で、先ずはニックスがラフィストの懐に飛び込んできた。

ラフィストはすかさず間合いをあげ、剣を振るう。ニックスはそれをかわし、がら空きになっているラフィストの胴に蹴りを入れる。ラフィストはその攻撃をもろに受けて倒れこむ。しかしすぐさま起き上がると、技が決まった事で隙が生じたニックスへと殺到する。

完璧に反応し切れなかったニックスは、ラフィストの一振りによってダメージを受ける。

「ニックス……！やるな！」

「ラフィストこそ、強くなったな！」

お互いダメージを負った事で、二人の間合いが自然と開く。何とか決定打のチャンスを作ろうと、ニックスは気孔破で遠距離攻撃をする。ラフィストはそれを剣で裂き、反撃とい

わんばかりにニックスに向けて剣圧を放つ。ニックスはそれをかわし、膠着状態を打破し

ようと、ラフィストに殺到してくる。ニックスのあまりのスピードに、ラフィストは咄嗟に反応し、剣を振り上げる。思いつき振った形になった剣が、ニックスに直撃し、彼の肩を切り裂いた。

「ニックス！」

剣にかなりの手応えを感じた事で、ラフィストが急いでニックスに駆け寄る。ダメージを受け、そのまま倒れこんだニックスは、視界にラフィストの姿を確認すると、気にするなとばかりに笑った。

「思いつきりやったんだから、気にするなよ……ラフィスト。それに、お前にはまだ戦うべき相手が……いる、だろ？」

ニックスの言葉にハツとする。ニックスに、思いつきり戦おうといったのは自分だ。それにニックスに勝った今、次はサードと戦わなければならない。迷ったままの心では、サードに勝つどころか、傷一つ負わせる事が出来ないだろう。負けてもエールを送ってくれたニックスに、ラフィストは心の中で感謝した。ニックスが担架によって運ばれていくと、マキノが弾かれたように飛び出していく。

「マキノ、どこに行くんですの！」

「医務室！」

そう言うと、わき目も振らずマキノは走っていく。そこには二人だけが取り残され、二人の間には沈黙が流れる。

「……………ナディア、本当にどうしたんだろう。……まさか、旅に出たって事はなさそ

うだし」

「そうですわね」

「後で、ホテルを訪ねてみるよ。このままこなかったら、ね」
そう言うと、二人の間に再び沈黙が流れた。

医務室にニックスが運ばれ、丁度そこにマキノが駆けつける。マキノはニックスの名前を
呼ぶが、返事が無い。

「ニックス！……冗談でしょ？ねえ、返事してよー！」
医務室にマキノの声が木霊し、無常に響く。マキノの瞳からポタポタ涙が溢れだし、それが
ニックスの頬に落ちる。

「だあー！さっきから人の隣でうっせーな！」
突然ニックスがムクリと飛び起き、叫ぶ。マキノは目を点にした後、
下を向きわなわなと
震えだす。

「ニックス……」

「ん？何だよマキノ……？」

「人がどれだけ心配したと思ってんのよー！」
顔を上げたマキノが、ニックスをキッと睨み、三節坤を振り下ろす。
マキノの三節坤が何
度もニックスに直撃し、ニックスが堪らず悲鳴を上げる。そのダメ
ーじにより、ニックス
が再び倒れこむ。

「お、前なあ……俺死にかけなの、わかってんのか？」

「そうですよ！——……ああ、これは傷が開いちゃってますね」
ニックスの怪我を見ていた医務官まで、落ちつくようとマキノに
諭す。しかしマキノは

落ち着く所か、傷が開いたと聞くや否や医務室を飛び出し、回復魔法を使える二人を呼んでくると言って走っていった。マキノのそんな姿を見て、ニックスは嬉しいのかニヤニヤしている。

「ったく、マキノの奴〜！……本当は俺の事かなり好きなんじゃねえか〜！」

「はいはい、傷に障りますからね。静かにして下さい」
こんなに騒がしい患者と見舞い客は初めてだ、と医務官にほとほと呆れられていた事は、言うまでも無い。

「はい、これで大丈夫ですわ」
完全に傷が塞がったニックスの肩をポンポンと叩き、ガーネットが包帯の後始末を始める。

「それにしても酷い傷だったね……何か変な痣まであったし。手当が遅かったら危なかったんじゃないの？」

「いや、重症になったのはマキノの奴が……」
「何か言った？」

その瞬間、マキノの目がキラリと光る。

「もうこれで大丈夫ですから、観客席に戻りましょう」

「そういえば、もうそろそろラフィストの試合だったな」

服を着てゆっくりベッドから立ち上がるのを、マキノが支える。しかし重かったのか、マ

キノがニックスに対して重いと文句を言っているようだ。医務室のドアを開け、外に出た所でニックスが突然痛みを訴える。

「どうしたのよ！傷は塞がったでしょ！？」

「か、関節が……」

「はー！？何で今頃！」

衝撃で関節をやったのかもしれないとティーシエルが回復魔法をかけようとするが、ニックスはそれを慌てて拒否する。そして、ガーネットとティーシエルに先に観客席に戻って

てくれと訴えた。少し戸惑いながらも、二人はその場を後にする。マキノもニックスに頑

張れと言うと、二人の後を追おうとした。

「おい、待ってって！お前は肩貸せ……立てない」

「な、何でよー！私だって二人の試合見たいのにつ！……んもう、わかったわよ！さっき

私の三節坤が当たったからって、言いたいんでしょ！」

ニックスに駆け寄り、早く立つよう促す。試合が気になるのか、焦れたように早くと催促

する。しかしニックスは構わずマキノに質問する。

「なあ、お前さ……好きな奴とか、いるの？」

「特に？」

即答だった。しかもきっぱりと言われてしまい、ニックスは項垂れていく。マキノはニッ

クスを起こそうと、一生懸命支える力を強くする。すると、アナウンスが通路にまで響き

渡ってきた。

「ただ今より決勝戦、サードソーリユア選手対、ラフィストゥブレツセント選手の試合

を始めたいと思います……——」

「バカバカ、バカニックス！始まっちゃったジャン！あんたが変な事聞くから、いけないのよ！？」

「俺のせいだよ……」
目じりに涙を浮かべ、ニックスが呟く。そして自分の世界に逃避行する。そんなニックスに、マキノがその後に小さく呟いた、ホンッと、バカなんだからという声は、届く事は無かった。

観客席に戻ったガーネットは一心不乱にラフィー、頑張つてと祈っていた。決してサードに負けて欲しい訳ではないが、ガーネットはラフィストの事を応援したかったのだ。ギュッと目を瞑って場内を見ようとしてもしないガーネットに、ティーシエルが苦笑する。

「あのさ、そんなにしっかり目え瞑ってたら、試合見えないんじゃない？」

「う……し、心眼ですわよ……」
言い訳もどこか苦しい。

「強がっちゃって。本当はラフィストに、勝ってもらいたいんでしょ？ まあ、でもほぼ99%、サードの勝ちが決まっちゃってるようなもんだしね。無理ないよ」

「そっ……そんな事は……——」
ガーネットの言葉と同時に、試合開始の鐘が鳴り響く。刹那、両者の剣が激しくぶつかり合った。剣が交わった音が響いた後、二人はお互いに間合いをあげ、相手の出方を伺っている。

「あれー、どうしたんだろう二人とも。離れたまんまじゃない」

後ろからニックスを連れたマキノがヒョイッと顔を出した。

「まさか……あいつ、この期に及んでびびってんじゃ……」

「そんな！ラファイはそんな人ではありませんわ！」

ガーネットがニックスの言葉に噛み付く。ニックスも負けじと、じやあ、何で間合いを詰めないんだと騒いでいる。

「実力の差があるからさ」

それに答えたのはガーネットではなく、静かに試合を観察していたティーシエルだ。

「サードの直接攻撃の破壊力は、ラファストよりも確実に大きい。だから間合いをとって

ラファストは一撃にかけてるんだ。でも……——」

「でも？」

「ラファストは気付いていない。サードが何故間合いをとったのか……一撃に自信のある

者は、普通間合いを詰めるんだ」

「って事は……——まさか！？」

その瞬間、サードがラファストよりも先に動いた。それを見て、ラファストも隙を付こうと動きだす——……が、一瞬風が巻き起こったかと思うと、動いたラファストの体が宙に舞った。

「ラファイー！」

「……そう、サードは剣士じゃなくて、上級クラスの魔法剣士だ。直・間両方の攻撃が得意なんだよ」

「ティーシエル、解説してる場合かよ！落ち着きすぎだぜ！」

ニックスが横にいるティーシエルの方を向いて、叫ぶ。しかしラファストの事が気になる

のか、すぐさまラファストに視線を戻した。

「――ラフィスト、負けんな！立てよ！」

ニックスの大きい声が会場中に響き渡るが、ラフィストに反応は無い。

「いくらこいつでも、俺のウイングエッジの直撃を受けたんだ……立つのは無理だろう。」

少し、残念だがな」

決着はついたと言わんばかりに、サードが場外へ歩き始める。司会者のダウンのカウントをしている中、ガーネットが叫んだ。

「ラフィー、立って！」

ガーネットが落ちそうなくらい、身を乗り出しながら叫び続けている。その声を、ラフィストは薄れる意識の中で、聞いていた。ガーネットが懸命に応援してくれているのに、こ

のまま一矢も報いないまま、負けてしまっていたのか。そう思った瞬間、ラフィストの心

に稲妻が走り、目がカッと見開いた。

「もうちょつと、お前と剣を交えたかったが……――」

サードの言葉がこう言って目を伏せた瞬間、会場にどよめきが走る。異変に気付き、サ

ードが振り返ると、そこにはラフィストが立ち上がっていた。

「おおーっと！ラフィスト選手！立ち上がったー！」

「サード、勝負だ！」

全身全霊の力を込めて剣を握り、形振り構わずサードに殺到する。

気迫溢れるラフィスト

の姿に、思わずサードの顔に笑みが漏れる。

「面白い！こうでなければ、手ごたえが無くてつまらん！」

「くらえ！………鳳凰乱舞！」

「グラビティブレード！」

両者の技が同時に炸裂する。二人の剣技の凄まじさに、周囲に砂埃

が巻き起こり、観客の視界を奪う。視界がはれた時、二人は剣を交えて立っていたが、先にラフィストが崩れ落ちた。

「やっぱり、サードは強いな……」

こう呟いた後、痛みあまりラフィストは気を失う。倒れたラフィストの顔に、血がポタポタと滴り落ちる。それはラフィストが最後の攻撃で、サードの肩につけた傷から落ちる血であった。

「お前はやはり期待通り……いや、それ以上だ」

サードは懷から魔石を取り出し、ラフィストの傷の手当てをする。暫く自身に付いた傷を

眺めた後、魔石で自分の肩の傷も癒した。アナウンスでサードの優勝がコールされ、会場から惜しめない拍手が巻き起こった。

「でも二人とも凄かったよねー！」

会場からホテルへの帰り道を歩きながら、マキノがウツトリとして両者を見やった。

「そんな……俺はまだだよ。全然サードに歯が立たなかった」

「その謙虚さがお前のいい所だ、ラフィスト。だが、俺に傷を負わせたのは、お前が二人目だ。もっと自信を持て」

「二人目？おい、サード！一人目って誰だ？」

ニックスが興味津々な顔でサードに迫るが、サードはそれを無視する。その態度にニックスが怒り喧嘩ムードになりかけ、ラフィストは慌てて話題を逸らし

た。

「あー……っと、ティーシエルがいないね」

「ナディアの様子見に行くって、ホテルに行つたみたい」

「そ、そう」

「……ラフィー」

それまでずっと黙りこくっていたガーネットが口を開いた。

「なんだい、ガーネット？」

「その、今日……とても素敵でしたわ」

「あ……ありがとう」

お互いの顔が真っ赤なのを意識してか、二人の視線は交わる事無くどこかに逸れている。

照れくささと嬉しさを抱きながら歩く帰り道は、とても長い距離に思えてならなかった。

「ファイアー！」

炎が巻き起こり、目標物に殺到するが効果は無い。

「んもう！何で閉まってるのよー！」

そう、プギューのガスによって眠ってしまったナディアは、修行場に閉じ込められてしま

ったのだ。先程から何回も壁やドアを壊そうと試みているのだが、うんともすんとも言わない。

「あー！もう、どうしよう！あっ……お腹すいた」

ぐうっとお腹の音が鳴り響き、ナディアはその場にへたり込む。

ナディアが泊まっているホテルに行ったティーシエルは、ナディア

が修行場へ行ったつき

り帰ってない事を知ると、修行場へと向かった。管理人に頼んでドアを開けて確認しても

らおうと思ったのだが、生憎管理人が見つからない。仕方なく、一人で修行場まで行き、

中に誰かいるか確かめる事にする。すると、壁の向こうからものすごい音が響いてきた。

ナディアが呪文を使っている音だ。

「これは……もしかして、ナディア……そこにいるの？」

「その声は……ティーシエル！お願い、管理人呼んできて！」

ティーシエルの声を聞き、ナディアがほっと胸を撫で下ろす。しかし、ティーシエルが管

理人の不在を告げると、ナディアの中に怒りと絶望が同時に走る。

「はぁー、やっと出れると思ったのに——……」

再びペタンと床に尻を付き、崩れ落ちる。もう魔法を使う元気すら残ってない。

「その様子だと、魔法効かないのか……でもこれなら効くかも。――

……ナディア！ち

よっと離れてて！」

「何！何するの！？」

「ちよっと試してみたい呪文があるのさ！——……太古から伝わりしかの封印……それ

を解かんと欲するは、我。我は封印を解く鍵を作り出し、それは封印を解くだろう……ア

ンロック！」

詠唱が終わり、杖から呪文が放たれるとドアが光りだす。そして、それはゆっくりと開き

だした。

「ふう……何とか成功、かな？まあ、鉱石の扉開けるのと同じ魔法使ったし、成功すると

は思ってたけど」

「ありがとー！ティーシエル！」

ナディアが嬉しさのあまり、ティーシエルに飛びついて抱きしめる。ナディアを支えきれ

なかったティーシエルが、床に倒れこんで地面に思いっきり叩きつけられた。

「ナディア……」

「ん、何？」

もしかして、急に抱きついたりしたから照れているのかしら、とナディアは思い、我ながら

ら何て大胆な事をと今更ながらに照れ始め、乙女心全開にする。しかし、そんなナディア

の想いはティーシエルの一言によって、一瞬にして砕かれた。

「――……重い」

先程までナディアを占めていた想いとは正反対の物が、心の中にこみ上げてくる。ナディア

アの怒りをかっているとは露知らず、ティーシエルは上にいるナディアを退かして、とんと

とんと話を進めていく。

「ああ……それよりナディア、お腹空いてるんじゃない？僕達のホテルで、一緒に食べて行ったら？」

「そうね……そうさせて頂くわ！」

半ば切れ気味に返事をするナディアに、ティーシエルが不思議そうな顔をする。とりあえ

ず外に出ようと、再び修行場のドアを閉め、元来た道を二人で帰っていた。

「あーん、おいしー！」

グランドベイサイドホテルのレストランで、ナディアは他の皆と会話もせずに黙々と一心

不乱に料理を口に運び続ける。丸一日食べていなかったという事もあり、よっぽどお腹が

空いていたのだろう。一心地ついてナディアがお茶を飲んでいる時、漸く他の皆がナディア

に話しかけた。それまではやはり少々遠慮してたのだろう。

「ナディア、とんだ災難でしたわね」

「ホント！死ぬかと思った。飢え死になんて今の時代、恥ずかしいもの」

「でも、そんな事になったのも、元はといえばマキノの連れてるプギューのせいだろ！？」

「んなもん即行野生に返せよ！」

邪魔者を減らす好機とばかりに、ニックスが噛み付く。マキノは流石に悪いと思っていた

のか、困った顔をしていた。確かに元はといえば、あの時ちゃんとプギューを見ていなかった自分に原因があったからだ。

「ごめんねえー……」

「もういいのよ。こうして助かった事だしね」
「ぐっ……」

「……ニックス。いくらプギューが可愛いからって、小動物に僻むのは人としてどうかと思うよ……」

被害にあった本人が折れた事で、ニックスはこれ以上何も言う事が出来なかった。しかも

そこにティーシェルによって止めを刺され、これ以上ないほど落ち込んでいる。

「それにしても、今日は色々な事がありましたわね」

「私も武術大会見たかったな。とりあえずサード、おめでとう。ラフィーも惜しかったんでしょ？ 凄いじゃない」

ナディアの賛辞も、サードには関係ないらしく黙々と料理を口に運んでいる。ラフィスト

はナディアの賛辞は嬉しかったが、それを素直に受け取る事は出来なかった。

「俺は、全然サードには敵わなかったんだ。惜しくなんてないよ」

「いや……ラフィストもよくやった。正直言って、あそこまでやるとは思ってなかった。

まあ、課題はいっぱいあるが、今は賛辞をありがたく受け取ったらどうだ」

サードの言葉に、嬉しそうにラフィストが笑う。そしてナディアに改めて、ありがとうと

答えた。そんな和んだ空気に、ニックスが不満一杯に口を開く。

「あのよー……俺は？ 何の励ましもないのかよ……」

一瞬沈黙が走り、和んだはずの空気が強張る。

「アハハ……あんた一番弱いよね。ま、これ以上弱くなるなんてない、これからは上がっ

ていだけでよ。頑張りなさい」

マキノが無気力にニックスを励ます。台詞も棒読みだし、言ってる事は結構失礼なのだが、

ニックスは満足げなのでよしとしよう。

「御馳走様。私、もう寝ますわ。疲れちゃって……」

「あ、俺も……」

ガーネットが席を立つと、ラフィストも続いて席を立った。

「あー、行っちゃったね」

「追いかけていいのかしら、サード」

ティーシェルがデザートを食べながら、上目遣いで二人の消えた方向を見やる。ナディア

がニヤけながらサードを小突き、からかっている。

「別に……関係ない」

「えー、嘘よ！だって顔に書いてあるもの！」

「う……五月蠅い！——……大体、お前らには関係ないだろう」

「僕は行っちゃったとしか言っていないよ、サード？」

「——……そんな事を言ってるんじゃない」

ティーシエルの確信犯的な言い回しに、サードの口から大きな溜息が漏れる。

「ま、どうでもいいけどさ、サード！そんな事じゃ、ラフィーにガーネットとられちゃう

よ！うーん、私はサードの方がいいとは思うけど！」

茶化すマキノの言葉にニックスがガンツとショックを受け、再び沈み始める。沈むニックス

スなどお構い無しに、一行はサード弄りを続行する。

「フッ……俺、お前が好きなんだぜ。……くらい言っちゃえば、よろめくかもしれないわ

よ！——という訳で、行ってきたさいサード！」

「よ、余計なお世話だ！」

ぐいぐいとナディアに背中を押され、サードがレストランから追い出される。背中を押して

ていたナディアは、サードが部屋に向かったのを確認すると、皆のいるテーブルへと戻ってきた。

「素直じゃないわねー、サードも」

「ま、それがサードらしくていいんだけどね」

ねー、とナディアとマキノが頷き合う。

「フフ……あれだけ煽つといて、君達も中々に無責任な感じだよね」
そういうティーシエルの口振りも、どちらかと言えば楽しそうな方だ。未だ沈んでるニックス

クスは放置され、残った三人でこの後の結果について賭けあっている

た。

一十四章 一〇惑う月

「私……ラフィーや皆の事、どう思っているのかしら」

へやに戻ったガーネットは、一人部屋で悶々と考え込んでいた。最近妙にラフィストの事

を意識してしまうのが、気になっているのだ。考えても考えてもこの想いに名前をつける

事が出来ないでいたガーネットは、一つ息を吐き、ベッドに倒れこむ。頬に触れている布

団の感触が心地良い。次第に意識がぼんやりし始めてくる。

「こんな事思うなんて、私……変かしら」

ポツリと呟き、瞳を閉じる。このまま眠ってしまうのも悪くない、そう思った時ドアをノ

ックする音が聞こえる。ぼんやりしていた意識が覚醒していく。

「誰かしら？」

疑問に思いながらも体を起こし、ドアの方へ向かう。もしかしたら同室のマキノかもしれ

ない。帰ってきたのだろうかと思い、ドアを開ける。しかし、そこに立っていたのはマキ

ノではなく、サードだった。

「ラフィストは……いないのか」

「え、ええ……」

ラフィストの名前で、ガーネットはさっきまで考えていた事を、サードは下でからかわれ

ていた内容をそれぞれ思い出し、二人の間に気まずい空気が流れる。暫く二人は黙り込ん

でいたが、ガーネットはサードにさっきの疑問をぶつけてみるのも、いいかもしれないと

思った。意を決してガーネットが沈黙を破る。

「あ……あの、サード……」

「何だ？」

「サードは、私の事どう思ってますの？」

「ど……どうしたんだ、いきなり！」

開口一番に核心を付かれ、サードが顔を真っ赤にする。ガーネットは聞き方が拙かったかしらと思ったが、今考えていた事を正直に話す事にする。

「私、わからないんですの……皆の事、どう思っているのか。だからどう思われているのか知りたくって……」

再び沈黙が流れ、先程よりも空気が気まづくなる。

「……ご、ごめんなさいサード。変な事聞いて！もうそろそろ寝て、明日に備えな

きゃ、ね！……おやすみなさい」

誤魔化すように手を振り、ガーネットが開けたドアを閉めようとする。そこにサードが手

を延ばし、ドアを閉めようとしているガーネットの手をぐっと掴み、引き寄せる。そして、

ガーネットの耳元に何かを囁いた。それを聞いたガーネットは、弾かれた様に部屋を飛び

出していく。残されたサードは、その場にしゃがみ込む。

「何を言ってるんだ、俺は……」

暫くそうやっていたが、ガーネットが戻ってくる気配も、誰かがくる様子も無い。持て余

した感情のやり場もないまま、サードは自分の部屋に戻った。部屋に入ると、中でラフィ

ストが剣を磨いていた。顔を見た瞬間、言いようのない感情が心の中に巻き起こってくる。

正直、今は顔も見たくなかった。それなのに、彼はいつも通りサ―

ドに話しかけてきた。

「おかえり、サード」

サードは返事もせず、ドアを閉めてズカズカとベッドの方へ向かっていく。サードの様子

がいつもと違う事に気付いたのか、ラフィストが何かあったのかと聞いてくる。それにも

サードは、だんまりで通した。

「おい、どうしたんだよ！」

無視され続けてラフィストが焦れたのか、サードの手を掴んでくる。「触るな！」

もの凄い大声でサードが怒鳴り、掴まれた手を思いっきり振り解く。その拍子に、ラフィ

ストの体が数メートル大きく後ろに飛ぶ。サードがしまったというような顔をし、倒れた

ラフィストに手を差し伸べる。

「す……すまない……」

「何か、あったんじゃないのか？」

体を起こしたラフィストが、尚もこう聞いてきたが、サードはその問いには答えずにベッ

ドに潜り込んだ。

「はぁ、美味しかった」

「あ、あの……マキノ」

「なあに？」

一緒に部屋に帰っていたニックスが、マキノに話しかけ部屋へと引っ張っていく。急に引

っ張られ、一体何なんだとマキノは思ったが、ニックスが荷物から何かを探しているよう

だったので大人しくそれを待つ事にする。目的の物を見つけたらしいニックスは、マキノ

にそれをズイッと差し出す。

「何、これ？」

「何って……お前、誕生日」

「は？私の？私の誕生日、二ヶ月も前だけど」

それを聞いてニックスは、思わず手に持った包みを床に落とす。落ちた包みをマキノが拾い上げる。

「まあ、いいや。私に用意してくれたんでしょ、これ？貰っとく。ありがと」

封を開けると、中から出てきたのは花の付いたヘアピンだった。

「あ、可愛い！グッチョイだね！……恥ずかしくなかったの、これ買う時」

「う……うるせー！と、ととと、とりあえず渡したからな！おやすみ！」

言うだけ言うと、ニックスはベッドに入り眠ってしまった。急にベッドに潜り込んでしま

ったので、マキノも慌ててニックスに声をかける。しかし、ニックスの反応はない。ニッ

クス布団を掛け直してやると、耳元にそっと呟いた。

「アンタがもう少し強くなったら、付き合ってもいいよ！」

明かりを消し、マキノは足早に部屋を後にした。ドアの閉まる音がした時、ニックスの目がぱちちりと開かれる。

「う……うそだろ……！？」

「あれ？部屋の戸、あいてる……」

そのままマキノが部屋に入ると、中にガーネットは居なかった。机の上に鍵だけはキッチンと置いてある。窓に近寄ると、窓が開いている形跡はない。連れ去られた、という訳でもなさそうだ。窓の外を見ると、マキノの視界にガーネットの姿が映った。

「どうしたんだろう？」

部屋のドアを閉め、ガーネットの所に行ってみる事にする。ホテルの外にいたガーネットは、その場でしゃがみ込んでいた。

「ガーネット、一体どうしたの？」

「何？」

振り返ったガーネットの目は真っ赤になっている。さっきまで泣いていたのだろうかと思

い、マキノが慌てふためく。何かあったのかと聞くと、ガーネットがマキノの胸に顔を埋めて泣きながら、さっき起こった事を話した。

「そ、そうか……サード言ったんだ、好きって。……ホントに」

マキノが最後に小さく付け足した事までは、ガーネットに聞こえなかったらしい。

「……普通は嬉しいって思うべきなんでしょうけど、私……わかりませんの。サー

ドの言う好きと、私の思う好きの違いが。そう思ったら頭が混乱してしまって、涙まで出ちゃって……」

「そっか」

マキノがよしよしと、ガーネットの背を撫でる。空には月が煌々と照り、空気はひんやりと冷たい。体の温度とともに、彼女の心の温度まで奪い去ってしまう。マキノはそんな気

がして、ガーネットを撫で続けた。

皆が去った後も、ナディアはレストランのバーで一人酒を飲んでいった。なかなかいける味

だった事もあり、かなりの量を消化済である。そこに何か用でもあったのか、ティーシェ
ルがやってきた。

「あ、まだここに居たんだ」

「……ティーシェル、何の用？」

ナディアは酒に強いのか、酒が入っていても酔ってはいないらしい。「別に明日でも良かったんだけど、ナディアの姿を見かけたから……」

「って事は、何かあるの？」

こっちに座りなさいとナディアが席を勧め、ティーシェルがそこに座る。興味津々といっ

た様子で、ナディアが隣のティーシェルに詰め寄ると、ナディアから漂う酒の匂いにティーシェルが顔を顰める。

「……あのさ、僕が魔法を合成して使ったの、ナディアならもう分かってるよね？」

「ああ、大会の時のアレね」

「うん、あれはルーン言語の連結性を利用して作ったんだ。合わせたい呪文と呪文の間に、
ルーン言語を織り交ぜただけなんだよ」

「へえ、そうだったの……で？それが何と関係してるって訳？」
遠まわしに話すティーシェルにナディアが突っ込む。

「ほ、ほら！明日からまた旅再開でしょ！……だからさ、ダブル合
成魔法とか出来たらいい

いなーって思っ……」

「ふーん、ダブル合成魔法ねえ」

「よ、用はそれだけだから……」

「あ、ならちよつと付き合いなさいよ」

グラスに酒を注ぎ、ティーシエルの前に突き出すが、それをティーシエルがいらないと固

辞する。ナディアは彼に飲ませようとグラスを手に持ち、ほらほらとティーシエルの口に

グラスを近づける。それに拙い雰囲気を感じ取ったのか、ティーシエルが立ち上がり、ナ

ディアから離れた。

「あ、明日六時にここだからね！……じゃ、おやすみ！」

「ちよつと！……もう」

酒の入ったグラスと、席に残った温もりだけがその場に残される。

そろそろホテルに戻る

かと思い、よそった酒を一気に呷って飲み干し、その場を離れた。

ホテルの外に出ると、

火照った体にひんやりした空気が気持ちいい。鼻歌交じりにご機嫌な気分でナディアが歩

いていると、微かにすすり泣く声が聞こえてくる。

「……気味悪。でも、この声どつかで聞いたような……？」

声のする場所をそつと伺ってみると、そこにいたのはマキノとガーネットの二人だった。

何となく出て行くのも忍ばれて、話を盗み聞きする。

「ガーネット。今分らないのは、まだ時が来てないって事だよ！きつと自分の中で分か

る時がくると思う。それまでこの事はキャンセル！考えなくつていいよ！」

「でも、私……サードの事を思うと」

マキノとガーネットの会話で、ナディアはサードがガーネットに気

持ちを告げた事を悟る。

煽ったとはいえ、本当に言ったのかと感心するとともに、その事でガーネットが深く悩ん

でしまった事も知り、少しだけ反省する。

「大丈夫だって！……私達皆ガーネットが好きだし、サードもきつとガーネットの答えが

出るまでちゃんと待っててくれるわよ」

「本当……？」

「本当！何なら超レアなガムかけてもいい！」

「……マキノったら」

ガーネットの顔に、笑みが少しずつ戻ってくる。マキノがガーネットの様子を見て、帰ろ

うと言って手を差し出す。ガーネットも手を握り返し、二人は仲良くホテルに戻り始めた。

こっちに向かってきた二人にナディアはヤバイと思い、慌てて隠れようとするが、思いつ

きり二人とぶつかってしまった。

「きゃあ！」

「あーん、なんですの！？」

「ってナディア……」

相手を確認した二人が、ナディアの名前を呼ぶ。

「こんな遅くに、二人とも何やってたの？」

少し白々しいかと思っただ、ナディアはとにかく誤魔化そうとする。しかし、ガーネット

とマキノのナディアを見る目は、疑いの眼差しだった。

「ナディア、私達の会話……聞いてたんじゃないの？」

「それは……」

「ねえ」

マキノとガーネットの二人に攻め寄せられ、ナディアはついに観念する。

「そうよ！聞いてたわよ！……かなり最後の方だけど！——……
ガーネット、あなたも
しかして」

「ごめんなさい、ナディア。その話は、今はキャンセルですわ。私
自身が、もう少し大人
になるまで……」

「そ、そうね」

人の話を盗み聞きしたのがバレた時ほど、気拙いものはない。ナデ
ィアは何て言っている
ものか計りかね、それっきり口を噤んだ。

「気にしないで下さいな、ナディア。それより……サードに、明日
からどうやって接した
らいいのか、分からないの。急に飛び出してしまふなんて、私……」

「ガーネット、考えてたって明日はくるんだから！」

「それはそうですけど……」

「でも逃げたい気持ちもよくわかるわ。とりあえず明日は、正面か
らぶつかりなさい！変
に相手を意識する方が良くないって事もあるんだから。……あ、そ
うだ。何なら今日、私

の部屋に来る？恋愛経験豊富なお姉さんが、悩み相談にのるわよ」
ナディアの誘いに、ガーネットが考え込む。そんな彼女の背をマキ
ノが押す。

「ガーネット行ってきたら？っていうか、私も行きたい！」

「じゃあ、三人で寝てもいいかしら？」

「ベッドは二人分よ？」

「ベッドをくつつければ大丈夫よ！ね？」

決まり、とばかりにマキノが手を叩く。ナディアもガーネットの手
を繋ぎ、三人仲良く手

を結ぶ形となる。ガーネットは彼女達の優しさを感じ、笑顔になる。
結んだ手を振りなが

ら、ナディアのホテルまで三人は歩いていった。

「でねー、ニックスったら、全っ……然分かってないのよね！」

ニューフォートレスホテルの部屋の中。女の子三人の話が、いつの間にかガーネットの事

から男衆への愚痴へと変わっていた。マキノの分かってない、という言葉にナディアが大きく頷き同意する。

「そうよね！男ってみーんなそう！……ティーシエルさ、私の事捜しにきたでしょ？それが嬉しくって私が飛びついた時、何てったと思う！？」

ガーネットはさあと言い、マキノは照れて何も言わなかったと答える。ナディアは怒り収まらないといった感じで、違うわよと叫ぶ。

「私も、最初はそう思ってたけどね……一言こうよ！——……重い」しばしの沈黙が部屋に流れる。聞いていた二人は流石ティーシエルだわと思ったが、ナデ

ィアに向かってそれは言えない。この様子では、言ったその日が命日となりそうだからだ。

取りあえず何も言わず、苦笑するだけに止める。

「あの子が華奢すぎるだけなのよ！今時の十八歳で、四十キロないなんてオカシイのよ！」

「アンタは女か！って感じ？」

「うわっ……ガリガリ」

「私よりも痩せてますわ……——」

「でしょ！？ご飯も少ししか食べないし……。……全く、体の作りがどうなってるのか知り

たいわね！何が一口二口食べて御馳走様……よ！」

「ナディアはしっかり食べる派ですものね……」

「よくそんなんでも倒れないねー。ニックスと足して二で割ったら、丁度いいんじゃない？」

「最近ちょつとあいつデブってるし」

「マキノはニックスとうまくいっているのね」

「ガーネットがクスクス笑いながら言うのと、マキノが焦りだす。

「そ……そんなんじゃないって！」

「あーららー、照れちゃって！マキノもお子様ね」

「お子様って何よー！ヒッドーイ！」

「あはは……そろそろ寝ましょう。明日も早い事だしね」

ナディアがベッドから出て明かりを消す。ガーネットを真ん中に川の字になり、三人は眠

りについた。互いの温もりに包まれて、安らかに。

一十五章 一く契約く

「はつくしゅん……」

可愛い声のくしゃみが、部屋に木霊する。

「何だー、ティーシエル。風邪か？」

「ううん、違うと思うけど……」

そう言いながら鼻をムズツとさせ、寝間着から普段着に着替える。誰かが噂でもしてたの

かな、などと考えていると、ニックスがこっちをじっと見ている事に気付いた。自分の着

替えもせずに何してるんだと思い、ニックスの方に視線を向ける。

「何？」

「い、いや……前々から聞きたかったんだけど……よ」

「だから何が？」

何やら言いにくそうにしているが、ティーシエルにとってはそんな事知った事ではない。

言いたい事があるならさっさと言えばと催促すると、漸く喋りだした。

「お前……細いよな……」何キロ？」

「なーんだ、そんな事か。38キロだけど？」

「さささ、38ー！？」

「うん」

ニックスが大きな声を出し、ティーシエルの肩をガシツと掴む。

「お前、痩せすぎだ！もっと食べえ！」

「い……嫌だよ。あんまり食べると気分悪くなるんだ、僕……」

「だあー！——……あのな、ラフィストでも60キロなんだぞ！
？年上のお前がヒョロ

くてどうすんだ！」

知らないよそんな事、と言って肩を掴んでいる手を振り解く。

「じゃあ、ニックスはどうなんだよ！」

「俺は66キロ」

「ニックスの身長にしては、重いんじゃない？」

「痩せ過ぎのお前に言われたかねー！」

「あ、もう六時だ！僕先に下へ降りるから、戸締りよろしく」

尚も囁み付いてくるニックスを無視し、着替えをさっさと済ませ、
ティーシエルがドアか

ら出て行く。ニックスは部屋に一人放置され、寂しかったのか急いで服を着替え、その後を追いかけていった。

「あ」

「……………あ」

運悪く、そのままレストランに行ったマキノと別れて一人廊下を歩いている時に、ガーネ

ツトはサードとばったり会ってしまった。昨日の今日なので、何と話しかけたらいいもの

か迷い、気まずさを感じる。ガーネットのそんな様子に気が付いたのか、サードはガーネ

ツトの頭をポンポンと優しく叩いた。

「いつも通りに、していればいい」

こう一言だけ言って、サードは下に下りて行ってしまった。ガーネツトはサードに何か言

おうと思ったが、何も言葉が出てこない。昨日逃げた事を謝るのも、昨日考えていた事を

言うのも、何か違うと思った。ただサードの優しさに甘えるだけの形になってしまった事

に、ガーネットは心の中で謝った。

レストランでの食事を終えたラフィスト達は、そのまま次の行き先について話し合っていた。世界樹の所に行くにはどうしたらいいか、という事に一同は頭を悩ませている。ここ

から王様に頼んで船を出してもらおうという手も考えたのだが、そうになるとアンカース王都

の前をダイレクトに横切る形となる。王都から船は見えるだろうし、ここから世界樹のあ

った島に行くのは少しリスクが大きいような気がする。今はまだ、アンカースと一悶着起

こすのは早い。

「でも、じゃあどうすんだ？」

どこから行こうが、アンカース大陸の近くは通るんだろ、とニックスが言う。再び一同の間に沈黙が下りた。暫くして、サードが口を開いた。

「ツアラはどうだ？」

地図で場所を確認すると、フォートレス大陸の西にあり、アンカース大陸の南西に位置す

る大陸の帝都だった。ここからならばアンカース大陸を横切る際に、王都の近くを通らず

にすむ。どんな所なんだと聞くと、サードはアンカース王国と並ぶほど騎士団揃いの、大

国家だと答えた。そこにティーシエルが、砂漠地帯の広がる暑い国だと付け加える。

「でもツアラは騎士団も有名だけど、傭兵業が盛んなのも有名だからね。……性質の悪い

奴らに絡まれないように、気をつけないと」

「あら、この面子ならそんな心配は要らないわよ」

「傭兵って、なんですか？」

俗に言う賞金稼ぎ、何でも屋だとサードが答える。大帝国ツアラは小さい島々も占領して

いるから、そういった所と抗争が耐えないらしい。国を守る騎士団をそういう所に多く割

けないので、傭兵を募っているお国事情があるのだという。

「まあ、ナディアの言う通り、変な事には巻き込まれないと思うし……ツアラから世界樹

を目指そう」

「ねえ、ティーシエルは、ツアラに行った事はないの？——……あるならワープで、ス

イーっと！」

「無い」

なら船で行かなきゃいけないのか、とマキノががっかりする。その時、地図を見ていたら

フィストがある事に気が付いた。ツアラ大陸に、グレミアという町の名前を見つけたのだ。

グレミアという場所は、以前ティーシエルからお姉さんのいる町だと聞いた所だ。ここな

らば、ティーシエルも行った事があるかもしれない。

「ティーシエル、グレミアは行った事、ないのか？」

ラフィストの言葉に、サードがそうかという顔をする。

「確かに、グレミアから馬車でツアラに向かうって手があるな……どうだ？」

「それなら、あるけど」

「なら決まりだな！」

「よっしゃー！燃えてきたぜー！あ、何か俺、体動かしたくなってきた！出発まで、ちょ

っくら運動でも……――」

今にも飛び出して行きそうなニックスを慌てて引きとめ、まだ話はあるんだって、と告げ

る。今までと違い人数が大所帯となった事あり、戦闘におけるそれぞれの役割をきちんと

決めておきたかったのだ。これからは闇雲に戦っても、勝てない敵が増えてくるかもしれない

ないと言うと、皆が納得して頷く。

「まず、俺とサードが直接攻撃で敵に仕掛ける。ニックスとナディアが、そのバックアッ

プ。後衛からガーネットは回復、ティーシエルは補助と援護。マキノは素早さを生かして、

攻撃と後衛陣の守りを頼む」

こんな感じでどうかと言うと、皆がラフィストの意見に同意する。

「僕が後衛っていうのは、ちょっとアレだけどね。まあ、ナディアは攻撃魔法しか出来な

いし、仕方ないかな？」

「ティーシエル、アンタもうちょっと可愛くなったらどう？」

ナディアがピクピクと眉を引きつらせる。

「ナ……ナディア！私も回復補助と光魔法しか出来ませんし！」

「ナディアは魔法戦士系だから、確かに突っ込むのには向いてると思うけど。僕はセイ

ジクラスだから、敵の攻撃食らうのはナンセンスだしね」

「くっ……この子はクラスランクの違いをあげつらって！」

「――……あ、ランクで思い出した。ラフィストもガーネットもナディアも、クラスア

ップしない訳？」

クラスアップについて尋ねると、ティーシエルがご丁寧に説明してくれる。元々、武器や

魔法を使い始めた時点で、それぞれ当てはまる下級のクラスに分類

されるらしい。そこか

ら鍛錬を積み、一定以上の技量レベルに達すると、上のレベルへの昇格が認められる。それ

れが一般的にクラスアップと言うそうだ。

「何か得する事でもある訳？」

魔法なら今でも充分に使えてるわよ、とナディアが突っかかる。

「町で売られてる武具や魔道書があれば全部じゃないの、知ってる？」

「どういう事だい？」

ティーシエルがポーチから、紋章のような物を取り出す。

「つまり、これを持ってる上級クラスの者にしか売れない、特定武具もあるわけ。代表的

な例でいったら……サードの持ってる魔石、なんてそれに当てはまるかな。魔石は魔法剣

士の証を持ってないと売ってもらえない」

さっき言った傭兵なんかはクラスによって報酬も違うし、騎士として仕官出来るのも、上

級クラスの人だけだと付け加える。下級クラスはあくまで自称に過ぎないが、上級クラス

は国が認める形になるので、身分を相手に提示したい時とかにも役立つとも教えてくれた。

「なるほどな……確かに、なれるならなった方がいいかもな。どうやって、クラスアップ

すればいいんだ？」

「王様に許可貰って、神と契約するだけだよ」

「ふーん、簡単なんだな！な、俺は出来ないの？」

ニックスが俺もクラスアップしたいとアピールするが、武闘家はそもそもクラスが無いか

ら無理だと言われる。例外として、剣も扱えればクラスアップする事が出来るらしいが、

使えない二人には関係の無い話だったので、マキノとニックスは出来ないので納得する。

「でも、自分のクラスも、アップできる上級クラスもわかりませんわ」

「使ってる武器や魔法の系統で、簡単に分かるよ」

ラフィストはフェンサー、ガーネットはアビイス、ナディアはマジダと言い、さらにア

ップできる上級職についても教えてくれた。例え上級クラスにアップしても、他の系統の

物を極めれば、違う上級クラスに転向する事が出来るらしい。とりあえずクラスアップだ

けでもしておく事を勧められ、ラフィスト達は城に向かう事にした。城に付き、近衛兵に

王への謁見を願ひ出る。すると近衛兵はすぐに伝えてくると言ってくれ、王の所へ向かった。その間、ラフィスト達は控えの間で呼ばれるのを待つ。椅子に

座って待っている時、ナディアがティーシエルの服の裾を掴み、小声で話しかけた。

「ティーシエル……あの、神様と契約するのって……」

「何？」

「絶対、必ずしてもらえるの……よねえ？」

「は？」

意外な言葉に、ティーシエルが驚く。

「その、ね。——……私さ……前みたいな感じになったら嫌だなー、なーんて……思ってた、して？」

「あのね、そんな心配要らないよ。契約っていつでも形式だけみたいなものだし。まだま

だ技量が足りないとかそういう事が無い限り、失敗する事は無い」
「契約結べなかった人って……」

「今の所いない。そもそも、王だってそんな簡単にはいはい認可下ろさないから、いざ契

約って時に技量不足ですって事は、まずありえない話なんだよ」

それを聞いたナディアは、ほっと安心した表情を浮かべる。何だかんだ言って、世界樹に

拒まれた事を彼女自身気にしていたのだろう。その時、控えの間に先程の近衛兵が入って

きて、王の間にどうぞと告げる。王の間に入ると、フォートレス王がラフィスト達を出迎えてくれた。

「おお、そなたらか。よくぞ参った！……して、今日は何用じゃ？」

「上級クラスへのクラスアップをしたいので、その許可を頂きに参りました」

「ほう。……まあ、そなたらのレベルなら、認可を降ろしても問題なかろう。して、何の

クラスになるのじゃ？書付を書いてやるから申すがよい」

王の言葉に礼を言い、ラフィストはソードマスター、ガーネットはブリースト、ナディア

はマジマスターになる事を告げる。側近が持ってきた紙に、王がサラサラとサインをす

ると、それをラフィストに手渡した。

「……よし、これでいいぞ。これを持って、契約の間で契約してくれるがいい」

「ありがとうございます。それと……僕達は契約を済ませたら、大帝国ツアラに向かおうと思っ

「ツアラか」

「はい。目的地である世界樹のあった島にも近いですし、何よりアンカースの王都の前を、横切らずに済むので」

「船を出してやろうかと思っていたが、お前達がそう決めたのならそれでいい。……お前達の旅の無事を、心から祈っておるぞ！」
何から何まで世話になったフォートレス王に改めて礼を述べ、ラフイスト達は王の間を後にした。

「ここが契約の間だよ」

廊下でばったり会ったディレス王子が、契約の間まで案内してくれる。ティーシエルは心なし彼から離れた所にいるが、ラフイストとしては人好きのするフォートレス王に似ている彼の事は、嫌いではなかった。もう少しここにいる事が出来れば、友達になれたかもしれないのにと残念に思う。

「ここで契約するんだ！綺麗ー！」

広々とした空間の中央に丸い台があり、その台の周りには水が張られている。契約の間の神秘的な雰囲気、マキノが目を輝かせている。

「……王子、司祭はどこにいる訳？」

「おかしいな……ダラス司祭がいらっしゃるはずなんだけど」
ティーシエルの指摘に、ディレス王子がキョロキョロと周りを見回す。そこに、一人の近衛兵が入ってきて、王子に何やら耳打ちをしている。

「どうかしたんですか？」
ラフイストがディレス王子に尋ねると、彼はバツが悪そうに口を開いた。

「いや……あの、ギックリ腰で来れないらしくって。今ブルーバの

町まで、別の司祭を呼

びに行かせてるらしいんだけど……――」

「そんなの待ってたら、夜になるな」

サードが冷静に述べる。

「もういいよ、僕がやる」

カダンツの司祭でもあるティーシエルが、クラスアップの契約を引き受ける。ディレス王

子に儀式用の服を頼むと、傍にいた近衛兵に服を用意するよう命じてくれる。それに着替

える為、ティーシエルは近衛兵と一緒に外へ出て行った。

「そういえばティーシエルはセイジだったっけ」

忘れてたなー、とディレス王子が呟く。多分、今の言葉をティーシエルが聞いていたら、

カンカンに怒っていただろう。ディレス王子によれば、国や都市の司祭には上級クラスの

ビショップかセイジを任命するのが、慣わしらしい。そんな事を聞いているうちに、司祭

の衣装を纏ったティーシエルが、皆の前に姿を現した。

「ティーシエル可愛いー!」

「うっ……やっぱり可愛い……」

いつも可愛いと言っているマキノはともかく、ディレス王子までもが涙を流している。ど

うやらまだショックから立ち直りきれないらしい。そんな周囲を無視し、ティーシエル

がナディアに近づく。

「ナディア、僕がやるんだから失敗するはずが無いさ。それに、これは世界樹とは全く別

物だ……あんまり気にする事はないよ」

「あ、ありがとティーシエル」

そう言うときティーシエルは祭具を持ち、契約の場に置いていく。そ

して王から受け取った
書類を手にとると、順番に一人ずつくるように言った。

「神よ、私の声をお聞き下さい」

ティーシエルの声に反応するかのように、燭台が灯る。ガーネットの契約が終わり、次はナディアの番だ。

「契約者の御名はナディアメイカー。この者がマジマスターとなります事を、お認め下さい。そして、その印をここにお示し下さい」

周りの水に、波紋が起こる。暫くすると水が光り、ある形を描いた。その形を見て、ナディアがポツリと呟く。

「……ルーン文字」

「確かに、認定の印を承りました」

一瞬にして静寂さを取り戻し、水も元通りとなる。ティーシエルは書類を燃やし、マジマスターの印が入った紋章と認定書をナディアに手渡す。

「ね、簡単だったでしょ」

それを受け取りながら、ナディアが頷く。

「次、ラフィストきて」

ティーシエルに呼ばれ、ラフィストがナディアと入れ違いに契約の台の上に乗る。確かにティーシエルの言う通り、これだけ早いなら気も楽だなと思った。

ティーシエルが言の葉を紡ぎ始める。先程と同様に、水が光ってある形を描く。それはナディアの時とは違うル

ーン文字だった。ガーネットの時も違ったし、それぞれクラスごと

に違った物が浮かび上

がってくるのだらうと単純に思う。ティーシエルが確かに認定の印を、と言いかけた時、

突然浮かび上がったルーンの文字が輝きを強め、周りの水ごとラフイストに迫ってきた。

「なっ！」

「うわっ！」

水がかかると思い、思わずラフイストは目を閉じるが、自身が濡れた様子は無い。恐る恐る

目を開くと、祭壇の周りの水も、ルーンの文字も消え失せていた。

「え……もしかして、失敗なのか？」

ラフイストがティーシエルに尋ねるが、彼は目を見開いて口をあめぐり開けたままだ。テ

ィーシエル、と呼びかけると、ティーシエルはハツとした表情をした後、書類を燃やして

ラフイストに返事をする。

「……こんな事、初めてだ」

「なあ、失敗なのかこれ」

ティーシエルは首を振り、紋章と認定書をラフイストに渡す。

「そもそも失敗の場合、ルーン自体現れないらしいから。……だからって、ルーンごと周

りの聖水まで体に吸い込まれるなんて話は、聞いた事が無い」

「そ、そうなのか」

磁場が不安定だったのか、それとも……とティーシエルがブツブツ言っているが、失敗し

た訳ではないのだし、ラフイストは気にしない事にした。紋章と認定書をしまい、祭壇を

降りる。すると、皆驚いたのか、ラフイストの元に駆け寄ってきた。

「ラフイスト、大丈夫なのかよ！」

「な、何か水がグアーって押し寄せたように見えただけど！」

「つていうか、成功なのかこれ!？」

慌てふためいて詰め寄ってくるニックスとマキノに、大丈夫だという事とクラスアップの

成功を伝える。それを聞いて、二人は勿論、他の皆も安心したようだ。

「とりあえず僕着替えてくるから。着替え終わったら、早速グレミアに行こう」

祭具を片付けたティーシエルが、契約の間から出て行く。すると、ディレス王子がラフィストに話しかけてきた。

「ちょっと驚いたけど、クラスアップおめでとう」

「ありがとうございます」

懐から何かを取り出し、それをラフィストの手に握らせる。

「これは？」

「邪を弾くアミュレットさ。……もう、行ってしまうんだろ？ 私は何も手助けしてあげる

事が出来なさそうだし、せめてもと思ってね。貰ってくれ」

「ディレス王子……」

「礼を言うなら、旅を終えた後に無事な姿を見せるのと、土産話を持ってくるのが礼だと

思ってくれ。……それと、王子って言うのと敬語は止めてくれないか？ 私はラフィスト達

の事を、大切な友人だと思っているんだから」

「ありがとう、ディレス王子……いや、ディレス!」

固く握手を交し合う。再びここに戻る時は全てを終えた時だと心に誓い、ラフィスト達は

ツアラ大陸へと向かった。

一十六章 一〇秘密

「すごい活気だよなー！な、ラフィスト！」

ここはツアラ領、グレミアの町。ワープでここまでやってきたラフィスト達は、馬車を預かり所に預けた後、町を見て回っていた。フォートレスも市などが立ち並び活気に満ち溢れていたが、グレミアはそれ以上だと思う。色々な諸島などを勢力化にしているだけの事はある、見た事もない品々が多く売られていた。ここならば、珍しい武器や防具なども置いてあるかと思う店に入ろうとしたが、それはサードに止められる。サードによると、ツアラに行けばもっと良い武具が揃っているらしい。ここで買うよりも、そっちで買った方が良いというアドバイスを受け、結局店を見て回る事は止めにした。

「んー、見る物もないのなら……どうします、ラフィー。クリスティーナの所にでも御邪魔しに行きます？」

これからどうするか考えていると、ガーネットが提案する。クリスティーナって、と聞くと、ティーシエルが僕の姉さんだと答えた。いきなり大勢で押しかけるのは迷惑なんじゃないかと思ひ遠慮したが、ティーシエルがそんな事気にする人じゃないから遠慮はいらないと言った事で、結局御邪魔する事に決まった。ティーシエルに案内された屋敷に入ると、ちょ

うどクリスティーヌが家にいて、ラフィスト達を屋敷の中に招き入れてくれた。

「それにしてもどうしたの、こんな所で。……何かあったの？」

クリスティーヌは、カダンツにいるはずの弟がグレミアにいる事に驚いているらしい。カ

ダンツで何かあったのではと、もの凄く心配している。そんな彼女に事情を説明し、よう

やく落ち着きを取り戻したのはお茶が入ってからだった。

「そう……。お友達と一緒に、アンカース王国について調べているのね。あ……だけど、どうしてグレミアに？」

「実は、ツアラに用事があるんだ。船に乗ってある所に行きたいんだけど、ツアラ以外か

ら行くのは少し具合が悪くって。グレミアはツアラ領だから、ここからツアラに行こうと思ってるんだ」

「あら、でも今船は殆ど出てないみたいよ」

「え！」

ラフィストが驚いて叫び、クリスティーヌに事情を聞く。現在ツアラでは、殆どの船乗り

がアンカースと何かあるのを嫌がり、船を出さないらしい。出したとしても、アンカース

とは全く別方向行きの船だけだ。一番アンカース大陸に近い場所という事もあり、警戒心

が芽生えてしまっているようだ。

「どうしてもというのなら、船乗り本人か、そういった人に口を聞いてくれる人を探さないわ

いと駄目かもしれないわ」

「そ、そんなー！ここまで来てそれはねえよ！」

船が出ないという現実問題に、ニックスがガツクリと項垂れる。こ

ここにいるメンバーはツ

アラに知り合いどころか、行った事すらない者ばかりだ。サードも、何度か立ち寄っただ

けで、口を利いてくれる者まではいないと言う。

「それよりも、ツアラに行くのなら気をつけた方が良いわ」

「え、何かあるんですか？」

「今、ツアラで大盗賊が出るという噂が持ちきりなんです」

「と、盗賊！？盗まれないように気をつけねえと！」

あたふたとニックスが手を動かし、服を叩いて財布を確認する。急に騒ぎ出したニックス

をサードが一睨みし、心配なら靴に金を閉まっとけと一喝する。サードの気分を害してる

事にも気付かず、ニックスは単純にサードの案に感心したらしい。

早速、靴にお金を入れ

ている。ニックスのそんな姿にクリスティーヌは微笑みながら、窓の外に目をやる。どう

やら話しているうちに、日が暮れてきたようだ。

「そろそろ御夕食の時間ね……まだ、宿はとっていないんでしょう？今日はここに泊まっ

たらどうかしら？」

「いいんですか？」

「遠慮なんかしないで結構ですよ。……ティーシエル、悪いけど主人とお買い物に行ってくるきてくれないかしら」

「わかった、姉さん」

ティーシエルが階段を昇っていき、広間を離れる。すぐに目的の人物が見つかったらしく、

ティーシエルと背の高い男の人が上から降りてきた。どうやら、この人がクリスティーヌ

の御主人らしい。二人が行ってくると言って、屋敷の外に出て行っ

た。

「あの、さっきの方が御主人ですか？」

「ええ、アレンドレナード・ダールというの。……それより、皆さんに話したい事があるのです。……これから話す事は、決してあの子に言わないで欲しいんです」

約束、してくれますかというクリスティヌに、ラフィスト達が頷く。わざわざ買物に

行かせたのは、俺達に話したい事があったからかとラフィストは納得したが、聞かれたくない内容というのが気になって仕方ない。

「それで、話とは……」

「……あの子は、弟じゃないんです」
ラフィスト達の間、衝撃が走る。

「あの子って、ティーシエルの事ですよね……？」
念の為確認すると、クリスティヌがコクリと頷く。そしてゆっくりと話を続けた。

「母リーサは十八年前、子供を身籠っていました。勿論父は男の子を欲しがっていたので、
凄く期待してたんです、お腹の子に。……でも……」

「母は事故にあって流産し、子供が産めない身体になってしまったんです」

ナディアは自分の師でもあるアルベルトの性格を思い出す。普段は温厚で真面目な方だった。しかし、一度怒ったら止めようが無いほど、激しい気性の持ち主でもあった。彼のそ

ういう所を、ナディアは一度だけ見た事があった。

「アルベルト卿、怒ったんじゃない？」

「ええ、父は凄く怒りました。事故を起こした相手を殺そうとまでしたんだもの……その

上、夫婦仲までこじれ始めたわ」

ラフィスト達が出会ったミッドウェー夫妻に、その様な影は全く見えなかった。それどころ

か仲の良い夫婦にすら思える。何か変わる切欠でもあったのだろうかと思ひ、それからどうなったのかを尋ねた。

「――ある日、父が祈りの間へ行つた時、出て行つたと思つたらすぐに家に戻つてきた

んです。――……赤ん坊を抱いて」

「それって、もしかして……」

「そう、その時の赤ん坊こそティーシエルなの。母は、親が戻ってくるかもしれないと言

つていたけど、父は、祈りの間の台座の上に捨てられていたんだ、きつと神様が下さつた

に違ひない！だからこの子をうちで育てると言つて、喜んでいたわ。……それから夫婦

仲も元に戻つて、全てもううまくいつてるの」

「あの、どうしてこんな事……」

彼女が話さなかつたら、きつとラフィスト達は一生知る事はなかつただろう。それなのに、

何故あえて話そうと思つたのか聞いてみたかつた。

「良くも悪くも、今までの子の世界はカダンツだけだったわ。けど、今は皆さんと一緒

に世界を旅してる……その過程で、本当の親に巡り会わないとも限らない。あの子がうち

に貴方達を連れてきたって事は、貴方達が大切な仲間だという事の証。だから、もしあの

子が本当の事を知つた時、支えてあげて欲しいの」

クリスティーヌのこの言葉で、ラフィストはいかに彼女が弟の事を思っているのか悟つた。

血など繋がっていなくとも、確固とした繋がりが彼らの間には存在していた事が、ラフィストには嬉しく思えたのだ。その時、ランツフィートの事件さえなければ、自分とジュリアもこうなっていたのだろうかと考え、ラフィストは一抹の寂しさに襲われた。

買い物に行っていたティーシェルが戻った後、ラフィスト達は夕食をとる六時まで自由行動する事に決めた。家に残って手伝いをするというティーシェル以外、思い思いにグレミアの町に繰り出していく。ラフィストも折角だから何か見ようかと歩いていると、視界の端にガーネットの姿を見つけた。何だか、後ろ姿が寂しそうに見える。

「ガーネット？」

「――……ラフィー」

後ろ姿だけではなく、振り返ったガーネットの顔も、どこか寂しそうだ。いつもの元

気一杯の、明るい彼女ではない。そういえば、最近笑顔が翳る時があったような気がする。

「最近、元気ないね。どうしたんだい？」

「え？」

「い、いや……何かたまに寂しそうっていうか……」

彼女の反応に、妙に気恥ずかしさがこみ上げ誤魔化すような口調になる。

「ラフィーは私の事、よく見てらっしゃるのね」

彼女の事が気になっている自分を言い当てられたような気がして、

ラファリストは顔を赤くする。ガーネットはフツと笑うと、自分の手をラファリストの手の上に重ねた。

「ありがとう、ラファイー。……でも、寂しいわけじゃ、ありませんわ。私にしては珍しく、考え込んでいただけですよ」

それが顔に出てしまったのかもしれませんがね、と言うと彼女の手がラファリストの手から

離れていく。何となく離れがたく思い、彼女にどこにいくのかと尋ねる。彼女はラファイス

トの気持ちに気付いた様子も無く、教会に行こうかと思っていると答えた。

「そっか」

「あ、ラファイーも……」

ここまで言いかけて、ガーネットの言葉が途切れる。ガーネットはラファリストを誘おうか

と思ったが、ラファリストの顔を見て誘うのを躊躇ったのだ。今までなら、自然に誘ってい

たはずだ。しかし、この間の一件で自分の気持ちについて考え始めてから、妙にラファイス

トの事を意識するようになっていたのだ。どうしよう、とガーネットが考えているところ

に、ラファリストの言葉が耳に飛び込んでくる。

「俺も、一緒に行ってもいいかな？」

「本当!？」

途端にガーネットの顔がぱあつ、と明るくなる。心から笑っているガーネットを見たのは

久しぶりだなと思うと、ラファリストの顔にも笑みが浮かぶ。ラファリストが笑っている事に

気付き、ガーネットが不思議そうにラファリストを見上げる。どうし

たの、と問いかけるガ

ーネットにラフィストはいや、と言うと言葉を続けた。

「ガーネットがこんなに明るく笑うの、久し振りかなと思ってさ」

「え……」

ガーネットの頬が赤く染まる。ガーネットはラフィストの手をギュッと握り、その顔が見えないよう顔を逸らした。

「ラフィー……あなたには、何でも分かってしまうのね」

「それは、君の事を……——」

いつも見ている、と言おうと思ったが、結局ラフィストはその言葉を飲み込んだ。考え込

んでいるという彼女に、今告げるべきではないと思ったからだ。ラフィストは言葉を続け

る代わりに、握っている手をギュッと握り返す。そしてガーネットに行こうかと言うと、

教会に向けて歩き出した。

ラフィストとガーネットが教会に向けて歩いている時、ジュエリーショップに入っていた

ナディアが店の中から出てきた。人込みにラフィストとガーネットの二人を見た気がして

出てきたのだが、どうやら勘違いだったらしい。勘違いでなくとも、二人の邪魔をしよう

という気は、サラサラ無かったのだが。それよりも、ナディアにとって問題だったのは、

このジュエリーショップだ。

「これといって、私を引き立てる宝石が無かったわ……」

ブツブツ文句を言いながら、大通りの流れに逆らって歩いていると、

いつの間にか広場に

出たらしい。広場では何かのショーをやっているようだ。何をやっているのか気になり近

寄ってみると、やっているのはマジックショーだった。ショーは大盛り上がりを見せ、見

入っているナディアの横にも大勢の人が集まってくる。最後の通りのマジックが終わり、

広場が拍手で一杯になる。周りの人が、一座にお金を投げ入れているのを見たナディアは、

自分もと思い、財布を出そうとする。

「あ、あら……」

財布を入れたはずのところに手をつまむが、財布は無い。落としたのかもしれないと、そこら中探し回るが結果は一緒だった。

「う、うそ……」

そんなにたいした物が入ってなかったはずと思い、財布の事は諦めようとする。しかし、

財布の中に昔にティーシエルと二人で撮った写真や、クラスアップした際に貰った認定書

が入っている事に気付いた。

「さ、探さないと……何か魔法で何とかならないかしら！」

財布を捜す為、ナディアは走りだした。

広場から少し行った所の大通りの裏路地で、一人の男が財布を開いている。中を見て、何かを確認しているようだ。

「えーと……一、二……うわ、少な！何だよこれ！これなら俺の方が数倍持つてるぜ……」

宝石店から綺麗な姉ちゃんが出てきたから、金持ってる確率高いと思っただのによ！」

がっかりと言わんばかりに、財布を投げ捨てる。その拍子に、財布から何かの紙切れが出た。男がそれに気付き、拾い上げる。どうやら古い写真のようだ。

「何だこれ。古い写真だなー……これは！」

写真を見ていた男の目がカッと見開く。

「カ、カワイイ子が二人も……！一人はどう見ても、あのきつそうな姉さんだよな？将来

がアレか……はぁ。んじゃ、こっちは誰だ？——……だが、この写真から推測するに、

今は相当カワユクなっている筈……よし、探すぞ！」

投げ捨てた財布を拾い上げ、写真をその中に戻すと、ポケットにそれを突っ込む。そして

男は再び大通りに出ると、人込みの中に紛れていった。

「はぁ？財布無くした？……何それ」

「その経緯は聞かなくていいから！何か探す方法とかないの！？」

ナディアがティーシエルを問い詰める。魔法で探せるなら、ティーシエルが何か知ってい

るかもしれないと、一度戻ってきたのだ。ティーシエルはある事にはあるけど、と言いか

ける。その言葉にナディアがくい付くと、中に入っていた物を何か渡せと言われる。中に

入っていた物など手元に一つも無い。ない、とナディアが返すと、じゃ、ダメだねとバツ

サリと切られた。

「ナディアさん、ちゃんと警備隊に届け出を出しておいてあげるから！ほら、元気だしなよ。見つかるよ、きっと」

アレンの励ましに、ナディアが安心した顔を見せる。

「そ、そうよね……じゃあ、自分の手で出しに行こうかしら」

気を取り直してナディアが立ち上がると、夕暮れ時に近いという事もあり、アレンとティ

ーシエルも一緒にいてきてくれると言ってくれる。

「ふふ……もし財布落としたんじゃない、盗まれたんだったら、そいつはメツタンギツ

タンにしてやるわ！」

ナディアが扉を開けると、バーンと音が響き渡る。ナディアは、いっ

つになく燃えているよ

うだ。それを見ているティーシエルとアレンは多少引き気味だ。

「お義兄さん」

「なんだい、ティーシエル君」

「女って、恐ろしいね」
「ああ……そうだね。何かあった時、一番逞しいのは女の人だろうね」

今回の教訓、女の恨みは恐ろしい。

「しっかし中々みつかんねーな、あの子。——……くっそー！

俺の勘はここだと騒いでいるのに！」

そう言うと、髪をグシャグシャと掻き毟る。自分の思い通りに行かないと、こうやって自

慢の緑髪を掻き毟るのが彼の癖だ。

「俺の勘も衰えたかねえ……いや、そんなはずわ！……って、あれ

？あそこに見えるはさ
っきのオネーさんでは！？」

彼はサツと物陰に隠れ、警備隊の元に向かう三人をマジマジと眺める。すると何かに気が

付いたのか、彼はばつと写真に目を移した。確認するように、何度も写真と向こうにいる

三人とに視線を動かし続ける。

「間違いないえ！じゃ、早速――……いや、待てよ。いきなり行ったら流石に怪しまれる、

よなあ。ん、あれはダール家の紋章？……ははーん、こいつは使えるな」

何か妙案でも浮かんだのか、男はひっそりとほくそ笑む。

「よっしゃ！まずは手始めに予告状でも作るとするか！――……くうー、久し振りに腕

が鳴るぜ！ま、キルト様に不可能は無しくてか！？」

こう言うと、彼は手持ちの紙にサラサラと筆を走らせる。それをさり気なく警備隊に置いてくる為、緑髪の男、キルトは大通りへと歩き出した。

「うーん、やっぱりそのような財布は届いてませんねー」

「そうですか……――」

「ま、届いたら連絡を差し上げますので」

「ありがとうございます――……」

無気力に外に出るナディアと、それに続く二人。見つからなかった事で、さっきの気合は

一気に吹き飛んでしまったようだ。連絡も入れたし家に帰ろうと言って、三人は元来た道

を引き返す。あ、と言って何かを思いだしたのか、ティーシエルが

急に止まる。俯きなが

らその真後ろを歩いていたナディアは、その背中に顔をぶつけて変な声を出す。

「ちよつと！いきなり止まらないでよ！」

「ゴメン……でも」

そう言うと、ティーシエルの視線が横にずれる。視線の先にあったのは、先程ナディアが

入った宝石店だ。何か宝石店に用事があるのかと聞くと、ティーシエルはちよつと待って

てと言い残し、店の中へと入っていった。アレンと話しながら待っている、ものの五分

ほどでティーシエルが戻ってくる。何だったのだろうと思っていると、いきなり目の前に

包みを差し出された。

「……え、何これ」

自分が貰って良いものか戸惑っていると、逆にティーシエルの方が驚いたような顔をする。

まさか覚えてないのか、といったような顔だ。

「もしかして忘れてる？今日はナディアの……——」

「あー！誕生日！」

「そう」

「すっかり忘れてたわ……」

はあ、と溜息を漏らすと、ティーシエルが、だからこれは誕生日プレゼントと言ってくる。

ありがたく、その包みを受け取り、開けても良いかと伺う。すると、彼からどうぞと返

事が返ってきた。いそいそと開けた中から出てきたのは、ブラウン系のダイヤが施された

ブレスレットだ。それを見てナディアが黙り込んでいると、その反応が気になったのか、

ティーシエルがおずおずとナディアの顔を覗き込んでくる。

「……もしかして、好みじゃなかった？」

「え！あ、ああ……ううん！とっても気に入ったわ！ありがと、ティーシエル」

ナディアの返事にティーシエルがほっとした表情を見せ、再び前を歩いていく。ナディア

が黙りこくっていたのは、気に入らなかったからではない。むしろ、とても彼女の好みだ。

彼女は、それとは違う所に腹を立てていたのだ。それはあの宝石店に対して、だ。ブレス

レットを眺めながら、私が行った時はこんなカワイイの置いてなかったじゃない、あんの

宝石店め、と呟いた。

一十七章 トレジャーハンター

「ティーシエル、大変ねー。でも似あってるわよ」

ティーシエルの格好を見てナディアがニヤニヤ笑う。そのナディアの笑みを見て、不快そ

うにティーシエルは眉を顰めた。もの凄く機嫌が悪そうなティーシエルの後ろで、クリス

ティーヌが恐縮そうに身を縮めている。

「ご……ごめんなさいね、ティーシエル。私のせいで……」

「い、いや……姉さんのせいじゃ……」

目に涙を浮かべ始めたクリスティヌに、ティーシエルが慌ててフオローする。事の顛末

はこうだ。警備隊から戻ってきた三人を、クリスティヌが出迎えてくれた。その時、ク

リスティヌが転びかけたのだ。そして、水をまく為に持っていたバケツの中身が、見事

にティーシエルに引っかけたのである。運悪く、着替えを全て洗ってもらっていた為、

替えも無い。仕方なく、背丈が近いクリスティヌの服を、今現在着ているのである。ナ

ディアがニヤニヤしているのは、この姿に対して、だ。

「姉さん、せめてドレス以外のは無かった訳……?」

「一番ましなのが、それだったの……」

「そ、そう……」

ティーシエルが遠い目をしていると、ドアが開く後がする。それとともに、大広間にマキ

ノがひよつこりと顔を出した。

「あつれー! ティーシエル何着てんの? かゝわいー!」

外から戻ってきたマキノが、ティーシエルの姿を見てはしゃぐ。服の替えが無かったと説

明するが、マキノにとってはそんな事はどうでも良いらしい。悪乗りして、ティーシエル

の頭にリボンまでつけ始める。必死に抵抗するが、マキノの腕力に勝てるはずもなく、髪

の毛にリボンが結いつけられた。

「……きしょ」

鏡を見て、ポツリと呟く。しかしそう思ってるのは彼だけなのか、女性陣は至って嬉しそ

うにその姿を眺めている。その反応に少しばかり傷つき、項垂れていると大広間にニックスがやってきた。

「お、誰？ かーわいいーい！——……って、ティーシエルじゃねえか！……お前、何やってんだ？ 女装か？」

「水に濡れて……替えが無かったから……」

「あー！ それでその格好かー！ あはははは！」

似合いすぎてておかしいとばかりに、ニックスが大笑いする。とうとう臨界点に達したの

か、ティーシエルは俯いてしまう。俯きながら、何かをボソボソ言っているようだが、大

騒ぎしている大広間の面々で気付く者は誰もいない。漸く一番近くに

いるニックスが気が付くと、何ブツブツ言ってるんだと尋ねる。その瞬間、ティーシエルはぱつと顔を上げる

と、手をニックスに向けた。

「地獄に落ちろ！」

向けられた右手から、得意の水魔法が放たれる。丁度その時、大広間に慌てた様子の警備

隊の者が、飛び込んできた。そこに魔法によってふっ飛ばされたニックスが飛んでくる。

避ける間もなく、正面衝突してしまった。

「あっちゃー」

目を回して二人を見て、ナディアとマキノが苦笑する。かたやティーシエルは、ニックス

スは兎も角、警備隊の者まで巻き込んでしまった事に大慌てしている。急いで回復魔法を

かけに向かった。回復魔法によって目を覚ました警備隊の者は、先ほどの勢いのまま、こ

の屋敷の主人であるアレンの元に駆け寄る。

「大変です！警備隊に先程予告状が届いたんです！ダール家宛で！」

「と、とにかく落ち着いて下さい！……で、どんな事が書いてあったのですか？」

落ち着いた様子のアレンの諭され、落ち着きを取り戻した警備隊は、懐から一通の手紙を

取り出した。

「こよい、貴女を攫いに参ります！……だそうです」

「貴女って……姉さんの事、かなあ？」

ティーシエルがポツリと疑問を漏らすと、アレンが先程と打って変わって大慌てする。

「なっ……それは大変だ！すぐ警備を依頼しないと！妻にもしもの事があつたら、私は――」

――……っ！」

アレンは知らせに來た警備隊の者に、急いで警備の者を手筈するよう依頼する。警備隊の

者は、人数を集める為入ってきた時と同じ様子で走って屋敷を出て行った。警備隊が去っ

た後も、アレンは未だパニック状態である。

「あ、あなた……落ち着いて」

「そうですよ！まだクリスティーヌさんと決まった訳じゃありませんし」

「確かに……名前が指定されてないのも、変……よね？」

ナディアは予告状に、変な違和感を感じる。それが何なのかははっきりしないが、嫌な予

感がするのは確かだ。そこに、ラフィストとガーネットが戻ってくる。大広間に入ると、

何やら変な雰囲気漂っている事に気付き、ラフィストがニックスに何かあったのか尋ね

る。ニックスはラフィストに予告状が届いたのだと答える。

「今宵貴女を攫いに……って、大変じゃないか！」

「警備はもう頼んだんですの？」

「今頼んだところですが……こんな急に大人数が集まるかどうか」

アレンの言葉に、ラフィストは自分達も交代ごうたいに警備をしようとして提案する。御世話

になっている事もあり、仲間達はその案に賛成し、夜を待つ事となった。

完全に日が沈み、時間はあっという間に深夜になった。そんな中、ダール家の屋敷を屋根

の上から眺めてる者がいる。キルトだ。

「やっっぱ、こよいぐらい辞書で調べればよかったかな？頭悪く見えるよなあ……」

キルトは夜目が利くのか、暗がりの中でもぼっちり様子が分かるようだ。唸りながら目の

上に手を翳し、目を細めてじっと見ている。すると、屋敷が段々と騒がしくなり、警備の

人数が増えていく。

「流石ダール家。警備も半端じゃないねあゝ！……ま、アレ位の障害がないと燃えないし

な！A級トレジャーハンターの俺にとっちゃ、アレくらい楽勝だけど！ギャラリーも集ま

ってきた事だし、そろそろ行くか……——」

いつの間にか屋根にあった人影がフツと消える。キルトは闇に姿をくらまして行った。

「今宵って具体的な数字にして欲しいわよね」

キルトが闇に姿をくらました頃、ナディアとティーシエルの二人が警備を手伝っていた。

他の皆は自分の番に備えて仮眠中である。

「今の所、何の音沙汰も無いようだけど……」

ティーシエルが辺りを見回す。落ち着き払っているティーシエルと異なり、ナディアはち

っとも現れる気配の無い怪盗にイライラしている。財布に続き、こんな騒動まであった事

で、不機嫌が頂点にきているのかもしれない。

「ああもう出るなら出る！出ないなら出ない！はつきり——」

しなさいよ、と言葉を続けようとした時、辺りの証明が全て消える。すると、用意してい

た証明の一つが勝手に付き、そこに一人の男が立っていた。彼はキヨロキヨロと辺りを伺

い、誰かを探しているようだ。警備員がその男、キルトに殺到する。キルトは彼らを相手

にもしていないようで、視線もやらずヒョイツと避ける。

「麗しの君よ、いずこ……——見つけた！」

キルトは叫ぶと、軽やかに走り出す。しかし、その先にいたのはクリスティヌではない。

隠れて様子を伺っていたクリスティヌも、妻を守る為意気込んで警備をしていたアレン

も戸惑いを隠せない。キルトが走っている方向にはティーシエルと、ナディアの二人しか

いないからだ。キルトの視線は、ティーシエルの方に向いている。

それに気付いたナディ

アは、一つの考えに至った。

「そ……そうか！アンタね！」

この男がきつと自分の財布を盗んだのだ。そして、財布の中の写真に付き、そこに写っ

ていたティーシエルを追っかけまわしているのだ。財布を盗んだ犯人と、誘拐騒動の犯人

がナディアの中で結びつき、怒りが沸々と湧き起こる。

「其が奏でし雷光を我が力をもって集結せん……」

ナディアの詠唱に気付いたティーシエルが、慌ててナディアを止める。男が自分に向かっ

てきている以上、自分も巻き添えを食らう可能性があるからだ。幾らなんでも、見知らぬ

男の為に魔法をくraitくは無い。しかし、制止の言葉はナディアには届かず、ナディア

の手から雷が放たれた。

「ライトニングディザスター！」

キルトは突然放たれた雷を間一髪で避ける。その時バランスを崩したのか、キルトは地面

に倒れこんだ。そこにつかつかと歩み寄ったナディアが、顔の真横に思いつきりヒールを

突き立てる。ナディアの目は完全に据わっており、今にも魔法をぶち込みそうである。キ

ルトは一瞬にして自分の身の危険を感じ取った。

「ナ……ナディア。いきなりどうしたんだよ」

「ティーシエル！コイツが私の財布盗んだのよ！——……ふふ、今から神の裁きを与え

てくれるわ」

ナディアの口元は邪悪に笑っている。その顔を真正面で見ているキルトにとっては、般若

のような顔に思えた。これ以上の災を防ごうと、ティーシエルがナディアの手を掴んで制

止をかける。キルトは横にいるティーシエルに気付き、勢いよく立ち上がりティーシエル

の手をとった。

「麗しの君……俺の命を、般若から助けてくれたんだね」

「何ですって!」

「何ですの、さっきから……」

仮眠していたガーネット達も、この騒ぎに気が付いたらしい。走って現場に駆けつける。

ナディアはキルトの暴言に対して腹を立てているが、ティーシエルはキルトがしている勘

違いに気が付いた。

「皆、この人僕を女と勘違いしてるんだよ!」

「ハハ、またまたそんな冗談を!」

「本当だぜ。今は偶々そんな服を着てるけどよ、コイツは男だ」

そう、ティーシエルはまだクリスティーヌの服のままなのだ。ニツクスは残念だったな、

とキルトの肩に手を置く。キルトはその事実打ちのめされたのか、ガックリしている。

そこを警備員が逃がすまいと、ぐるりと取り囲む。

「っと、落ち込んでる暇はなさそうだ。あばよ!」

警備員の頭を馬飛びするような形で飛び越え、キルトは去っていった。あつという間の出

来事だった為、一同は一体なんだったのかとポカンとしている。真先にナディアが我に

返ると、キルトが財布を持って行ったままだという事に気が付いた。

「アイツ、私の財布持って行ったままじゃない！——……あの身のこなし……きつとツアラの盗賊ってアイツの事だわ！ツアラに行きましょう！さあ、早く！」

ナディアにももの凄い剣幕で急かされ、ラフィスト達は旅の支度を済ませると、ツアラへ向かい始めた。

「おいよー……ツアラまで後どれくらいだー？」

歩いても歩いてもツアラらしき町は見えない。それどころか一面砂漠地帯だ。ついにニックスが弱音を吐き、ダウンする。

「ニックス！だらしないわね！それでも男！？」

「まあまあ、ナディア」

ナディアが泣き言を言うニックスに、活を入れる。ラフィストがナディアを宥めるが、ナディアの剣幕はこの間の一件から、ずっとこんな調子だ。その様子を見て、馬車の中に入っているマキノとガーネットが一体財布に何が入っていたのだろうと、ヒソヒソ会話する。

「ニックス、ダレルのもわかるけどさ……砂漠の途中にあるストロアートって町も過ぎた

事だし、後ちよつとだよ」

「本当か、ティーシェル！」

ニックスが嬉しそうに顔を上げると、前を歩いていたサードが前方を指差した。

「見ろ……あそこが大帝國ツアラだ」

薄っすらと大きな城と町の影が、ラフィスト達の視界に飛び込んで

きた。

ツアラに辿り着いた一同は町の外に馬車を止め、門をくぐる。流石大帝国と言われる国だ

けあって、立派で美しい町並みである。まずは宿を取ろうと、宿の中に入り予約を取る。

砂漠を歩きつくして皆クタクタであったが、これからの為にも情報収集をしておこうと、

頑張って町に繰り出すことにする。一人いきり立っているナディアにラフィストは近付く

と、キルトを探すのか彼女に尋ねた。

「当たり前よ!」

迷うことなく即答してくる。どうやら彼女は裁きを下さないと気がすまないらしい。ラフ

イストはそんな彼女に一抹の不安を感じる。ナディア一人だと何をするか分からないので、

結局ラフィストとティーシエルも仲間と別れ、彼女についていく事にした。彼の情報を手

に入れる為、裏通りに入り酒場の中へと入る。そこは傭兵やゴロツキが多いらしく、雰囲気

気はあまりよくない。

「すみません……緑髪の盗賊について知りませんか」

その中の一人にラフィストが尋ねると、男は酒をあと黙って手を差し出す。情報をよ

こせという事だろうか。ラフィストは幾らかの金貨を男の手に乗せた後、酒を注文する。

注文した酒を男に渡すと、気前の良さに気を良くしたのかペラペラと喋りだした。

「あー、緑髪の盗賊……ねえ。ここいらじゃ有名だよ……キルト、だろ？ 正確にあ盗賊じ

やなくて、トレジャーハンターつつうんだが……——」

「キルト？ キルトって言うのね！？」

男の話を遮るように、ナディアが叫ぶ。ナディアの剣幕に押され、男は簡潔に短い返事だ

けを返す。キルトの居場所について尋ねると、裏通りの二番街にいらるとの事だった。居場

所を聞いた途端飛び出していったナディアを追いかけて、ラフィストとティーシエルの二人

も酒場を後にする。辿り着いた二番街でも何人かに聞き込み、漸くキルトのいるらしい場

所に到着した。待ったの声をかける間もなく、ナディアによって家のドアが蹴り破られる。

ドアは勢いよく吹っ飛び、床に転がる。最早これでは再起不能だろう。

「うわ！ 何だ……って、げえ！」

中にいたキルトが奇声をあげ、後ずさる。

「覚悟は……いいかしら？」

手をバキバキと鳴らし、デモンストレーションをするナディア。体からはバチバチと魔力

の波動が迸り、呪文を放つ気で一杯である。流石にそれにはキルトも慌てふためいている。

しかも、突然の状況についていけず、半ばパニックに陥っているようだ。何とかナディア

を二人がかりで落ち着かせると、漸く魔力の波動が収まった。

「とりあえず、私の財布返して！」

ナディアがキルトに手をズイッと差し出す。キルトはナディアの手に、ポイッと財布を投

げた。財布が戻ってきた事で、ナディアは少し落ち着いたらしい。

先程までの剣幕はもう

なかった。

「それにしても少ない中身だなー……俺の方が、まだ持ってるぜ」

「ならなんで盗んだんだ？金に困ってる訳じゃないんだろ？」

キルトの言葉に、ラフィストが疑問の声を漏らす。キルトによると、暇つぶしと新しい刺

激を求めてらしいが、ラフィストにはイマイチその感覚が分からなかったたので無視した。

「――……そういえば、さっきの男が君の事、トレジャーハンターとかって言ってたけど……」

ど……トレジャーハンターって盗賊なわけ？」

ティーシェルの疑問も最もだ。ラフィストもナディアも、こそ泥と何が違うんだという思

いを心の中に抱いていたからだ。そんな三人にチツチと指を振ると、キルトはそんな狡い

奴らとは違うと言い出した。

「トレジャーハンターをそんなのと一緒にしないでくれよ。トレジャーハンターはツアラ

公認の冒険家なんだ。ほれ、証明書」

そういうと、キルトは一枚の紙を取り出して三人に見せる。キルトによると、トレジャー

ハンターとは傭兵の多いツアラ独特の専門職らしい。しかも上級クラスの人間にしか与え

られない特別な称号だ。普段は宝を求めて冒険するが、国や人の依頼を受けると情報を集

めたり、頼まれた物を持ってきたりするのだ。時には密偵を請け負う事もあるらしい。彼

らは依頼の難易度や達成度によって、更にAからEまでランク分けされる。A級ともなれ

ば自分で依頼を選ぶ事が出来るし、何か不祥事を起こしても国がそ

れをもみ消してくれる

ほど高待遇だという。俗にいう裏家業の専門職なのだが、表向きの体裁の為一般にはトレ

ジャーハンターと呼ばれている。

「情報……って事は色々な事に精通してるって事？」

「まあな。――……この国で、俺以上に情報に詳しい奴はいないな。……アンカース調

査団さん」

キルトの言葉に、三人は驚きをみせる。

「おいおい、何で知ってんだみたいな顔は止めろよ。これでも腕には自信があるんだ。そ

の俺を物ともしないで攻撃かまして来る相手の事くらい、ちゃんと調べるぜ」

あれからラフィスト達はすぐツアラへと向かったので、キルトに殆ど調べる時間など無か

ったはずだ。それなのに、さらっとラフィスト達の正体について言い当てる。情報に詳しい

いという彼の言葉に疑いようが無かった。

「キルト、だよな。――……一つ聞きたいんだが……この国で船を出してもらおうと思

ったら、どうすればいい？」

ラフィストがキルトに尋ねる。彼ほどの情報力ならば、当てが見つかるかもしれないと踏

んだからだ。キルトがそうだな、といった後でもったいぶる。そんなキルトをナディアが

睨み、さっさと答えなさいと脅す。

「ま、あんたらには借りがあからな。答えてやるよ。……アンカース方面行きて事な

ら、どんなに頼み込もうがまずどこの船も出ない」

思った通りの答えにがっかりする。キルトはだが、というと言葉を

続けた。

「俺が同行するって形で、直接口を利けば……一つ、当てが無い訳ではないな」

「ほ、本当か！」

「……嘘じゃないでしょうね」

「この期に及んで嘘言うかよ。……本当だ」

キルトの言葉に三人は顔を見合わせて喜ぶ。彼の言う事が本当なら、早く仲間に知らせなければと口々に喋りだす。

「おいおい……誰も同行するとは言ってねえぜ」

「頼む、キルト。協力してくれ！」

ラフィストがキルトに頭を下げる。真っ直ぐ過ぎるラフィストの態度に、キルトは溜息をつくと、いいぜと言葉を返した。

「……あんたらの旅に同行しても。コイツ可愛いし、アネさんは怖いけど美人だしな。潤

いがあれば、俺は構わねえ」

キルトの返事にラフィスト達は喜びを見せる。そんな三人を尻目に、キルトはティーシェ

ルの方をマジマジと眺め、やっぱりコイツ性別間違えて生まれてきてるよな、と呟く。キ

ルトを仲間の元に連れて行こうと、ラフィストが宿に一緒に来てくれと言うと、キルトは手早く荷物を纏めだした。

「さ、行くかハニー！」

準備を終えたキルトは、ティーシェルの肩に腕を回す。不快な顔したティーシェルが腕を払いのける前に、ナディアによってキルトの手が抓られ、払いのけられる。

「俺ってば、アネさんに嫌われてる?」

「アンタ……もしかしてアネさんって私の事？」

「そうけど？」

「はー！？な、何でなのよ！」

「だって……何か、なあ……」

キルトは言葉を濁してはいるが、その目は人の手に負えなさそうだと、極悪的な強さが

ありそうだと言っている。ナディアもキルトのそんな視線に気付いたのか、不機嫌な顔を

している。隙あらば呪文を放ちそうな勢いだ。

「ナディア、落ち着いて」

「へえ、アネさんナディアっての？ところでハニー、君の名は？」

「ハニー……？」

ナディアがキルトを射殺しそうな目で睨む。

「いやいや、失礼。アハ」

「僕はティーシエルⅡミッドウェー……で、彼が」

「ラフィストⅡブレッセントだ。よろしくな、キルト」

「ティーシエルか！いい名前だ！……あ、ラフィストもよろしくな」

キルトは至ってマイペースな上、上機嫌である。

「ほら、とつとと行くわよ！」

「はーい、アネさーん」

「……」

そんな事ばかり言ってるから、アネさんなんて言われるんだナディア、とラフィストとテ

ィーシエルは思ったが、そんな事は口が裂けても言える訳が無い。

言い争いを始めながら

先へ行ってしまったナディアとキルトの後ろ姿を見ながら、これから先の事に気を重くす

る二人であった。

一十八章 一く優しい音色に

宿の部屋の中、マキノがベッドに座っている。手には生肉を持っていて、プギューに餌を

あげているところのようだ。先程から皆遅いよね、とか何やってんだろうとか呟いている

が答えが返ってくる事は無い。プギューと二人、留守番をくらっているのである。プギュー

ーがプギューンと一鳴きすると、マキノはプギューに美味しい、と語りかけた。

「プギュー」

「生の肉、よく食べられるよね。さーすが、ドラゴン」

最後の肉を与え終え、マキノの手が空になる。ごろんとベッドに横になり、マキノが目を

瞑る。時計の音だけが、虚しく部屋に響いている。何とも言えない気持ちだが、マキノの中にこみ上げてくる。

「プギュー。私さー、本当にここにいていいの？」

「プギュー？」

プギューがフワフワとマキノの傍に寄ってくる。寄ってきたプギューーを抱きしめ、マキノは独り言を続けた。

「私、半ば強引に仲間になっちゃったし、このメンバーでの役割も何かよくわかんないし、

私がこの旅に参加してる意味も……」

わからない、その言葉を紡ぐ代わりに、プギューを強く抱きしめてうつ伏せになる。腕の

中のプギューは、鳴きながら苦しそうにもがいている。しまいには、

苦しきのあまりマキ

ノの腕の中から飛び出して行ってしまった。

「プギュー！……プギューまで行っちゃった」

ふう、と溜息をついた時扉の開く音がした。誰かが帰ってきたと思い、慌てて起きる。中

に入ってきたのはサードだった。変な気持ちを表に出さないよう、マキノは努めて明るく

話しかけた。

「おつかえり！どうだった、情報とか？私、皆がいなくてつまらなかったよ！私も一緒に
行きたかった！」

サードは何も返さない。口数の少ないサードにしてみればいつもの事なのだが、今のマキノにはそれも癪に障って仕方が無かった。心の中で、何よいつも感じ悪いんだからと悪態をつく。そうだ、大体こっちが明るく話しかけても、どうせ頭の中はガーネットで一杯な

んだ。一度そう思ってしまうと、感情があふれ出してくるのを止められなかった。

「……私で、悪かったわね」

サードに聞こえない位の大ききで、マキノはポツリと呟く。言ってしまうってからハツとした。こんなの、いつもの自分ではない。

「そうだ、ねえお腹空いてない？何か食べる？」

「いや……」

必要最低限の会話。これできっと、サードは自分の部屋に戻るのだろう。私と話すより、

剣の手入れをしている方が、よっぽど有意義なんだ。そう思うと、さつきしまいかけた感

情が再び沸き起こってくるのを感じる。

「お前は。いつも元気だな」

そう言い残して、サードが部屋を出て行った。頭の中に木霊するサードの言葉を、マキノ

は否定する。いつも？……違う。元気だな……そんな訳は無い。お前は――

「違う！」

枕を思いっきりドアに投げつける。ドアに当たった枕がボスツと落ちる。何してるんだろ

うと思った時、変な汗をかいている事を自覚する。息が荒くなり、苦しくなる。このまま

ここに、居たくなかった。気が付いた時には、既に宿を飛び出していた。

「おーっす、ただいまー！」

ラフィスト達に続いて、情報収集に出ていたニックスとガーネットも戻ってきた。サード

も一緒に行ったはずだが、先に戻ってきていたらしい。ラフィスト達がキルトを連れて戻

った時には、既に部屋にいた。

「おかえり」

「あ？……コイツ誰だ？」

「キルト＝ラージェンス。これからあんたらに協力する事になった。よろしく」

キルトは簡潔に挨拶を済ます。ニックスの後ろにいたガーネットに気付いて視線を移すと、

いきなり立ち上がりズカズカと歩み寄った。

「よろしく！君の名は？」

「ガ、ガーネットですわ……」

「ガーネットオー！美しい！君は谷間の百合より美しい！——：

君に比べれば、同じ
名の宝石も色褪せてしまうほどだ！」

「な、一体何ですの……」

「気にしなくて良いと思うよ。多分一種の病気だから」

キルトのテンションにドン引きしたガーネットにティーシエルが突っ込む。それを見てい

たナディアがラフィストの肩に手を置き、ライバルが増えたわね、とからかう。

「あ、ところでアイツは？いないのか？」

ニックスの言葉に、いつも真っ先に飛び出してくるマキノを思い浮かべ、そういえばと思

う。ナディアはどうりで今日は寂しい訳だと言っているし、ティーシエルは留守番してた

んならないのっておかしいよねと漏らす。

「まさか……」

「どうかしたのか、ニックス」

「出たのかもしれない」

ニックスのブツブツと切ったような言葉に、一同は疑問の声を上げる。再び、出たんだよ

アイツのと言うと、ニックスは話し始めた。

「アイツ、普段は明るいけど数年に一回位、何ていうか……感情の激化が起こるんだ」

「な、なんで？」

「昔、アイツに何かあったみたいでさ。——……俺がトラートに来る前の事だから、何

があったのかは知らないけど……アイツ、過去を思い出したくない節があるみたいなんだ。

昔貰ったプレゼントの話とかになると、急にいなくなるし。多分、一種のトラウマだよ」

そんな風には見えなかった事もあり、皆は驚いている。サードは相変わらず話に興味が無

いのか、窓の向こうを見たままだ。

「その症状が出ると普段思っていない事とか、えっと……ひがいもーもー？」

「被害妄想」

ティールが訂正を加えると、ニックスはそう、それと叫ぶ。

「そのひがいなんたらが強くなってよ。……鬱病みたいになって、しばらく人形みたいになってる」

「マキノ、可哀想ですわ……」

でも何でいきなりその症状が出たんだろうと言うと、ニックスは何かきっかけがあったはずだと答える。ラフィスト達がキルトを連れて来た時は既にマキノ

はいなかったし、今帰

ってきたばかりのニックスたちは言わずもがな、だ。会った可能性があるのは、残るはサードだけだ。

「サード、お前マキノに会ってない？」

「会った」

「何か、言ったのか！」

窓の外を見ていたサードが漸くこちらを振り向き、何もと答える。

その様子に、それだけ

じゃねえだろとニックスがくっつかかる。

「本当に何も言っていない。マキノは何か色々言っていたが……。それと、部屋を出る

時に、お前はいつも元気だなと言っただけだ」

ニックスの表情がみるみるうちに変わり、サードの襟首を掴み上げる。

「てめっ……」

「ニックス、落ち着けて！」

「マキノが大事な君の言い分も分かるけど、別にサードは傷付ける事を言った訳じゃないだろ？事情だって知らなかったんだし、これじゃ単なる八つ当たりだ」

ラフィストとティーシエルが二人がかりで抑えるが、簡単にティーシエルが吹っ飛ばされる。キルトも見えてないで止めてよ、とティーシエルに言われたキルトが訳も分からず止めに入り、漸くニックスを抑える事が出来た。

「マキノは淋しがりなんだよ！……サード、お前もう少し愛想良くなったらどうだよ！」

「そんな事、お前に言われる筋合いじゃない」

サードが話は終わったとばかりに、再び窓の外に視線を向ける。サードを睨んでいたニックスが、サードの様子に荒い息を二、三度吐くと黙り込んだ。

「もういい、放してくれ」

ラフィストとキルトが恐る恐る手を放す。

「マキノは、お前にも明るくして欲しかったんだ。そりやお前にだって過去がある。何で

そんなに愛想が無いのかだって知らない。……けどよ、あいつが話しかけた時くらい返事してやってくれよ」

ニックスが部屋の扉を開ける。

「俺、探してくるわ！マキノが迷惑かけてすまん！……先に夕飯食っててくれ！」

「あ、おい……待て！」

走っていきかけたニックスを、後ろからキルトが呼び止める。振り返ったニックスに、キルトが何かを放り投げた。慌ててニックスがそれをキャッチする。

「この町の地図だ。お前に貸してやる！……闇雲に探すより、行き
そうな所を探した方が

良いからな！ほら、日も暮れてきてんだし、さっさと行け！ここは、
夜は危険なんだ。早

く見つけて帰ってこい」

「ありがとな！」

地図を片手に、ニックスが走っていく。段々足音が小さくなり、消
えていった。

「なあ、やっぱり俺達も探した方が良くないか？」

ニックスを行かせたものの、やはりマキノの事が気になりラフィス
トが皆に相談する。そ

れをナディアが引き止める。ニックスの気持ちを思い、彼一人に任
せるべきだと思ったか

らだ。そこをキルトがはやし立てる。

「よっ、流石アネさん！」

「アンタ……」

「ナディア、アネさんですの……？」

「キルトが勝手に言ってるのよ！」

「だって、アネさんだろ」

キルトの答えに一同は心の中で頷く。ナディアはそんな事無いわよ、
とキルトに反論して
いるが、キルトはそれを全然聞いちゃいない。

「それよりも……あんた、サードってったっけ？その剣と風貌から
察するに、大体アンタ

の事情はわかるけど、今はこいつらの仲間なんだろ？あのマツチヨ
の言う通り、返事して

やるくらい、バチは当たらないと思うぜ」

キルトはだんまりを通してしているサードに話を振る。最後に、まあど
うするかは確かにお前

の勝手だがな、と付け加えるがそう告げる言葉は厳しい。

「なあ、サード。キルトの言う通り、俺達は仲間なんだ。サードにはサードの事情があるし、人の事なんて煩わしいだけだって言いたいのも分かる。でも、それじゃ一緒に旅をしている意味なんて無いだろう？……それだけは、分かって欲しい」確かに、目的だけを同じにして集まったのかもしれないが、それで済ませてしまう繋がりでは、ラフィストはこの先やっていけないと思う。少しでも仲間であるという事を理解してもらおうと、ラフィストはサードに訴えかける。どこまで通じるかは分からなかったが、ラフィストは言わずにはいられなかった。

無我夢中で走った後、気が付いたらマキノはオルゴール屋の前に立っていた。店の中に入ると、店中オルゴールの優しい音色に溢れている。そのうちの一つに、目が留まる。蓋を開けてみると、懐かしい音色が流れてきた。どこかで聞いた事があるなと思い、ぼんやりそのオルゴールを眺めていた。しばらくすると、店の主人がマキノに話しかけてきた。

「お客さん、それがよっぽど気に入ったみたいだねえ……」

店の主人は優しく声をかけてくれたが、マキノは何と答えたらよいか分からず何も言葉が

出てこない。俯きかげんなマキノに、店の主人が何か辛い事でもあったのかと思っただけで、オルゴールをマキノの手に握らせた。

「ほら、これを特別にプレゼントしてあげるから元気を出しなさい」

「えっ!?!?……悪いです……」

「いいんだよ。それに私はこのオルゴールを気に入ってくれて、嬉しいんだ。そのオルゴールは、娘の好きだった曲だからね」

「好き……だった?」

視線を手に握らされたオルゴールに落とす。今の言い方では、もうこの世にはいないようではないか。そう思い、店の主人を見ると、三年前に流行り病で亡くなったという返事が返ってきた。店の主人の言葉に、急に自分の父親を思い出す。マキノの異変に気付いたらしい主人がどうかしたのか尋ねてくる。いつの間にか泣いていたらしい。目からこぼれる涙に気付き、涙を拭った。その時、店のベルが鳴り誰かが飛び込んでくる。

「マキノ!」

「ニックス!?!」

「やっぱりここだった……ほら、帰ろうぜ」

「嫌! 帰りたくない!」

差し出したニックスの手を、マキノが払いのける。

「どうしたんだよ。――……サードも、お前の事分かってくれたみたいだし、もう大丈夫だって!」

「違う……違うの! サードが悪いんじゃない……何ていうか、怖い。……一人でいるのが嫌」

「……あのよ、昔に何があったんだ?」

話したくなけりゃ話さなくてもいいけどよ、話した方が楽になるぜと言いながらニックス

がマキノに尋ねる。マキノはニックスの優しい口調に、ポツポツと

話し始める。

「ニックス、私のパパの事知ってるよね？」

「ああ、確か十年前に亡くなったんだっけ……」

「パパが死んだの、私のせいなの」

マキノの母親が、一時期仕事で家を留守にしていた時があったらしい。その時、マキノは

父親と二人で家に住んでいたそうだ。六歳の誕生日の時も、二人で祝っていたのだという。

「その時ね、私おねだりしたの……オルゴール買って、って。パパは笑ってオツケーして

くれた。パパが町へ買いに行った時、私は一人で留守番してた。……でも、夜になっても

パパは帰ってこなかった。——……次の日になって、村の人からパパが死んだって聞いたの。私、思ったわ……——オルゴールなんておねだりしなきゃ

良かった。そうすれば、

パパも死なずにすんだのに……って」

その事を思い出すから、マキノは一人でいたくなかったのだろう。

ニックスはそんなマキノ

を安心させるように、マキノの手を強く握った。

「大丈夫だって！俺達はいなくならないしょ！ほら、触れるだろ？」

「ニックスう……ありがとう」

マキノが涙をポロポロ流す。そんなマキノの額を指でピンツと小突くと、ニックスはそんな

な顔すんなってと告げる。

「お礼を言いたいのは、こっちの方なんだぜ？」

「え？」

マキノが顔を上げ、目をパチパチさせてキョトンとした表情をする。

「お前のおかげでラフィストに会えた！他の皆だって、良い方向に変わっていったる！お

前と話す時のガーネットは元気そうだし、ティーシエルも最近角が取れてきた。ナディア

だってお前がいないと淋しいって言ってる」

「そ……そうかな？」

「そうだぜ！」

ニックスの言葉にマキノの心の中が温かくなっていく。さっきまで居場所とか、考え込んでいた自分が馬鹿みたいだ。そう思うと、自然と顔に笑みが浮かんでくる。

「ニックス、店長さん……ありがとう！」

店のおじさんに礼を言って店を出る。暫くしてから、マキノがポツリと話を切り出した。

「パパの話、実はアレで終わりじゃないの」

「え？」

「あれは私が一人でいるのが怖い理由。……私が明るい理由は」

「マキノ、言いたくないなら……」

「聞いて欲しいの！……ニックスには」

ニックスはマキノのニックスには、という言葉をきいて舞い上がっている。そんな事には

気付かず、マキノは話を続けた。

「その後で、パパの遺体が戻ってきて……それで」

十年前の事をマキノが思い起こす。戻ってきた父親の遺体。夜盗にでも襲われたのだろう

か、遺体には傷がいっぱい付いていた。しかし、その手には約束のオルゴールが、しっかりと握られている。

「オルゴールなんて要らない！マキノとお話してよ！パパー！」

父親の遺体の傍で小さいマキノがわあわあと泣き喚く。そんなマキノを、連絡を受けて戻ってきた母親が強く抱きしめた。

「マキノ、しっかりしなさい。パパはもういないの、いないのよ……」

「ママ……マキノが良い子にしてたら、パパは戻ってくる？」

ねえ、とマキノが問いかけても母親の返事はない。何かに堪えるように、ひたすらマキノを抱く力を強めるだけだ。

「じゃあ、マキノが良い子でいたら返事してくれるかな？」

「マキノ？」

「だってパパ、マキノと口利いてくれないんだもん。マキノが悪い子だからでしょ？パパ、怒ってるだけでしょ？」

まだ六歳の子供に、死を理解させるのは無理だと思ったのだろうか。母親のすすり泣く声

が次第に大きくなってくる。この時のマキノには、どうして母親が泣いているのか分から

なかった。分かるのは、父親の返事がないという事だけだ。

「だから私は……返事が全くないと、思い出しちゃうの。怖いの」
脳裏に父親の遺体が浮かんでくる。それを振り払うように、フルフルと二、三度首を振る。

ニックスはそんなマキノを見て、そんな事があったのかと呟く。

「でも、もう大丈夫よ！だって、ニックスや皆がいるもの！」

「マキノ……」

こう言って、マキノが吹っ切れたかのようにニッコリと笑った。良い雰囲気になった事を

感じ取り、ニックスは頭の中で悶々と考える。ここでやるべき事は、俺が一生ついてや

るとか言って抱きしめる事だと、勝手に決意する。実行しようと口を開くと、ニックスの

声は思いつきマキノにかき消された。

「あのね！それに、いつかきつとカツコイイ……そう、王子様みた

いな人が来て、私を攫

っていつてくれるのよ……！」

「へ……王、子様？」

ふと自分の足元、手、髪を見る。ボロボロの靴、マメだらけのゴツイ手、真っ黒の長い髪。

自分と世にいう王子様像とは、あまりにもかけ離れているような気がする。

「どうしたの？ ニックスもちゃんと結婚式に呼んだげるよ！」

いきなり除外通告され、呆然と突っ立っているニックスの手をマキノが取る。

「ニックスって何かパパみたい」

これが完全に止めとなり、ニックスの魂が衝天しかける。そんなニックスに気付いた様子

もなく、マキノはニックスの手を取って宿への道を駆けて行った。

一十九章 一〇 出航

先に食事をとっているのも憚られたラフィスト達は、ニックス達の帰りを待っていた。会

話はなく、時計の音だけが部屋に響き渡っている。外が暗くなり、街灯が灯り始める。キ

ルトの、夜は危険と言う言葉が気になるのか、一同はチラチラと時計をばかり見ていた。

「二人とも……遅いね」

「あれ？ ハニー、もしかして二人の事心配してるの？ 優しいな、ハニーは」

俯き加減にポツリと呟いたティーシエルの言葉尻を拾い、キルトがあっけらかんと喋りだ

す。雰囲気になぐわぬ言葉の調子と、その中身にきれたナディアが、キルトの背中に蹴

りを入れる。

「アネさん……」

もしかしてご機嫌斜めというように、キルトがナディアの顔を伺う。そんなキルトをナ

ディアは一睨みすると、もう一発蹴りを入れた。

「キルト、あんた私の事アネさんって言うの、止めなさいよ！……」

私はアネさんじゃなく

て……——」

「アネさん」

ナディアがキルトに制裁と言わんばかりに魔法を放とうと、詠唱を始める。こんな宿の中

で呪文なんて放たれては、店の人も俺達もたまったもんじゃない。必死にナディアを宥め

ていると、部屋の扉が開く音がした。

「よ！待たせたな、皆！」

「ニックス！マキノも！……大丈夫かい、マキノ？」

「うん、もう大丈夫！」

ニックス達が戻ってきた事で、騒ぎが収まり皆がニックス達の元に集まりだす。皆が口々

にマキノに声をかける中、サードがマキノの前に歩み寄った。

「なあに、サード？」

「……——さっきは、悪かった」

サードなりに精一杯歩み寄ったつもりなのだろう。言い終えると、照れくさそうにそっぽを向いてしまった。サードの言葉に、言われたマキノも周りで見た一同も、間の抜けた表情をする。

「な、何なんだ！その顔は！」

皆の態度に、サードが不機嫌そうな顔をする。それとは対照的に、皆の顔は段々からかう

様な、嬉しいようなといった顔になっていく。

「え、いやあ……——」

「サードでも、謝る事があつたんだな……って」
な、と一同が口々に言う。

「……俺だって、謝る時は謝る」

サードがムスツとして、近くにあったソファーにどかっとな腰を下ろした。この様子では当

分機嫌は直らないかもしれない。ラフィストは怒らせてしまったかな、と苦笑しながらも、

遅くなったけどご飯を食べに行こうと皆を促した。

夕食後、再び部屋に戻ってそれぞれ思いの場所に座っている。ラフイストは、マキノは全

然知らないだろうし、キルトに会いに行った三人以外は彼の事をよく知らないと思ったの

で、彼にもう一度自己紹介してくれるよう頼んだ。キルトはおう、と短く返事をする、

皆の真ん中で立ち上がった。

「じゃ、改めて名乗るが……俺の名前はキルトⅡラージェンス。歳は二十歳だ！んで、職

の方はA級のトレジャーハンターで……——」

「やってる事はこそ泥と一緒にだけどね！」

「アネさん、人の話の途中で口を挟むなって！……しかも、こそ泥なんかと一緒にするな

ってあれほど言っただろ」

キルトが口を尖らせ、ブルーとナディアに文句を言う。

「元は何なんだ？」

サードがさっさと話を進めるとばかり、強い口調で問いたです。

「ん、元の上級クラスって事？それでも一応、武器全般極めてるんでね。バトルマスター

からトレジャーハンターにチェンジした」

あ、使ってる武器とか見る、と言うと、キルトは持ってきた荷物を漁りだす。この辺に入

れたような、と武器の場所をうる覚えな彼に、一同は啞然とする。

こんな調子で、突然敵

に会った時どうするんだろうと、言い知れない不安も込み上げてきた。荷物の中から、ナ

イフや吹き矢がポイポイト、どんどん投げ出されていく。漸く目的の物を見つけると、ラ

フイスト達の前にそれを見せた。

「これが俺のメイン武器、ライジング・サンだ」

こう言ってキルトが見せた物は丸い形に刃が付いた、一種のブーメランのような物だった。

色々なブーメランを見てきたが、こんな形状の物を見るのは初めてな気がする。もしかしたら、特注品なのかもしれない。

「ふうん、これがライジング・サンかあー」

武器を見るニックスの視線に、キルトが不機嫌な顔になる。

「おい、マツチョ！」

「マ、マツチョって誰の事だー！」

お前だよ、お前とキルトは言うのと、更に言葉を続ける。

「お前、今これ見て弱そーだと思っただろ？」

キルトがニックスの方を睨む。自分の武器を馬鹿にされて、腹を立てているのだろう。ニ

ックスはマツチョ呼ばわりされた事に腹を立てていたが、キルトの言葉が図星だったのか、

目を逸らしながらそんな事は無いと否定する。誰の目から見ても、それが嘘だというのは

明らかだった。そんな分かりやすいニックスの反応に、馬鹿正直な奴とマキノが呆れて溜

息をつく。そんな中、一人興味深そうに武器を眺めていたサードが、何かに気が付いたら

しい。皆を呼び、ここに名前が彫ってあると指をさした。

「これは……フォートレスの公用語だね。えっと、デイー、テ……
——っ！」

書かれた文字を読み上げたティーシエルが驚きの声を上げる。

「デイーテって、あの人……だよな？」

「あれ、お前らじいちゃんの事知ってんのか？」

マキノの言葉のニュアンスに、デイーテとラフィスト達が知り合いだという事を感じ取っ

たらしい。そんなキルトの疑問に答える為、俺達の武器も彼に作っ

でもらったのだとラフ

イストが説明した。

「ちよっと待って！……キルト、アンタ今じいちゃんって言ったわよね？」

眉を寄せて、ナディアが疑問の声を漏らす。それにさも当然と言うかのように、キルトは

ああ、だって俺のじいちゃんだしなと答えた。余りに飄々と言われたからか、ラフィスト

達の思考回路が一時停止する。

「えっ……じゃあ、キルトはディーテさんの……孫？」

「おう！」

漸く絞り出した言葉に、キルトがあっさり返答する。ラフィスト達は信じられない気持ち

で一杯になっていたが、何故かティーシエルは一人だけ納得していた。あのキキナナ湖の

加工場を思い出したからだ。物が乱雑に置かれ、食品関係と爆薬関係をごっちゃにしてい

るディーテと、荷物に武器を適当に突っ込んでいるキルトに血の繋がりをを感じ取ったのだ。

ああ、変な所ばかり遺伝しなくても良いのにとと思うと、何やら悲しい気分になってくる。

「これ作ったの、ディーテさんなんでしょ？何か、他の使い道もあるの？」

マキノが尋ねると、キルトが返事代わりに取っ手の出っ張りを押す。すると、一本の長い

刃がビュッと伸びてきて、剣のようになった。

「す、凄い！」

「これは俺の為に直・間両用に作られててさ。普段はブーメランのように飛ばすんだが、

接近戦になった時はこうして剣代わりにして戦う」

「便利だ……」

さっきまで馬鹿にしていたニックスも純粹に驚く。

「出発する準備が出来てるなら、船の件は明日にでも交渉してやるよ。アイツにゃ貸しが

あるし、恐らくタダで船に乗れるぜ」

キルトの頼もしい言葉に、一同は喜びの笑みを見せる。皆の様子にキルトは気を良くした

のか、ティーシエルとガーネットの肩に手を置き、自分の方に引き寄せた。

「ま、これもみんな可愛いハニーや姫君の為だけだなー」

ああ、両手に花。可愛い子がいると潤いがあっていいなあと、キルトは一人別世界に浸っ

ている。ガーネットは突然の事に戸惑っているが、ティーシエルは半ば諦めたのか、僕は

ハニーじゃないだとブツブツ文句を言いながらも、別段気にした様子は無い。必要以上

にベタベタするキルトにきれたのは当の本人達ではなく、先ほど怒りを静めたばかりのナ

ディアであった。ラフィストが慌ててナディアを羽交締めにし、サードが二人からキルト

を引き剥がすと、これ以上騒ぎが起きないようにそれぞれ部屋に戻る事にした。

朝ラフィストが目覚めると、既にキルトが起きていた。準備もばっちり整っているらしく、

いつでも出れる感じになっている。

「おはよう、キルト」

「ああ、おはようさん」

キルトとティーシエルを一緒に部屋にするなどナディアに言われた事もあり、キルトはラフィストと同じ部屋で寝る事になった。残りの三人は隣の部屋で寝ている。ニックスの鼾が壁越しに聞こえるので、まだ寝ているのかもしれない。壁を通して響くニックスの鼾に、ラフィストは苦笑しながら同室の二人は大変だろうなと思う。この鼾でも起きないのだから、眠りが深いのかもしれないが。そう考えた時、サードが比較的朝起きるのが遅い事に気が付いた。

「ニックスは昔からだけど……サードもよく寝るよな」

誰に尋ねる訳でもなく、ポツリと呟く。答えが返ってくる訳でもないので、独り言のつもりだったのだが、キルトから返事が返ってきた。

「そりゃ、出身によるものだろ」

何か含みを持たせたような言い方に、ラフィストが疑問を持つ。そういうえば昨日も事情は察するとか、言っていた気がする。キルトはサードについて何か知っているんだろうか、とラフィストは思った。

「昨日もそうだったけど……キルトはサードについて、何か知っているのか？」

あー、とキルトが言い、言おうかどうか考え込む。けれど、教えても大丈夫かと思ったのだろう。キルトがあくまで予測だけだな、と言いながら喋り始めた。「アイツ、色も白いし暑がりっぽいからな……北国出身じゃないか」と思って。北国の連中は、睡眠時間が結構長いらしいからな。それにあの剣、大剣だろう？ 大剣使いの魔法剣士は、

あるお国の騎士団で多く見かけるもんでね……とまあ、こう考えりや自ずと出身なんて絞

れてくるもんさ。サード以外は、皆グラン大陸出身だろ。風貌や訛りで大体の出身地も絞れるぜ？ 当ててやろうか」

「そ、そんなもんなのか？」

俄かに信じられず、ラフィストが半端な返事を返す。キルトは敏感にそれを察知し、はは

ーん、お前疑ってるなさては、と呟いた。

「まず、お前はグラン南部出身だろ。あそこにヤリユートかホールスがあるが、訛りもそ

こまでどぎつくないし、ホールス辺りか？ 姫君は綺麗な公用語だし、ありゃバリバリのグ

ラン出身だな。ニックスとマキノは格好からしてトラートの武闘家って感じだし……あ、

でもニックスもグラン南部の訛りあるな。さっきの言葉と言い、もしかしてお前と同じ出

身か？ ハニーはどの公用語にも比較的通じてる感じから、カダンツだな。アネさんはツア

ラとグランが混じったようなイントネーションするからランツフィートか？」

どう、とキルトが尋ねる。ナディアの出身までは知らないが、他は確かにキルトの言う通

りだ。しかもニックスが元々はホールスにいた事まで言い当てている。改めて情報力って

凄いな、とラフィストは感心する。もし自分にキルト位の知識があったら、もっと以前に

サードの事を知る事が出来たかもしれない。そう思うと少し情けなく思い、その事をキル

トに漏らすと、キルトはここまで分析出来るのは俺だからだと言っ

て慰めてくれた。

「それに、知らないから出来る事っていうのもあるしな……と、そろそろ起こした方がよくないか？」

「そうだな……あ、キルト」

「ん、何だ？」

部屋を出かけたキルトが振り返る。

「さっきのサードの話……出来ればサード本人が話すまで、言わないで欲しいんだけど」

ラフィストの言葉に、キルトは頷きながら色々とか何かあるみたいだしな、と返事を返す。

そして船に乗り込む為、まだ眠りにについている一同を起こしに向かった。

キルトに案内され、一同は港を目指して歩いていた。いよいよ世界樹の元へ向かうという

事でラフィスト達は緊張していたが、キルトは暢気なもので、鼻歌など歌っている。そんな

なキルトに、ナディアが何か気になる事でもあったのか、キルトに話しかけた。

「あのさ、アンタ二十歳よねえ……」

突然年齢について聞かれて多少驚きつつも、キルトはそれが、と答える。

「私、まだ十九歳よ」

「え……!？」

「そうそう」

横からマキノが口を挟み、うち何だかんだいって二十歳なの、サードとキルトしかない

んだよねと言う。その事実を聞いたキルトが、驚きの声を上げた。そして、信じられんと

ばかりにサードとナディアの方をマジマジと眺める。その視線を受け、不機嫌な顔をした

サードが悪いか、と返す。ナディアはそんな事は気にせず、だからアネさんって呼ぶのはおかしいでしょとキルトに返した。

「いや、全然？」

きっぱりと言い切られてしまった事で、ナディアも流石に諦めたらしい。もう好きに呼びなさいよと言うと、黙って歩き始めた。暫くすると、港らしきものと、何艘かの船が見えてくる。キルトはその内の一つに近付き、船の傍に立っている人物に話しかけた。

「よし、グラン！儲かってるか？」

声をかけられた人物、グランは振り返り、自分の後ろにいる人物がキルトだと認識すると、

何やら嫌そうな顔をして逃げ腰になる。

「げっ……キ、キルト！」

「あのよう、グラン。頼みがあるんだが……——」

「い、嫌だぞ！」

キルトが話を切り出す前にあっさりと断られてしまう。大体、お前が持ち出してくる話は

ロクなのじゃないんだと、文句も忘れない。

「ねえ……何か話が違わない？」

「船、タダで乗れるんじゃないかってっけ？」

何やら不穏な話の流れに、キルトの後ろで一同がボソボソと耳打ちをする。しかし、断ら

れた当の本人であるキルトは、至って余裕といった表情だ。

「グラン、確かお前に一万ギル位貸してたよな……——」

「なっ……何だよ！今度は脅しか!？」

俺は脅しには屈しないぞ、と荒い剣幕のグランに、キルトはまあまあ落ち着けと言い、次の言葉を発した。

「あれ、チャラにしてもいいぜ？」

「えっ!?!……マジか？」

キルトの言葉が予想外だったのか、グランが間の抜けた声を出す。ただし、条件があるけどなどキルトは言う、急にグランが身構えだした。

「何、そんな大した事じゃない。……実は、こいつらがアンカース方面に行きたいらしい

んだが、このご時世だろ?どこの船も出ちゃいない。だからお前の船を貸して欲しいんだ

よ、勿論操縦者のお前付きで」

「えっ!こいつら乗せてやるだけで一万ギルちゃら……か?アンカース方面っていうのが

何だが、それでも……うん。——……よし、その話のった!」

「ま、こんなもんだろ……おい、ボサツとしてないでさっさと乗れよ!」

「え?本当に良いのか?」

ラフィスト達がボソボソ話している間に話がついたらしい。操縦者であるグランがもう出

航していいんなら乗れよ、と言ってくる。ラフィスト達は船の中に乗り込み、世界樹の島

に向けて出発した。

「き、気持ちが悪いですわ……——」

顔を真っ青にしたガーネットが、船の縁に凭れ掛かり、潮風に当た

って気分を紛らわしている。ラフィストはそんなガーネットの背を撫でてやると、ガーネットは大丈夫だといって気丈に微笑む。ティーシエルは相変わらずの口調で、酔い止めを飲まないから辛い思いをするんだと文句を垂れている。普段のガーネットならば反論する所だが、そんな元気も無いらしい。キルトが船酔いしてる君も素敵だよと、訳分からない事をガーネットの隣で騒がしく言っている。それが響いたらしく、うっと気持ち悪そうにすると、ガーネットはキルトを追い払う仕草を見せた。

「おい、ラフィストー！ サードがそろそろ話し合いをしないかって言ってるぞ」

船室の入口から、ニックスがヒョッコリと顔を出す。それに頷き、ガーネットに声をかけるが、ガーネットはまだ辛いらしく、ここで気分を紛らわせていると答えた。

「ガーネット、辛かったらいつでも俺に言ってくれよ」

「ええ、ありがとう……ラフィー」

ガーネットを一人残していくのは心配だったが、ガーネットがもう少しここにいたいと言

うのでは仕方が無い。ラフィストはガーネットに声をかけた後、船室へ急いだ。船室に入

ると、サードがガーネットはどうしたと尋ねてくる。気分が悪いからもう少し潮風に当た

ってから来る事を伝えると、サードは眉を寄せながらも先に話始めるか、と切り出した。

そんなサードの様子を見て、話し合いそっちのけでマキノとナデアが、あれ、絶対ガー

ネットの事気にしてるよねと囁きあっている。

「そもそも、好きならもっと素直に……——」

「言いたい事はそれだけか？」

会話している二人の後ろから、突如声が聞こえる。さっきまで別の場所に座って話をして

いたサードが、二人の真後ろに立っていた。その声は毒味を運び、酷く不機嫌な様子を伺

わせている。

「え、ええ……もう終わったわ……——」

ナディアの答えに不機嫌な顔のまま、サードが元の場所に戻っている。

「ナディア……昔からちつとも変わってないよね。人の話聞かない所とか」

「ティーシエル、悪かったわね！ふん！」

「アネさん、怖い！」

声色を変え、キルトがナディアを茶化す。その声が癪に障ったのか、ナディアは青筋を浮

かべながら、あんた、いっぺん海に落ちてくると鼻息を荒くする。

それをニックスがまあ

まあと宥め、漸く静かになった頃、話し合いを再開した。

「今この船は北75、西45の方角に向かっている……カダンツで聞いた話が本当なら、

沈んだ世界樹の島があった場所だな」

「行ったら色々分かるんだろ？何か今からドキドキしてきたぜ！」

行く前からニックスは既に興奮気味である。他の皆も顔には出していないが、気持ちはニ

ックスと同じようだ。その中で、一人冴えない顔をしている事に気づき、ラフィストが声

をかける。

「ティーシエル、どうかしたのか？」

「え、いや……何でもないよ」

あからさまに空元気な声で返され、ラフィストが眉を顰める。二人の話を聞いていたナデア

も気になっていたのか、声をかける。

「ティーシエル、あんた船に乗ってからちょっと変じゃない？何かピリピリしてるし、愚

痴や文句は多いし……——」

「だから！何でもないってさっきから言って……——」

尚も頑なに返事を返すティーシエルに、ナディアがデコピンする。

いきなり何するんだよ、

といきり立つティーシエルに、ナディアはお黙り、と一喝すると言葉を続けた。

「あんたも昔っから変わってないわね！人に迷惑かけようとしない所とか！……偶には皆

に甘えなさいよ。……私、アンタが一人で悩んでるの、嫌なのよ」

「ナディア……ゴメン」

頭を下げて謝るティーシエルに、いいわよ別に、とナディアが返す。

「ティーシエル、気になってる事があるなら言ってくれよ」

「ラフィスト。——……僕、世界樹の所に行くのが怖くて……

何かにじっと見られて

る感じもするし、何だか気持ち悪い」

「へ、変な事言うなよティーシエル！そんな訳無いだろ！？」

懸命に不安を取り除こうと、ニックスが明るく振舞う。

「兎に角今は、世界樹の元に行くしか道が無いんだ。行く事を止める事だけは、けして出

来ない。だけど、今みたいに思ってる事があつたら、いつでも言うてくれよ。不安は一人で抱えちゃダメだ」

ラフィストはティーシエルの肩を掴み、彼に聞かせるように言う。

ラフィストの言葉を受

け、他の皆も口々に今更遠慮なんかするなと言いだめた。ティーンズエルが頷き、笑顔を見せると、漸く船室にも明るさが戻ってくる。仲間達の頼もしさにラフィストは笑いながら、心の中で思っていた。不安と恐れがあるのは彼だけじゃない。自分も言いような無い気持ちを感じているのだと。

二十章 一〇 赤の守り石

段々天候が崩れ始め、波が荒くなってきたのか船の揺れが激しくなる。流石にこのま

まガーネットを外にいさせる訳には行かなかったので、ラフィストはガーネットを呼びに

外に出た。外に出ると、まだガーネットは船の縁から身を乗り出して、気分悪そうにして

いる。中に入った方がいいと言う為、ラフィストがガーネットの所へ近付こうとした瞬間、

大きく船が揺れて傾いた。

「うっ……わ!」

ラフィストは近くにつかまり、何とか転ぶのを免れる。早くガーネットを船室に入れなけ

ればと思いい顔を上げると、さっきまでいたはずのガーネットがいない。

「ガーネット!」

船が揺れるのにも構わず、ラフィストは船の縁に走りよる。そこから海を覗き込むと、ガ

ーネットが海に放りだされていた。気分の悪さと海の冷たさで、意識が無いのだろうか、

ぐったりとしたガーネットが海に飲まれていく。誰かを待っている時間など無い。ラフィ

ストはそう判断し、海に飛び込んだ。

「ちよっ……ラフィー!」

様子を見に来たらしいマキノの叫び声が響き、足音が遠ざかる。海に飛び込んだラフィス

トを見て、皆を呼びに行ったのだ。ラフィストはマキノが自分の名

前を読んだのにも気付

かず、懸命に荒れ狂う海を掻き分け泳いだ。ガーネットと自分の距離はどんどん遠ざかっていく。水は冷たく、体が冷えていき掻き分ける力も弱まっていく。

「く……そ！もう少し！」

めいっばい手を伸ばすと、ガーネットのマントに手が触れた。ラフィストはマントを引っ

張り、ガーネットを自分の傍に引き寄せる。そして、引き離されないよう、彼女の体をし

っかりと掴んだ。何とか船まで戻り、船の周りについている網を伝って上に上ろうとする。

波の抵抗力が強く、思うように船に戻れない。そう思っていると、上からぐいっと引っ張られた。

「……っ！」

引っ張られた反動で、ドッと甲板に体をぶつける。ラフィストの傍には、荒い息をしたニックスとサードがいる。彼らがラフィストを引き上げてくれたのだろう。そこに他の仲間

達が駆け寄り、倒れこんでしまっているラフィスト達を引っ張って、船内に引き入れた。

マキノがすぐさまガーネットを部屋に運び、彼女の濡れた服を脱がせて体を温める。海に

飛び込んだラフィストも、全身びしょ濡れだったので服を脱いで着替え、毛布に包まった。

暫くしてマキノに呼ばれたティーシエルがその場を離れ、船室はマキノとティーシエル以

外の者だけになる。キルトに入れてもらったお茶を飲み、体も温まって漸く一心地付くと、

ナディアが話しかけてきた。

「でもラフィー、いきなり飛び込むなんてカッコイイじゃない！」

「そ……そうかな」

「これはポイント高いわ……きつと、ときめいたわね！」

「ええ!？」

「おい、海に入って体力消耗してるんだ。静かにしてやれ」

サードがからかわれているラフィストを見かねて口を挟むが、逆に、勿論引っ張り上げた

サードもカッコ良かったわよとからかい倒される。そこに、マキノに先程呼ばれたティーシエルが戻ってきた。

「あ、ティーシエル。どうだったよ？」

ニックスがガーネットの具合について尋ねる。ティーシエルが水もあまり飲んでないし、

回復魔法もかけたから大丈夫と言うと、一同はほっと息をつく。ガーネットの事はマキノ

に任す事に決め、このままぼんやりしているだけなのも何なので、世界樹についた時の事を再び話し始めた。

「やっぱりよー、きちんとした事を聞いた方がいいんじゃないかねえ？」

「あ、俺もそう思う。気が合うじゃねえかマッチョ！」

「だーかーらー、俺はマッチョじゃ……!」

大声を上げてキルトにくっつかかるニックスを無視し、ティーシエルがラフィストとサー

ドに意見を求める。サードは二つの魂の謎と、大きな災厄とは何なのかをまず聞くべきだ

と主張する。そこにラフィストが、ルーン聖石が存在している理由も聞いてみてはどうかと付け加えた。

「しかし、何故今更死んだとされる創世神の名前が、出て来るんだ

ろうな……」

「……グレイスの事か」

ラフィストの疑問に、サードが反応し呟く。ラフィストがグレイスについて何か知っている

事はないか皆に尋ねると、智の神ということしか知らないという返事が、ティーシエル

から返ってくる。更にキルトによると、創世記の中からはグレイスの事が殆ど抜け落ちて

いるらしい。よってどんな知識人に聞いても、ティーシエル程度の反応が返ってくるのが

関の山だという。

「でも、知らねえじゃすまねえだろ？ 本当にソイツがアンカースにいるんならよ」

「だよなあ……」

ニツクの言葉に一同は、はあっと溜息をつくと黙り込む。アンカースににいるという事は、

戦う可能性が高いという事だ。それなのに、相手の事を何一つ知らないで挑みかかるのは、

無謀としか言いようが無い。静まり返り、暗くなった雰囲気を払拭するように、ニックス

が明るい声を出した。

「それよりよ、二つの魂って誰の事なんだろうな！」

「はいはい！俺！」

キルトが思いっきり立ち上がり主張するが、ナディアに却下と言われ、一刀両断される。

即答に近い形でばっさりとやられた為、キルトもショックを受けているようだ。テーブル

にの字を書いてかなりへこんでいる。

「僕はラフィストだと思ふな……こないだのクラスアップの一件といい、ラフィストには

何か不思議なものを感じる」

「えっ！そ、そんな……俺なんかそんな訳ないよ」

ラフィストではないかと言うティーシエルに買いかぶり過ぎだとラフィストが否定する。

「それについては、世界樹の所に行ったらわかるんだ……考えていても仕方ないだろう」

サードの言葉でこの議題は結局お流れとなり、話し合いも終わりとなった。そこにマキノ

がガーネットの所から戻ってきて、話し合いは終わったのか尋ねてきた。皆がマキノに話

していた内容を伝えている中、ラフィストは一人離れてその様子をぼんやり見ている。サ

ードの、世界樹の元に行ったら分かるという言葉に、ラフィストは全ての根底が覆ってし

まうような恐怖を感じていたのだ。その場から逃げるように立ち上がり、ガーネットの様

子を見てくると言っつてその場を離れた。

「サードは、行かなくていいワケエ？」

ガーネットの元に向かったラフィストを見ていた全員から、サードが突っ込まれる。しか

しサードは黙ったままだ。いい機会だとばかりに、皆がまくし立て始める。

「照れちゃってないで、素直になんなさいよ」

「サード。ラフィストにとられちゃうぜ！」

「マッチョに同感」

「サード、恋は遠慮しちゃダメだよ！」

「ハニーに同感」

サードに詰め寄る皆の間に、マキノがまあまあと言っつて入り込み、後ろからサードの首に抱きつく。

「サードは一発逆転を狙っているのよ。ね！サード！」

サードは何も答えないが、ニックスは仲の良さそうな光景に涙が出そうだ。

「何かあの二人……あの事件以来仲が良い……どうしよう」

普通俺と仲良くなるはずだろ、なあとニックスがナディアに泣きつく。ナディアはニックス

スに落ち着きなさいよアンタ、と言うと小声で返した。

「あれは恋っつーより、兄妹に感じが近いから心配要らないわ」

それよりプギューに気をつけなさいというナディアに、そんなものかとニックスが返す。

ナディアはそんなもんよと言い切った後、マキノがティーシエルに流れないように気

をつけてよねと付け足した。ナディアの反応に何か気付いたのか、

ニックスがふーんと言

って、ニヤニヤ笑う。

「な、何よ」

「もしかしてナディアってば……ティーシエルらぶ、だったり？」

「ちっ……違うわよ！か、仮にも年下で、弟みたいな感じとゆーか……」

「とゆーか？」

「あーもう！いいでしょ別に！」

「二人で何騒いでんの？」

いきなり後ろから声がした事で、二人が声にならないほど驚く。しかも後ろの声の主は、

話題の主であるティーシエルだ。バツが悪そうな感じで二人は何でもないと否定する。テ

ィーシエルは二人の反応に、顔に疑問の色を浮かべていたが、気にしない事にしたらしい。

「変なの。それよりそろそろご飯にするから、悪いけど二人でラフイーと大丈夫そうだっ

たらガーネットを呼んできてよ」

ご飯という響きにニックスが目を輝かせる。

「め……飯かぁー！誰が作るんだ？」

「僕だけど？」

エプロンをつけながらティーシエルが答える。その光景にキルトが喜び、まさかハニーの

手料理が食べれるとは、と感動している。そんなキルトに、ナディアが五月蠅いと言って

肘鉄を食らわせると、ニックスの服を引っ張ってラフィストを呼びに行った。

「ところでハニーって料理得意なの？」

腹を擦りながらキルトがマキノに尋ねる。今から食べる以上、やはり味の方が気になるの

だろう。マキノはサンドイッチ食べた事あるけど美味しかったよ、と答えた。ね、サード

と言いながら、抱きついたまま前に乗り出してサードに同意を求める。確かになと言いつ

つ、うざつたいとばかりにサードがマキノの腕を首から振り払う。

その時には、既にマキ

ノとキルトはこれから出てくる料理に想いを馳せており、マキノは腕が払われた事に気付

いていないようだ。

「ラフィー……」

「しっ！ニックス……ラフィーの声がしない？」

ラフィストを呼ぼうと、大きな声を出しかけたニックスを制するように、ナディアがニッ

クスの口に手を当てて、小声で喋る。

「……そういえば」

ももごと、口を動かしニックスが返事をする。二人の思惑が一致したのか、二人ともドアに耳を当てる。二人は中の会話を盗み聞きする体勢にすっかり入っているようだ。しかし、中の会話はかすかにしか聞こえてこない。

「な、何て言ってる訳？」

「分かんねー！」

それにじれったさを感じたのか、二人の手に力が入る。ドアノブが回り、二人の重さで扉が開く。急に支えがなくなった状態になった事で、盗み聞きしていた二人はどっと床に倒れこむ。いたたと言いながら顔を上げると、こちらを見ていたラフィストと目が合う。ラフィストは不審そうな目つきで二人を見ていた。

「……大丈夫、二人とも」

ラフィストの言葉に二人は跳ね起きて、笑って誤魔化する。

「あはは、大丈夫よ！この扉中々開かなくて。ね！ニックス！」

「そうそう、つい力が入っちゃってよ！」

明らかに言い訳くさい二人の言葉に、ラフィストは疑いの眼差しを向ける。しかしこれ以上言っても意味が無いと思ったのか、まあいいやと呟く。ラフィストのその言葉に、二人はほっと息をついた。

「ガーネットの様子はどうなの？」

「まだ目を覚まさないんだ」

三人は、ガーネットの様子を伺うように彼女の顔を覗き込む。次の瞬間、ガーネットの睨みがゆっくりと開いた。

「う……うん……」

「ガーネット！」

「あ、あら……私、一体？」

状況を理解できていないガーネットにナディアが、海に落ちたガーネットをラフィストが

飛び込んで助けてくれたのだと伝えた。それを聞いた途端、ガーネットの顔が赤くなる。

私、その、かなづちでと言ってしどろもどろになるガーネットの手を、ラフィストがしつ

かりと握り、呟いた。

「ガーネット、君が無事で本当に良かった……」

「ラフィー……」

二人の間に流れる空気に、ナディアがあらあら、と言わんばかりな顔をする。

「そうそう、そろそろご飯なんだけど……ガーネット、あなた大丈夫？」

「ええ、もう少ししたら行きますわ」

「じゃ、先に行ってるわね私達」

御邪魔致しました、といった表情をしながら、ニックスとナディアが部屋を出て行く。

ボタンと扉の閉まる音がした事で、二人つきりである事を、ラフィストとガーネットが急に意識し始めてしまう。そんな気まずい空気と沈黙を破るよう、ぎ

こちなくだがラフィストが口を開いた。

「あ、あのさ……ガーネット。その、渡したい物があるんだけど……」

「何ですか？」

落ち着かない様子で胸ポケットを弄り始めたラフィストがおかしかったのか、ガーネット

が笑みを浮かべる。ラフィストがポケットから手を出し、ガーネット

トの前にズイッと差し

出す。ラフィストの手に乗っているのは欠片ほどの大きさの、ガーネットの石であった。

「これからはもっと危険になる。――……だから、小さい石だけ
どお守り代わりにして

欲しいんだ」

「ラフィー……」

石を受け取り、嬉しそうにそれを握り締める。

「ありがとうございます、大切にしますわ……」

「……そろそろ、皆の所に行こうか」

照れながら、ガーネットの前に手を差し出す。ガーネットはラフィ
ストの手の上に、そっ

と手を重ね、立ち上がった。

「二十一章」約束

「うっわ、美味しそう！」

マキノがテーブルに並んだ料理を見て声を上げる。そこには高級料理店に出てくるような

品々が沢山並んでいて、いかにもティーシエルらしいメニューだった。テーブルに付きな

がら、ナディアがあんたの料理基準ってこれだったって呟いている。キルトやニックス

は我先にと料理を口にしようとする。まだ全員揃ってないでしょ、とナディアが二人の手

をバシッと叩くと、そこにラフィストとガーネットが入ってきた。

「あ、ラフィスト！ガーネット！……もう大丈夫なのか？」

心配してくれたニックスに、ラフィストはもう大丈夫ってと返す。

そして、テーブルの上

の物に気付き、これ全部ティーシエルが作ったのかと驚いた。まあね、と自信満々に返し

た後、明日は世界樹の所につくし、しっかり食べないとねとティーシエルが言った。操縦

者のグランを含み、全員がその場に揃った事で一同は食事を開始する。

「超うまい！さっすがティーシエル！……ティーシエルみたいな旦那さん持った

人って、幸せ者よね！」

「ありがと」

料理を頬張りながら、マキノがウツトリしている。ティーシエルの方も誉められて悪い気

はしないのか、少々顔が赤い。ティーシエルみたいな旦那さんとい

う言葉にショックを受

けているニックスを小突き、もっとしつかりしなさいよアンタ、とナディアが鼓舞する。

その後ティーシェルの反応に気付いたナディアは、ニックスにかまけてる場合じゃないと

一人心の炎を燃えたたせていた。

「ナディア、食べないのか？」

食事の手が止まっているナディアに、ラフィストが声をかける。ナディアは食べるわよ、

と言うと料理をガツガツ食べ始めた。

「アネさんは食い意地が汚い……っ」と

その光景を見ていたキルトがメモを取り出し、メモリ始める。それに気付いたナディアが、キルトを睨む。

「誰も食い意地なんか汚くないわよ！」

「いやーん、アネさんこわーい！」

キルトのふざけた声に、ナディアの血管の切れる音がする。礼の如くナディアがこのまま

暴走し、万が一呪文が発動でもしたら、この船は沈没するだろう。

最悪の事態を脳裏に想

像し、全員が一斉に席を立つ。落ち着くとナディアを止めに入るが、ナディアの耳に皆の

声は全く届いていない。

「も……もうダメだ……」

「アンカースで死ぬならまだしも、こんな死に方だけは絶対嫌ー！誰か、何とかしてー！」

ニックスがテーブルの下に潜り込み、マキノは大声を上げる。その瞬間、ナディアの動き

がピタリと止まった。恐る恐る彼女に近付き、ナディアと声をかける。

「――……呪文、使えない」

「な、何ー!？」

今度は恐怖でなく動揺が一同の間に走る。もしかして、世界樹に近付いている事による影

響なのだろうか。そう思いどうしようか慌てていると、ティーシェ
ルが落ち着いてよ、皆
と至って冷静な声を出す。

「僕がスペルロックをかけたただけだってば。こんな所で沈没、嫌でしょ？」

船室が一瞬静まり返った後、皆が黙って席に戻る。そして妙な雰囲気
気で食事が再開された。

食事を終えたサードが付き合いきれんと言って、早々に席を立ち部
屋に戻っていく。普段

なら引き止めたり茶化したりする他の皆も、それを引き止める訳で
もなく、あ、うんと言

って流してく。この場に流れるシュールな空気を変えようと、俺達
も早く寝ないとな、と

ラフィストが元気な声を出す。こう言いながら、このメンバー個性
強すぎるよなと内心ひ

っそり思い、何だか疲れてきたなと思った。ラフィストもう休も
うと席を立つと、ナデ

ィアが、あ、そういえばと話し出した。

「ティーシェル、いつぞやの合成魔法の話だけど……――」

何の話だ、と席を立ちかけていた面々が戻ってくる。結局操縦者の
グランと、サード以外

の全員がその場に残った。マキノが興味深そうに、それって何なの
とナディアに聞いている。

ナディアは皆に、二人で同時に魔法を放つつもりだと説明する。
それってかなり難し

いんじゃない、とラフィストは簡単に言い放ったナディアに呆れたが、

ナディアは完成すれば

大きな戦力になるからと返した。

「ですけど、どんな風にやるんですの？」

「そうそう、私もそれを聞きたいのよ。私もあれからいくつかの合
成魔法を完成させたい」

ど……それを合わせるとなると、話は別じゃない？」

ナディアの言葉に、ティーシエルはそうそこなんだよ、と返す。

「あれから僕も色々考えてたんだけど……ほら、相反する属性の魔法が合わさると、消滅するだろう？」

「そーだったのお！？」

「何、お前知らなかったの？」

ニックスに馬鹿にされ、マキノがむくれる。テーブルの下でニックスの足をガンツと蹴ると、どういう事か教えてとティーシエルに説明を求めた。

「つまり、相手が呪文を唱えて、発動させるだろう？その瞬間、自分が反対の属性の呪文を

唱えると、同じ位の威力ならうまく消滅できるんだ。こっちの威力が大きいなら多少のダメージは与えられるし、まあ無いと思うけど相手の威力が強い場合でも、受けるダメージは格段に減る」

「アンタ……こっそりと自意識過剰よ？」

ナディアには言われたくないね、とティーシエルが一蹴すると、ナディアが腹を立てて怒鳴る。隣に座っているラフィストが、まあまあとそれを宥めた。

「それにしてもこのスペルロックって気持ち悪いわ！さっさと解きなさいよ」

寝て起きれば直るし、いつきれるか分からないからそれはダメと返され、ナディアが悔し

そんな顔をする。それを見たキルトはキラキラと目を輝かせている。
「って事は、今日はアネさんの裁きが無い！イコール、何をしてもいい！？」

やった、何しても痛い思いしなくてすむぜとキルトがはしゃいでいると、どす黒いオーラを醸し出しているナディアがキルトの背後にスツと立つ。

「うふふ……私、攻撃魔法しか出来ないけど、強力な黒魔術も会得しているの。アンタ、

変死体になりたい？いいわよ、お望みなら叶えてあげる。……その前に私には強力な拳も残されている事を忘れないでね」

「ナディア、話がずれてるって……」

仲間内で争わなくても、とラフィストは再度宥めると、ナディアにラフィストは優しすぎ

るのだと怒鳴られる。突然の大声に、ラフィストの心臓はバクバクする。そんな怒鳴るよ

うな事じゃないような気がするがと思うが、とりあえず余計な事は口にしない事にした。

そこに本題に戻るけど、とティーシエルが話を切り出す。

「僕達が得意なのって相反属性だろ？理論的に考えると、消滅を防ぐ為に多少威力は落ち

ても同じ属性を使うか、水と雷のように比較的相性の良いものを使うかだと思う。……そ

れと、一種の賭けのようなものだけど……」

「何よ、もったいぶらないでさっさと言いなさいよ！」

「思い切って、相反属性を使う」

「え！」

どよめきがおこる。先程ティーシエルは消滅すると言っていたはずだ。それなのに、相反

属性を使うとはどういう意味なのだろうか。ナディアは、そんなの

消滅するに決まってる

じゃない、常識よとティーシエルにくってかかる。ティーシエルはそれは下級、中級の魔法の話だと言った後、最上級クラスの魔法は自身に膨大なエネルギーがあるから、反発する時に新たなエネルギーが生じる可能性があると述べる。

「確かに、それが成功すればもの凄い魔法になると思うけど……最上級クラスの合成魔法なんて、かなり疲れるわ」

考え込み、煮え切らない態度を返す。今まで誰もやった事が無い事だ。不安などがあるのかもしれない。しかし、それが出来れば切り札として使えるのは間違いないだろう。迷っ

ているナディアに、普段は同じ属性のものを使っていればいいとティーシエルは言った。

「でもよ、それって実際にはどういうものになるんだ？……ガラスを熱くしたところに水を垂らすと割れるっていうアレか？」

ニックスが珍しくマトモな質問をする。ティーシエルはそれに近いものかもしれないね、

と答えた。それを聞いて、やっぱ俺には魔法無理だなとニックスが頷いている。確かに理

論構築の世界にはラファリストもついていけないと思ったので、ニックスの言葉に心の中で

賛同する。皆が話している中、ナディアが一人黙って考え込んでいたが、少し考えさせて

頂戴と言い残すとその場から立ち去って言った。

「あ、でも……ねえティーシエル。さっきの例みたいに、水と雷とかなら反対じゃないんでしょ？ならどうして威力が落ちちゃうの？」

必死になって話を理解しようとするマキノに、ティーシエルがそれは先天属性があるからだと言った。先天属性って、と頭に疑問符を浮かべるマキノに、最初から備わっているその人の属性だと告げる。大抵の場合、自分の得意な系統はこの先天属性に左右される事が多いらしい。ティーシエルとナディアの二人も、例に漏れずそれぞれの先天属性を得意としているようだ。

「その話、ティーシエルが仲間になってすぐの頃に聞いたよな」そうそうと思い出して言い出したラフィストとニックスに、ティーシエルが頷く。自分の知らない話になった事で、マキノは少しむくれているらしい。で、どうしてダメなのと声を張り上げた。

「ナディアの先天属性は炎だし、僕は水だ。例え使う魔法の相性が悪くなくても、半端な魔法じゃ先天属性に影響を受けちゃうんだよ」

「それであえて、相反する自分達の先天属性を使うのか……でも、危険なんだろう？ 成功するっていう保証も無いし。大丈夫なのか？」

それでも、とティーシエルは呟くとそれっきり黙りこんでしまった。特に何か話す訳でも

なく、沈黙のまま皆が席に座っている。これではキリが無いと思ったラフィストは、明日に備えて今日はもう休もうかと促し、部屋に戻った。

ゆっくりと伸びをし、個室の窓の外から景色を見渡す。昨日とはう

って変わって青空が広

がり、清しい天気だ。鳥の鳴き声まで聞こえてくる。昨日までの不安が嘘のように、目

覚めたラフィストの心は穏やかだった。こんなに目覚めのいい朝は久しぶりかもしれない。

船室に行くと、キルト以外の皆が揃っていた。いつもはぐっすり寝ている皆も、今日ばかりは早く起きたらしい。

「ラフィー、いよいよですわね」

「ガーネット……—そうだな」

自分と、皆を奮い立たせるように自信に満ちた笑みを浮かべる。ラフィストの笑みを見た

皆の顔にも笑みが溢れた。そこにキルトが欠伸びながら入ってくる。

「ふぁ？……あれ、皆起きてたのか」

いつも遅いくせに何で今日は早いんだと一人文句を垂れている。そんなキルトに、一番最

後に来て文句ばっか言ってるんじゃないわよ、とナディアが突っ込む。座って朝食をとり始

めると、グランがやってきて目標の座標に到着した事を告げた。一同は準備を整え、船内

から甲板に移動した。カダンツやトラートで聞いた話通り、島のあった場所には何もなく、

ただ海が広がっているだけであった。

「この下に世界樹が……」

海を覗き込み、ラフィストが呟く。海の底は真っ暗で、島が沈んでいるとは思えない。こ

れからこの中に入らんだと、ラフィストはゴクリと唾を飲む。サードがティーシエルに呪

文を催促すると、ティーシエルは杖を掲げて詠唱を始める。緑色の光が彼を包み、辺りに

ルーンの呪が現れ始めた。詠唱が終わり杖から光が発せられると、透明な水の膜がラフィ

スト達を包み込む。これで水の中でも大丈夫だという彼の言葉を受け、一同は一斉に水の中へと入っていく。

「わぁ！綺麗ー！」

周りには魚が沢山泳いでおり、光が差し込む水の中は神秘的な雰囲気醸し出している。

マキノはこの光景に綺麗だと騒いで感動しているし、他の皆も珍しい光景に辺りを見回しながら目を輝かせている。

「――……私、海の中なんて見た事も無かったし、それにカナヅチだし……何だか損した気分」

「ガーネット。今度、俺が泳ぎを教えてあげる。大丈夫、すぐうまくなるさ」

「本当？じゃあ、約束ね」

「ああ。世界が平和になったら、必ず教えてあげるよ」

ガーネットと他愛の無い約束をしながらラフィストは思っていた。

平和になったら、皆は

またそれぞれの生活をスタートさせるのだろう。一つの所に落ち着くかもしれない、世界中を旅して回るかもしれない。自分だってどうしようか決めかねて

いる。ホールスに戻る

のか、それとも、と。でも、平和になってもガーネットと一緒にいられたらいい。その想

いがラフィストに約束の言葉を紡がせた。こうぼんやり考えていたら、世界樹の傍に着い

たらしい。大きな木が見えてくる。世界樹の元へうまく入れたとしても、皆一緒だとは限

らない。ラフィストは新たに気合を入れ直した。

「いよいよだな……」

眼下にはつきりと世界樹らしき樹と、島が見えた。どうやら島の周りにも、ラフィスト達

を包んでいる魔法のようなものがかかっているらしい。ただ唯一異なる点は、島を包む光

が赤い事だ。一同は顔を見合わせて頷き合い、意を決して赤い光に手を触れる。その瞬間、

カッと光が目飛び込んでくる。あまりの眩しさに目を閉じたラフ

ィスト達は、その光に

飲まれていった。

二十二章 巡る魂

ラフィストは、気が付いたらたった一人で木の下に立っていた。一緒に入ったはずの他の仲間がいない。仲間達の名を呼びかけながら、辺りを見回す。すると、ラフィストの頭に声が響いてきた。

「ラフィスト!! ブレッセント……魂を継ぐ者」

「な、誰だ!」

突然響いてきた声に、周囲の様子を伺う。しかし、誰かがいる様子はない。その声は尚もラフィストに語りかけてくる。

「ずっと……あなたを、待っていました。……精霊達の元を訪れなさい。きっとあなたを導いてくれます」

「俺の仲間達は、どうしたんだ!?!」

「彼らの魂は、今見極めている所です。……相応しい魂を持つ者達ならば、後から追いつくでしょう。さ、お行きなさい」

進むべき道を指し示しているかのように、一本の光の道が現れる。ラフィストは仲間を信じ、光の道を歩み始めた。

ガーネットは眩い光に包まれた後、何もない白い空間にいた。他の仲間がいる様子は全くない。周囲を見渡し、ここはどこかしらと呟いた。

「ガーネットⅡMⅡフォルツアートⅡグラン……」

「は、はい！」

突然名を呼ばれた事で、ガーネットが驚き飛び上がる。

「あなたの魂に問います。あなたがこの旅で得たものは、何ですか」

「それは……人を大切に想う心ですわ」

ガーネットが答えを発すると同時に、再び眩い光が放たれた。次に目覚めたのはニックス

だった。彼も、ガーネットと同じ質問を受ける。その問いに暫く考えを巡らすと、一言じや言えないと答えた。

「だって、旅した一秒一秒が俺の得た物だからな！得た物を一つで言い表す事なんて、俺には出来ねえ」

「そうですか……では、あなたに大切な誰かはいますか」

「ああ」

ニックスもガーネットと同じように、光に飲まれていく。サードもマキノもナディアもキ

ルトも順々に目覚め、真実を見極める迷い無き心、守りたいと思う大切な仲間、まっすぐ

に逃げない勇氣、自らの意思を貫き通す事と答えていく。それに答えるかのように、彼らを光が包んでいった。

ニックスが次に意識を取り戻した時、立っていたのは草原だった。辺りを見渡すと少し離

れた所にマキノを見かけた。立ち上がり、マキノの所に駆け寄ると、マキノを揺り起こす。

「マキノ！」

ニックスに起こされたマキノが、ゆっくりと目を開けていく。

「あ……ニックス。どおしたのよ！……それにここは？」

ニックスはそれにどこかの草原みたいだけど、よく分からないと答える。わかるのは、質

問をされて、気が付いたらここにいたと言う事だけだと答えると、

マキノがニックスも、

と驚いた声を上げる。

「お前、どんな事聞かれたんだ？」

「べ、別にっ！ふっの事よ！」

マキノは先程の事を思い出し、顔を真っ赤にする。そして、有耶無耶に答えを返した。旅

で得たものは何だと言われた後に、マキノはもう一つ質問されていたのだ。仲間としてで

はなく、命をかけて守りたいほど大切な人は、と。

「……それより、他の皆はどうしたのかな？」

「さあな。……ま、いずれ会えんだろ」

ニックスはこう言うと、ゴロンと草の上に横になる。それを見て、マキノもニックスの隣

でゴロンと横になった。海の中だというのに、ここは太陽が出ているように暖かい光が差

している。

「ここ、海の中なのに気持ち良いね！……暖かい」

「本当だな」

チラリとニックスが隣にいるマキノの顔を伺う。気持ちのよさにまどろんでいるのか、目

がトロンとしている。しかし、気分は最高にいいようだ。言うなら今しかない。そう思い、

ニックスは口を開きかけた。

「あ、あのさ……マキノ！」

「何……——？」

「この際だから言っておきたい事が……っ！」

「あ、いたいた……おい、マツチョ」

キルトやガーネット、サードにナディアが二人の元に駆け寄ってくる。勢いをそがれた事

で、ニックスは言葉を発せられないでいるようだ。俺に春はこないのか、畜生と心の中で

叫んでいると彼らが目の前にやってきた。

「ねえ、二人とも……ラフィーとティーシエル見てない？」

「さつきから探してるのですけど……いませんのよ」

彼らにここにいたのは自分達二人だけだったと答えると、彼らはガツクリと肩を落とした。

「まさか、あいつら入れなかったなんて事は……——」

キルトがポツリと呟く。ガーネットとナディアがそんな筈は無いと言いきり、キルトに無

神経な事を言うなど詰め寄る。サードが他の場所にいる可能性もあると指摘し、一同はいない二人を探し始めた。

「ねえ、この子さあ……」

「なんだいエナメル？」

「テレーズ様に似ているからここに連れてきたんだけど、フェルメルもそう思わない？」

「うん、思う」

とりあえず起こしてあげようよ、とエナメル、フェルメルと呼ばれた者がティーシエル

の頬を突付き出す。その感触にくすぐったさを覚えたのが、身じろぎをした後にティーシ

エルが目を開ける。

「ここ、は……——皆、皆は!？」

「エナメル、皆は?だって」

知ってる、と言うように少年がエナメルと言う少女に話しかける。

「ううん、知らない」

「だって」

こう答えると、顔を見合わせていた二人がクリクリした目をティーシエルに向ける。おか

しいな、と言いながらキョロキョロと周りを見回した後に、ティーシエルは目の前の二人

をマジマジと見つめる。その視線を受け、少年と少女が自己紹介を始めた。

「私妖精のエナメル。こっちはフェルメールよ!」

「へえ……妖精かぁ。初めて見たよ!」

初めて見る妖精に、ティーシエルが目をキラキラ輝かせる。そして掌ほどの大きさの彼ら

を、ツンツンと突付き始めた。二人は擦ったそうに身を振ると、ティーシエルに名前とは

尋ねる。名前を名乗ると、二人は付いて来たと服を引っ張り始める。仲間を探さないと、

と固辞するが、彼らは後で一緒に探してあげるからと言って引く様子が無い。やれやれと

思いながら、ティーシエルは二人についていった。

「そういえば、ティーシエルはどうしてここにきたの?」

歩いているティーシエルの周りを、エナメルとフェルメールがひらひら飛び回っている。

ティーシエルは話を聞く為にここに來た事を彼らに話し、また、世界樹について何か知っ

ている事は無いか尋ねた。

「知らない……——グレイス様なら知ってると思う。今はここにいないけど」

「グレイスだって!?!」

創世記では一億年前に死んだとされる創世神。そして、サードによるとアンカースにいる

らしい人物。その名前を聞いて、ティーシエルは思わず声を張り上げる。

「グレイスは……そいつは悪い人なんだろう!? 創世神フレッドと争っていた訳だし……そ

れに、今はアンカースにいる。それなのに、何で様付けしてるんだよ!」

ティーシエルの言葉を聞いて、突然エナメルとフェルメールの二人が怒り出す。

「しっ……失礼ね! グレイス様は悪い方なんかじゃないわ!」

「フレッド様とも、とても仲が良かったしね」

伝承で伝わっている創世記とはまるで違う。その事に気づき、考え込む仕草をする。では

人々の間で伝わっている創世記は、一体何なのだろうか。誰が、一体何の為に。そう思う

と疑問が次々にあふれ出してきた。

「そんなつまらない事じゃなくて、楽しい話をしようよ!」

「おい、エナメル。人の間に入ってくるなよ!」

フェルメールが文句を言うが、エナメルはそれに構わず話を続ける。彼らによると、ティ

ーシエルとテレーズという女神がそっくりらしい。その女神は現在、丘の上にある神殿の

中の、クリスタルの中に眠っているそうだ。もしかしてそこに向かって

エナメルが当たりと嬉しそうに返事をする。はしゃいでいるエナメルの横で、フェルメー

ルがそう言えばと呟き、話し出した。

「フレッド様は一億年前、ダークエビルと戦った後に石になったん

だけど……その時グレ

イス様が、フレッド様の魂は、一億年後の地上に生れ落ちるって言うってたんだ」

それを聞いた時、二つの魂のうち一つはまさか、という考えがティーシエルの頭の中を巡

る。だが、それではもう一つの魂とは一体何なのだろうか。

「着いたよ」

エナメル言葉にハツとすると、いつのまにか神殿に辿り着いていたらしい。真っ白く透

明感のある建物の前に立っていた。中は広々としており、神殿の最奥にクリスタルが一つ

あるという殺風景なものだった。ティーシエルはクリスタルの中で眠っている人物を見る。

長い金髪の美しい女性が眠っている。

「でも、僕とはあまり似てない気が……——」

「えー、そっくりだよー」

二人に言いきられてしまった為、ティーシエルが押し黙る。

「この人の魂は？」

「うーん……それがね、七年前までここで封印してたんだけど、あの日いきなり無くなっ

ちゃったの」

七年前はちょうど世界樹が沈み、アンカースがランツフィートに侵略した年だ。それと関

連性でもあるのだろうか。世界樹といえば、雫や葉と言った不思議な伝承も伝わっている

のも気になる。

「クリスタルの封印……世界樹の雫と葉。ここには面白い物がいっぱいあるね」

「あ、その言い伝え知ってるんだ」

「まあね。僕達の世界でも、ちよっと有名なんだ」

言い伝えに共通部分を見つけ、ティーシエルが顔に笑みを浮かべる。変わってない部分がある

あるというのはどこか安心するものがあつたからだ。しかし、その安心も次の瞬間に壊される事となる。

「世界樹の雫は飲むべからず、葉は死者に与えるべからず……だよな？ エナメル」

「ちよつと待って！ 力を得られるんじゃないの？」

ティーシエルの言葉を否定するように、エナメルが首を振る。

「ううん……グレイス様は飲むなって……——」

「飲むと心をとられる、葉を与えると死者が不滅の傀儡となるって言われた」

二人は確認しあうように向き合くと、そうだと頷きあう。自分達の世界で言われて

いる事と余りにも違う。その事実打ちのめされながら、世界樹は、創世神は一体何なんだとティーシエルは呟いた。

光の道を進んだラフィストは、妖精と精霊達の住む集落に来ていた。光の道は、ある一軒

の家まで伸びている。その中に入ると、一人の老婆がラフィストを出迎えてくれた。彼女

は椅子に揺られながら、ゆったりと腰をかけている。

「ラフィスト様ですな……お待ちしておりました」

老婆に勧められ、近くの椅子に腰掛けると何やら表が騒がしくなる。誰か客でも来たのだ

ろうかと思っていると、窓から小さい塊が飛び込んできた。先程の妖精の一人、エナメル

である。

「ヴィラ婆様ー」

「何じゃ、騒々しい！ 今大切な客人が……」

「私も婆様にお客さんを連れてきたの！」

エナメルが言い終えた後に、扉が開く。そこから入ってきたのは、ラフィストが良く知る

人物だった。

「ティーシエル！」

「ラ、ラフィスト！ 良かった……無事だったんだね」

二人がお互いの無事を喜び合っている時、ヴィラがティーシエルをじっと見る。そして、

エナメルとフェルメールに向き直り、この場を離れるように告げた。

エナメルは不服の声

を上げたが、フェルメールがそれを宥める。二人は仲間達を探してきてやると告げると、

来た時と同じように窓から飛んで出て行った。二人が出て行った後、

ティーシエルもラフ

イストと同じように椅子に腰掛け、目の前のヴィラと向き合った。

「私はグレイス様、フレッド様にお仕えして参りました……ヴィラ

Ⅱマドリッドと申し上げ

げます。――……二人の御帰還、心より嬉しく思います」

ヴィラが深々と頭を下げる。ラフィストとティーシエルは、帰還という言葉に驚きを隠せ

ない。ヴィラは下げていた頭を上げると、驚きを隠せないでいる二人に語りだした。

「ラフィスト様……あなたはフレッド様の魂の転生体。体は地上のものですが、体に宿る

魂はこのものです。創世の剣を手に入れた暁には、きっと何もかも思い出す事でしょう。

そしてティーシエル様、あなたは一億年前に生まれたテレーズ様の

御子息。魂も器も、こ

ちらのものです」

「な、何言ってるんだよ……僕にはちゃんと、父上も母上もいる。姉さんだって！……何

を証拠にそんなでたらめ言ってるんだよ！」

「ティーシエル、落ち着け！」

「落ち着ける訳無いだろ！……ラフィストだって、そうじゃないのか！」

「そうだけど！」

ラフィストは自分の手をグッと強く握り締める。

「まずは話を聞くのが先……だろ」

強く握った手からは、血が滲み出している。自分が異質の者だという事を聞くのは、確かに

に怖い。今までの自分が否定されるような気分にもなる。お前は他の奴と違うのだと責め

られていた気分にも。だけど、先延ばしにしても、いつかはそこに辿り着くかもしれない。

それならば、今覚悟を決めるべきだとラフィストは思った。ラフィストの血がにじみ出た

手を見て、ティーシエルが押し黙る。

「あなたが持っているそのルーン聖石は、テレーズ様が作ったこの世に一つしかない物。

そしてあなたの魔力はこの者と同じもの……疑いようがありません」

「……じゃあ、父上も母上も……姉上も、他人……」

そう言うと、ティーシエルの目からポタポタと涙がこぼれ始める。いつもと違い覇気が感

じられず、目に生気が無い。半ば、茫然自失としているのだろう。

ラフィストはティーシ

エルの横顔をそっと伺う。クリスティーナに頼むと言われたはずな

のに、かける言葉が何一つ見当たらなかった。

「…………父上は」

暫くして、ティーシエルがポツリと呟く。誰なんだよ、言ってよとポツリポツリと言葉を紡ぐ。ヴィラは言おうか言うまいか迷っていたようだが、口を開いた。

「グレイス様です」

この事には、流石にラフィストも衝撃を受ける。アンカースにいる、敵かもしれない創世神。それがティーシエルの父親。その事実が重く圧し掛かってくる。もし、相對した時に平然とした気持ちで戦えるだろうか。そんなのは絶対に無理だ。そう考えていた時、笑い声が聞こえ始める。ティーシエルの方を見ると、彼が自分を嘲るかのように笑っていた。

「はは……グレイスって、敵の親玉じゃないか……」

「ティーシエル……………」

ラフィストが気にするな、と声をかけようとする。しかし、その言葉は発せられる事無く、

ティーシエルの叫び声にかき消された。

「気にするな、とでも言いたいのか！ 気にするに決まってるだろ！

……皆だって、表面上

は何でもないって顔してたって、内心ではそんな事ないはずだ」

「そんな事は無い！ ……もっと皆を信じろよ。仲間だろ？」

「君に、何が分かるっていうんだ！」

言った直後、ハツとティーシエルが傷ついたような顔をする。こんな事を言いたい訳じゃ

ない。そう言いたい事が、顔から伝わってくる。

「ごめんラフィスト。……でももう、僕は……皆と一緒にには、いら

れない」

「ティーシエル！」

ラフィストからフィツと顔を逸らせ、ティーシエルが家の外へと飛び出して行く。ラフィ

ストがティーシエルの名を呼び、追いかけるが目の前で姿が掻き消えてしまい、どうする

事も出来なかった。

暫くして、エナメルとフェルメールに連れられた仲間達がヴィラの家に合流した。皆はラ

フィストと再会できた事を喜んだが、姿の見えないティーシエルに気付き、ティーシエル

はどうしたのか尋ねる。ラフィストは皆に父親の名は伏せて、ティーシエルが本当の親の

事を知ってしまった事を告げる。それを聞いたナディアが、ヴィラの家を飛び出して行っ

た。他の皆も探しに行こうとしたが、ラフィストは先程のティーシエルの様子から考えて、

旧知の仲であるナディアに任せるのが一番だと思い、皆にここで待っていてと言った。

「でもまさか、ティーシエルがここの人間だとは思いませんでしたわ」

ヴィラに出されたお茶を飲みながらガーネットが呟く。

「んで、ラフィストが創世神フレッドの生まれ変わりとは……」

「おいおいマッチョ。だからって何か変わる訳でもないだろ」

「あはは！キルトも偶には良い事言うじゃん」

いつもと変わらない仲間のやり取りに、ラフィストは心が暖かくなる。そんなラフィスト

達の横で、サードがヴィラに話を切り出す。

「おい、貴様……二つの魂とは結局何の事だ。それに、ルーン聖石は何の為に存在している……大きな災厄とは一体なんだ」

「……失礼な奴じゃのう。まあ、いいわい答えてやろう。二つの魂とは、フレッド様の魂

と、テレーズ様の御子の魂。ルーン聖石はテレーズ様がティーシェル様を悪しき者から守

る為に、グレイス様の魔力を結晶化させて作った物……最後の問いは、分からね」

「グレイス、様……だと？何故、奴を敬う？」

「今どこに居られようが、あの方は我々の主。……それにわしは、あの方を信じておる。

フレッド様の転生を誰よりも待っていたのは、あの方じゃからな」
ヴィラはこういうとニッコリ笑った。本心でそう思っているのだろう。その笑みに嘘偽り

は無い。自分もギリギリまで、創世神グレイスの事を信じたいとラフィストは思った。

「これ以上の事をグレイス様は語る事は無かった……だからあの方がお主等にとって敵か

どうかすら、わしにはわからん。じゃが……真実を知る手段が無いとは言わん」

ヴィラの言葉に、ラフィスト達は身を乗り出す。ヴィラはラフィストを指差した事で、皆がラフィストに視線を向ける。

「創世の剣を継承者であるお主が手にすれば、この世界の事全てを知る事が出来る」

「そうなの！？」

「す……すげえ……んで、どこにあるんだ婆さん！」

「グレイス様が、持っておる……——」

マキノやニックスがテンションを上げて大きな声を出す、ヴィラの言葉に沈黙する。ラ

フィスト達は敵であろうと無かろうと、グレイスと会う事になる事を悟った。万が一の場合、戦う事になる事も。

「二人が戻ってきたら、すぐ地上へ戻るぞ。アンカースに向かうんだ」

サードの言葉に、皆が頷く。

「ラフィスト様」

ヴィラがラフィストを真剣な眼差しで見つめる。

「創世の剣は、お主に真実を見せるじゃろう……けれど、それは何も知りたい事だけではない。知りたくない事……例えば、人の欲望、絶望、悲しみまで知る事になるのじゃ。強

くなりなされ……全てを受け入れられるほどにな」

ヴィラの言葉に、ラフィストはもっと強くなろうと決意を固める。

力だけの強さではない。

心も今以上に強くなる必要がある。自分を変わらず受け入れてくれた皆の為に、ラフィ

ストはそうありたかった。

「二十三章」～変わらない事～

辺りを駆けずり回ったナディアは、神殿に入ってしまった。ここにテ
ィーシエルの魔力の痕

跡を感じたからだ。単純な造りの神殿なのに、ティーシエルの姿は
見当たらない。自分が

いなくなった時、ティーシエルはちゃんと自分を見つけてくれた。
励ましてくれた。それ

なのに自分は彼を見つけれないでいる。

「ティーシエル！何処なの！……んもう！」

ナディアは急に不思議な感覚に襲われ、足を止める。自分の心臓の
鼓動が段々激しくなっ

てくるのが分かる。目を閉じ、意識を研ぎ澄ますとティーシエルの
悲しみがナディアの中
に流れ込んできた。

「ティーシエル！」

いてもたってもいられず、とりあえずナディアは叫んだ。ティーシ
エルには聞こえてない

かもしれない。しかし、そんな事はどうでも良かった。

「よおーく聞きなさい！まず一つ！私に何でも言って頂戴！一人で
悩むなって言ったのは

アンタなんだから！二つ！アンタが誰の子供だろうと構わないって
事！私達は……私は、

ちよつと生意気で世間知らずで自分勝手に……でも凄く優しいアン
タが大好きなのよ！誰

の子だろうが何処の子だろうが、変わらないわ！三つ！それが分か
ったら出てきなさい！」

ナディアの声が神殿中に響き渡る。これだけの事を一気に叫び、ナ

ディアの声は荒れていた。恥ずかしいのか、顔も真っ赤だ。

「バカみたい……」

ナディアは一人呟き、俯く。その時、何処からか魔力の波動が流れ込んでくる。この波動

は、ティーシエルのものだ。そう確信し、ナディアはそっちに向かい歩き始める。何も無

いと思っていた壁に先がある事に気付き、そこを通り抜ける。気が付くと、一つのドアの

前に立っていた。中から彼の魔力が漏れ出している。恐らくこの中にいるのは間違いない

だろう。ドアを開けようとし、ナディアは一瞬その手を止めた。ティーシエルに会ったと

して、自分は何を言ってあげれば良いのだろう、そう思ったからだ。意を決し、ナディア

は恐る恐る扉を開ける。

「ティー……シエル？」

返事はない。部屋の中にナディアの足音だけが響く。どうやらこの部屋は休憩所のようなだった。暗い中目を凝らすと、ベッドがいくつか並んでいるのが分かる。

「いるんでしょう？」

「……う……ん……」

微かに返事が返ってきた。暗闇に慣れてきた目を凝らすと、奥のベッドに人影が見える。

きつと、ティーシエルだ。

「みつけ！」

ティーシエルが仰向けに寝転がっているベッドの横に、ナディアが勢いよく飛び込む。ベ

ッドが揺れ、軋む音が聞こえた。

「ナディア……何しにきたの？」

「何よ、その返事は」

「僕……一億年前の人間、なんだって」

「ふうん」

「敵の親玉かもしれない奴の、息子なんだって」

「あ、そう」

「何だよ、その返事は」

「あんたこそ何よ、その返事は」

「ナディア！僕は……」

「ティーシエル！私は悲しいの！」

ティーシエルの声を遮るように、ナディアが叫ぶ。

「何でナディアが悲しいの？ここで悲しいのは僕の方だと思うけど」

「あら、何で私が悲しいとダメなの？」

ナディアの言葉に、ティーシエルはだって理由が、と呟く。ナディアは上半身を起こし、

ティーシエルの方をじっと見ながら、わからないの、と問いかけた。

「知ってる？悲しみは半分コ出来るのよ」

「何だよ！さっきからさっぱり意味が分からない！」

「ティーシエルの悲しみ、半分私が貰ってあげる」

仰向けになっていたティーシエルがそっぽを向くように、横向きになる。

「軽々しく言うなよ……大体、ナディアに何が分かるんだよ！」

「私には……どうして分かんないの？」

「それは……っ！」

言いかけて、ティーシエルはハッと息を吞んだ。顔に何かがポタポタと落ちているのに気が

が付いたのだ。ナディアは顔を顰めながら大粒の涙を流していた。

「バカ！……何も変わらないのに！事実を知って、何が変わったって言うのよ！？何も変わ

わってなんかないわ」

変わったと叫ぶティーシエルに、ナディアが変わってないと叫び返す。二人は何度も同じ事を言いあう。ナディアは頑固なティーシエルに変わってない、と再度強い口調で叫ぶと言葉を続けた。

「アンタの親が誰だか分かったからって、父さんや母さん、姉さんの愛情が無くなったって思うの？ラフィスト達の心に、アンタへの憎しみが芽生えたって思うの？そんな事、ある訳無いでしょ！」

ティーシエルは返事を返さない。ナディアに背を向けたまま、黙りこくっている。

「元氣だしなさい。すぐには無理かもしれないけど……」
「でも、僕は……まだ……」

「ムリにつけなくていいんじゃないの？心の整理なんて」
「え……？」

「ムリしなくていいのよ。今なら泣いたっていいわ。……皆の所に戻るまでは、ね」

ティーシエルの口元が微かに微笑む。

「何だよ。元氣出せて言ったり、泣いていいって言ったり……」
まるで正反対じゃないか、とティーシエルは呟く。

「悲しい時は思いつきり泣くの！そしたらスッキリするから。……何も出なくなったら、笑うしなくなるわ」

「そ、か」

ティーシエルの返事に、ナディアがそっとティーシエルの肩に手を乗せる。

「じゃ、泣いても……いい」

「今だけよ」

「うん……」

ナディアの手の温度が肩に伝わる。涙が出るのはきつとそのせいだと自分に言い聞かせ、

ティーシエルはナディアに背を向けたまま、ボロボロと涙を流した。

「ティーシエル……遅いね」

はあ、とマキノが溜息をつく。

「確かに、少し遅すぎるな……——」

「ねえ、ラフィー。様子見てきてはダメかしら……？」

居ても立ってもいられないといった様子で、ガーネットが席を立つとうとする。

「いや……ガーネット、もうちょつと待ってみよう」

「ティーシエルの事、信じてやろうぜ！」

ラフィストとニックスがガーネットにこう言い聞かせた時、ドアの開く音がした。

「ティーシエル！……ナディアも！」

「皆、心配かけてごめん」

ティーシエルが皆に迷惑かけた事を謝る。その後ろでは、ナディアが何か私ついでみたい

に言われたんだけど、と不満を漏らしている。ラフィストは、ティーシエルと目が合い、

一瞬ドキッとする。さっき言い合った事もあり、何となく不安になったのだ。しかし、ラ

フィストの心配とは裏腹に、ティーシエルはニコリと笑った。それを見た時、もう大丈夫

だとラフィストは思った。そして、次は自分が乗り越えていく番だと。

「ティーシエル様……」

少し離れて見ていたヴィラが、ティーシエルに近付いていく。

「ヴィラさん……やっぱり僕、様付けで呼ばれるの、恥ずかしいや」
「しかしながら……——」

「わかってる。それが僕を大切に思ってくれている、証だってこと位……」

「では婆から一つだけ……ティーシエル様、友を大切になさいませ」
ヴィラの言葉に、ティーシエルが頷く。

「皆、これからよろしくね！」

笑顔でティーシエルがそう告げる。ラフィスト達は、当たり前だろ、今更何言ってるんだ
よ、と口々にティーシエルに返した。

もう海上は夜という事もあり、ヴィラに今夜は留まっていこうように
言われたラフィスト達

は、その言葉に甘える事にした。サードは急く気持ち強いのか最後まで反対していたが、

そう急いても結果は変わらん、無理に船を動かして何かあったらどうするのだとヴィラに

強い口調で言われ、渋々おれたようだ。夕飯の支度をしている時に
ヴィラに呼び出された

ナディアは、現在、集落から離れたただっ広い平原を歩いていた。

「んで、私に何の用？」

「他でもない、ティーシエル様の事じゃ」

ヴィラは止まる様子も無く、どんどん先に進んでいく。

「……それはいいけど、何もこんなとこまで来なくたって……」

「いや、ここら辺でないとう」

ヴィラが辺りを見回し、ここらで良いかと言うと、ナディアに向き
直る。ヴィラが何をし

たいのか、ナディアにはさっぱり見当もつかない。

「ティーシエル様の御両親については、お主はもう知っておろう。

……御二方共、魔法の
サラブレットじゃ」

「で？」

「じゃからティーシエル様の魔力は強過ぎての。恐らく全く力を出していないじやろう：

…まあ、本人も気付いてはおらぬようだが。いや、全ての魔力を出したら大変な事になる

という事に、本能で気が付いているのやも知れぬ」

以前に見せつけられた力の差を、ナディアは完全に忘れた訳ではなかった。その事がフツ

とナディアの頭をよぎる。生まれつきの才能や能力に嫉妬心さえ芽生える。

「だからお主に一つ魔法を託したい。魔力の放出を抑える魔法じゃ……この魔法は魔力が

高い者にしか会得できん。お主の魔力の高さを買っての事じゃ！ ……この婆の願い、聞いてはくれぬか？」

色んな感情が混ざり、ナディアは迷う。更にヴィラは、この精霊の街に伝わる伝説の呪文

も授けたいと、ナディアに告げた。攻撃の力と守る力。この二つの力があれば、少しでも

ティーシエルを守ってやる事が出来るかもしれない。その想いが、嫉妬心や羨望を上回る。

「ヴィラ、やるわ！」

「おお……ありがたい」

ナディアの手を取り、ギユと握り締める。ナディアが早速やっつてと言うとヴィラはコクリ

と頷く。辺りの草がざわめき始め、周囲を淡い光が包み込んだ。ヴィラの詠唱とともに、

ヴィラの体から発せられる光がナディアへと移っていく。光が完全にナディアへと移ると、

周囲を包む光も完全に消えうせた。

「これでよい」

「これが……新しい力！」

ナディアはギュッと手を握りしめながら言った。ヴィラは、強力な呪文だからくれぐれも

扱いには気を付けてくれと忠告する。

「それと……ラフィスト様以外の仲間の方には、父親の名を言っておらぬ。出来れば言わ

ないでおいてもらいたいのが……」

ナディアが頷いて肯定の返事を返すと、ヴィラはありがとうと言葉を返した。そろそろ戻

ろうかとヴィラに促され、ナディアは来た道を引き返した。

夕食後、明日の朝すぐに船に戻ると言い残し、サードがさっさと部屋に戻っていく。あま

りの素っ気無さに、マキノはぷーとむくれているが、ラフィストは仕方ないさとマキノを

宥め、サードをフォローする。それを見ていたニックスとティーシエルが、ラフィストつ

て苦労性と声を揃えた。

「え、何々？黒胡椒？」

キルトの親父ギャグに、一同が呆れかえる。しまいの果てには、ティーシエルに寒いと言

われ、ガーネットにふぶいてますわ、とボソリと突っ込まれる。その反応が堪えたのか、

キルトが酷い、酷いわとオカマ喋りを始め、さめざめと泣き始める。

そんなキルトに気色

悪い喋り方止めなさいよ、とナディアが拳の鉄槌を下した。キルトとナディアのやり取り

に、笑いの渦が巻き起こる。特にいつもキルトに酷い事を言われて
いるニックスは、ここ

ぞとばかりに大笑いしているようだ。

「さ、俺達もそろそろ寝ようか」

「そうだね」

「ラフィスト！もしかして初めてじゃねえ？俺とお前の二人部屋！」

「そういえば……——」

嬉しそうに言うニックスに、ラフィストも笑顔で言葉を返す。それぞれ部屋に別れた後、

ラフィストはベッドに潜り込んだ。いよいよアンカースに向かう。

そう思うと、なかなか

眠りに入る事は出来ない。ここで知った、創世神フレッドの生まれ
変わりという運命。創

世の剣を手にして、全てを知らなければならないという使命。この
事が、今まで以上にラ

フィストに重圧をかける。その日ラフィストは、一睡もする事無く
一夜を過ごした。

二十四章 北の戦士

「わー！ツアラダー！戻ってきたー！」

マキノが船の縁からジャンプする。それを見たニックスが、慌てて船から身を乗り出す。

無事着地した事を確認してほっとしていた後、ニックスは危ないだとマキノに注意する。

マキノは暢気な口調でニックスの注意をかわすと、たったか走って行ってしまった。マキノの態度に呆れているところに、ナディアに耳打ちされる。

「ハラハラする？」

急に耳に入ってきた言葉に、ニックスが二、三メートル下がって驚く。そんなニックスを

見るナディアは楽しそうな顔だ。しまいにはどうせなら告白しちゃうなさいよと、からかい始める始末だ。ニックスはそれにも素直に反応を返すものだから、

格好の玩具となって

いる。いつまでたっても船から下りてこない二人に焦れたサードが、来ないとおいてくぞ

と怒鳴って二人が船を下りるまで、そのやり取りは続けられた。

「じゃあグラン、ありがとな」

「ほ、本当に一万ギル、チャラだろうな！」

「ああ、本当本当」

また船借りるかもしれないけど、と内心キルトが思っているとは露知らず、グランは純粹

にチャラになった事を喜んでいるらしい。そんなグランに礼を言つて、ラフィスト達はそ

の場を後にした。

「ところで、アンカースにはどうやって行きますか？」

宿へ向かいながら、話は既に次の目的地アンカースの事になっている。とりあえず、どう

やってアンカースまで行くか、というのが目下の課題だ。マキノがワープで行けないのか

尋ねるが、行った事無い場所には行けないと色好い返事は返ってこなかった。第一、相手

に魔導士がいるとなれば、マジックシールドが張られている可能性がある」と述べる。現時

点では、フォートレスから船で向かうのが一番近くて良いという結論に至った。話し合い

は宿でもう一度する事にし、ラフィスト達はアンカースに向かう為の準備をする為に、で

買出しをする事にした。効率よく分担して買出しに行こうと、二組に別れる事にする。そ

の時、ナディアとティーシェルの二人が魔法の練習がしたいと言いだし、ラフィスト達と

別れて行動する事となった。待ち合わせの時間と場所を決めた後、ワープで人気の無い所

に移動した二人を除いて、ラフィスト達は公平にグとパで分かれる事にする。

「んじゃ行くよー、グーとパ！」

マキノの掛け声とともに、皆の手が一斉に差し出される。その瞬間、皆の視線がガーネッ

トの手に集まり、その視線が彼女へと移動した。

「ガーネットったら、何ソレー！やだなー、可愛いんだから！」

ガーネットの手はグーでもパーでもなく、また、チョキでもない。

ジャンケンではありえ

ない手の形を出したのだ。ジャンケンを知らないと言んだラフィストが、彼女にジャンケ

ンを教える。その後、再びグループ分けを再開したが、ニックスがチョコキ出したり、皆同じだったりして中々決まらない。嫌々ジャンケンに参加していたサードが、早くも焦れ始めたのを感じ取り、結局地面に阿弥陀クジを書いてグループを決めた。そうやって決まったグループはラフィスト、ガーネット、マキノと、サード、ニックス、キルトのグループだ。女性に囲まれる形になったラフィストにキルトがグチグチ文句を言い始めるが、サードにキリが無いと一蹴される。

「ラフィスト、俺達が食料などの調達に行く。――……幸い、荷物持ちが二人もいる事だしな」

「わかった。じゃあ、俺達は宿取った後に、それ以外の物を見ておくよ」

また後でと言いつつ、ラフィスト達がさっさとその場を離れて行った。その場に沈黙と男三人が取り残される。

「お、俺達って……サードの」

「荷物持ち、か……はは……――」

ニックスとキルトが泣き笑いの表情を浮かべるが、サードはそれを感じかける様子も無くさっさと歩いて行ってしまふ。相変わらずのサードのマイペースっぷりに、残された二人が慌てて追いかけていった。

その頃、魔法の練習をしにきた二人は人気の無い森の中にきていた。

ここならば魔物は居

たとしても、人はこないだろう。念入りに辺りを注意深く見回していたナディアが、うんと一つ頷く。

「じゃあ、結界を張って早速練習しようか」

「そうね……じゃ、張って」

「は？」

「だから、結界！」

言った事が伝わらなかったと思ったせいか、ナディアの口調が強くなる。だが、伝わっていなかったのではなく、結界を張る事に対しての疑問の声だったという事など、ナディアは無論気付いていない。仕方なく、ナディア結界張る気ないでしょって言いたいのだと、ティーシエルが口にする。それにナディアが当然のように当たり前でしょと答えると、ティーシエルは黙って不貞腐れながらも結界を張った。

「……まずは二人の詠唱の速さを揃えなきゃね」

「とりあえずやってみましょう！論より証拠っていう事だしね」

それから数十分。先程までしていた魔法の爆発音は全く響いていない。中々息を合わせる

事が出来ず、ナディアがグツタリと木に凭れ掛かってしまったのだ。そんな彼女にティー

シエルが呆れた目で嫌味を言うが、大魔法を連発しているだけあって疲れているのか、そ

の口調に覇気は無い。それにナディアが返す言葉も八つ当たりに近い気がする。二人はそ

んな状況に、言いあっていても仕方がないと溜息をつくど、練習を再開した。

「我、ここに水を起こしこの大地は大水と仮すだろう……無限の重

水の力、その礎となり
あまねく力を解放せん！」

「紅蓮の炎を巻き起こし、生あるもの全てを焼き尽くす……森羅万象全てに置いて輪廻する炎よ！」

二人の詠唱が重なり、同時に杖が光りだす。同時に巻き起こった合
成魔法が、二人の前で
激しくぶつかり合った。合わさった魔法が消えるかどうか気がかり
だったナディアが、ぶ
つかり合う魔法の元へ近寄りかける。その瞬間、青い火花が魔法か
ら一筋漏れるのに気が
付いたティーシエルが、ナディアを後ろに突き飛ばした。

「爆発する！」

とっさに全体をカバーするのは無理だと判断し、ティーシエルは自
分とナディアの周囲に
だけ強力な結界を張る。張り終えたと同時に、二人をもの凄い衝撃
が襲った。結界越しの
衝撃に、とんでもない威力の魔法である事を悟る。漸く爆発が収ま
り、結界を解除し周囲
を見回してみると、周辺に生い茂っていた木々が吹っ飛んでしまっ
ていた。あまりの光景
に絶句した後、ティーシエルが感心したように呟いた。

「相反属性の合成魔法だから、リアクションエクスプロードってと
ころかな？」

「ねえ、ティーシエル……」

目の前の光景を呆然と見ながら、ナディアが口を開く。そして、あ
まりこの魔法は使わな
いようにしようと告げた。

宿の予約を終えたラフィスト達は、町に繰り出していた。初めてツアラに来た時は町をゆっくり見て回る事が出来なかったので、マキノやガーネットは嬉しそうだ。特に情報収集の時居残りをしていたマキノのはしゃぎっぷりは、半端ではない。早足で先を駆けて行ってしまい、それに追いつこうとラフィストとガーネットが必死に追いかける。先を行っていたマキノが後ろを振り返ると、二人の姿が無い。どうやら随分と先に行ってしまったようだ。二人を待とうと、後ろを振り向こうとした時、マキノは誰かとぶつかってしまった。

「きゃっ」

衝撃でマキノがその場に尻餅をつく。相手の男は190センチ近くある長身の男だった為か、ビクともしていないようだった。マキノが不注意を謝ると、相手の男が大丈夫と声をかけ、手を差し伸べてくれた。マキノが立ち上がり、スカートについた砂埃をパタパタと払っていると、男が懐を探り出す。何しているのだろうか。何と伺ったマキノの前に差し出されたのは、何かの石だった。

「あの……」

「君、武闘家だろうか？これをあげるよ」
遠慮するマキノに、いいからと言って男がその石を握らせる。きつと役に立つよと言って
いる所を見ると、何か特殊な石なのだろうか。マキノが受け取った石をマジマジと見てみると、男がそれは魔石だと教えてくれた。

「魔石……ああ、知ってます！見た事あるし」

「魔石を？」

マキノの言葉に意外だったのか、男が尋ねる。最初何故不思議がつているのか分からなかつたマキノだったが、そういえば魔法剣士以外魔石は買えないのだという事を思い出す。

買えないという事は、必然的に見る機会など無いに等しい。だから不思議がつっていたのだ

ろうと思い、仲間に魔法剣士がいる事を男に話した。

「へえ……俺も魔法剣士なんだよ。で、その人なんて人？」

「サードⅡソーリユアっていうんですよ」

もしかしたら知ってる人かもね、と冗談まじりの口調で話していた男の顔が、一瞬こわば

る。一言そうかと小さく呟いた後、何事も無かったかのようにその表情は元に戻った。そ

して、じゃあと告げると踵を返した。

「あ、あの……ありがとう！」

マキノが礼を述べると、男が振り返りニコリと笑う。

「ははは、大した物じゃないし気にしないでいいよ。——……サードに、よろしく言っ

ておいてくれ。僕の名は……いや、何でもない」

それだけ言い残すと、男は人込みの中に消えていった。そこに、漸く後ろからラフィスト

とガーネットが追いつく。知らない男と話していたのが気になったのだろう。ガーネット

がどなたですの、とマキノに尋ねている。

「多分、サードの知り合いみたい……魔石貰っちゃった」

「魔石!？」

驚いたガーネットがマキノにちよつと見せてくださると言うと、マキノは彼女の手にその

石をのせる。暫くその石をマジマジと見ていたガーネットであったが、その石をマキノの

手に返し、良い物を頂きましたわねと言った。

「え、でもたいした物じゃないって……——」

「そんな事はありませんわ！これは魔石の中でも珍しい物で……」

ガーネットが何と説明したものか暫く迷った後、再びマキノから魔石を受け取ってジャン

プするよう言う。ガーネットの言葉を受け、マキノがジャンプすると、今度は魔石を手渡

し、もう一度ジャンプするよう言った。

「ほっ……と、あれ？何か超身軽！」

「あ、もしかして……それって能力増強系の魔石？」

前にサードが言っていた事を思い出し、ラフィストが口を開くとガーネットがそれに頷き、

このように白い魔石は身が軽くなる効果があるらしいと教えてくれた。へえと感心してい

るマキノに、能力増強系の魔石は珍しいものだってサードが言っていたと告げると、これ

ってそんな良いものだったんだと魔石をマジマジと眺めた。

「それより、サードに心当たりないか、聞いた方が良いかもな」

サードを知っているらしく、同じ魔法剣士である男。魔法剣士は、ある国に特に多いとキ

ルトは言っていた。サードがアンカースに関わっていた事を考えると、恐らくその国とは

アンカースの事ではないかとラフィストは思った。ならばその魔法剣士には、何かあるか

もしれない。例えば会う事が出来なくとも、サードから話を聞く価値はあると思った。

待ち合わせの時間になった事で、ラフィスト達がその場所に向かうとそこには既にサード

たちが待っていた。そこにマキノが駆け寄って行き、サードに魔石を貰った事と、サード

を知っている風だった事を告げる。サードがどんな風貌かと問うと、マキノは赤褐色の髪

で背が高く、痩せ型の魔法剣士の男だと告げた。それを聞いたサードの顔色がサツと変わる。その変化は誰の眼から見ても明らかだった。

「もしかして、知り合いですの？」

ガーネットの質問にも言葉を濁し、サードが目泳がせる。過去に何かあったのだろうか。

ラフィストがそう思っていると、ニックスとキルトがもったいぶらずに言えとブーイング

を浴びせる。サードはそれを無視し、顔を背けた。マキノはそれを機嫌を損ねたのだと取

り、文句を言った二人に何言っただのと怒鳴る。

「だ……だってよー！マキノ！」

「内緒にしようとする方が、絶対悪い！」

マキノに言われた事でタジタジのニックスと、断言するキルト。どうやらこの二人には、

自分が悪いという意識が全く無いらしい。特にキルトは、完全に開き直っている。ラフィ

ストがどうしたものか、と思っていると、そこに別行動を取っていた二人が戻ってきた。

「ティーシエル、ナディア！……魔法、出来たのか」

ラフィストにナディアが当たり前でしょ、私を誰だと思ってるのよと返す。そんなナディ

アに、途中で投げ出そうとした人もいるけどね、とティーシエル

は釘をさす事も忘れな

い。ナディアがどういう意味よ、とくってかかろうとするが、一同に流れる空気を感じ取

り何かあったのか尋ねる。二人にさっきあった事を説明すると、興味深そうな顔で二人は

サードの方を見た。それにも、サードは沈黙で返すと、ニックスがサードに悪態をつく。

「またダンマリか……チツ、つまんねー！」

ニックス、と窘めるマキノを、庇われた本人であるサードが制す。

「いい、マキノ。……確かにニックス、お前の言う通りだ」

一つ息を吐いた後、サードは更に言葉を続けた。

「前に、俺に傷を負わせた男について、言った事があったな……恐らく、マキノが会った

のはその人だ」

「え！そーなの？」

そんなに凄い人だったの、あの人とマキノが驚く。あの温厚そうな顔からは、とてもそんな

な風には見えなかったからだ。このまま立って話すのも何だったので、ラフィスト達は食

事をしながら話す事にし、店の中へと入っていった。

レストランで食事していると、久しぶりの陸での食事でも気分でも悪くなったのか、ティ

ーシエルが席を立ちトイレに向かった。それを見計らったかのように、ニックスがラフィ

ストを突付いて話しかける。

「どうした、ニックス？」

ニックスは黙って何かを指差す。ニックスの指の先にあったのは、

さっきまでティーシェ

ルが食べていた料理だ。もしかしてティーシェルの料理でも取ろう
と思っているのだろう

かと思いい、ラフィストが彼に意地汚いな、お前という目を向ける。

それに気付いたニックス

スが慌てたて否定し、一氣にまくし立ててきた。

「ち、違うって！俺が言いたいのは……」

「あ、もしかして食事の量の事？」

ナディアの言葉に、そう、そうなんだよとニックスが同意する。そ
んなニックスに、何か

問題でもあるのかとキルトが言うと、ニックスは問題大有りだと答
える。

「何で？」

「だってよ、これでもうごつつあんなんだぜ？」

「あの……ニックス。ごつつあんって……」

ニックスがキルトに答えた言葉の中に、わからない単語が混じって
いて疑問符を頭に浮か

べているガーネットが、ニックスに問う。そんなニックスをテーブ
ルに沈めると、マキノ

が今のは気にしなくて良いからね、とガーネットに言って誤魔化す。

「でも確かにこれで御馳走様は……」

ないよな、とラフィストがしみじみ思う。よく見ると、四分の一も
食べていない。よくこ

んな量で体が持つよなと感心していると、ナディアがまあ、あの子
38キロしかないから

ねと発言する。それに、その事実を知らなかったラフィストやキル
ト、いつも何事にも無

関心なサードでさえ驚きを露にする。いくら何でも男で38キロは
無いよなとラフィスト

が、流石ハニーとキルトが、だから体力ないのかとサードが心の中

でそれぞれ思った。そ

んな彼らの驚きには興味ないとばかりに、ナディアがティーシエルの皿を自分の方に引き

寄せる。こっちはニックスと違って旧知の仲という事もあり、遠慮などかけらも無い。席

に戻ってきたティーシエル本人も、その行為を全く気にしてないようだ。それよりも、自

分に視線が集まっている事を不思議に思っているらしい。

「じゃ、サード。早速話してよ」

マジマジとティーシエルを見ていたサードが、無遠慮にジロジロ見ている事を気まづく思

ったのか、ドモった返事を返す。そして、姿勢を正すとサードは語りだした。

二十五章 告げる過去

「……あれは俺が十一歳の時、つまり九年前だな。俺は、山間の雪の多い町に父と母と、三人で暮らしていた。雪が降りしきるあの日……町に調査団がやってきた。そいつらは山

頂付近にある遺跡を調査しに来た、アンカースの連中だった」

「アンカース!？」

これから向かう目的地の名前が出た事で、小さなどよめきが起こる。

「山頂……遺跡……もしかしてそれって、ハーマル遺跡の事？」

ティーシェルの声にサードが一つ頷いて同意の意を示す。そして、俺はアンカース王国の

ハーマル出身だと短く告げた。まさかサードがアンカース出身だとは皆思っていないかつ

たようで、驚きで目を見開いていた。ただ一人キルトだけが、ラフイストに視線で言った通りだと告げている。

「マキノが出会った男はアデルⅡシュワイツァーと言って、若いながらも調査団の団長を務めていた。――……そんな彼と、アデルと初めて出会ったのはアデルが家に宿を借りに来た時だった」

ハーマルには宿が無かった為、調査団全員がどこかの家を借りたのだという。そしてたまたまアデルがサードの家にやって来たらしい。アデルの優しい人柄もあり、サードが異国の話をせがむと彼は喜んで話してくれた。サードはそんなアデルについていく事を、その時決めたのだと言った。

ハーマル遺跡の調査が終わり、アデルがアンカースに戻る日がやってきた。アデルは昨日

寂しくなるねと別れを惜しんでくれたが、サードはアデルと離れる気などサラサラ無い。

昨日皆が寝静まった時、家を出る為の荷物を一人でこっそり纏めた。後はアデルや両親を

説得するだけだ。サードはアデルのいる部屋をノックすると、一つ深呼吸して中に入った。

「サード、どうしたんだい？」

「ねえ、アデル。……お願いだよ、俺も一緒に連れて行ってくれよ！俺もアデルのように、

外の世界を見たいんだ！」

サードがこう告げると、案の定アデルが驚いた顔をする。その次にアデルが浮かべた表情

は、いかにも困ったといった顔だった。でもなあと洩るアデルに、サードが必死にくらい

つく。すると、とうとうアデルは音を上げたらしい。自分ではなく、両親に説得してもら

おうと思ったのだろう。両親と相談しておいでと一言告げた。こうなるとアデルには悪い

が、サードは両親を説得する自信があった。サードが両親にアデルの元に行きたいという

意思と、その理由を告げる。サードの熱のこもった言葉に、両親は中途半端に帰ってこな

い事を条件に許してくれた。両親の了解を得て早々にアデルの元に戻ると、アデルはやっ

ぱり駄目だったのだろうという顔をする。そんなアデルに了解を得

た事を告げると、アデ

ルは驚きの声を上げた後、諦めたかのように溜息をついた。

「……言っとくが、末席とはいえお前はアンカースの兵士になるんだ。ついてくる以上、

厳しい訓練をお前につけるぞ。それでもいいんだな？」

「俺、アデルと同じ魔法戦士になる！その為にも頑張るよ！」

人間、こんな事を言われて嬉しくない者などめったにいない。アデルも例外ではなく、その頬を緩ませていた。

「仕方ないなー」

アデルはサードの頭を一撫ですると、両親にちゃんと挨拶をした後に荷物を持って、村の入口にくるよう告げた。それから二年の間、サードは常にアデルについて行った。城での

訓練の時も、他国に調査に向かう時も、アデルと一緒に日々を過ごし時を重ねていった。

アデルの厳しいといった言葉に嘘はなく、アデルと剣を交える時はいつも満身創痍になる

ほどだった。アデルは部下だけではなく、上の將軍達にも一目置かれていたらしく、時には

そういう人達にも稽古をつけて貰えた。辛かったが、同時に楽しかったと思う。ア

デルの訓練の賜物でもあるが、元々サードにも剣の才があったのだろう。二年後には魔法

剣士の称号を与えても良いというレベルにまで、サードは腕を上げた。サードがアデルに

呼び出されたのは、そんな時だった。

「サード、ちょっとついてこい」

「何？」

「くおら！何ではなーい！」

そういうアデルを何ですか、団長とサードがかわすと、アデルはちよつと歩くぞとサードに告げた。調査場に向かう為に、途中立ち寄った町からどんどん離れていく。何処まで行くのだろうとサードが思っていると、草原に出た所でアデルが歩みを止めた。

「これをやろう」

アデルがサードに三つの魔石を差し出す。サードはアデルが魔法剣士になる事を認めてくれたのだと思い、純粹に喜んだ。サードが感謝の気持ちをアデルに告げようと顔を上げた時、その瞳に映ったのは真剣な顔をして自分に剣を向けるアデルだった。

「え……アデル？」

「サード、真剣勝負だ」

何を、というサードの疑問に答える事も無く、アデルが切りかかってくる。サードは必死に攻撃をかわし応戦するが、サードの敵うレベルの相手ではなかった。小石に躓き、転ぶ。

いつものアデルならば、仕方ないなといって手を差し伸べてくれる所だ。しかし、そこにいたのは鬼のような形相をした一人の剣士だった。冷たく剣を取れと言い放つ。サードは立ち上がると、アデルに習った方法で魔石を使い、剣に炎を纏わせる。そんなサードの攻撃を容易く受け止めると、アデルは剣に風を纏わせサードに向けて技を放った。

「真空剣！」

二重の風の刃が、サードを襲う。それは容赦なくサードの全身を切り刻んでいった。サード

ドは必死に立ち上がろうとするが、足に激痛が走る。血が止め処なく流れ、意識もはつき

りしない。とうとうその場に崩れ落ちてしまった。倒れたサードの元に、アデルが剣をしまいつかつかと歩み寄ってくる。

「ア、デル」

「――…サード。お前の剣の腕は上達したとはいえ、まだまだだ。自分の実力を思い知ったか？」

それだけ言うと、アデルは踵を返し歩き始める。直感した。自分はこの場に打ち捨てられていくのだと。サードは必死に何でなんだと叫んだ。理由も知らず、このままアデルに捨てられていくのは嫌だった。そんなサードに告げられたのは、役に立たない者はいらないという、無常な言葉だった。

「そ、そんな……。アデル、嘘だよな」

その問いにアデルは答えない。歩いていくアデルの姿がどんどん小さくなる。アデルの姿が完全に見えなくなった時、サードは声がかれるほど泣き叫んだ。

興味津々といったマキノが、サードにその後の事を尋ねると、サードは血が止まらなくて動けなかったが、回復の魔石を見つけた事で何とか助かったのだという。魔石など、そこに落ちている物ではない。アデルがサードの為に置いていったのだろう。

「あ、もしかしてサードがアデルと別れたのは……」

「そうだ。ランツフィートが侵攻される、一ヶ月前の話だ」

恐らくアデルは、サードを切り捨てたのではないだろう。国の異変にサードを巻き込むま

いとした結果だったのだ。その時アデルがアンカースで重要な役割を担っていた事が、後

に調べた結果わかったらしい。そして、五年前世界樹のあった島付近で失踪した事も。そ

れを知ったサードは、アデルを探す為今まで旅を続けていたのだと告げた。

「だけど、アデルさんを探してどうするつもりなんだ？」

「アデルの真意が知りたい。……あの時の俺は幼すぎた。俺が未練を残さず別れるようし

向ける為、アデルがあの時戦った事になど気付きもしなかった。アデルと別れた何年かは、

俺を切って捨てたアデルを憎んでいたほどだ。その憎しみは、俺自身すら変えてしまった

……今の俺に会う資格など、ないかもしれないがな」

「大丈夫ですわよ」

自嘲気味に俯いて笑うサードに、ガーネットが笑って言った。

「変わらないものなど、滅多にありませんわ。あるとすればそれは想い。あなたがアデル

に会いたいという、その純粋な想いですわ」

ガーネットの言葉に、サードの口元に笑みが宿る。

「そうか……」

「そうだぜ、サード！な、マッチョもそう思うだろ！」

「おう！アデルさんは生きてるって事が分かったんだしょー！」

珍しくキルトとニックスが一致団結してサードを励ましている。それにしてもニックスは、

段々マッチョと呼ばれる事に抵抗が無くなっている様だ。

「サード、アデルさんにはきつと会えるさ。旅の目的がアンカース

という以上、彼の行動

と交わる時がくるかもしれない。だから、これからも一緒に頑張ろうな！」

「ああ」

ラフィストは、サードの話が聞けて良かったと思った。今まで以上に、サードと言う人間

を知る事が出来たし、仲間だという意識が自分の中で高まったからだ。言っちゃって楽に

なったんじゃないのとからかうナディアをかわし、サードがマキノにアデルと何処で会っ

たのか尋ねる。マキノが夕方の事を思い出しながら、宿を出てちょっと行った所だと告げ

ると、サードがガタツと音を立ててその場を立ち上がった。

「サード？」

「ラフィスト……悪い。俺は先に帰る！」

剣を手に取り、サードが店の外に走っていく。一同が止める間もなく、サードはあっとい

う間に走っていつてしまった。自分達も行くべきか迷ったが、ガネットがそれを止める。

ガネットの言う通り、今はサードのしたいようにさせてやろうと思ひ、その場に留まっ

て暫く話でもする事にした。

宿の裏庭に出て、空に浮かぶ満月を一人眺める。美しい夜だった。

今日は色々な事があつ

たと思う。懐かしい人物の名前も聞く事が出来た。目的の物はこの町でも見つからなかつ

たが、彼の安否を知れただけでも良かったのだと思う。そんな事を

考えていたアデルの元に、誰かが近付いてくる。

「アデル！」

「……サードか。大きくなったな」

「大きくなっただけじゃない！俺は……俺は強くなった！あの時のように、無知で無力な俺じゃない！」

「そうか……もうそんなに……七年か」

サードに背を向けていたアデルが振り向く。あれから色々あったのだろう。少し、やつれたようだと思ふ。

「アデル、教えてくれ……お前に何があったんだ？何で俺を戦に巻き込まないよう、突き放したりしたんだ？」

サードがアデルに詰め寄る。アデルはそろそろ話しても良い頃だと思っただのか、ゆっくりと語り始めた。

「俺は、関係ないお前を巻き込みたくなかった。それにあの時、城の中では良くない噂があつたしな……」

サードが、もしかしてあの魔導士の事かと尋ねると、アデルは頷く。そして五年前重要な

情報を掴み、それによって消されかけたのだと言った。

「重要な、情報？」

「魔導士と共にアンカースに居る、グレイスという存在の復活方法だ」

アデルによると、グレイスは不完全な状態なのだという。まずは魔導士よりもそっちを何とかしようと思つたらしく、グレイスの復活を食い止める事にしたらしい。それにはルー

ン聖石を探し出し、それを破壊する必要があるのだと彼は言った。
「サード、どんなに些細な事でもいい。ルーン聖石について知っている事があつたら、教えてくれ……頼む！」

アデルの訴えに、サードが迷う。ルーン聖石について自分は知っている。仲間の一人が持っている物だ。それを告げればアデルは喜ぶだろう。しかし、アデルはルーン聖石を壊すと言った。あれはティーシエルにとって大切な物だ。それを壊すとなると、彼は非常に悲しむかもしれない。だが、サードはアデルの役に立ちたかった。小さな声で、仲間が持っている事を告げる。

「どこにいるんだ！サード、案内してくれ！」
アデルの頼みにサードが頷く。二人は、その場から離れ、歩き出した。

あれからレストランで話した後、ラフィスト達は宿に戻る事にした。今はその帰り道の途中である。突如、何かに気付いたらしいティーシエルが空を仰ぎ見る。

「ティーシエル、どうかした？」

彼の様子に気が付いたナディアが声をかけるが、ティーシエルは言葉を濁した返事を返す。

少し思案した後、ラフィスト達に散歩してから戻ると告げた。いつもと違う態度に、ナディアが自分もついて行くと言うが、ティーシエルによって強く拒まれてしまった。渋々つ

いていくのを諦めたナディアにすぐに戻ると声をかけると、ティーシエルは広場の裏手にある森の方へ走っていった。森の中に入り、完全に一人きりになったティーシエルは息を整える。辺りに誰かいる様子はない。

「出てきなよ!……そこに、いるんだろ?」

そう言うと、待っていたかのように黒いローブを纏った男が姿を現す。禍々しい気配と、

強い魔力。おそらくコイツがアンカースにいる魔導士だと確信する。

「お前が、アンカースにいる魔導士か……」

「あなたこそ、私に気が付いたからこそ、ここへきたのでしょうか?」
よくもまあいいしゃあしゃあと、と思う。これ見よがしに自分だけに魔力の波動を送って

おいて、気が付いたからときたまんだ。ティーシエルが短く何の用、と言うと魔導士は自

分と一緒に来るよう告げた。答えず、無言で魔導士を睨み、嫌だといったらと問う。

「少し、大人しくして頂くだけです」

そう言って魔導士が出した物は、かかった相手を眠らせるスリープの杖だった。相手が実

力行使をする気だと分かり、さっと応戦の構えを取り呪文の印を結ぶ。

「ジューテiriamオクサイド!」

もの凄い量の水が発せられ、魔導士を襲う。あっという間に、魔導士は飲み込まれてしま

った。ティーシエルが止めとばかりにもう一発放とうと、詠唱を始める。しかし、みるみ

るうちに相手を襲った水が無くなっていく。再び眼前に現れた魔導士はまるで無傷だ。

「な……なぜ?」

効かないと言いかけた瞬間、辺りに鈴の音が響き渡る。それと同時に、ティーシエルの瞳が閉じられ、地面へと倒れこんでいった。スリープの杖が発動したのだ。

「くくく……流石グレイスメの杖。いかなる魔法をも受け付けんわ……」

地面に倒れたティーシエルの腕を掴み、魔導士がワープする。そこにはティーシエルの杖だけ残されていた。

ティーシエルと別れたラフィスト達が歩いていると、前方からサードと一人の男が走ってきた。サードと一緒にいるのがアデルなのだろうと思い、ラフィストはサードにどうかしたのか聞いた。サードはそれに対して簡潔に、ティーシエルはいるかと尋ねる。ラフィストがティーシエルなら散歩に、と言いかけた瞬間鈴の音が響き渡った。

「この鈴の音は……まさか！サード、あっちだ！」

アデルが真っ先に鈴の音がした方へ駆けていく。サードもアデルの後を追い駆けていった事で、何かあったのだと悟った。ラフィスト達も彼らを追って走り出す。いち早くその場についたアデルが、地面に落ちている杖を拾い上げる。そのすぐ後に、サードがアデルに追いついた。アデルはどうかしたのかと聞くサードに、手に持った杖を見せる。

「それは確か……——ティーシエルの」

「やっぱりな……」

「やっぱりって、どういう事だ？ アデル！」

そこに漸くラフィスト達が到着し、二人の元に歩み寄った。アデルはラフィスト達に気付

き、再び杖の所有者を確かめる。同じ杖を持っているガーネットが確認し、名前まで御丁

寧に彫ってありますし、間違いありませんわと告げた。

「くそ！ 先手を打たれた！」

木に拳をぶつけ、やりきれない思いを露にする。そんなアデルに事情を尋ねると、ティー

シエルがアンカースに連れ去られた可能性が高いといった。ルーン聖石について話し、き

っと目的はルーン聖石だろうと付け足す。事の事態を察知し、今すぐアンカースに向かう

事にした。アデルが、懷から一つの石を取り出す。

「ここに帰還の石が一つだけ残ってる……俺はアンカース城に行った事があるし、これを

使えば今すぐアンカースに行く事が出来る。ただ、問題は帰りだな……」

俺はワープを使えないしと言うと、ナディアがワープを使うと言った。

「だがこのメンバーの数じゃ、多すぎて目立つな……」

サードの呟きに、アデルが頷き今回は救出に専念すべきだと告げ、精々4、5人程度で行

くべきだと付け加える。ラフィストがアデルに協力してくれるよう頼むと、アデルは自分

の目的の為に協力すると述べた。結局、アンカース内部を知っていて行く事の出来るア

デルと、仕掛け対策にキルト、ワープ要員にナディア、万が一に備えて戦士系のラフィス

トとサードが行く事になった。

「ラフィー、私達は宿で帰りを待っていますわ。……ティーシエルの事、よろしくお願い致します」

「ああ、無事に連れて帰ってくる！」

残るガーネットとニックスとマキノにそう力強く告げ、ラフィスト達はティーシエル救出

にアンカース城へ向かった。

二十六章 一〇再会

小さく喘ぎ、薄っすらと目を開く。どうやらここは、先程までいた森の中ではない。一面に蔓が張つてある、広々とした部屋の中に自分はいるようだ。しかも御丁寧なベッドに横になっている。

「……………ここ、は」

「起きたか？」

誰かが近づいてくる。その人間の姿を確認すると、先程の黒づくめの魔導士ではなかった。

しかし見知った顔ではない。一体誰なのだろうか、とティーシエルはぼんやり考えていた。

その男は、ティーシエルの額に優しく触れる。その行為から、敵意は感じ取れない。その

男はベッドの近くに椅子を用意し、そこに腰をかけた。

「私の名は、グレイス。そしてここはアンカースだ、息子よ……………」

――」

目の前に居るこの男がグレイス。アンカースにいる創世神の一人であり、敵かもしれない

男。そして、自分の父親。憎しみや愛情といった様々な感情が、ティーシエルの心の中を

駆け巡っていく。ティーシエルが黙っていると、その沈黙を信じられないゆえのものと取

ったのか、俄かに信じられない話かもしれないが、とグレイスが付け加えた。それに対し、

ティーシエルはぶっきらぼうに、わかっていますと一言述べる。

「そうか……………」

その瞬間、グレイスがフツと優しい笑みを浮かべる。ティーシエル

にはその笑みが意外だった。勝手にそんな顔はしないと思っていたからかもしれないが、その笑みはグレイスの印象をガラリと変えた。これならば話を聞いてくれるかもしれないと思い、起き上がろうとするが、体は中々言う事を聞かない。先程のスリープがまだ残っているのだろう。それでも無理をして起き上がろうとするティーシエルを、グレイスが抱きしめる。そして軽く頭をポンと叩くと、再びベッドに横にした。

「まだスリープが体に残っているな……もう少し、寝ていなさい」そう言うと、グレイスがその場を離れ再び姿を消した。ティーシエルは閉じた瞼にその姿を映しながら、本当にあれが自分の父親、創世神グレイスなのかと思う。そのままティーシエルの意識は、夢の中へと入っていった。

アデルの帰還の石によってアンカースにやってきたラフィスト達は、アンカース城手前にある広場の前にいた。先にある城門を見ると、警備兵がうろついている。一筋縄では場内に入れそうにない。

「さて……問題はここからどうするか、だよな」ラフィストが呟き、皆に意見を求める。キルトは面倒臭いからアネさんの呪文でドカーンと行っちゃおうぜなどと言っているが、それでは少人数で来た意味もないし、潜入の為にキルトについてきてもらった意味も全くない。サードが呆れ返って

じゃあ、お前は来なく

ても良かったななどと言っている。大した案も浮かばず、暫くその場で話していると、ア

ンカースの兵士が六人ほど近寄ってきた。

「おい、お前達！何やってるんだ！ここは立ち入り禁止……」

「……ウザイ。……そうね、たった今いい案思いついたわ。

ラフィー、あいつら倒

して衣装借りるのはどうかしら？」

言い終わるや否や、ナディアは呪文の詠唱を始める。ティーシエルが連れ去られてからか

なり気が立っているらしい。その証拠にナディアの手から発せられた炎の威力は、いつに

も増して強かった。しかし、兵士達には余り効果はなかったらしい。

「チッ……流石アンカースね。呪文はあまり効かないみたい……」

体勢を立て直したアンカース兵が一斉に向かってくる。それに応戦しようと、ラフィスト

とサードが剣を構える。そんなサードにアデルが後ろから声をかけた。

「サード、お前がどれだけ強くなったのか、俺に見せてみる。お前に徹底的に教えた俺の

剣術、どれ程お前のものに出たか」

「言われなくても！」

アデルの言葉に、いの一歩にサードが飛び出して行き、敵を切り伏せる。ラフィストもそ

れに負けじと、アンカース兵に向かっていく。キルトも後ろからライジングサンを投げつ

け、加勢する。ナディアは思ったように魔法が使えない事により、

後ろで皆の活躍を眺め

ている形になった為、イライラが募っているようだ。ナディアがふと隣に立って皆を見て

いるアデルを見ると、その表情はさっきまでの温厚な顔ではなかった。剣の腕を見定める

厳しい師の顔。アデルを見てみると、自分の師であったアルベルトを思い出す。厳しく、

優しくかった彼を思い出していると、ナディアはイライラしていた自分を抑える事が出来た。

そうこうしている間に、兵士達はラフィスト達によって倒されたらしい。その殆どが、特

に気合が入っていたサードによって倒されたものだ。

「サード」

ナディアの隣に居たアデルがサードの元に歩み寄っていく。

「見事だったよ。……強くなったね」

「いや、アデルには及ばないさ」

サードの言葉に、残りの三人は目が点になる。普段のサードなら、当然だとか、フツとか

言うはずなのに、と思ったからだ。サードは心からアデルを尊敬しているのだろう。そんな事を三人でボソボソ話していると、そのサードからお声がかかった。

「おい、何してる。さっさとこれを着ろ」

そう言って三人に服を投げつけるサードは、いつものサードだった。

「あん、もう汗臭い！」

あれから兵士の服に着替えたラフィスト達は、キルトが開けた城の裏口から侵入して一階

の廊下を歩いていた。まずは何処に行ったものか迷っていると、アデルが食堂なんかに行

けば人が集まっているから情報も集まるだろうと助言する。アデル

の助言通り食堂に入る

と、晩飯時という事もあり、そこには3、40人程の兵士が寛いでいた。

「ふいゝ、今日もよく働いたぜ」

「本当、本当。ったく人使いが粗いのなんの！」

何人かが集まって談笑しているテーブルがあったので、ラフィスト達はその近くに座る事にした。ラフィスト達が聞き耳立てているとは知らず、彼らは話し

続けている。

「しかしジュリア様、相変わらず優しいよな」

彼らの会話に、ラフィストは思わず耳を疑う。七年前にいなくなつた自分の妹と、同じ名

前の人間が今アンカースにいる。その人物の事が気になり、ラフィストは危険かと思つた

が思い切つてその兵達に尋ねてみる事にした。

「あの……ジュリア様って……」

「ん、何だお前……新入りか？」

肯定の返事を返すと、その兵は元々ジュリアは七年前に記憶を失つて倒れていた所を、ア

ンカースの王子によって助けられ、それ以降この国の巫女をやっている事を教えてくれた。

それを聞き、ラフィストはその少女はきつと妹に違いないと思つた。隣に座っていたナデ

ィアが、突然のラフィストの行動が気になつたらしく、ラフィストの耳元にジュリアとは

誰だと呟く。ラフィストは他の兵には聞き取れないほど小さな声で、妹だと返した。

「おい、新入り！それよりもっといい話があるぜ！」

兵士達の話聞いていたのか、かなり酔っている別の兵士が、ラフィスト達のテーブルの

近くに寄ってくる。鼻につくほど匂ってくる酒の匂いに顔を顰めながら、ラファリストは何ですかと返事する。

「他の奴らは知らないだろうけどな……さっき、王お抱えの魔導士が、可愛い子抱えて王

座の間に入っていったんだ……ヒック！ありゃきつと上玉だぜ」

饒舌な兵士に、アデルとサードがにやりと笑う。早速王座の間に向かおうとした所、食堂

に誰かが入ってきた。一瞬身構えるが、すぐにその警戒を解く。食堂に入ってきたのが、

14、5歳ほどの赤茶髪の女の子だったからだ。その少女は間違はなく、七年前にいなくなったラファリストの妹、ジュリアだった。

「すみません……水差しを頂けないでしょうか」

兵士の一人にそう頼み、水差しを受け取る。ジュリアの姿を見て、ラファリストは今にもジ

ュリアと叫びだしそうになっていた。ラファリストが心の中で葛藤している間に、ジュリア

は食堂を後にしようとしていた。ラファリストに気が付いた様子は全くない。兵士が記憶がないと言っていたのは、間違いないのだろう。

「ジュリア……」

生きていると分かって、抱きしめたい程にラファリストは嬉しかった。しかし、ただ目線で

追っているだけの今のこの状況が、腹立たしくてたまらなかった。その様子に気付いたナ

ディアが、ラファイーと見かねたかのように声をかける。

「行ってきたさいよ。今行かないと、後悔するわよ」

ラファリストは一瞬迷ったが、首を振る。確かに行ってきたいが、今はティーシエルを助け

る方が先だ。死んだと思っていたジュリアが、生きていると分かっただけでもよしとしよ

うと、自分を納得させる。

「まあまあ、まだアイツから情報聞き出せそうだしさ。ちょっとカマかけて、何か仕掛け

とかないか聞いておきたいんだよな……」

「あの手のタイプは、煽てれば色々はきそうだしな」

キルトやサードまで、さり気なく行って来いと背中を押す。アデルが軽くラフィストの背

中を押し、こっちは任せておきなとウィンクする。ラフィストはこんな状況でも自分の事を

慮ってくれる仲間達に感謝し、廊下に飛び出していった。すると、ラフィストの視界に

廊下を歩くジュリアの姿が入ってくる。ラフィストはジュリアに声をかけて、走りよって

行った。呼ばれたジュリアが、ラフィストの方を振り返る。

「あ……き、君……ジュリアだよ」

何と言っているのか分からず、ラフィストがしどろもどろに話を切り出す。

「ええ、そうですけど。……あ、もしかして新入りの兵士さんかしら？ 改めてよろしくね。

……ごめんなさい、私すぐ行かなくちゃ」

「待って！」

ジュリアを制止し、ラフィストは被っていた兜を取る。

「ジュリア、僕は君の……兄だ。ラフィストだよ。覚えて、ないか？」

「兄……？」

いきなりの事に、ジュリアは完全に戸惑ってしまっている。目の前で対面しても、彼女が

ラフィストの事を思い出す気配は全くなかった。それどころか、ラ

フィストを疑うような
目で見ている。

「ごめんなさい。きっと、何かの間違いじゃないかしら？……私、七年前に倒れている所を助けられたのだけれど、私に家族はいなかったって。助けてくれたロイド王子が、そう仰っていたわ」

「君は王子の言う事を鵜呑みにするのか！？」

「そ、そんな事を言われても……困ったわ。……それにもし私が、あなたの妹だとしても

———」

「ジュリア様！」

廊下の向こうから兵士がジュリアを呼び立てる。ラフィストは拙いと思い、再び兜を被り直した。すぐ行かなくてはと言っていたところから、なかなか戻ってこないジュリアの様子を見に來たのだろう。他の兵と格好が異なる事より、兵隊長のよくな立場にいる人物かもしれない。

「あ、行かなくちゃ。じゃあ……」

ジュリアが足早に去っていく。今度はラフィストも、ジュリアを追う事は出来なかった。

様子を見に來た兵士が、ラフィストの姿を認めると、ジュリアにある兵士は誰だと尋ねる。

「ええ、私の兄だと言っていたのですが……」

「そうですか……まあ、そんな輩もたまにありますからな」

ジュリアを部屋まで導くと兵士は、ジュリア様の家族はアンカース城の者と王子ですから

お気になさらぬよう、と告げて扉を閉めた。そして、そこから更に歩き別室へと入っている

く。何人かの兵士がいる様子から、どうやら兵士の控え室のようだ。
「どうかなさいましたか？」

「…………どうやらネズミが入り込んだらしい。探せ！」

彼の掛け声と共に、部屋から一斉に兵士が飛び出していった。

留守番の形になった三人は宿で紅茶を飲みながら、アンカースに向かった彼らの帰りを待っていた。ポツリと、マキノがティーシエル元氣かなと呟く。ティーシエルはワープが出来る。だからもし何かあっても、彼ならばワープで戻ってこれるだろう。しかし、一向に

戻る気配がないという事は、城の中もしくは術者本人に、呪文封じでも施されているのかもしれない。そう考え、マキノはティーシエルを心配し、先の一言を漏らしたのだ。ガー

ネットがぼうっとしながら、そうですわねと一言返す。ガーネットの心ここに在らずな状態に気付いたマキノが、ねえガーネットと話しかける。

「今ティーシエルじゃなくて、ラフィーの心配してるんじゃないの？」

「えー！」

ガーネットが急に姿勢を正し、そんな事はありませんわと必死に否定する。マキノはまあ、

いいけどねと言った後、あ、でもさあと話を続ける。

「ナディアって、呪文使えてるのかなー？」

「そりゃ大丈夫だろ。相手だって魔法使うんだしさ。ティーシエルにだけかければ、いいじゃねーか」

「そうだけど……あのティーシエルが、そう簡単にかかるの？」

マキノの疑問の声に、ニックスがうーんと悩む。ガーネットは普通はありえませんか、

あちらには島を沈ませるほどの魔導士がいる事ですし、可能かもしれないと呟く。

そっかと納得し、二人は考えるのを止めた。本来体を動かす方が性に合っている二人は、

考えるのも、誰かを待ってじっとしてるのも好きではない。そんなじれったい気持ちを抑

える為、別の話題に変える事にした。

「あ、そういうば……ずっと思ってたんだけど！サードの髪型って、アデル意識してると
思わない？」

マキノの言葉に、ガーネットは、多少は思いますけどと控えめに答え、ニックスは絶対そ

うだと断言する。二人から肯定の返事が返ってきた事に気を良くしたマキノが、更に話す。

「でもさー、アデルって王子様みたいーい」

「王子様？」

ガーネットがキョトンと語尾を繰り返して返すと、マキノは肯定した後、ニックスには

前に言っただけ、王子様って私の理想なんだと付け加える。ニックスはマキノの理想像が

目の前に降って沸いた事で、ただただショックを受けているようだ。ショックを受けなが

らも、どの辺が王子なんだよ、と内心でニックスが思っていると、マキノはウツトリとし

た表情で、優しいし、強いし、背が高いし、完璧とアデルの王子としての要素を並べ立て

た。全ての点で比較しても、自分が勝てる点は何一つない。項垂れ

るニックスの傍らで、
女の子二人がきゃあきゃあ騒ぎ出す。

「本当、懂れるよー！……まあ、ガーネットには既に王子様がいるから、関係ないけどね！」

「んもう！何ですの！マキノったら！」

その場に居るのも辛くなったニックスは、お茶のおかわり入れてくるわと言いつつ残り、その

場を離れる。心の中で涙を流しながら、あいつ愛想がいいからどれが本心か、全くわからねえよと一人ゴチた。

曲者探しに兵士達が動き出した頃、食堂ではキルトが巧みな話術で、アンカースの情報を聞き出していた。アデルやサードはアンカース出身と言う事もあり、沈黙を守って食事を取る振りをしている。ナディアも喋れば女だと分かってしまうので、情報収集は全部キルトが行っているのだ。酔った兵士を酔い潰し、キルトが三人の元へ戻ってくる。

「あいつ本当、口軽すぎるぜ……あんなの一兵士として置いといて、マジ大丈夫か？」

お陰で隠し扉とかの仕掛けは事前に知る事が出来たけど、と言うキルトに、アデルが面目ないと返す。今は侵入している立場とはいえ、元は自分もこの人間だったのだ。かなり気にしているのだろう。先程のやり取りで、王座の間の真下に隠し部屋がある事を知った

キルトは、とりあえずそこに行ってみてはどうだと他の皆に切り出

す。アデルが、恐らく
そこが一番人を拘束しておくには最適だろうと言った事が決め手となり、皆はそこに向かう事に決めた。合流する為にラフィストの元へ向かおうとした時、バンツと食堂の扉が開
らかれる。そして、何人かの兵士がどっと入ってきた。

「今から身体検査を行う！兜や鉄仮面を被っている者は脱いで、一列に並べ！」

いきなりの事態に、アデルとナディアが焦りだす。サードは元アンカースの人間とはいえ、
広く知れ渡っている可能性は低い。キルトも、一般兵として上手くやり過ごせるだろう。

しかし、アデルとナディアは別だ。アデルは団長として広く知れ渡っていたし、何より今

はアンカースの御尋ね者だ。末端の者まで知っているだろう。ナディアは根本的に女なの

で、ここにいる事態が不自然だ。どうしようか迷っていると、彼らの様子に気付いた一人
の兵士が近寄ってくる。

「おい、何をしている！」

さっさとしろとばかりに、ナディアの腕を掴む。

「――気安く触らないでよ！」

バツと掴まれた手を振り払い、ナディアが叫ぶ。明らかに女性と思われる声が、食堂中に

響き渡った。食堂中の兵士が、ナディアたちの周りを取り囲む。こ
うなったら実力行使し

かないわね、と言わんばかりにナディアが仮面を脱ぎ捨て、呪文の詠唱を始める。

「汝が見るは光の幻、我与えしは深淵なる闇への誘い……」

「な、何だその詠唱は！」

「デイドリーム！」

食堂中に虹色の煙が立ちこめ、周りを取り囲んでいた兵士達が次々と倒れていく。あっけ

に取られている他の仲間をナディアが促し、四人は食堂を飛び出して行った。キルトとア

デルが先行しながら、王座の間へと走りだす。

「それにしても君、無茶するねえ。まるで若い頃の俺のようだ」

「ふふ、ありがとう。だって私、まだまだ若いもの」

その後、二人は走りながらさっきナディアが使った魔法について、にこやかに会話してい

る。追われている立場だというのに暢気な二人の様子に、サードとキルトは呆れた様子だ。

「そーだ！君の魔法、少し貸してくれないか？」

「え？」

「一度、強い魔法使って、魔法剣を使ってみたかったんだよねー」

「あら、いいわよ」

どうやらこの二人は、結構馬が合うらしい。ピンチをピンチとも思わない豪胆さも、似て

いるのかもしれない。こんな調子で彼らが廊下を走っていると、前方で一人の兵士が手を

振って兜を取った。遠くの人影を見分けたキルトがラフィストだと皆に告げる。

「ラフィー、どうだった？」

キルトが彼らの元に駆け寄ってきたラフィストの肩を、ポンと叩く。ラフィストは何も答

えず、ただ首だけを横に振った。

「もしかしたら、記憶を封印されている可能性があるな……」

「アデルさん、本当ですか！」

「ああ」

「ラフィスト、俺達の侵入がばれた。直に追っ手が来るかもしれない

い。今は先を進むぞ！」
サードの言葉にラフィストは頷く。再び彼らは王座の間に向けて走り出した。

目を覚ましたティーシエルは、ゆっくりと指を動かしてみた。どうやらもう、スリープによる影響はないらしい。自分にスペルロックをかけられている様子も無い。ベッドから起き上がり、周りを見回す。周囲にグレイスがいる様子も無い。今ならばワープで簡単に逃げられるだろうが、そうする気は起きなかった。暫くぼんやり立っている、グレイスが水差しを持ってやってくる。水差しを渡し、辛くはないかとティーシエルに尋ねた。別に、とティーシエルが答えると、グレイスは似ているかと呟いた。

「誰、に？」

「テレーズに、だ。……ルーン聖石など持っていないくとも、一目で分かる」

そういうと、グレイスは椅子に腰掛け、聞きたい事があるのだろうと言った。お前も座れと言うようにグレイスが掴んだ手を、ティーシエルが乱暴に払いのける。

「何で……僕はこの時代の、ここにいるの？」

「お前を、守る為だ」

「僕を……？」

彼が自分の親である事を思わせるような言葉に、ティーシエルが戸惑う。

「一億年前のあの日……のっぴきならない事が起こった。世界樹に

よって、この世界のバ

ランスの崩壊が起こったのだ。私一人の力では、とても止める事が出来なかった。その時

の私に出来た事は、不完全な状態となる事で世界樹と共に眠りにつき、フレッドの魂の再

生を待つだけだった。しかしその間、赤ん坊だったお前を守る者は誰も居ない……だから

テレーズがお前を、私やフレッドの魂が目覚めるこの時代に送ったのだ。——…しか

し、お前の力を欲すると共に恐れていた世界樹も、ただでは転ばなかった」

グレイスの手がティーシエルの額に伸びる。髪に触れたかと思うと、頭についているサー

クレットをグレイスによって取られた。

「このサークレットは、お前の魔力を封印する物だ。世界樹によって付けられたこれを壊

すまで、封印は解けないだろう……——壊す方法はたった一つしかない」

「何？」

「創生の剣で切る……それだけだ」

こういうと、グレイスがサークレットをティーシエルの額に戻す。

「……でも、あなたにとって僕は、復活の為の駒に過ぎないんだろ」

「いや、復活と言うよりは完全体に戻るという方が近いな……私が不完全な存在になる為

に魔力を抽出して作った物が、ルーン聖石なのだから」

「——…じゃあ、何でそんな大切な物僕に持たせたんだ！自分で持っていれば、良かったじゃないか！」

「ただの目印だ。自分の子供だという、な……——だから、それはお前にしか使う事が

出来ないよう、施してある。それに、多少なりの護符代わりにもなってくれる」

ティーシエルはグレイスの事が分からないという風に、頭を抱える。グレイスは悪い奴の

はずだ。ナディアの故郷、ランツフィートの件だって、彼や魔導士が関わっていたはずだ。

そうだ、そうじゃないかと自分に言い聞かせ、ティーシエルはランツフィートの件はどう

説明するつもりだと責める。

「私は兵士に娘……ジュリアを連れてくるよう、言っただけだ。そこに住民を皆殺しにするよう追加命令を加えたのは、ダグラスだ」

「ダグラス……？」

ティーシエルの呟きに、グレイスが黒ずくめの魔導士だと告げる。

自分をここに連れてき

た奴が、ランツフィートを滅ぼした。あんな奴の為にナディアが苦しい思いを今もしているのだ。そう思うと、どうしようもない怒りがこみ上げてくる。

「奴は私を、私は奴を見張る為、共にいる……ダグラスは、私に勝手に動かれては困るらしい。今回も、お前を見つけたから会いに行こうとしたら、それなら連れてきてやるから

会いには行くなときた」

「何で大人しく言う事を聞いてるんだ！アンタは不完全でも創世神なんだから！」

「……人質をとられていてな。お前の母、テレーズの魂だ」

そういうと、グレイスは大きく息をつく。そして、正直私はダグラスの奴が恐ろしいと、

話しだした。

「今では城の殆どが奴の洗脳にかかっている……勿論、王も王子も

な」

ティーシエルがジュリアって子も、と尋ねるとグレイスが首を振る。記憶は取り除いたが、

洗脳から何とか自分の力で守っているという。

「ルーン聖石を私に使うかどうか、決めるのはお前の自由だ……無理に今、決めろとは言

わない。――……どうやらお前の仲間達が、城へ潜入したようだ。

……一度、仲間達の

元へ帰るといい。次にここに来る時に、答えを出しなさい」

そういうと、グレイスがティーシエルの前に空間を開く。そして、ここを抜ければ王座の

間の前に出ると言った。このままゲートを抜けるべきか迷ったが、今の自分に決意など出

来そうにない。皆の元へ帰ろうと、ゲートを抜ける時にティーシエルが見た、別れ際のグ

レイスの顔は、優しく、でもどこか寂しそうな顔をしていた。

「あー、疲れた……玉座の間はまだなのかよー！俺、デリケートだから、そろそろ限界な
んだけど」

文句を言いながら走るキルトに、ナディアがグチグチ言うなと一喝する。かなり走ったが

一向につかない玉座の間にイラついているのは、何もキルトだけではない。そんな思いを

払拭するようにラフィストがアデルに後どのくらいなのか聞くと、

アデルはラフィストの

方を振り向き、その角を曲がった所だと答えた。その時、いきなり前方に現れた人影に

アデルがダイレクトにぶつかる。相手の方にダイレクトに衝撃がいったらしく、ぶつかった

た相手が吹っ飛んだ。

「大丈夫ですか、アデルさん！」

「私は大丈夫なんだが……——」

ぶつかった相手はそうもいかなかったらしいと、アデルが倒れている人物を指差す。一体

誰だろうと覗き込んだラフィスト達の視界に入ってきたのは、探し人であったティーシエルだ。

いきなりの事に声も出ず、皆口をパクパクさせている。

「あれ、どうしたんだい？」

「ティ……ティティティ……——」

「ティ？」

アデルがそれじゃ分らないと言ったように、言葉を繰り返す。

「ティーシエル！」

「ええー！」

ラフィスト達から出た名前に、アデルも同じように驚く。背後からこっちから声がしたぞ、

という声を聞き、漸く状況を思い出した一向は、ティーシエルを抱えて慌ててその場から

ワープした。

「遅いねー。いい加減ランプも飽きてきたよー！」

「そうですね」

お茶を飲んだ後、起きて帰りを待ってしようというマキノの意見で、ランプをやっている

た三人だったがこれ二十回以上やっていた事もあり、流石に飽き始めてきたようだ。

「ひょっとして捕まっちゃったとか？」

ボソリと言ったニックスを、マキノが三節坤で殴り倒す。ニックスは何するんだと文句を

言っているが、マキノは言っている事と悪い事があるでしょと、聞く耳を持たない。それ

どころか更に殴りかかろうとしている。

「け、けどよ！あんまり遅いようだったら何か考えなきゃ……」

――

「あ」

言い終わる前に、ニックスの上に何かが降ってくる。その光景を見て、マキノとガーネット

トが少し間の抜けた言葉を漏らした。ニックスの真上に降ってきたのは、ワープしてきた

ラフィスト達だ。お互いの姿を確認しあい、彼らは無事に戻ってきた事を喜ぶ。それをニ

ックスの声が遮った。

「ど、どーでもいいがよ……そこ、どいてくれ」

ラフィスト達が恐る恐る下を向く。そこには下敷きにされたニックスがいた。ニックスに

謝りながら、ラフィスト達は慌ててその場から降りた。キルトとサードは悪いと言いつつ

も、大して悪いとは思っていないらしく、ゆっくりと上から立ち退く。この騒ぎで気が付

いたのか、サードの小脇に抱えられたティーシエルが目覚めました。

「ティーシエル！」

「あれ？ここは……皆！って、何で僕ここに！？――……玉座の間の前に、出たはずな

のに……あれ、その後どうしたんだっけ？」

恐らく玉座の間の前に出た直後、アデルにぶつかったのだろう。ぶつかったアデルは申し

訳無さそうな顔をしている。

「ティーシエル、何ともない？」

「ナディア……うん、大丈夫」

サードに降ろされて、ナディアの問いに答えるティーシエルの後ろで、サードがアデルに

促す。サードの促しで目的を思い出したアデルは、ティーシエルに用件を述べようと話しかけた。

「ティーシエル君。悪いけど、ルーン聖石を……」

アデルがルーン聖石の名を出した途端、ティーシエルが顔を背ける。明らかに不自然な態

度にナディアは何かあったのか問いかけるが、ティーシエルは黙って首を振る。だが、ア

デルに対して拒絶の姿勢は変わらない。

「初めて会う俺を、信用できないのは分かる……けど、それを壊さないでグレイスの復活

を阻止できない。……頼む、協力してくれないか？」

ティーシエルは後ろを向いたまま、首を振るばかりで何も答えない。サードがどういうつ

もりだと掴みかかり、振り向かせる。振り向いたその顔は、涙でクシャクシャだった。そ

れを見たサードの心に、罪悪感が沸き起こる。

「話せば……わ、かるって……言っただ、じゃ、ないか……！それに、グレイス……ううん、

父……さんは悪い人じゃ、ない」

一同が告げられた事実に驚いている中、ナディアがティーシエルに、グレイスに会ったの

か尋ねた。予期していた通り、ティーシエルがそれを肯定する。

「でもね、ティーシエル君。そいつがアンカースを操っているんだよ？だから、ルーン聖

石は壊さなきゃ……——」

言い聞かせるように、アデルがティーシエルに言葉をかけ、肩に手を置く。しかし、ティ

ーシエルは乱暴にその手を払い、アデルに掴みかかっていった。

「アンタに何が分かるって言うんだよ！……何もかも一人で背負い込んでいる父さんの何

が、アンタに！……ランツフィートだって、ダグラスって魔導士がやった事だ」

「ティーシエル、落ち着けよ！」

ラフィストが必死にアデルに掴みかかるティーシエルを止めるが、止まる様子は無い。

「それに、アンタには残念な話だけどね。……これを使えるのも、壊せるのも僕だけだ。

僕は、父さんを信じてみたい……だから壊さない」

掴んでいたアデルの服を離し、ティーシエルが宿の階段を駆け上っていく。ラフィストの

制止の声も聞かず、そのまま部屋に入ってしまった。

「ラフィー……私達、どうしたら……——」

「しばらく、そっとしておいてやろう。きっと色々あったんだ……」

このままここにいても仕方がないので、ラフィスト達も部屋に戻る事にした。ティーシェ

ルと一緒に部屋のラフィストを、気まづいだろうとニックスが自分達の部屋に誘うが、ラ

フィストは首を横に振る。ティーシエルが信じるといったグレイスはともかく、アンカー

スの魔導士が独断で来るかもしれないからだ。そうニックスに告げると、ニックスはそう

かと言って納得してくれた。

「あ、アデルさん……今夜はもう、これ以上……——」

「わかってるよ。私も目的の為とはいえ、焦りすぎていたようだな。

彼とグレイスが親子

だという事を、知らなかったとはいえ……――」

一刻も早く、目的を果たしたいだろうアデルが快諾してくれた事に、ラフィストはほっと

する。ラフィスト自身にとっても色々な事があつたので、彼も心身とも疲れきっていた。

そんな心と体を休める為、ラフィストも階段を昇っていった。

一 二十七章 一 離れた心

「ちょっと待って！」

部屋に戻りかけた一同を呼び止める声が響く。声の主、ナディアは去りかけたアデルの腕を掴むと、自分の方へと引っ張る。あまりの強さにアデルがよろけるが、ナディアはそんな事はお構い無しにアデルに詰め寄った。

「あなた……さっきルーン聖石を壊すって言ったわよね！」

「ああ、そのつもりだ。まあ、彼の同意が無いと何とも言えないけど……」

「じよ、冗談じゃないわ！——……アデル、例えばルーン聖石を使っちゃうと……無くなるのよね？」

「おそらく。はっきりとは分からないが、あれは魔力の結晶かもしれない。そうだとすれば、使ったと同時に消えるだろうね」

アデルの言葉に、ナディアの顔が蒼白になっていく。ナディアの旅の目的は、ルーン聖石

で弟を生き返す事。ルーン聖石が消滅してしまつては、その目的を達する事が出来なくな

ってしまう。その事でパニック状態になりかけているナディアに、ラフィストが声をかけ

ようと近寄るが、それよりも先に彼女の目の前に居たアデルが、不審そうな顔つきで肩に

手を置き、声をかける。しかしナディアは、アデルの手を勢いよく振り払い、フラフラと

二、三步後ずさっていく。

「うそ……うそでしょ？——じゃあ、私の……私の今までの旅って、一体何だったの！」

ナディアの問いかけに、誰も言葉を返す事が出来ない。暫くその場に立ち尽くして俯いた

後、ナディアは一同に背を向け、黙って階段を昇っていく。階段の途中で、一旦足を止めると、ナディアは静かだが強い口調で口を開いた。

「私、ルーン聖石が無くなった場合……この旅を降りる事も考えておくわ」

「ナディア！」

一同はナディアに制止の声をかけるが、彼女はそれを振り払うかのようにあつという間に階段を駆け上り、部屋に入ってしまった。

「お、おいラフィー……流石にやべんじゃねえか？」

「ああ、分かってる……けど、ナディアの問題なんだ。それは俺達にはどうにも出来ない」

「ラフィー！？そりゃいくらなんでも……」

「ニックス。中途半端な慰めや同情なら出来るかもしれない……でも、結局自分で納得す

るしかないんだ。……今俺達がすべきなのは慰めとかじゃなくて、そばに居て支えてやる事なんじゃないか」

「そ、そっか……そうだよな……」

ニックスが納得したかのように呟くが、後味が悪かったからか黙りこくってしまう。他の

皆もそれは同じようで、重苦しい雰囲気が一同の中に漂っていた。だが、自分達がここで思いつめていても仕方がない。ラフィストは皆を促し、それぞれの部屋に戻っていった。

皆が部屋の中に入った後も、ラフィストは一人部屋の前で立ち尽くしていた。さっきはニ

ックスにティーシエルを一人にしておけないと言ったが、中にいるであろうティーシエル

の事を考えると、何となく部屋に入りづらい気分になってしまったのだ。今回の事の発

端は、ティーシエルが連れ去られた事に全ては起因する。無理やり連れ去られたかのよう

に見えたのだが、その後何かあったのだろうかとラフィストは思った。そうでなければ、

幾らなんでもあの態度の変化はおかしいと思う。そうなるとアンカースにいますというグレ

イスの存在が、今一つ良く分からない。今までは敵である可能性があるかもしれないと漠

然と思っていたが、彼には彼の思惑が別に存在しているのかもしれない。一度直に会って、

話してみたいとも思う。そのグレイス復活の鍵のルーン聖石。これはティーシエルしか使

う事が出来ず、アデルさんが言うには、一度使ったら消えてしまう可能性が高いらしい。

ルーン聖石を使って復活しようとしているグレイス、その復活を阻止する為ルーン聖石の

破壊を模索しているアデル、ルーン聖石で弟を生き返そうと思っているナディア。ルーン

聖石を巡るそれぞれの思惑で、今パーティはバラバラになりかけていると言っても過言で

はない。そしてアンカースで生きていたジュリア。セクルードが言っていた特別な乙女と

は、やはりジュリアの事だったのだろう。アンカースがジュリアに何をさせようとしているのかは分からないが、一刻も早く妹を助けてやりたい。助けて、平和になった世界で空
白の時間を埋めていきたかった。それが今のラフィストにとっての、旅の目的となった。

しかし、それだけでは駄目なのだ。精霊の町で、ヴィラに自分が創世神フレッドの生まれ

変わりだという事を聞き、強くなれと言われた。この旅を始めて色々な出会いがあり、発

見もあった。けれど、未だに自分が一体どんな存在なのか、何をすべきなのか、それすら

分かっていない。そんな自分が、創世の剣を持つ事が出来るのだろうかと思うと、とてつ

もない不安が押し寄せてくる。それを振り払うように軽く首を振ると、ラフィストはノックして部屋の中に入った。

「あ、ラフィスト……」

部屋に入ると、思っていたよりティーシエルは落ち着いていた。彼の様子に少し安堵し、

声をかけようとしたが、その言葉を彼によって遮られてしまった。

「ティーシエル？」

「お願いがあるんだ！父さんに、会って欲しい……僕と一緒に」

「会って……アンカースに行くのか？」

ラフィストの問いに、ティーシエルが首を振って否定する。ティーシエルの意図がいまい

ちよく分からず、ラフィストが頭に疑問符を浮かべていると、精神転移の呪文で心のみア

ンカースに行くと言った。

「……わかった」

さっきまでグレイスの考えや、ルーン聖石の事など聞かなければならない事を色々考えていたのに、会うと決まった時にラファリストの心を占めていたのは、ジュリアの事だけだった。結局自分の中で、その他の事が後回しにされている事実気付き、ラファリストは駄目だな俺は、と一人ごちる。ラファリストの変化に気付いた様子も無く、ティーシエルが何かを口ずさみ、印を切る。自分の思考に耽っていたラファリストが気が付いた時には、蔓が張り巡らされた広い部屋の中に立っていた。実体はない筈なのに、浮いている訳でもなく地に立っている奇妙な感じに、ラファリストは僅かに気持ち悪さを感じる。

「何か、変な感じがするよ……」

「体は置いてきているからね」

「ティーシエル？」

重く、どっしりした声が響く。その声がした方を向くと、一人の男が立っていた。ティーシエルが父さんと僅かに呟いた所を見ると、彼が創世神グレイスなのだろう。

「その様子だと、返事をしにきたという訳では無さそうだな……まだ他に知りたい事があったのか？——…その隣にいる者も」

驚きの余りラファリストがティーシエルの方を向くと、ティーシエルが一つ頷く。実体が無

くとも、創世神ともなればその姿を見る事くらい容易いのだろうと納得していると、グレ

イスがどかっと大きな椅子に腰をかける。そしてラファリスト達の方を見つめて、何から知

りたいと問いかけてきた。ジュリアの事をいの一に聞きたい気持ちがあったが、まずは

仲間の揉め事の元となっている、ルーン聖石の事から聞かなければ拙いよなと思い直し、

ラフィストはその事から尋ねる事にした。

「あの、ルーン聖石で人を生き返らせる事と違って、出来るんですか？」

「？……ティーシエルから聞いてなかったのか？あれはただの魔力の塊。そんな力がある

なら、テレーズの為に使ってくれと言っているさ……まあ、だからこそ蘇生能力を持つ唯

一人の乙女が欲しかった訳だが……——」

「それって、ジュリアの事ですか！」

「……知っていたのか。そうだ、ジュリア＝ブレッセント……彼女がその乙女だ」

「じゃあ、記憶を奪ったのも……——！」

「私だ。少々可哀想な事だとは思ったが、ランツフィートの惨状を見ていた事を考えると、

そうすべきだと思ったからだ」

グレイスの言葉に、ラフィストがカツとなる。ランツフィートの惨状をジュリアが見る事

になったのだって、元を返せばアンカースがランツフィートで殺戮を行ったからだ。いや、

それ以上にジュリアを連れてこいと命令しなかったら、ランツフィートの殺戮だって行わ

れなかったかもしれない。そうすればジュリアは今も、ホールスで元気に暮らしていたは

ずだ。そんな想いがラフィストの中で溢れ出し、沸々とグレイスへの憎しみが沸き起こってくる。

「可哀想って！……元はと言えばあなたの都合で、ジュリアは……妹はそんな光景を見る

羽目になったって事がわからないのか！」

「ラファリスト、ランツフィートは……」

「でも、この人がジュリアを連れてこいって言わなかったら、ランツフィートの侵略すら

なかったかもしれない……それを否定するっていうのかティーシェ
ル！」

「それは……」

グレイスを庇おうと口を開いたティーシェルが、ラファリストの剣幕の強さに口を閉じる。

「ラファリスト……ランツフィートの件も、ジュリアの件も、今更言
い訳しようとは思わな

い。確かに君の言う通り、テレーズを蘇生させたいのは私のエゴに
過ぎないのだから……

だが、息子にまで強く当たらないで欲しい」

グレイスの言葉に、ラファリストはハツとする。頭が段々冷えていく
のが分かる。この人は

自分の行いを正当化せずに、自分のエゴだと言った。それに比べて、
自分は相手をただ責

めただけだ。それに、ラファリストの言葉はランツフィートの事を考
えて出たものではない。

あくまで自分は、ジュリアの事しか考えていなかった。それだって、
傍から見れば充分エ

ゴではないのだろうか。ランツフィートで死んだナディアの弟の事
を考えれば、生きてい

ただけで喜ぶべきなのだ。

「ティーシェル……ごめん」

ラファリストの言葉に、ティーシェルが気にするなというように首を
振る。

「本当にすまない……テレーズを生き返したら、必ず君の元に返すと約束する。だから、もう少し待って欲しい」

思いつめた、暗い表情のグレイスを見て、ラフィストは何も言えなくなる。この人は一体

どれだけの事を、自分一人で背負っているのだろう。ヴィラの言う全てを背負う覚悟を持

つとは、こういう事なのだろうか、ふと思った。

「父さん……その蘇生って、どうやるの？」

ナディアの事が気になったのか、ティーシェルがグレイスに尋ねる。ルーン聖石で生き返

す事が出来ないとわかった以上、せめて他の方法を探してあげたかったのだろう。

「蘇生能力と言っても、誰でも生き返せる訳では無くてな。……人の器と、魂を結合する

能力、というのが一番近い言い方だろう。人の器程度ならば私にも創る事が出来るが、魂

の再構築は流石に難しい……魂がこの世界に留まっている事が、最低限の条件だろうな」

「そうなんだ……」

「ジュリアの力が目覚めるのは次の朔の晩、五日後だ。五日後に仲間と共に、ここへ来る

といい……その時に全て話す。この世界に起こっている事全てを……」

「グレイスさん、創世の剣はあなたが持っているんですよね？」

ヴィラが言っていた事を確認しようとラフィストが尋ねると、グレイスがそうだと返す。

「だがあれは、今の不完全な私では封印を解けない……その件も、五日後にして欲しい。

それに心だけで来ているのだし、どのみち持ち帰れないだろう？」

半透明な自分の体に気付き、ラフィストがあつと声を上げる。創世の剣を自分に渡すのも抵抗が無い所からして、グレイスは自分達と争うつもりは無いのかもしれない。彼を完全に復活させるのは一種の賭けかもしれないが、彼を信じて賭けてみる価値は充分あるように思えた。そう思う事が出来ただけでも、ラフィストは彼に会う事が出来てよかったと思う。これ以上、肉体から離れているのは拙いからか、ティーシエルがそろそろ戻ろうと声をかけてくる。それに頷き、ティーシエルの手を取ると、再びティーシエルが呪文の詠唱を始める。

「ラフィスト……真っ直ぐな瞳と強い意志を持つ青年。――……君は、本当にフレッドとよく似ているよ」

「え……？」

グレイスが呟いた言葉は、その場から意識が消えかかっていたラフィストには、殆ど聞こえていなかった。何て言っていたんだろうと思った時には、ラフィストは既にベッドに上っていた。ラフィストの真横にはティーシエルが眠っている。精神転移呪文の疲れで、そのまま眠ってしまったのだろう。

「あ……そうだ！ナディアに蘇生方法について、教えてあげない！」

起こさないように静かにベッドから降りると、ラフィストは部屋の外へと出て行った。ナディアの部屋のドアをノックして、ナディアに声をかけると、中から入ればと返事が返っ

てくる。その声は重たい感じがし、不機嫌という風でなく、気持ち
が沈んでいるといった
色が強いように思える。中に入ると、ナディアは窓の外を眺めてい
るようだった。

「あ、あの……ルーン聖石の話なんだ。あれは、魔力の塊で人を生
き返——」

「ないんでしょ？」

「え？」

「生き返らないんでしょ？あの子は。……ありがと、気を使ってく
れて」

ナディアが少し寂しそうな微笑みを向ける。

「ラファイ、あなたにはいつも迷惑かけたよね。私って短気だし、
我が儘だし。あなた達

と居ると、何か落ち着くのよね。……でも」

言葉がつまる。何とか言葉を続けようと、ナディアは一つ息をつい
た後、視線を逸らすよ
うに下に向ける。

「分かっているの。今は我が儘言っちゃいけないのよね。皆だって大
変だし、私一人が悲し
いっていう訳でもないし。そうよ、今は私一人が我が儘言っていち
や、駄目なのよね……」

「ナディア……」

「私、ヴィラさんに呪文授かったし、さ。……でも……私、今まで
結構平気な顔してたけ
ど、本当はショックなの。ティーシエルが、まさか創世神の子供だ
なんて。……それって、

平民の子供の私と、あの子の間には、生まれながらに差があるって
事でしょ？私ね、差っ
て努力で無くなると思ってた。けど、実際は違うのよね。幾ら頑張
ったって、越えられな

いものがあるのよ」

「そんな事……」

ない、とラフィストが言う前に、ナディアがパンと音を立てて、顔の前で手を合わせる。

「ごめん、愚痴っちゃって。……でもね、分かってもらえるかな？

私がね、今まで何年も

かけてやってきた事、全部パーなの。——だから、また一から蘇生法の可能性を探さなきゃいけない」

「その事なんだけど、俺の妹が蘇生能力を持ってるらしいんだ！肉体の再生だけなら何と

かなるらしいし、この世界に魂が留まっていれば蘇生の可能性が……」

先程聞いた話を上手くナディアに話そうと、ラフィストは身振りを交えて説明しようとする

るが、ナディアは無理よとにべも無く切り捨てる。

「魂が元のまま留まっていられるのは、長くて精々二、三年……あの子が死んだのは七年

前よ？……魂の再構築も可能じゃないと、駄目なのよ」

「でもまだ留まっているかも……」

「もういい、余計な気を使わないで！……悪いけど、一人にして」

かける言葉が見つからず、ラフィストは黙ってナディアから背を向ける。ドアを開け、出

て行こうとした瞬間、後ろから声がかかる。

「ごめん。さっき少し、感情的になりすぎた」

「ん。気にしてないよ」

そう一言だけ残し、ラフィストは部屋を出て行く。その後ろ姿を見送った後、ナディアは

枕を抱えそこに顔を埋める。

「もう、やだ……今の私、凄く嫌な人だわ！」

今は自分の事だけを考えている場合じゃないという事は、わかっている。けれど、このまま皆と一緒にいいものか、ナディアは今一つ決めかねていた。もう一人で考え込んだりするのは止めて欲しい。頭の中で、フォートレスで再会した時にティーシエルが言った言葉が響く。

「そうよね……」

すつくと立ち上がり、最低限の荷物を纏めて廊下に出ると、ナディアはラフィストの部屋をノックする。すると、すぐに中からラフィストが出てきた。正直、言おうか迷ったものの、意を決して、ナディアは口を開いた。

「あの、私……二、三日、一人にしてもらってもいい？……少し、気持ちいを落ち着かせたいの、お願い」

「……そのままいなくなったりは……」

「しない、約束する。必ず一度はここに戻って、旅と一緒に続けるか決めるから」

ラフィストは考え込んだ後、ナディアに分かったと了承する。せめて四日後には必ず戻ってくるように付け加えると、ナディアはそれに了解の返事を返す。

「わかったわ。じゃあね……バイバイ、ラフィー」

そう言うと、ワープを唱えナディアはどこかに消えてしまった。バイバイと言った彼女の

言葉が、頭から離れない。その言葉に、一抹の不安さえ感じる。しかし今は彼女がどんな

答えを出すにしろ、信じているしかない。不安を紛らわそうと、ラフィストはベッドの上に転がる。

「五日後……全てが分かるのか……」

改めて声にその事実を出してみても、何となく実感がわかない。それ以上にラフィストの頭を占めているのはジュリアの事と、グレイスの思いつめたような表情だった。グレイス

は自分がこの世に生まれる一億年の間、ずっと一人で何かを背負ってきたのだろうか。そ

して、今度それを背負うのは、創世の剣を継ぐ俺の役目なのだろう。自分の事だけで一杯

一杯な自分。そんな自分に、本当に何かを背負う事が出来るのだろうか。考えれば考える

ほど思いつめていくだけで、気がおかしくなりそうだ。半身を起こして電気を消すと、何

も考えないように、無理矢理眠りに入ろうとする。起きた時に悩みが全部なくなっていた

ら、どれだけいいだろうと考えていると、冴えていた頭も次第に眠りに落ちていった。

朝起きてみたが、やはり悩みは消えずいつもと変わらない日、いやナディアがいらないのを

除いて変わらない日だった。

「ナディア……大丈夫かな」

「ラフィスト、ナディアがどうかしたの？」

心配そうにしているティーシエルに、昨日のナディアの件を話すと、ティーシエルはやっ

ぱり僕のせいだよね、と気落ちする。

「いや、そんな事は」

「いいんだ。――僕、結局ナディアの役にも立ってないし…

：肝心のルーン聖石は、
弟さんを活き返す事が出来ないし……」

「ティーシエル……」

「ん！僕は大丈夫だよ。それに僕、ナディアが戻ってきた時……出
来る限りの事をしてあげたいと思ってるんだ。……だから、もっと強くなりたい」

「そっか……」

昨日もう一度グレイスに会った事で、ティーシエルなりに決心した
のだろう。戻ってきた
目の輝きに、ラフィストも安堵する。安堵と共に、ラフィストのお
腹の音が部屋中に鳴り
響く。暫くの沈黙の後、ティーシエルがプツと噴出し、そろそろ下
に降りようかと立ち上
がった。顔を赤くしながらも、ラフィストも下の食堂に向かう。そ
こには既に皆が揃って

おり、席についていた。他の皆は待っていてくれるようだが、サー
ドやキルトなんかは既

に食べ終わっている。キルトは腹減ってたもんで悪いが先食ったぜ、
と一言了承を入れる

が、サードなど何処吹く風といった様子だ。相変わらずの様子に苦
笑しながら席につく

フィスト達に、ニックスがメニューを渡して注文するように勧めて
くれた。

「結構美味しそうですね！二人もさっさと選んじゃえよ」

「傭兵さん達が多いせいか、結構色々な土地の料理があるみたいなの！」

これとか結構グランで食べられてるものじゃない、とマキノがメニ
ューを指し示す。確か

に、マキノが指し示した洋食Aセットは、グラン大陸全域で食べら
れる郷土料理に、近い

感じた。そういえばグランの料理もここ最近口にしてないなと思い、ラフィストはこの洋食Aセットを頼む事にした。皆はどれにしたのか尋ねると、ニックスやマキノ、ガーネツトもラフィストと同じ物にしたらしい。やはり何だかんだ言って、皆グランの料理が恋しいのだろう。まあ、既に食べ終えたサードやキルトは腹に入れば一緒といった感じで、適当に頼んだらしいが。ティーシエルはジャムサンドと紅茶に決めたらしく、メニューを閉じて店員に渡している。ラフィストは朝食を待っている間に、ナディアの一件を皆に話す事にした。

「まあ、そういう訳で今はナディア、俺達から離れてるんだよ」
ラフィストが一通り話し終える。

「ナディア、大丈夫かしら……結構思いつめてしまう所がありますし」

「大丈夫さ、アネさんの事だし！」

心配そうにしているガーネツトの肩をキルトがポンと叩き、励ます。

「全く、勝手なものだな」

「な……！」

「おいおい、サード。そんな事言っちゃいけないよ。彼女だって悩んでるんだ」

ナディアの行動にサードが文句をつけ、その事に対してティーシエルが腹を立てるが、ア

デルによって先に諫められてしまい、ティーシエルは口を噤む。諫められたサードは、相

手がアデルだからかバツが悪いらしく、いつに無く大人しい。サードの態度にアデルはう

んうんと頷くと、サードも反省しているようだし許してやってよ、

とティーシエルに声を

かける。昨日の今日でバツが悪いのか、それとも苦手なのかは知らないが、ティーシエル

はうっと言葉を詰まらせ、そっぽを向く。アデルはそんな態度を気に入った風も無く、嫌わ

れちゃったかなと陽気に笑っている。

「それより、こっちが本題なんだけど……実は四日後に、皆でアンカースに行く」

「え？ のりこむのかよ！」

「いや、違う。グレイス……さんが、全てを話してくれるらしい」

「話す……という事は、戦う意思は無い、という事ですよ？」

ガーネットの問いに頷き、それだけは確かな様子だったと伝える。

ラフィストの言葉に違

和感を感じたキルトが、どういう事だと尋ねる。ティーシエルの方を見ると頷いたので、

ラフィストは昨日精神転移の呪文で、グレイスに直に会った事を皆に伝えた。

「なるほど、ね」

「あー、でも四日かー！ 何かウズウズするわ！」

納得した顔のキルトの横で、マキノが大はしゃぎはしていないものの、明らかに顔からは

楽しみという感情が滲み出た表情をしている。

「でもよ、ラフィスト。アネさんはパーティーを離れるかもしれないんだろ？」

「それは……分からないけど。どちらにしろ、二、三日以内には一度戻ってくるって、言

ってたし。……それに、俺、ナディアはきっと戻ってくるって信じてる」

ラフィストの言葉に、一同が頷く。

「今頃……何をしているのでしょうかね」

「ナディアの事だ。自分なりの答えを見出す為に、頑張っているさ。きっと……」

バイバイ、ラフィーと寂しそうに告げたあの言葉に、不安を覚えない訳ではない。でも今

自分達がすべき事は心配ではない。彼女を信じる事と、やるべき事をやる事だと自分に言

い聞かし、ナディアを心配しているガーネットに言葉を返した。

ベッドに柔らかな日差しが差し込む。差し込んだ朝日に、そろそろ起きると、マキノがベ

ッドに飛び乗って起こしに来るわねと思い身構えるが、一向にその気配はない。ナディア

は目を開けて身体を起こし、思いつき伸びた後、辺りを見回す。

昨日まで居た部屋とは

違う。部屋の中には自分一人しかいなかった。

「そっか、今は一人なんだ……」

一人になるのは、凄く久しぶりの様な気がする。いつもは朝起きたらマキノやガーネット

がおはようと声をかけてくれて、食堂に行けば皆が居る。そんな日常を、いつの間にか当

たり前のように感じていた。

「何か……つままない、かも」

おはようと言ってくれる人も居ない。食事をしても大事な人の顔も見れないし、楽しく会

話も出来ない。皆と一緒にいる時間の方が、一人で居た時間より短いはずだ。一人は慣れ

ている。それなのに、ナディアは一人でいる時間を苦痛に感じた。そもそも自分が一人で

いる事に慣れたのは、両親や弟を亡くしてからだ。一番自分と近しかった弟の事を思い出

し、一人でいる筈の無い弟に向かって問いかける。

「ねえ、ロズウェル。……私はどうすればいいの？」

世界樹も駄目だった。ルーン聖石も駄目だった。ラフィストが言っていた蘇生法も絶望的。

後に一体、何が残ったのだろうか。五年の間、探し続けた可能性はこれで全て掻き消えてしまった。何ももう、残ってはいない。

「皆、今頃何してるんだろう……」

今も、皆とこのまま旅を続けるべきか悩んでいる。しかし、本音はきつと怖いのだ。今旅

が終わって、全てが分かってしまったら、生き返らせるという可能性が無くなってしまう

かもしれない。それが、怖かった。

「……久々にロズウェルの墓にでも行こうかな。ねえ、ロズウェル。もしも私の傍にいて、

私の事を見守ってくれているのなら、聞いて。私はあなたの為に何が出来る？お姉ちゃん、

何だってやってあげるわ。……お願いよ。何をすればいいか教えて……教えてよ！」

大粒の涙が目から零れ落ちていく。泣くつもりなど無かったのに、涙が止まる様子は無い。

ロズウェルが死んだ時、もう泣かないと決めたし、それ以降泣かなかった。涙脆くなって

しまったのは、旅に加わってからの様な気がする。それに一人だった時は、何かに対して

怖いなど思っていた事は無かった。それなのに今のナディアは、旅に加わる事に怖さを

感じ、一步踏み出せないでいる。強くなったと思ったのに、いつか

らこんなに弱虫になっ

たのだろうと不思議に思う。

「ねえ、教えてロズウェル……ティール、皆……」

いつまでも自分の中で出ない答えを、弟や仲間達に求め続けた。

二十八章 一 休息

食堂で食事を終えた後、ラフィスト達はこれからの事を話し合う為、ラフィストの部屋に集まっていた。と言っても、アンカースに行く四日後まで何かする事がある訳ではない。

必要があるのは精々修行ぐらいだろう。そんな中、アデルがちょっといいかなとラフィストに話を切り出す。

「ねえ、ラフィー君。君達四日後まで何するつもりなんだい？もしも時間があるようなら、ちよつとサードを借りていいかな？色々話したいんだ」

「ええ、構いませんよ」

剣の稽古に付き合ってもらえなくなるのが心残りだったが、ラフィストはアデルの申し出を快く了解した。

「ほー、サードがアデルと一緒にいるんなら、お前の剣の相手がいなくなるな……よし！

この俺が付き合ってやろう！」

「キルト！」

ラフィストの心の中を読んでいたかのように、キルトがラフィストの剣の相手をかけてで

る。申し出は嬉しいのだが、それ以上に彼の剣の腕がどれほどなのか気になるという思い

の方が強かったりするので、稽古の相手としては少々不安を感じるというのが正直な思い

だ。それを敏感に察したのか、キルトが不機嫌そうに眉を顰める。

「何だよ、その本当に剣出来るのか？ 的な視線は！ 俺だってなあ、

ライジング・サンを変

形して剣使ってたんだ！前言っただろ！」

「そ、そうだったっけ……」

ラフィスト以外の皆も、でも実際に見た訳じゃないしと口々に呟いている。どうやら思い

は皆一緒のようだ。あまりの反応にキルトが腹を立てたのか、お前等など大きな声で叫ぶ。

「人の事なんだと思ってるんだよ！言っとくが、俺はこそ泥じゃねえぞ！」

「い、いや……意外だなーって思っただけで、深い意味は！」

過去の事まで持ち出して怒り出してしまったキルトを宥めようと、ラフィストが必死にフ

オローするが、彼の怒りは収まらないらしい。それどころか、ターゲットを元凶のラフィ

スト一人に定め、徹底抗戦の姿勢になってしまっている。見かねたニックスがティーシェ

ルに耳打ちし、ティーシエルがキルトを宥めにかかる。

「キルト」

「んだよ！」

不機嫌そうに振り返ったキルトだが、声をかけた人物を見た瞬間、その顔がどんどん強張

っていく。ティーシエルの方は対照的にいい笑顔である。

「あ……ハニー」

「怒っちゃ駄目だよ……皆、心配してるよ？……それに、イメージアップしたと思えばい

いじゃないか。……キルトが、仲間想いなのもわかったし！……優しいんだね、キルト」

「ハ……ハニー！ハニーだけだ、俺の事わかってくれるのは！」

キルトがティーシエルにしがみ付き、さめざめとしている。それを見つめるティーシエル

は先ほどのいい笑顔から一転し、白い目でキルトを見ている。

「あの目が本心だな」

「多分先ほどの言葉の空白に、本音が隠れているんですわ……」

サードが的確に突っ込み、ガーネットが遠い目をしながらポツリと
呟く。漸くキルトの機

嫌が直ったので、ラフィストとキルトが剣の修行をしに部屋を後に
する。その後ろ姿を見

送った後、マキノが噴出して大笑いする。

「単純ねー！」

「そうだねえ…ねえ、サード」

「……そうだな、アデル」

「うっ……こっちは素直すぎてこえー」

いつになく素直なサードの態度に、ニックスが引く。そんなニッ
クスを一睨みした後、サ

ードとアデルも部屋を出て行ってしまい、部屋には四人だけが取り
残される。

「俺達はどうするよ？」

ニックスがガーネットとマキノとティーシエルに尋ねると、マキノ
はガーネットと買い物

に行くと言い出す。そんなマキノの言葉に、二人っきりで過ごした
いと思っていたニッ

クスが、ガツクリと肩を落とす。マキノがティーシエルはどうするの
か尋ねると、ティーシ

エルは行く所があると言って部屋を出て行ってしまった。

「んー、大丈夫かなティーシエル」

「昔から痩せ我慢しますから……ちよつと心配ですわ」

「ま、ティーシエルの事だし大丈夫だろ！……それより俺もついて
っていいか？」

「勿論ですわ」

「荷物持ちでよければね！」

さ、行くわよというマキノとガーネットに引き摺られる形で、ニックスが部屋の外に出て行く。最初はマキノに言われた荷物持ちという言葉にショックを受けていたが、マキノと一緒にショッピングできる事に気持ちが切り替わったのか、ニックスの顔は引き摺られている間中、緩みっぱなしだった。

宿を出て町を歩いていたティーシエルは、路地を曲がるとある店の中へ入っていった。店の看板には魔道の紋章が描かれている。どうやらここは呪文の契約所ようだ。魔道書を置いてある図書館などが無い所には、こういった呪文契約所なるものが各地に存在しているのである。ティーシエルが店の中に入ると、中には人がいない。奥にいるのだろうと思い、店の主人を呼ぶと、カウンターの奥の通路から店の主人が出てきた。

「何だ？何か用かい、お嬢ちゃん」

主人の言葉にムツとしつつも、構わず呪文の契約を行いたいと用件を告げる。店の主人は棚から一つのファイルを取り出し、捲り出すと簡潔に何属性だと告げる。

「……闇。ダークマター」

「ダークマター！最上級魔法のアレか！止めときな！」

告げられた呪文の名に、店の主人が開いていたファイルをバンツと閉じる。そして、あんなに一体何考えてるんだと、ティーシエルをなじった。それでも頑と

して引き下がらないテ

イーシエルに根負けしたのか、店の主人が溜息をつく。

「自己犠牲呪文が必要なんて……どんな事してんだ、あんた！——
——本当はこんな契約な

んか行いたかないが……わかったよ、目え閉じな！」

店の主人によって発せられた言霊により、ティーシエルの身体に呪
が刻み込まれる。その

瞬間、ティーシエルの身体をとてつもない疲労感が襲う。ここにき
て、魔力を抑えられて

いる弊害が出たのだろうかと思うが、踏ん張ってグッと耐える。こ
の呪文だけは契約破棄

する訳にはいかなかったからだ。万が一、グレイスが何かを企んで
いたら、この呪文で一

緒に死ぬと、そう決めたのだ。疲労感が多少弱まった事で、ティー
シエルは顔を上げた。

「ありがとうございます」

ニコリと微笑み、店を後にする。その背に、店の主人が声をかけた。

「……あんたに何があんのかは知らん。だがな、簡単に命を投げ出
すような真似だけは、

すんじゃねえぞ」

店の主人の言葉に頷く事も出来ず、ティーシエルは店の扉を閉める。
その足でまっすぐ宿

に帰り、ベッドに横になった。

「いざとなったら、これでって決めたけど……僕は、死ねるのだろ
うか？——……いや、

それより殺せるのか、あの人を」

自問自答しても、答えは出ない。これが皆の為にもなると思っても、
所詮はティーシエル

の自己満足に過ぎないからだ。ただただ、ダークマターを使う事が
無いよう祈りながら、

眠りに落ちていった。

見晴らしのよい広場の草の上にアデルが座り、その隣を指差す。サードがそこに座ると、

アデルはゴロンと仰向けになって空を見上げた。サードも続いて、ゴロンと仰向けになり空を見上げた。

「久しぶりだなあ。こんな風に……隣り合う事も。あの時から、随分と歳を取ったよ。も

う、二十八だ。サードは——……ええと、二十？」

「ああ、もう二十なんだよ……アデル」

空には雲がゆっくりと流れている。二人の間にあっという間に流れてしまった年月とは、正反対のようにも思う。

「なあ、サード？俺さー、何していいか分からなくなっちゃったよ」

「……」

「俺の今までの目的はルーン聖石の破壊だった。……でも、今はそれが正しいのかさえ、分からない。今まで悪だと思ってたものが善で、白だったものが黒？訳分からないよな」

やり場の無い感情をぶつけるかのように、周りの草をむしっては放る。草が少しだけ風に

舞い、落ちていく。二人の間に沈黙が流れる。その間も、アデルは意味の無い行為を繰り返している。暫くして、アデルの話を黙って聞いていたサードが、

ポツリと口を開いた。

「アデル、俺……アデルがアンカースの団長だったから、アンカースの事を何か調べれば

アデルについて何か解かると思って、この旅に参加した」

「えー！俺の？……何か照れるなあ」

「だから、さ。ラフィストみたいに妹が、とか……ティーシエルみたいに父親が、とか深い理由なんて一切無いんだ。俺はアデルに会えて、目的は果たされ

ただろ？アデル……俺

は、ここにいてもいいんだろうか」

アデルの草をむしる動きがピタリと止まる。

「ん。お前がもっと一緒に旅をしたいって言うなら、いいんじゃないか？」

さらっと答えたアデルに、サードが少し戸惑う。

「俺何かさ、ルーン聖石を壊そうと思ってたのに、何かそういう雰囲気じゃないし。今更

ながら、あの朝食の場においてよかったかすら疑問だよ」

「アデル……」

「いいよな、仲間っていうのは。——……あーあ、団の皆は元気かなあ」

「団か……懐かしいな」

しばしの間、昔に思いを馳せる。短かったが、団の皆と過ごした楽しい日々。彼らが生き

ているのかすらサードには解からないが、それでもまた会えたらどれだけいいかと思った。

「それよりアデル。本当は、こんな事言うつもりじゃないんだろ？」

サードの指摘に、アハハと笑いながらアデルが良く分かったねと答える。サードはそれを

長い付き合いだからな、と軽く流した。そんなサードの対応に、流れた年月を直に感じた

アデルは、僅かに微笑む。そして、大きく溜息をついた後に話し始めた。

「空が、だよ。緑だったらどうする？」

「……は？」

一瞬何を言われたのか理解出来なかったサードが、ポカンと口を開けてアデルの方に顔を

向ける。アデルはサードに構う様子も見えず、話を続けた。

「ほら、物語とかでよくあるだろう？ だけど、そういう不思議を、不思議と思わない時も

ある……サードには、空が青く見えるかい？」

「あ、いや……さあ？」

「誰がこの世を動かしている？ それを誰が知っている？……サードは、新しい時の訪れを迎える、覚悟は……準備は出来ているかい？」

アデルが何を言いたいのかさっぱり解からない。少し考えた後、サードはわからないと答

えた。それに対し、アデルも俺もと答える。アデルの答えに、アデルが何を言いたいの

のかさっぱり解からない。少し考えた後、サードはアデルの横顔をじつと見つめる。

「それでも今は、俺にとっての空は青だ。……サード、君は？」

「青」

「そうか」

「アデルは、緑である事を望んでいるのか？」

そうかもしれない、と言った後アデルは立ち上がり、服についた泥を払う。

「そこで、だよ。俺に世界が何色か、見届ける権利はあるかい？」

ここで初めて、サードはアデルが何を言いたいのか分かった。フツと笑い、上半身を起こしアデルを見上げる。

「あったら、どうする？」

「見てみたい、この目で」

「……アデルが、見てみたいって言うなら、いいんじゃないか？」

「そうか。……ん？どっかで聞いた台詞だな、それ」

眉を顰めるアデルを見て、サードがプツと噴出す。サードの様子にアデルが苦笑し、お互

い顔を見合わせる。その瞬間、耐え切れなくなったのか二人で一斉に笑い出した。こんな

に笑ったのも、こんなスッキリした気持ちになったのも、お互い久しぶりだった。

「おい、ラフフィーストー！行くぞー！」

辺り一帯に鈍い音が響き渡る。

「おっと……と！」

かなりの衝撃がラフフィストに走り、一瞬剣を取り落としそうになるが、慌てて体勢を立て

直す。そこを付け入るように、キルトの連撃がラフフィストに襲いかかる。それを辛うじて

受け止めるが、かれこれ一時間以上こうして剣を交えている為、ラフフィストの足にふら付

きが見え始めた。いつも飄々としている彼とは結びつかないほど鋭い剣撃が何度も繰り出

される様に、ラフフィストは感心すら覚える。ラフフィストの足のふら付きに気が付いたのか、

キルトが地面に剣化したライジング・サンを突き刺し、少し休憩するかとラフフィストに告

げて腰を下ろした。

「ほれ！ラフフィストも座れって！」

「あ……ああ」

キルトに勧められたのもあるが、やはり身体は正直らしい。疲れた

身体を休める為、ラフ

イストは素直に腰を下ろした。

「なあ、キルト。キルトは何でそんなに強いんだ？」

正直、細身で身軽というイメージはあるが、あまり強そうには思えない。それなのに、先

ほどまでの剣技は見事な物だった。その事を不思議に思ったラフィストは、キルトに疑問をぶつける。

「こればかりはキャリアだな……と言いたいが、実はそうでもないんだな。純粹な力勝負

ならサードやニックスは勿論、お前にすら俺は勝てない。下手すりゃマキノちゃん以下か

もしれないな。俺の取り得は、この身軽な身体しかない……だから俺は、徹底的に受け流

しの鍛錬を積んだ。相手の威力を受け流して、自分の長所を生かして一回に二撃加える。

そうやって、相手を圧倒するようにしているだけだ」

「自分の長所、か……」

「お前だったら、割と小回りや精密な動きが得意だろ？後は気を使った攻撃も出来るんだ

よな？その二つを上手く操って、自分の攻撃にリズムを作ったらどうだ？」

「そんな事、考えた事も無かったな」

今まではずっとサードと組み手していた事もあり、ラフィストはいかにサードに近づける

かを考えていた。しかしキルトは、自分なりの強さがあると新しい道を示してくれた。改

めてラフィストは、自分の剣技について考えてみる。

「闘気剣、とか出来ないかな？」

「ああ、剣に気をのせるのか。……いいんじゃないか？力の足りない

自分をカバー出来るし」

あっさりと言い切るキルトを、ラフィストは不思議そうに見つめる。
「ラフィストなりに考えたんだろ？それならそれでいいじゃねえか。
他の皆だって、自分

なりに工夫してるんだ。お前が目標にしてるサードだってな。それに、自分の剣を見つめ

るって事は、己を見つめるって事だ」

あ、今のはいいちゃんの受け売りだけだと付け足して、キルトが笑う。己を見つめる。

自分自身が何なのかを考えている今にとって必要な事だと、ラフィストは思った。だとす

れば、この事もきつと無駄ではないはずだ。そして、それは必ずヴイラさんの言う強さへと繋がっていくと確信する。

「ありがとう、キルト」

キルトのアドバイスは、今まで迷っていたラフィストの心を一気に晴らした。その事につ

いて、ラフィストがキルトに礼を述べる。キルトは何について礼を言われたのかわからな

かったのか、急に改まって変な奴だなと笑う。

「大分休んだし、そろそろ再開するか！」

「ああ！今度は、俺からいくぞ！」

立ち上がって剣を手にとると、ラフィストがキルトに向かって突進し、剣を振り下ろした。

剣が交わるごとに鋭い音が、辺りに響き渡っていった。

七年前破壊された建物は、七年経ってもそのままだった。瓦礫の山と化したランツフィー

トの街外れに、今ナディアは来ていた。ここにはランツフィートの民の霊廊がある。つま

り、共同墓地のようなものだ。その近くにナディア自身が作った小さな墓があり、ナディアはその前に立っていた。

「ロズウェル……」

粗末な墓にそっと触れ、弟の名を呼ぶ。返事など無い事くらい、分かっている。なのにナ

ディアは名を呼ばずにはいられなかった。すると、変えるはずの無い返事が返ってくる。

「姉ちゃん……」

ナディアが動きを止める。今の声は確かに、弟のものだった。信じられないという想いで、

ナディアが目を見開く。ロズウェル、と叫ぶとこっちだよと言う声が聞こえてくる。声の

方を振り向くと、そこに立っていたのは紛れも無い弟のものだった。

「私に、会いに来てくれたの？」

目に涙が溢れる。ロズウェルは、そんなナディアを見つめ、優しく微笑んだ。

「姉ちゃん、僕の為に泣かないでよ——……なんてね」

急にロズウェルの声が変わる。この低い声はロズウェルの物ではない。

「……誰？ アンタ、何者？」

ロズウェルをナディアがキッと睨むと、ロズウェルが大きな声で笑い出す。

「何がおかしいのよ！」

「だって、おかしくってさ。……アンタ、聞くとところによると、死んだ弟を生き返そうとしてるんだって？」

「わ……悪い？」

「当たり前さ！生きているって事は、死に近付いている事でもあるって事だ。アンタの弟

は、アンタのエゴのせいで、死の恐怖にまた怯える事になるのさ！

——…確か、まだ

死にたくない！助けて！……だっけ？」

「何で知って……っ！」

「せーっかく死の恐怖から逃れて、平穏な生活をしているっていうのに！いくつになっても

も我が儘だね、アンタ。仲間放って、一人勝手に行動して？そんなアンタのせいで人が傷

ついていくんだ！おかしくない方が……変だろ？」

何か言わなきゃ、と思うがナディアは声も出ない。そんなナディアを、ロズウェルの姿を

した者は尚も笑っている。

「まあ、こっちとしてはお楽しみ要素が増えたんだけど」

そう言い残すと、その姿が薄れていく。待ちなさいとナディアは叫ぶが、アンカースで待

ってるよと言い残すと、その姿は完全に掻き消えてしまった。

「アンカースでって……まさか、敵？」

先ほどの存在について、ナディアが考えるが憶測ばかりで答えが出ない。取りあえず気を

取り直して、墓参りを済ませようと思い墓の方に向き直る。すると、そこには魔道書と杖

が置かれていた。こんな物、先ほどまで無かったはずだ。置かれて

いる魔道書を手に取り、

中をめくっていく。

「す、凄い……」

しかし、これはいつここに置かれたのだろうか。さっきまでは無かつた。これを見つけた

のは、先ほどの奴がナディアの前に現れてから。その事に思い至っ

た時、ナディアの中に
一つの確信が生まれる。

「まさか……ロズウェル？ロズウェルなのね！」

きつとナディアを決意させようとしてくれたのだ。いつまでも自分に囚われないで、前を

見て欲しいと。そんなロズウェルの想いを感じ取り、ナディアがその場に崩れ落ちる。

「ごめんね。私、迷ってばかりいた。我が儘ばかり言ってた。結局、私は自分の事しか考

えて無かったのね……でも決めたわ。私、皆の所に戻る……だからロズウェルも、見てて！

いつか、私が死んだら……」

天国で会おう。そう言わなくとも、きつとロズウェルには伝わるだろう。ナディアは顔を

上げ、しっかりと大地を踏んで立ち上がる。杖を取り、自分のいるべき場所に向かう

為、ワープの印を結んだ。墓場からナディアの姿が消え、元の静寂が戻る。墓の横には、

一人の少年が佇んでいた。

「姉ちゃん、もう過去なんか囚われないで。そして、忘れないで

……僕は、いつも傍にいるから」

笑顔と共に、彼は消えていった。

ワープで一瞬のうちにツアラに戻ってきたナディアは、宿の中に駆け込み階段を駆け上っていく。部屋の前に立つと、どの部屋も物音一つ聞こえてこない。もしかすると、皆出か

けているのかもしれない。一番所在が気になっていたティーシエルの部屋の前に立ちノックすると、返事が返ってくる。ドアを開け、彼の名を呼ぶと驚いた

声が返ってきた。そんな

なティーシエルに近づき、胸の中に顔を埋める。

「やっぱり、皆と……ティーシエルと一緒にいたいから」

「そっか……」

「それよりね、これを見て欲しいの！この魔道書……」

顔を上げ、ティーシエルの前に魔道書を差し出す。その魔道書を見た途端、ティーシエル

が息を呑む。彼の様子にナディアは知っているのかと尋ねると、ティーシエルからは知ってるも何も、という返事が返ってくる。

「これ、大魔法の魔道書……それかなり強いレベルのメテオだよ」中を確認するかのように、本を捲って読んでいくティーシエルの様子を見て、ナディアは

中読めるんだと呟く。そんなナディアに対して、それでも言語解読は専門だからとあっさり返す。

「で、メテオってどんな魔法？」

「炎属性の、使役者によって威力が変わる魔法だよ……その分、身体への負担も大きいし

誰でも扱えるって訳じゃないけど」

納得したナディアに、ティーシエルが早速契約したらどうだと勧める。ナディアは、ティ

ーシエルは契約しないのか尋ねるが、ティーシエルは黙って首を振る。先程感じた激痛を

思い出し、これ以上呪を刻むのは厳しいと思ったからだ。メテオク拉斯の魔法の負荷には、

とてもじゃないが耐えられないだろう。事情を知らないナディアは

珍しいというが、反属

性だからというティーシエルの言葉に一応の納得はしたらしい。

「じゃあ、私にメテオの呪、刻み込んでくれる？」

「わかった」

印を結び、詠唱するとナディアの身体に呪が取り巻いていく。そして、身体の中に吸い込まれていった。

「これが……メテオ？——って、重！」

強烈な疲労感に襲われたのか、ナディアがベッドに倒れこむ。ナディアの様子に苦笑しな

がら、ティーシエルがさつき身体への負担が大きいつて言っただろと告げる。そんなティ

ーシエルを恨めしそうに見上げながら、ナディアが溜息をついた。

ナディアの隣に腰を下

ろしたティーシエルがポツリと口を開く。

「ねえ、ナディア……父さんは何をしようとしてるんだろう」

「今は気にしないでいいんじゃない？ どうせ、もうちょっとでわかるんでしょ」

「そうだね……おかえり、ナディア」

倒れこんでいるナディアに、笑顔を向ける。

「んもう！ 遅いわよ！」

その頃、はしゃいだ様子のマキノとガーネットと、大量の荷物を持ったニックスが町を歩

いていた。日は傾き始めており、町並みをオレンジ色に染めている。

それでもマキノの元

気は衰えを知らない。

「きゃー！ 見てみてガーネット！ アレ、超可愛い！」

「マキノ……もうそろそろ帰りませんと」

「もうちょっと大丈夫だって、ガーネット！……あ、ニックス。荷物落とさないでよね！」

「へいへい……」

手に持っている荷物を抱えなおして、ニックスが返事をする。そして、いつもいつも損な

役回りだなど、心の中で涙した。両手一杯に荷物を抱えた彼を、ガーネットが同情するかのような目で見ている。

「なあ、マキノ……本当に、もうそろそろ帰らないか？お日様だって、かなり落ちてきてるしよ……」

ニックスの言葉に、マキノがはしゃぐ手を止め二人を振り返る。

「何かさ、二人共。不安じゃない？」

「え？」

「これからさ、先の事が全く分からないよ。またこうやって皆で買い物して、笑って、遊

んで……本当に、また出来るようになる？……こんな事考えたって仕方ないんだけどさ」

それを聞いて、ガーネットが優しく微笑む。

「大丈夫ですわよ。それに先の事が分からないのなんて、別に普段と何も変わりませんわ。

いつでも先の事なんて誰にもわからない……そうでしょう？」

「そうだぜ！それに、今から弱気でどーすんだよ！」

「そ……だね」

ニックスが片手に荷物を抱えなおし、マキノの肩をポンツと叩く。ガーネットも、その反

対の肩にそっと手を置いた。

「つーワケで、帰ろうぜ？激重い……」

「え！嫌よ！まだ時間あるじゃん！さ、ショッピング」

いつもの調子を取り戻して、明るい調子で再び歩き出すマキノに、ニックスとガーネット

がやれやれといった顔つきでお互いを見やる。

「たく、我が儘な娘だな！」

「フフ、まあまあ」

こうなったら、とことん付き合って差し上げましょうと言うガーネットに、ニックスが苦

笑しながらそうだと答える。先を行っていたマキノが二人の名前を呼び、早くと催促す

る。二人は笑顔で、マキノの元へと歩き出した。

二十九章 酒の席で

時計の針は六時を指している。既に宿のレストランには仲間全員が揃っており、それぞれ料理を注文していた。

「あ、ちょっと待って！えーっと、ワイン。赤の辛口ね。年代は…：任せるわ」

店員を呼びとめ、ナディアがワインを追加注文する。店員がかしまりましたと答え、その場から去って行くと、キルトがナディアにかみつく。

「おいおい、アネさん。未成年だろ？いいのか？」

「いいの！何よ、成年だからって……」

「でも、ナディア君。酒は気をつけたまえ」

「あら、アデル……」

アデルの呼び方が気になったのか、ナディアがそのナディア君って何よとアデルに突っ込むが、アデルは特に深い意味は無いよと軽く流す。その態度に呼び方を変える気は無いらしい事を汲み取ったナディアが、皆して人を変な風に呼んでと腹を立て始めた。横からマ

キノがまあまあと諫め、サードんよりはいいじゃないとフォローする。それを聞いたサードが途端に顔を真っ赤にし、口をパクパクさせる。どうやらサードとしてはアデルに聞か

れたくなかったらしい。

「へえ……サード。君、サードんって呼ばれてたのか」
流石のアデルも、愛弟子の呼び名に目が点になっている。

「なっ……マキノ、余計な事を言うな！」

「てへへ。ごめんごめん！つい、ね」

反省の色の無いマキノにサードが顔を真っ赤にしてくっつかかるが、アデルがいいじゃな

いか、可愛いぞと言った事でぐうの音も出なくなる。結局サードは、苦虫を噛み潰したよ

うな顔をして黙り込んでしまった。

「それよりラフィー、剣の方はどうでしたの？」

未だにキルトの腕前を疑っている様子のガーネットが、ラフィストに成果の程を尋ねる。

「うん、だいぶと自分の剣が出来上がってきたみたいなんだ。これも練習に付き合ってく

れたキルトのお陰かな」

「いやー、照れるぜー！」

飲み物を飲んでいるラフィストの背中をバンバン叩きながら、キルトが叫ぶ。叩かれたラ

フィストは、気管に飲み物が入ったのかむせ返ってしまっている。

「へえ……キルトも少しは役に立つんだ？……あ、僕にもワインを。

ロマネコンティ、持
つてきて」

「少しはだなんて酷い、ハニー！……ってあれ？ハニーも飲むの？」

ティーシエルの言葉にショックを受けつつも、近くを通りかかった店員にワインを注文し

たティーシエルが気になったのかキルトが尋ねる。未成年だし拙い
だろ、とキルトはさら

に続けるが、ティーシエルはカダンツにいた時も飲んでいたので問
題ないと、あっさりと

切り捨てる。

「でもどうせあんたは、高級もんしか飲まないんでしょ！」

先に運ばれてきたワインをぐっと一気に飲みほし、あっという間に
ボトルを空にしたナデ

イアがつっこむ。そんな事はないと言うティーシエルと言い合っているうちに、ティーシエルが注文したワインも運ばれてきた。それと共に、各自が頼んだ料理も一緒に運ばれてくる。いい香りが食欲をそそるが、ナディアやキルトなんかは運ばれてきた料理よりも酒の方ばかり見ている。店員がボトルを開けて去ると、香りを嗅ぐとナディアが颯爽とコルクを手取る。

「んー、いい香り」

「おい、どうでもいいがどうやって金を払うんだ」

ナディアとキルトがコルクを回しあい、香りを嗅ぐ傍らで優雅にワインを飲んでいるティ

ーシエルに、サードが指摘する。こんな高級なワイン一本も飲めば、軽く十万ギルは越えてくる。言っとくがそんな大金持ち合わせてないぞというサードに、

そんなの親の名義に

決まってるじゃないと返す。自分で払う気はサラサラ無いらしい。

何ともいえない表情を

しているサードに、ティーシエルがサードも飲むかと尋ね、返事も聞かないうちからグラスにワインを注ぎ始める。

「あんな……」

「はい、皆にも」

「きゃー、やった！」

折角のサードの説教も、ティーシエルのおすそ分けによって生まれた歓声によって、かき

消されてしまう。酒の入ったキルトやナディアのテンションが上が

り、堅い事言うなと騒ぎ始めた事もあり、結局はサードも他の皆と同様、ワインを飲む事

にしたようだ。自分の師であるアデルが、ありがたく頂戴しているという事も大きかったのだろう。

「これでは食事をしているのか、お酒を飲んでいるのかわかりませんわね」

「つか、あれで飯味わえてんのか？」

食事をしながらどんどんワインを消化していく彼らの様子を眺め、酒を飲まないガーネット

トやニックスがボソリと呟く。特に食べるのが好きなニックスにとっては、食事よりも酒

優先な彼らの食事は信じられないようだ。

「うえー……お酒の匂いキツイー……」

「た、確かにこっちが悪酔いしそうだね……」

いつの間にか追加注文されたボトルが、どんどん空けられていく。

その匂いを嗅ぎ、マキ

ノがうえっと顔を顰め、ラフィストが苦笑いする。ラフィストがチラッと見やったボトル

の多くは、ナディアとキルトによって空けられているようだ。逆によくここまで飲めるも

のだと感心さえする。

「よっしゃー！誰が先に酔いつぶれるか勝負だ！」

テンションが最高潮まで達したのか、キルトが高らかに叫んで酒を大量に追加する。これ

を見たラフィスト達は言っても止まらないだろうと思い、さっさと部屋に引き上げていく。

ガーネットやマキノはともかく、ラフィストやニックスは巻き込まれる可能性があるので、

避難の意味合いも強い。それほど酔っ払いの絡みとは恐ろしいのである。

「ほら！飲んでハニー」

あからさまに酔い潰そうとしているのがバレバレなキルト。だが、挑発に乗っているのか

ティーシエルが一気に飲み干す。袖で口元をぐっと拭う様などは、何とも男らしかった。

それを見て、アデルが拍手をしていい飲みっぷりだと笑う。

「アデル！もうその辺にしておいた方がいい……酒にはあまり――」

強くないはずという言葉の前に、大きな音が響き渡る。テーブルに頭をしたたかに打ちつ

け、アデルが轟沈したのだ。サードはだから言わんこっちゃないとばかりに、溜息をつく。

「あーららー。……アネさんも、そろそろギブすれば？」

「私は酒強いのよ！あんたこそどうなのよ？」

「お生憎様！俺も自信あるんだよなー」

じゃ、勝負するというナディアにキルトが乗り、さらにティーシエルまでそこに混ざる。

他の者がダウンするまで飲んだ者が勝ちというルールの下、一斉に酒を飲み始めた。ナ

ディアに審判を頼むと言われたサードが呆れた風に、ジョッキの数を数えていつている。

小一時間後、辺りに二人の声が響き渡った。

「おええええ……」

ナディアとキルトが口を押さえて下を向いている。それでもジョッキから手を離さないあ

たり、お互い絶対に負けたくないという思いが強いようだ。その横ではティーシエルが一

人、暢気に酒を飲んでいる。その様子を見やり、サードがげんなり

した顔でまだ飲むのか
と尋ねる。

「んー……どういう訳か、僕酔わない体質なんだよね。量を消費するのは無理だけど、一気に飲むくらいなら全然大丈夫」

確かにティーシエルの言う通り、彼は十杯程度しか飲んでいない。対してナディアとキルトは、既に四十杯以上ずつ消費している。

「……だと、キルト、ナディア。いくらお前らが酒豪でも、一気飲みは気分悪くするぞ。」

……酔いつぶれない分、余計辛いんじゃないか？」

だからもう止める、と二人からジョッキを取り上げ、サードがテーブルを片付け始める。

それを見たティーシエルがジョッキの中身を一気に飲み干し、テーブルを片付けるのを手

伝い始めた。ジョッキを手放した事で一気に緊張が解けたのか、ナディアとキルトがぐつ

たりする。そんな二人にティーシエルが懷から出した酔い止めを渡すと、二人は這うよう

な様でトイレへ向かった。残されたサードとティーシエルは、床にまで散乱しているジョッキを見て溜息をつく。

「お前ら三人合わせて約百杯か……よく飲めたな……——」

相変わらずテーブルに突っ伏したままのアデルを起こすサードの傍らで、ティーシエルが

会計を済ましている。どうやらこの飲み比べの代金全てを、親のつけにするつもりらしい。

ティーシエルは会計を済ますと、ブラリと外に出て行ってしまった。サードも漸く意識が

戻ったアデルを背負って、レストランを後にしようとする。そこに

先程の二人がトイレから戻ってきて、椅子に座る。大分気分も良くなってきたのか、先程より辛そうな様子は無い。

「っ……私とした事が。こんな私、私じゃないわ……」

グツタリしながらも、酔ってトイレに行っていた自分を否定するナディア。その横で、この勝負は引き分けなどキルトが呟く。どんなにグツタリしていても、勝敗に関しては譲れないらしい。

「はぁー、それにしても……ん、サード。ハニーは？ねえー」

戻ろうとしていた所を呼び止められたからか、若干不機嫌な様子で外に出て行つたと答える。

その場にいない事をあからさまに嘆いているキルトを、ナディアが横目でじっと見つめる。何か聞きたい事でもあるのか、考え込んでいるような目だ。相変わらず騒ぎ続けて

いるキルトを煩わしく思ったのか、サードがとつと帰ろうと席を立ち掛けた時、ナディアがポツリと呟いた。

「キルト、あなたさ……。いつもハニーとか言ってるけど、それって結局同性愛な訳？」

「えっ……」

ナディアの爆弾発言に、騒いでたキルトも、席を立ちかけていたサードの動きもピタッと止まる。何事も無かったかのように、まあそれは置いてよと話を続けるナディアに、流石のキルトとサードも顔が引きつる。

「あなたさ、女の人に対しては誰にでも愛想振りまいてるじゃない？その……心に決めた

人とか、いないの？もしも特定の人がいるんなら、あなた誤解されるわよ」

「んー……特定の人、ねえ」

一瞬だけ、キルトの表情がサッと変化する。話し方もいつものキルトと違って歯切れが悪

くなり、何やら濁すような感じだ。

「内緒、かな？やっぱそういうミステリアスな部分って、いい男のステータスだろ？」

そういつて笑い飛ばすキルトを、ナディアが疑いの眼差しで見やるが、特に突っ込む気も

無いのか、ふーんと軽く流す。

「何？アネさん、俺を疑ってるの？ヒドイー！」

「別に、そんなんじゃないけど……」

「じゃあ……も、もしかして俺の事が気になって！いや、でも俺にはハニーと姫君が！」

はいはいとぶっきらぼうに答えながらも、ナディアは自分の発言を後悔した。きつとサー

ドも、ナディアの質問をいい風には思っていないだろう。二人共、先程のキルトの微妙な

表情の変化を見逃してはいなかった。きつと、彼の過去には何か色々あったのだろう。そ

もそも過去に何かなければ、トレジャーハンターのような職についてたりしない。それなの

に、安易に過去を掘り起こそうとする先程の自分の発言は、誉められたものではなかった。

「特定の女……ね。いない訳でもないんだがな……」

僅かに聞き取れるほどの小さな声で呟かれた言葉を、ナディアは聞き逃さなかった。今、

特定の女って言ったわよねと詰め寄るナディアを、キルトがおどけた様子であら、聞いて

た、と茶化し始める。そんなキルトを一睨みすると、かわすのは無理だと思ったのかキルトが溜息をつく。そして、ポツリポツリと話し始めた。

「……いるっつーか、正確にはいたただけど」

キルトがフツと目を伏せる。昔の事でも思い起こしているのだろうか。その顔は、恐ろしいほど表情が無い。

「リーチェっていつてさ……フォートレス一の可愛い子で、俺好きだったんだよね。ま

あ、俺の片思いだったただけどな……——今となっちゃ死んじゃってるし、いつまでも

未練タラタラって訳にもいかないんだけどよ……けどなあ」

「けど、どうしたって言うのよ？」

「やっぱり、好き……なんだよなあ。だからハニーの事も守ってあげたいっていうか、

可愛いっていうか……——」

ナディアが何でそこでそういくのよ、と頬をついている反対の手を思いつきりテーブルに

叩きつけると、キルトは似てるんだよと間髪いれずに言い切る。

「ハニーとリーチェ、そっくりなんだよ」

「えっ……」

「まあ……世の中には二、三人は似てる奴がいるっていうからな」色々な意味で衝撃を受けたナディアを、サードが珍しくフォローする。しかし、その視線

は完全に明後日の方向を向いており、半ば現実逃避気味だ。自分の事でないしろ、男と

して女性と似ていると言われるのは、複雑というやつである。

「一目見た時、やっぱ守ってあげたいなっと思ってよ。……けど、流石にショックだっ

たぜ……あの顔で男だなんてな」

「い、言いたい事は分かるわ」

何とも言えない空気がテーブルに流れる。その空気を真っ先に壊したのは、話題の人物であるキルト本人だった。

「ま、そういう訳よ！今の話、酒入ったから喋ったと思ってくれて結構なんで」

そういつて笑うキルトには、暗い影など何もないように思える。しかし、実際には今言っ

た事以上に色々な事があったのだろう。それを乗り越えてきたからこそ、過去を話しても

屈託なく笑える彼が、存在しているのだ。そんなキルトの心の強さを、少しでもナディアは尊敬した。

「……もうちょっと、真面目に生きた方がいいわよ」

「わかってるって！……んじゃ、アネさんおやすみ」

キルトが上機嫌で階段を駆け上っていく。

「ナディア、俺達もう寝るぞ」

「ハイハイ……ったく」

ナディアは階段を昇りながら、先程の事を思い出す。一途な面を垣間見た事で、今まで何

考えているのか全く分からなかったキルトが、少し身近に感じた。

今までより、好感が持

てる気もする。それにキルトは好きな人を失っても、それを糧に生きる強さを持っていた。

しかし、自分はどうかだろうか。家族を失った今、その上好きな人まで死んだら自分は生きてい

「今度はもう、生きていないかも……ね」

階段を昇りきり、廊下に出た所で後ろを見ると、サードがいない。何しているのだろうか

下を伺うと、サードはアデルを抱えて階段を昇ろうとしている所だった。どうやら一回起

こしたものの、その後二度寝してしまったらしい。自分の考えに没頭していた事で、その

事に全く気付けずにいた。ナディアは慌てて階段を下りると、サードに手を貸す為、声をかけた。

「大丈夫？アデル、重くない？」

「大丈夫だ」

大丈夫とサードは言っているが、自分よりたっぱのある人間を担いで、重たくない者など

いない。ナディアが手を貸すと、長身のアデルは案の定ずっしり押し掛かってきた。

「やだー。結構、重いじゃないの！」

「全く、お前達はろくな事をしないな」

サードが酔いつぶれたアデルを見やった後、ふうと溜息をつく。

「何よお、いいじゃないの。だって、もう少ししてもし全てが解決したら、もう皆とこ

して一つの宿に泊まる事も、一つの食卓につく事も……きっと出来なくなるわよ。……ね

え、サードは終わったら何するの？一所に落ち着いたりするの？」

「いや……それは、考えていないが……」

「じゃあ、ガーネットの事はどうするの？」

一段先に踏み出したサードの足が、ピタッと止まる。

「それはもう、結論は出てる……だろ？」

「そう？」

再び、歩き始める。今度は心なしか足取りが速かった。階段を昇りきった所で、サードがナディア、と声をかける。

「助かった、ここまででいい。……気分は、大丈夫なのか？」

「うん、もう大丈夫。じゃあ……」

アデルとサードの後ろ姿を見送りながら、サードはわかり過ぎてしまふのだと思った。分
かり過ぎてしまふから、相手が誰を見てるのかもわかってしまふし、
それでいいと思って

しまふ。良くも悪くも、彼は大人なのだろう。それでも、サードは
ガーネットと離れる時

が来たらどうするのだろうかと思う。自分の好きな人の隣に、違う人
がいる事を認められる
のだろうか。

「まあ、こういう事はいつぺんに解決するもんじゃないか」

私も人の事言えないしと思いつながら、ドアを開けようと取っ手に手
をかける。すると急に

ドアが開き、ナディアの顔面にドアがぶつかった。その衝撃で後ろ
に倒れ、お尻をしたた
かに打ち付ける。

「いったあー……」

「だ、大丈夫？ ゴメンねー！ 血は出なかった？」

中からマキノが飛び出してくる。どうやら、マキノが中からドアを
開けたらしい。心配そ

うにするマキノに大丈夫と告げると、ゆっくりと起き上がった。

「ナディアを呼びに行こうと思って……皆もう部屋に帰ったのね」

「ええ。……そういうえば、ガーネットは？」

マキノが、今お風呂に入っていると告げる。正直、ラフィストとで
も話してるのかと思っ

たので、それには意外だった。話を切るようにそうと簡潔に答える
と、ナディアは部屋の

中に入っていく。それと入れ替わるように、マキノが部屋の外へと
出て行った。

「私、ちょっとジュース買いに行ってくるけど、何か飲む？」

「今はいいわ」

「じゃあ、ちょっと行ってくるね」

廊下を走っていくマキノを見送った後、ナディアはドアを閉めて部屋の奥へと入っていく。

ガーネットは既に風呂から上がっており、ベッドに腰を下ろしていた。

「ナディア、そんな所に立ってないでお座りになったら？」

「あ、うん……ガーネット、あなた……。私はてっきり、ラフィーと話でもしてるのかと思ってた」

「え？何ですかの？」

「いや、何となーく……」

話す事が何も無い訳じゃあるまいし、と思ったがあえて何も言わなかった。ガーネットの

問題に自分が口を挟む事ではないし、また自分にも言える事だったので、彼女にだけ言う

のも何か変な感じがしたからだ。誰に言う訳でもなく、ま、いいけどねと呟くと、ガーネ

ットが不思議そうに首をかしげる。構わず風呂に入ってしまうおうと、ナディアがその場を

後にすると、残されたガーネットはポツリと呟いた。

「ナディアったら……何が言いたかったんですの？」

部屋の隣の浴室で服を脱いでいたナディアが、その呟きを耳にして溜息をつく。それから、

きつとこういった鈍い所がこの子の魅力で、欠点なのよねと苦笑いした。

「三十三章」愛というもの

食堂の出口に水の張った大きな桶が置かれており、中には様々な色のガラス瓶が浮かんでいる。ここでジュースを売っているらしく、そこにいるマキノが真剣な表情で眺めている。

「どうやら、何味のジュースを選ぶか迷っているようだ。そんなマキノの背後に、人の影がぬっと射す。」

「何してるの？」

「ひゃあ！」

突然背後からかけられた声に、マキノが奇声をあげる。マキノがぱっと背後を振り返ると、後ろに立っていたのはティーシエルだった。彼の顔は奇声をあげたマキノより、驚いた表情をしている。いきなり叫ばれて、逆にびっくりしたようだ。落着きを取り戻したマキノがどうしたのと声をかけると、これから自室に帰るところと返ってきた。

「マキノは……ジュース？」

桶を覗き込んで中を確認したティーシエルが、買うのかという意味を込めてマキノに問う。

マキノはそれに頷くと、色々あってどれにしようか迷っていると答えた。マキノの言葉に

暫く考える仕草を見せたティーシエルが、桶の中から何本か適当に取り出して宿の主人にお金を払う。

「そんなに沢山飲めないって、ティーシエル」

「なら僕の部屋に来ればいいよ。ラフィストもいるし、三人でコップに分けて飲めば色々な味が楽しめるでしょ。マキノもその方がいいんじゃない？」

「あ、なるほど」

ティーシエルの提案に、マキノは素直に礼を言う。正直、どれも飲みたくて仕方が無かったというのがマキノの本音だ。鼻歌交じりに階段を昇り部屋のドアを開けると、中ではラフィストが剣を磨いている所だった。

「あ、おかえり……って、マキノも一緒なのか？」

「やふー！お邪魔ー！」

部屋の中に入り、近くにあった椅子に座る。マキノが座った椅子の前に、ティーシエルが

部屋に設置されたテーブルを動かし、そこに買ってきたジュースを置いた。剣を磨き終えたラフィストが剣を鞘に収めると、マキノがラフィストを手招きする。訳も分からないまま

ラフィストが寄って行くと、マキノによってテーブルの前の椅子を勧められた。ティー

シエルが持ってきたコップをマキノに手渡すと、マキノがそこにジュースを均等に注いでいく。ここまでくれば、流石のラフィストも何をしようとしているのか理解できた。

「飲み比べでもするのかい？」

「ま、そんなとこかな」

コップを他の二人に手渡すと、マキノが上機嫌でジュースを飲み始める。ラフィストもコップに口をつけると、口内に甘酸っぱい味が広がっていく。これは

どうやら林檎のジュースらしい。キルトとの剣の修行で疲れきった身体に染み渡っていく

ようで、ラフィストに

はジュースが美味しく感じられた。

「美味しいね、これ」

「まだまだ色々あるよ！えっと……オレンジでしょ、葡萄でしょ、パイナップルに、ピー

チ。それから……」

「僕は、ツアラ特産のパイヤが気になるな」

「そ、そうなんだ……というか、あれだけお酒飲んでよく飲めるね、ティーシエル」

彼らがどれだけ飲んでいたかは知らないが、こんな遅くの時間まで飲んでいたという事は

かなりの量を飲んでいたに違いないと、ラフィストは思っていた。

そんなラフィストに、

飲兵衛なのはナディアとキルトだけで、自分達は大して飲んでいないと反論する。要する

に、彼らと一緒にするなと言いたいらしい。だがそんな彼らと一緒に飲んでいる時点で、

充分飲める口なのだろうという事は、ラフィストには容易に想像がついた。これ以上何か

言っても反論しか返ってこないだろうと結論付け、ラフィストが苦笑いを浮かべていると、

それまで黙ってジュースを飲んでいたマキノがねえ、と声を上げる。

「折角だし、何か話しよーよ！……じゃ、まずティーシエルから」

「えっ！何で僕から……」

「時計の下にいるから」

マキノの安直な理由に、ティーシエルは文句を言うのを諦めたらしい。

「んー……昔の話だけど、実は七年前まで凄く髪の毛長かったんだ。魔導士は魔力を高め

る為に髪を伸ばすのが、結構支流で……あ、写真見る？」

「見る見る！わー、可愛いー！」

「本当。この頃のティーシエルって、女の子みたいだな」

取り出された一枚の古い写真を覗きこんだ二人が、口々に感想を述べる。腰まで髪がある

姿は、男と言うより女の子に近い。ここまで女の子に近いと、俺たちと違って女装しても

笑えないんだろうなという気持ちだが、ラフィスト脳裏に浮かぶ。女の子はマキノのように

純粹に可愛いとだけいいが、男は男としての矜持もあるからそうはいかない。

多分からかわれたり、遊ばれたり色々な意味で大変だったんだろう
と思い、軽く同情した。

「あ、でも何で今の髪型に？」

「一言で言うと、ナディアに切られた」

「ナディアに？何で？」

「何か、男が可愛く見えるのは道理的におかしいとか、嫌とか言ってた……」

そんな理由で、人の髪の毛をバツサリ切るとはナディアらしいと思
い、二人は笑みを浮か

べる。それ以降髪の毛を伸ばしていない所を見ると、ティーシエル
も髪に拘ってはいない

ようだし、問題は無かったのだろう。

「はい、おしまい」

「これだけ？」

ティーシエルの短すぎる話にマキノが不満を漏らす、ティーシエ
ルはもう無いしと言っ

て、さっさと話を切る。これ以上食いついても同じと思ったのか、
マキノはそれ以上追随
するのを止めた。

「じゃ、次は私が話すね！……ティーシエルの知られざる過去って

事で、私も奮発して知られざる過去を、大公開しちゃおうではないか！……ずばり！テーマは、何故私が武術学校に入ったか！」

知られざるという言葉に期待していたのか、マキノの続きの言葉に二人が少しガツクリした。そんな二人を無視して、マキノの話はどんどん進んでいく。

「私ね、昔占い師さんに運勢見てもらったのよね。で、その人曰く！武術学校に入ったら

王子様が現れるよ、と！——で、入学したの」

何とも単純な理由に、二人は呆然としている。それ、明らかに似非占い師じゃないとティーシェルが呟き、マキノって占いとか信じるんだなとラフィストがもらす。後先考えない

で行動するのは昔からか、という共通の思いが二人の中に芽生えた。「しかもね、その占い師っていうのが私の先生で……つまり、学校の生徒を募ってた訳。

あー、騙されたってカンジ！……その頃の私は、ちょっち反抗期入っててさー。殴りこみに行ったの」

「な、殴りこみ……」

今のマキノから想像できなく、思わず絶句する。

「そそ。私ってばかなり問題児でさー！今となっちゃ恥ずかしいんだけどね。でもね、流

石武術の学校の先生だけあって、激闘の末負けちゃってさー」

激闘という言葉に、冷や汗が流れる。そしてその時にやり合ったのが、トラートで会った

ガレレオ先生だと告げ、それ以来更正したのだと付け足した。そういったのに免疫が無い

のか、ティーシェルが相当ヘビーな学生だねと、顔を引きつらせな

がら言う。しかし、マ

キノはそうかなと笑い、事も無げにしていた。

「だって、反抗期ってこんなもんでしょ？……それより問題なのは、学校に王子様がいな

かった事！なんつつか……爽やかなのがいないのよね」

二人の頭に、同じ武術学校のニックスの顔がよぎる。彼も、お世辞にも爽やかなタイプとは言えない。

「で、王子様は見つかったの？」

ニックスがマキノに好意を寄せている事を知っているラフィストは、マキノにそれとなく探りを入れてみる。ニックスにとって色好い返事を期待していたが、そんな期待を余所にマキノの返事は無常だった。

「ん。いや、全然？——あ、でもお……アデルさん、格好いいよね！もう少しでお別れだと思うし、悲しいなあ……」

これにはラフィストも、あ、そうとしか答える事が出来なかった。それ以降もマキノの口からニックスの名前が出てくる事は無く、ラフィストはここにニックスがいなくて本当に良かったと思った。

「ねえ……ニックスは、君に言われたから調査団に入ったとか言ってたけど……本当はどうなの？」

「ああ……いつだっけな……。私が、アンカースのルビーで作られた指輪が欲しいって言ったのを聞いててね、じゃあ誕生日に買ってやるよとか言ってくれたから、ありがたく思ってたの。ニックスはアンカースのルビーを扱ってるお店とか探し

てくれたみたいだけど、

このご時世でしょ？どこにも無くってね。そしたら、アンカースまで取りに行くとか言い出しちゃって……私は別にいいよって言ったのに、調査団に入らないとアンカースに行けないだの暴走始めて……」

事の真相を本人の口から聞き、彼の旅の参加目的がいかに軽いものか分かった二人は、ニックスらしいと思いつつ、本来の目的とはかけ離れている事に肩を落とす。

「それより、私の誕生日とくに過ぎちゃったのよね……どうするつもりかしら。というよりむしろ、約束覚えてるのかしら……」

ニックスの性格を考えると、後者である可能性が高い。だが、どう思うと言うマキノに、多分覚えてるんじゃないかなとラフィストは返しておいた。後でこっそり、ニックスに自分が教えてやればいい事だからだ。そこに、ティーシェルがそれよりも、とマキノに話しかける。

「あの、一つ言いたいんだけどさ。アンカースのルビーって、上物で数が少ないルビーだから国内限定販売なんだけど……持ってるのは王族や上流貴族位なんだよ。知ってた？」

「え、そうだったの？」
きよんとするマキノを見て、ラフィストの中でニックスの参加目的が音を立てて崩れていく。所詮、ニックスはマキノの手の上で踊ってたに過ぎないのかと思うと、溜息ばかり

出てくる。ニックスの事を考えるラフィストとは反対に、マキノは

ニックスの事よりも、
宝石の方が気になっているらしい。

「ね、じゃあ因みにいくら？」

「一番安くて……ざっとこんなもん？」

そう言うのと、ティーシエルは指を四本立てる。

「四千ギルか……高いな」

ニックス、もうルビーは諦めた方がいいなと思い、ラフィストが更に溜息をつく。そんな

ラフィストに、ティーシエルが杖の先端でラフィストの頭を軽く叩いた。

「これだから宝石買った事無い奴は……丸の数が足りないよ、ラフィスト。四千じゃなくて、四万ギル！こんな小粒位のもね」

「よ、四万ギル！？」

「とてもじゃないけど、ニックスには無理ね……。……忘れよつと」
この為にニックスは調査団に入ったのだと言うのに、明るい調子でさらっと言うマキノ。

やっぱり今日の事はニックスには黙っておこうと、ラフィストは心に決めた。マキノがル

ビーを諦めた事も知らないですむし、夢を見ていられるからだ。その方が、ニックスにと

っても幸せだろう。とにかくさっさとこの話題を変えてしまおうと、ラフィストは、次は

俺が話すなと切り出した。

「俺がまだ九歳で、ジュリアが七歳だった頃の話で……俺が住む町の裏に森があつてさ。

そこで……——」

「そこで？」

興味津々といった顔つきで、二人が聞き入る。

「妖精を見たんだ！」

「へえー、神秘的ね！」

「妖精って……ドワーフ？それともフェアリー？」

マキノはメルヘンチックな話にうっとりし、ティーシエルは知的好奇心を満たそうとばかりに、質問をする。多分フェアリーだと思うと答えると、ラフィストは更に話を続けた。

「夕暮れまでその妖精と遊んで、家に帰る時このペンダントを貰ったんだ」

ジュリアが欲しいとせがんだ為、ペンダントはジュリアにあげたのだが、ランツフィート

に行く前にジュリアは家にペンダントを置いていった。なのでそのペンダントは今、ラフ

イストが身につけている。首にかけているペンダントを外し、見たいとせがんだマキノに

手渡してやると、マキノはまじまじとそれを眺め始めた。

「キレー」

「だろ？」

昔の事を思い出し、ラフィストも笑顔になる。ペンダントを覗き込んで見ていたティーシ

エルが、魔精霊の一種だねと述べた。

「精霊によって作られた魔石のような物さ。珍しい物だから、なかなか出回らないけどね。

これ、身につけると魔法耐性が強くなるから、つけといた方がいいよ」

「へえ……そんなに凄い物だったのか」

再び首にかけなおすラフィストに、ティーシエルが頷き大事にしながらと告げる。そして、

空けたビンやコップを片付け始めた。そろそろ休んだ方がいいと思いい、ラフィストがお開

きにしようかと言うと、マキノが自分の部屋に戻る為席を立った。

マキノがラフイスト達の部屋から出ると、誰かに呼び止められる。目の前にいたのはニックスだった。目を見開いてるニックスに、マキノはどうしたのと問いかける。

「どうしたのって、お前……軽く出てくんないよ。仲間って言っても、一応男の部屋だぜ？」

「いーじゃん。何が悪いの？」

あっさりと返され、ニックスは二の句が出ない。ニックスとしては、出来るだけ男だけの

部屋には入って欲しくないのだが、そういった事を言ってもきつとマキノには理解しても

られないだろう。そもそも、マキノのこういった軽さが、気持ちを量りかねる原因だと思

っているニックスとしては、今の返事は余り好ましくない。そんな事を小声でブツブツ言

っていると、マキノが聞こえないんだけど、と返す。

「聞こえないように喋ったんだから、当たり前だろ」

「何よお」

ニックスの言葉に、マキノがむっとした表情を見せる。だがそれも一瞬で、マキノはそう
いえばさとニックスに話しかけた。

「世界樹での事、覚えてる？ ほら！あの時、声を聞いたじゃない。世界樹に入るには、世

界樹がその人物を選ぶんでしょ？……って事は、あの声世界樹なんだよね？」

「まあ、多分な。でも、ラフイストとかの話によると、世界樹って……悪者の可能性高い

「んだろ？」

「でも、あの時の優しい口調からはそんな風には思えないな。だって私達の事、応援してくれたじゃないの」

「ああ」

廊下で考え込んで黙って立ち尽くしている二人を、たまに通る宿の客が不思議そうに見ていく。

「ま、それはわかんないけどよ！世界樹の名を語った誰かかも知れねーし、深く考えんのはやめようぜ。な？」

「そーだね……」

口ではそう言っても、心のどこかで納得出来ない部分があるのだろう。相槌を打つマキノの表情は、どこか不満そうだ。

「じゃ、私もう寝るわ。んじゃーね、おやすみー」

手を振って去って行くマキノを、手を振って見送るニックス。マキノが部屋に入り、ドアを閉じる音が響いた所で、ニックスは今マキノと二人っきりだった事实に気が付いた。そ

れに、考え事をしていたとはいえ、結構良い雰囲気だったかもしれない。気の利いた言葉

一つ言えなかった事に気付き、ニックスは不甲斐ない己を責めた。

「……………それで」

「ただいまー」

マキノが部屋に戻ると、ガーネットとナディアはベッドの上で話している最中だった。

部屋に入ってきたマキノに気付き、二人は一旦話を切ると、早く着替えてこっちに来るよ

う呼びかける。

「うん」

「どうしましたの？何だか静かですわね」

「そうかなー？でも大丈夫、少し考え事してただけだから」

マキノは服を着替えて部屋の明かりを消すと、ベッドに潜り込む。

横になると、身体に溜

まった疲れが一気に押し寄せてきた。暗い天井をぼんやり見つめながら、二人にさっきま

で何の話をしていたのか尋ねた。

「ニックスの……話ですけど」

「何で？」

マキノの反応に、ナディアが溜息をつく。その溜息はマキノにも聞こえるように、わざとらしく大きいものだった。

「マキノ、あなた正直な所、ニックスの事はどう思ってるワケ？」

ニックスがマキノに好意を持ってる事は、皆知っている。しかし、肝心のマキノがどう思

っているかは分からなかった。どんなにじれったい状態でも、ナディアは普段ならこうい

ったおせっかいな事は聞かない。しかし酒が入っていて機嫌が良かった事もあって、マキ

ノに問いかけたのである。それに対して、マキノは戸惑う。

「ど、どうって何で？別にただの……」

「友達、ですよ？」

「う……だって、そんなのあんまり意識した事が無くて……」

「本当ー？」

「だって……私の王子様とかけ離れてるんだもん。もっと爽やかで、背が高くて、スラ

ッとしてて、もつと……」

止まる事の無さそうなマキノの理想語りに、今度はガーネットまでが溜息をつく。あくまで憧れと、好きとは違うのだ。マキノのそれは、誰か一個人の中に憧れを求めているだけで、憧れに恋をしている状態だからだ。

「マキノ、王子様が理想ですね……」

「全く、理想が高いというか、子供というか……」

「な、何ようー！」

「マキノ、例えば今まで会った中なら……ディレス王子とか、本当の王子様ですわ。……」

あなたは、ディレス王子の事が好き？」

「好きだけど？」

あっさり答えるマキノに、ナディアがその好きじゃなくて、要するに愛してるかって事よ、

と付け足す。んーと悩み始めるマキノに、その様子じゃそうじゃないみたいね、とナディアが断じた。

「何で？」

「あなたの態度は、お友達だけど恋人としては思ってたって感じだからよ」

「憧れと、好きとは違うと思いますの。……どんな理想があったって、人は恋をしたら理

想は二の次ですわ。私、今ならそれが良く分かりますわ……」

ガーネットの言葉に、ナディアはおやつと思う。先程の反応からナディアは鈍いと思って

いたが、もしかして違っていたのだろうか。

「人は誰かを好きになったら、その人に自分の理想を求めずに、その人の好きな所を探すものだと思いますわ、マキノ」

「まるであなたが恋してる口調ね、ガーネット」
カマをかけるようにナディアが言うが、ガーネットに動じた様子は無い。

「……ええ、私好きですわ。ラフィーが好き。ラフィーの優しい所も、一緒にいたら強く

なれるところも、全部好き。だからね……今じゃ、二人つきりでいるのが恐い位ですわ」

フォートレスでの一件があったからか、ナディアはずっとガーネットは恋愛感情に鈍い所

があると思っていた。しかし、どうやら月日は彼女を強くしたらしい。人の言葉尻に込め

られた想いを汲み取るまでにはいつていないが、自分の感情を真正面から受け止める事は

出来るようになったようだ。

「だから、ラフィーに気持ちを伝える時には、ちゃんとサードに言いますわ」

「そう。……でもね、サードには何も言わないであげて。彼ももう、分かってるから……」

それが、あなたがサードに出来る思いやりよ」

サードは、もう結論は出てると言っていた。ならば、このまま放っておいてやる事が一番

良いと、ナディアは思ったのだ。ガーネットはでも、と些か納得していない様子だったが、

ナディアに約束ねと言われた事で、了承の返事を返した。

「もう、二人して……結局何が言いたかったの！」

「マキノ……」

「はあ。あなたに愛を説くには、まだ早いのかしらね。……取りあえず、ニックスの事も

ちゃんと見てあげなさいって事よ」

「だから、こういう事……」

「じゃ、おやすみー」
ナディアが我先にとくるっと背を向け、寝る体勢に入る。マキノは
ガーネットの方に顔を
向けるが、ガーネットも慌てて寝る体勢に入ってしまう。結局煮え
切らない思いのまま、
マキノも眠りにつく事になった。

一三十一章 一〇前夜

今日は、グレイスとの約束の一日前。アンカースに行く前に、各自準備を整えようという

事になり、二手に分かれて行動する事にした。ラフィストが紙に阿弥陀を書いていると、

後ろからキルトが仕組むなよとせつついてくる。どうやらキルトはこの間のくじ引きを、

未だに不満に思っているようだ。

「はい、作ったから書いて」

先に自分の名を明記して、ラフィストが筆を置く。それぞれが線を足しながら、どんどん名前を紙に書いていった。

「っていうかさ、何でいつも分かれる時、くじ引きする必要があるのさ？ サツと分かれられない訳？ ……まあ、もう諦めてるけど」

「俺もその意見に賛成だな」

残った所にティーシエルとサードが名前を書く。

「こうでもないかと、一部の人から文句がくるからね」

ラフィストはサードから阿弥陀の紙を受け取り、折りたたんだ部分を開いて線を辿っている

く。全員分の線を辿り終えた後、ラフィストとキルトとマキノとナディア、サードとニッ

クスとティーシエルとガーネットで行動する事を告げた。

「あ、アデルさんはどうします？」

「んー…サードと一緒にの方に行くよ」

取りあえず、六時に宿のレストランに集まる事に決め、ラフィスト達は二手に分かれて行

動を始めた。

まずは道具屋に行く事にしたラフィスト達は、今広場にさしかかっていた。しかし、広場がやけに騒がしい。気になったラフィストは、広場にいる人に一体何があったのか尋ねた。

「実は……広場の裏の森でモンスターが出たんだが、誰も歯が立たなくてな。……困ってるんだよ」

「ラフィスト、どうする？」

「出来れば倒してあげたいと思ってるんだけど……皆はいいかな？」
行くのか、という意味を含んだキルトの言葉に肯定の言葉を返し、ラフィストは同行して

いる皆の意見を伺う。マキノやナディアは快く了解してくれ、キルトも納得してくれた事

により、ラフィスト達はモンスターが出たという森へ向かった。森の入口付近に、確かにモンスターがいた。しかも、何やら見覚えがあるモンスターだ。

「あれは、確か……——」

「あ、ほら！ラフィー、ドラゴンゾンビじゃなかったっけ！」

「ドラゴンゾンビなら、光魔法ね」

敵を確認した後にドラゴンゾンビの前に躍り出ると、ラフィスト達を捉えたドラゴンゾンビが襲い掛かってきた。

「ラフィスト、特訓の成果の見せ場じゃねえ？」

まず、敵との間合いをとる為に、キルトが勢い良くライジング・サンを投げた。見事に命

中し、敵が怯んで動きが止まる。ナディアが詠唱を始め、マキノが

隙が出来た敵に踊りか
かろうとする。

「キルト……確かにな！——これが俺の剣だ！神火告天破斬！」

ラフィストが剣に気を纏わせ、剣を振るう。その瞬間、凄い威力の
剣圧が炎のようにうね

り、一気に敵を呑みこんだ。巻き起こった土埃に、ナディアは詠唱
を止めて目を閉じ、踊

りかかろうとしていたマキノは、止まって顔を伏せる。視界が晴れ
ると、既にドラゴンゾ

ンビは絶命していた。ラフィストの剣による鮮やかな勝利に、キル
トが口笛を吹く。

「ラフィスト、やるじゃん」

ラフィストの肩を叩き、キルトがラフィストをはやしたてる。

「でも、倒せてよかった……」

「よくない！」

和気藹々と勝利を喜ぶ二人の後ろから、女性二人の声が発せられる。

「私、全然活躍の場が無かったじゃない！」

「マキノはまだ良いわよ！私なんて呪文唱える前に倒されちゃった
から、ただ突っ立っ

ただけよ！」

女性二人に詰め寄られ、タジタジになるラフィスト。女性の反感を
買うと、後が大変であ

ると身に染みる思いだった。彼女らにとっては、ラフィストの剣よ
りも自分達の活躍の方

が大事なのだ。その事に心の中で少し涙しつつも、ラフィストは懸
命に二人を宥め、町に

戻って道具屋に行こうと言った。怒りを収めた二人と、キルトと共
に歩き出し道具屋に到

着した四人は店の中に入っていた。

「ねえ、ところで何を買うのよ」

道具屋の中を物色しながらも、ナディアが首をかしげる。

「何って……魔力回復させる薬とか買った……後、補助アイテムとか」

「別に一日だけなんだし、良いと思うけど……」

「でもさ、どうなるかわかんねーよ、アネさん。ほら、それに備えあれば憂いなしって言

うだろ？準備はしっかりしといた方が良いぜ。それに、ここの特効薬は良く効くからな。

俺もちようど買いたいと思ってた所だし」

「それもそうね」

返事をしながらも、そういった方面はラフィスト達に任せる事にしたらしいナディアは、棚に並べられた物を何気なく見て回っていた。

「ナディアー。ちよつち来てー」

マキノに呼ばれ、ナディアが振り返ると肘に何かが当たった。慌てて品物を確かめるが、壊れてはいないらしい。

「良かった……」

それを棚に戻した時、ふと横に目を遣ると、そこにはアクセサリーが並んでいた。ナディ

アはその中の一つを手に取り、立ち尽くす。なかなか来ないナディアに焦れたのか、マキノがナディアの元に駆け寄ってきた。

「どしたの？……あ、可愛いー！ビーズの指輪だ」

「これ……」

「ナディア、これビーズだよー。ナディアは高い宝石とか、そういうの方が良いんじゃないの？」

「……何かさ、懐かしい。当たり前だけど、昔は宝石なんて買えなくて……欲しいなっ

て思っ、一日中ウインドウを覗いてた時もあったの。そしたら、弟が作ってくれたのよ」

「いい弟さんだったんだね」

「皆、もう行くよ」

ビーズの指輪を見つめっていると、いつの間にか会計を済ませてしまっていたラフィスト達

が、店の入口付近から声をかける。マキノがどうするの、と問うとナディアは指輪を手に

持ち、先に行つててと言い残してカウンターへ向かつていった。

「あれ、アネさんは？」

マキノが一足先に店の入口に向かうと、ナディアと一緒にでない事に気が付いたキルトが首をかしげる。

「うん、ちょっと思ひ出を買いに行つたのよ」

何だそれ、訳わかんねえとキルトが騒いでいると、お待たせと言つてナディアが戻つてき

た。ナディアの指には、ビーズの指輪が綺麗に光り輝いている。それを見たマキノがにつ

こり笑つてナディアの耳に似合つてるよ、と囁いた。二人の間に漂う秘密の香りに、ラフ

イスト達は顔を見合わせるばかりだ。

「何か、隠し事されてるみたいで面白くねえなあ」

「んふふ……女の子同士の秘密よ。さ、次は何処に行くのかしら？」

「えっと、次は……携帯食料を調達しに……」

キルトが先頭に立ち、ならこっちの食料屋が安いぜとラフィスト達を手招きする。そして、

再び路地を歩き出した。

一方その頃、サード達は武具屋に向かっていた。

「ねえ、サード。武器は揃ってるんじゃないか？」

店に入りかけた時、ガーネットがおずおずと尋ねる。

「買うのは武器じゃない、防具だ」

そこまで言うと、一足先にサードが店の中に入っていく。その後に、四人が続いて入る。

すると、店の主人の威勢のいい声が、店の中いっばいに響き渡った。

「取りあえず、自分に合う防具を選んでこい」

「サードは？」

「服の下にプレートを付けてるから、俺はいらん」

「ふーん……僕もいいや。この服魔防も、守備力も高いし」

そう言う二人とアデルを残し、ニックスとガーネットが防具を合わせ始める。

「ティーシエル、どんなのがいいんですの？」

「軽くて、出来るだけ守備も魔防も高い奴……例えば、これかな」
ガーネットに手招きで呼ばれたティーシエルが、一着を見繕いガーネットに手渡す。気に

入ったのか、早速試着を試みようとしているガーネットとは対象的に、ニックスは未だに

防具と睨めっこしている。

「んー……これもいいんだが、こいつも……ってガーネット、いいじゃねえか！」

試着を終えたガーネットに気が付いたのか、ニックスが声を上げる。
余りにもニックスが

褒めちぎるので、ガーネットは少し恥ずかしそうだ。似合ってるよ、とアデルも感嘆の声

を漏らし、サードに至っては顔が真っ赤だ。

「サード……顔、真っ赤だよ！」

「う、五月蠅い！」

真っ赤な顔をしたサードをティーシエルがからかうと、サードはこ

う一声だけ述べた後、ズカズカとニックスの元へ歩み寄る。そしてこれにしろと、手甲と胸当てをニックスに押し付けた。つまり、これ以上からかわれないうちに、さっさとここから出てしまいたいのだろう。ニックスはその事に気付いた様子も無く、じゃこれにするかと決めたらしい。防具を買ったガーネットとニックスは、買った防具に変えて買い物を続ける事にした。

「何か、見たい物でもある？」
ティーシエルが皆に意見を聞くと、ガーネットがおずおずと手を上げる。

「私、食べ物屋さんに行きたいんですけど……」

「え？でもそれはラフィスト達が……ああ、おやつね」
付き合いの長いティーシエルが、ガーネットの言わんとしていた事を悟る。そして一同はガーネットの希望通り、食料品店へ向かった。

「これなら長持ちするし、腹持ちもいいぜ。味も悪くない」

「そうなのか？……じゃ、これにしとくか」

「いらっしやいませー」

ラフィストとキルトが携帯食料を物色していると、店員の元気な声が店内に響いた。その声と共に、別行動をしていた五人が店の中に入ってくる。店の入口付近にいたマキノがサード達に気付き、駆け寄って行く。別れた時とガーネットの格好が違ふ事に気付き、マキノが少し驚く。因みに、ニックスも防具を新たに身につけているの

だが、根本的な服は一
緒だからかマキノは気にも留めていない。

「可愛いーじゃん！もう防具見てきたんだー。私達もね、この後行
こうとしてた所なの！

んー、いいなあ。私は今までの服でいいと思ってたけど、やっぱ変
えちやおうかなあ……

あ！ラフィー！」

視界に入ったラフィストを、マキノが手招きする。

「ねー、可愛くない？」

「う……うん」

ラフィストは顔を赤くして、少し俯き加減に返事をする。普段とは
違うガーネットの姿に、

完全に照れてしまったのだ。ラフィストの反応に、ガーネットも気
恥ずかしくなったのか、

顔を真っ赤にしてお礼を述べる。

「ちよっとラフィー！おやつは五ギルまでって、一体どーいう……
あ、ガーネット！」

「姫ー！」

怒った様子のナディアと、会計を済ませたキルトがその場にやって
くる。二人とも、ガー

ネットの姿に驚いているようだ。

「いいじゃないの！似合うわ」

「姫は何を着ても似合うさ！」

「アンタが自慢してどうすんの！……そうだわ。食糧も買ったし、
私達もそろそろ防具を

見に行きましょーよ」

何もしてなかったくせに、こういう時は現金だなアネさん、と言
かけたキルトの口を、

新たな火種にならないようにラフィストが塞ぐ。これ以上、女性陣
に文句を言われるのは、

絶対に避けたいからだ。別行動の皆と別れて防具屋へと歩いていると、ナディアがラフィ

ストの傍に寄り、喋りかけた。

「んふふ、ラフィー……。ときめいたでしょ？」

「えっ……。何が？」

さっきの事だからかわれなくなかった為、ラフィストはとぼけて見せる。しかし、マキノ

によってガーネットの事よと背中をバンバン叩かれて、あっという間に逃げ道を塞がれてしまった。

「でもニックスも新しい防具を付けてたろ？マキノはどう思ったんだ？」

「な、何で私に聞くの！」

「そうだぜ、まずは姫さんについてだろ？」

話題を逸らしてしまおうとマキノに話を振ったが、そうはさせないとばかりにキルトが突

っ込む。その顔はニヤニヤしており、楽しいといわんばかりの表情だ。

「————っ！可愛かった！ときめいたよ！」

と思わず叫ぶラフィストに、あら正直とナディアが言う。ラフィストがここまではっきり

言うのは、どうやら意外だったらしい。

「誰かさんと違って、ラフィーは正直者よね」

「もういいだろ！先入るよ、俺！」

乱暴に武具屋の扉を開けると、ドアについていた鐘が五月蠅く鳴り響く。構わずさっさと

武具屋の中に入っていくラフィストの後に続いて、キルトとマキノとナディアも店の中に入っていた。

「じゃあ、見てくるね」

一人さっさと店の中を見て回るマキノ。

「私も見てこようかしら……二人はどうするの？」

特に必要が無かった二人は、自分達は構わないとナディアに返す。

ナディアは、あ、そう

とだけ簡潔に述べると、マキノの後を追うように、店の奥の方へ行
ってしまった。彼女達

の買い物が終わるまでここにいないと、絶対に怒るよなと溜息をつ
き、残された二人は近

くに置かれている椅子に腰掛ける。

「……男二人はちよつち寂しいかも……なあ、ラフィスト」

「同感だよ」

残った二人はがっくりと肩を落とし、呟いた。そう、女の買い物は
長いのだ。長丁場に備

えようと、キルトがちよつと抜けるなど言っ店の外に出て行く。

ラフィストがぼんやり

と店の中を眺めている間に、出て行ったキルトが戻ってきた。

「ほれ、ラフィスト」

「ああ、ありがとう」

キルトから手渡された物は、蒸しパンのような物だった。ここでは
店の中で物食っても文

句言われないから安心しろ、いうキルトの言葉に聞き、ラフィスト
もパンに口をつける。

蒸したての美味しいパンを食べながら、遠目で女性陣の様子を眺め
ていると、何とも楽し

そうにしていた。

「きゃー、見て見て！可愛くない？」

「あら、マキノ。あなたそういうのが趣味なの？私は、こっちの方
が……」

楽しそうに買い物をしている二人を横目で見た後、二人は特に見る
必要も無い防具に目を

走らせる。あの様子からして、機能性とか防御力とかは全く考えていないのだろう。サー

ドに怒られなきゃいいけど、と思いながらもラフィストは他人事を決め込む事にした。サ

ードに文句を言われるのは自分ではないし、今あの空間に割って入って彼女達に文句を言

われるのは真っ平だからだ。それはキルトも同じらしく、彼女達の様子を黙って見ている。

「あーあ……どうせ買うとしてもたった一着だけなのに……」

「だよなー！たかが一着の為に……しかもアレ、絶対何も考えてねえぞ」

たかが一着。その為に、二人は長い事待たされている。蒸しパンも食べ終わり、欠伸が出

掛かった頃になって、マキノは漸く決まったらしい。試着を済ませ、それを買うに行った。

ナディアに決まったのか尋ねると、彼女はあまり気に入らないからか、結局今のままにし

たらしい。あんなに悩んで一着も買わないのかと思うと、長かった時間を思ったラフィス

ト達は一気に疲れたような気がした。買った服を手を持ったマキノが、ラフィスト達の元

に駆け寄ってくる。店の時計で時間を確認してみると、もう六時近かった。

「ラフィー、もう戻ろうぜ……何か、くたびれた」

「そ、そうだな……」

「あら、二人共体力無いのね」

ぐったりしている二人を、ナディアがキョトンとした目で見つめる。

「アネさん、これは何つーか……気疲れ？」

「ふうん。じゃあ、精神的に弱いつてワケ？」

いや、そうじゃなくてと食い下がるキルトに、無駄だとラフィスト

が止める。そして目線でこれ以上疲れを増やす必要ないだろと訴えると、キルトが無言で頷いた。

ラフィスト達が宿に戻ると、レストランの入口に既に別行動をしていた皆が集まっていた。

サード達に全く疲れた様子は無い。あの様子だと、さっさと買い物を終えたんだろうなと

思い、少しうらやましく思った。そんな彼らの元に、お待たせと言ってマキノとナディアが駆け寄っていく。

「まだそんなに待っていませんわ」

「そうそう……って何かラフィスト達、ぐったりしてない」

後ろからゆっくり歩いてくる二人を見て、食料品店で会った時は元気だったのにと、ティ

ーシェルが首を傾げる。

「ああ、二人が弱いだけだから放っておいていいのよ。ね、マキノ」「そうそう」

ナディアとマキノの言葉に、まあ大丈夫ならいいんだけど、とティーシェルが納得する。

女性二人の言葉を聞き、それは無いだろうとラフィストとキルトは思った。しかも今の言

葉は、そんな二人の心に更なる気疲れを与えた。

「俺、もう駄目かも……」

「お……俺も」

ラフィストが地面に崩れ落ち、その後にキルトが続く。今日は理不尽に責められてばかり

だと思い、自分の不幸を呪った。そんな二人の前に、ティーシェル

がしゃがみ込んでヒー
ルかけたげよつか、と問いかける。

「ティーシエル、申し出はありがたいけど……いくら回復魔法でも
精神面までは効かない
だろうし、いいよ」

「あら、精神面の回復魔法ならありますわよ」

ティーシエルの後ろから、ガーネットがニッコリ笑って言葉を続ける。本当は対精神攻撃

用の魔法なのらしいが、精神を安らげる効果も得られるらしい。ティーシエルがマインド

ウォールね、と呟くと確かにあれなら効果があるかもと付け足した。

「そんなのあるのか？お願いだ、ガーネット！やってくれ！」

「俺も俺も！」

「いいですわよ」

杖を持っていない為、二人の額に指を当ててガーネットが詠唱を始める。

「……気の流動が蠢く鳴動、呪禁の曙光でかの者の心の深淵に癒しの光を与えん！マイン

ドウォール！」

言霊の終わりと共に、ガーネットの指先から二人の額へ柔らかい光が流れる。

「何かすっきりしたな、ラフィスト！」

「ああ。ありがとう、ガーネット」

お礼など結構ですわと述べるガーネットの後ろで、僕も使えるのにと小さな声で呟き、テ

ィーシエルが落ち込んでいる。出番が無かった事は勿論、二人に頼られなかったのが不満
だったらしい。

「まあまあ、ティーシエル……あ、ほら！ガーネットの方が光魔法得意だし！ね？」

慰めようとしたナディアが、マキノに先を越されてしまい、不機嫌そうな顔になる。そんな

なナディアの気持ちなど露知らずといったティーシエルが、彼女の目の前でマキノに礼を

述べる。それを見て、ますますナディアの機嫌が下降していく。ナディアは心の中で、テ

ィーシエルの馬鹿と悪態をついた。

「なあ……何かよう、ナディア機嫌悪くねえ？」

ニックスが隣にいたサードとアデルに耳打ちする。

「知るか」

「あー、そうだな。サードはそういう奴だもんな……——」

半ば諦めたように溜息をつき、アデルの方に向き直る。

「んー、確かに悪そうだねー。これは……——」

「これは！」

「触らぬ神に、祟りなし！だねえ」

少し期待していた事もあり、駄目だこりゃとニックスはガックリ肩を落とした。

最後にラフィストがハンバーグを注文し、オーダーを終える。

「ラフィー、それだけでいいんですの？」

「うん。……何かあんまり食べたくなくてさ」

二人のやり取りをじっと見て、次にニックスの方へ目を向けるマキノ。

「……ニックス、あんた食べすぎよ」

「そんな事ねーよ」

「そうよ、少しは緊張なさい」

「ナ、ナディアまで言うなよー！」

走行している間に、あっという間に料理が運ばれてくる。

「あーあ……明日か」

ナイフとフォークを持ち、ウインナーを切りながらティーシエルがボソッと呟く。

「早いものね」

横からナディアが、ティーシエルのウインナーを一つとって口に運ぶ。それを見たニックス

スが、先程のお返しとばかりに大きな声を出す。

「あー！ナディアも食べ過ぎ！」

「い、いいじゃないの……」

「ニックスとナディアは同類項だね」

何それと文句を言うナディアを無視し、ティーシエルが切ったウインナーとブロッコリー

を口に運んで、さっさと席を立つ。

「御馳走様、もう寝るよ」

「早！」

ティーシエルのおやすみなさい宣言に、キルトが叫ぶ。ティーシエルはそれを気に止めた

様子も無く、今日位は早く寝た方がいいよと言い残して、早々にレストランを後にした。

「じゃあ、ティーシエルのは貰うわね」

残っている料理を当然といった風に、ナディアが皿を引き寄せる。

「あ！それは俺が狙って……」

「うるさいわね！レディーファーストよ！」

ティーシエルの皿に伸びたニックスの手を、ナディアがパシんと払いのける。完全に自分

の下に皿を寄せ、ナディアが料理を食べ始めた。その様子を、ニックスが半泣き状態でじ

っと見ている。

「二人共……がめついなあ……——」

二人に聞こえないよう、ラフィストはこっそりと呟く。そしてテー

ブルから目を逸らすよ
うに視線を窓に向けると、空には綺麗な満天の星空が出ていた。星
の美しさに暫く眺め続
けていると、空に一筋の流れ星が流れる。ラフィストは何事も無い
ようにという祈りを星
に託し、明日へと想いを馳せていった。

一三十二章 魔戦士

窓の外が薄っすらと白み始めた頃、ラフィストの意識は覚醒した。

今日は皆でアンカース

に行く日だからか、緊張で早く目が覚めてしまったらしい。隣のベッドで寝ているティー

シエルを起こさぬように静かに身支度を整えると、ラフィストは外の空気を吸いに宿の外

に向かった。宿の外に出ると、ひんやりとした空気を感じる。少し冷たい外気はラフィス

トに心地良さを与えた。心地良さに身を浸して何気なく歩いていると、いつの間にかな

りの距離を歩いていたらしい。気が付いたら、広場の先にある森まで来ていた。葉につい

た朝露が、日の光によって輝いている光景が眼前に広がっている。

その様子にしばし目を

奪われていると、背後から声がかかった。

「ラフィー？」

声の方に目を向けると、そこに立っていたのはガーネットだった。

「どうしたんだい、ガーネット？」

「何だか緊張して目が覚めてしまって……それで、散歩していましたの」

「はは、俺と一緒にだ」

笑いかけると、ガーネットも笑顔を見せる。ガーネットの優しい声が、些細な仕草が、笑

顔が好きだ。しかし、全てが終わったらガーネットはきっと国へ戻るのだろう。そしてい

つかは彼女も誰かと結ばれる。これからアンカースで起こる事以上

に、彼女が自分の傍からいなくなってしまうのが、ラフィストには堪らなく怖かった。

「ラフィー？」

ラフィストの笑顔が消えた事を不思議に思ったのか、それとも黙っているのを不思議に思

ったのかは解からないが、ガーネットが不思議そうな顔でラフィストを見上げる。そんな

彼女の手を取り、ラフィストはギュッと握り締めた。いきなりの事に驚いたのか、ガーネ

ットは途端に顔を真っ赤にする。

「ラ、ラフィー？」

「ガーネット、全てが終わったら……君に、聞いて欲しい事があるんだ」

じつと彼女を見つめながら、自分の言葉を彼女に伝えた。ラフィストの真剣な表情に、緊

張してしどろもどろになっていたガーネットにも落ち着きが戻る。

ガーネットは返事の代

わりとばかりにラフィストの手を握り返すと、自身の想いを伝える為口を開いた。

「私もね……ラフィーに、伝えたい事があるの。全てが終わったら……聞いてくれる？」

「ああ」

「ふふ……何が何でも、今日は頑張らなければなりませんわね」「そうだね」

森に二人の笑い声が溢れる。うっすらと白む程度だった空は、もうすっかり朝の風景を彩っている。そろそろ仲間達も起きてくる頃だろう。二人は手を繋いだまま、来た道を戻り始めた。

支度を整えた仲間達が、人気の無い宿の裏に集まっている。何だかんだ言って、アンカースに乗り込むという事もあり緊張しているのだろう。皆どこかそわそわしている。ガーネツト、サード、ニックスにティーシエル。マキノに、ナディアに、キルトに、アデルさん。

順々に仲間の顔を見ていくと、今までの旅の思い出が次々とラフィストの頭の中に思い起こされていく。ガーネットは城を飛び出し、無理矢理この旅についてきた形だったが、どんなに辛くても決して弱音を吐かなかった。そして、ラフィストは

そんな彼女の姿に惹かれた。サードの最初の印象は、最悪だった気がする。一匹狼で、協力するという姿勢など

見られなかったが、今ではそんな事は無い。この旅では、幼馴染であるニックスにも再会

できた。中身は相変わらずだったが、変わらないものもあるのだと思うと、ラフィストは

嬉しく思う。ティーシエルも冷たい、自分勝手な奴だと最初は思っていた。だが旅する間に、彼の優しさを知る事が出来た。マキノの明るさは、仲間達にと

って癒しだったと思う。それに、個性的な仲間の緩和剤のような存在だ。ナディアはサバサバした性格で、皆を引

っ張っていつてくれた。最近色々あったが何か吹っ切れたようで、以前時々見せた寂しい

顔が消えた気がする。一番印象の強い出会い方をしたのはキルトだ。まさか、盗みにやつ

てきた奴と一緒に旅をする事になるなんて、あの時は全く考えてもいなかった。一緒に過

ごした時間は短いが、俺達の事をしっかり考えてくれているキルトは、大切な仲間の一人

だ。サードが探していたアデルさんも、目的の為とはいえ俺達に協力してくれている。手

が触れている腰の剣は、キルトのじいさんであるディーテさんが作ってくれた物だ。俺達

の無事を祈ってくれている、フォートレスのディレス王子にフォートレス王。元アンカー

ス將軍だったセクルードさんに、その妻のエミリさん。色々な出会いと別れを繰り返して、

今自分はここに立っている。そう思うと、身体の奥から力が漲ってくるようだった。

「ラフィスト、緊張してんのか？」

「ニックス……いや、違うよ」

朝に抱いていた緊張はもう無い。今までの出会いが、ラフィストを強くしてくれた。

「皆、ここまできたら後はもうぶつかるだけだ。アンカースにつけば、何かあるかもしれない。

だけど……何が起こっても、やれるだけ頑張ろう」

ラフィストの言葉に皆が頷く。彼らからそわそわした感じが消えた。そして皆で一つの円

になると、その中央に握った拳を出してコツンと合わせた。

「――大丈夫ですわ、私達は……だって、何よりも強い信頼という絆で、結ばれているんですもの」

「そうだね」

「虎穴に入らずんば、虎子を得ず。……なら、飛び込むまでだ」

「サード、何だそれ？」

「ふふ……ニックスはアホだね」

「ティーシエル！お前はいつも一言余計なんだよ！……それに、お前は知ってんのかよ？」

いつものようにくっついてかかるニックスに、大きな成功に、危険はつきものって事だよ。勉強

強になった、とティーシエルが軽く流す。変わらない光景に皆がプツと噴出す中、ニックスだけがバツの悪い顔をする。

「こーら、ニックス！機嫌損ねてるんじゃないの！」

「そうよ。そんな調子じゃ、いざって時誰かさんを守れないわよ？」

「別に機嫌損ねてなんかねえよ！ってカナディア、お前も一言余計！」

「ほれほれ、落ち着けてマツチヨ。マキノちゃんやアネさんの様なレディに、声を荒げるもんじゃないぜ」

「ぐっ……」

「あはは……よし、行こうか！」

ラフィストがワープを促すと、それまで笑っていたみんなの顔が引き締まる。地面に描か

れた魔方陣から光が巻き起こると、ラフィスト達の姿は光に包まれ、消えていった。

ラフィストやティーシエル以外の皆は見知らぬ場所の為か、皆キョロキョロ周囲を見回している。ガーネットがここはアンカース城のどこにあたるのか尋ねると、ティーシエルが

王座の真下にある、鳳凰の間だと答えた。

「待っていたよ」

何の気配も感じなかったのに、急に背後から声がかかる。バツと声のした方を振り向くと、

後ろにはグレイスが立っていた。

「そんなに警戒しなくてもいい……何もするつもりは無い」

「なら、創世の剣を……」

「待て」

ラフィストの言葉を、グレイスが遮る。そして、君達が信頼に足る者か確かめたいと告げた。

ティーシエルが必死に、自分の仲間だと訴えるが、ラフィストはそれを制する。グレイスが言う信頼の意味合いは図りかねるが、まずは彼の話を聞いてからにしようと思ったからだ。

「何を、すればいいんですか？」

「簡単な事だ……あの魔導士、ダグラスを倒して、奴に囚われているテレーズの魂を持っ

てきて欲しい。それが奴の切り札なんで……。魂が向こうにある限り、私は下手に動く事が出来ない」

「グレイス。俺はまだ、お前を完全に信用できない。お前が俺達を利用しようとしている可能性もあるからね。だから、一応聞いておきたい……魔導士は何者だ？」

いつにもなく厳しい顔のアデルが言った。

「世界樹の手の者だ……いや、今や世界樹は世界樹であって、世界樹ではないといった方が正しいのかもしれんが……——」

「それは、どういう意味だ？」

詰め寄るアデルに、細かい話は後だとグレイスは話を切る。今はこれ以上聞いても無駄だ

と悟ったのか、サードがグレイスに、奴はどこにいるのかと尋ねる。グレイスが東の棟の奥にある蒼天の間だと答えると、サードはグレイスに背を向けて、王座の間に出る階段の方へ歩き出した。

「サード」

「魔導士を倒す方が先だ」

「……これを持っていくといい。役に立つだろう」

そう言っ、紫の珠がラフィストの手の上に乗せられる。これは何なのか尋ねると、ダグラスのマジックシールドを解く宝珠だと教えてくれた。

「恐らくは、奴に操られているアンカースの王子、ロイドとも戦う事になるだろう……出

来れば、そうあつて欲しくは無いが」

「後、アンカース王ともな。そうだろう？」

サードが付け足しを加えると、グレイスが悲痛な顔をして目を伏せる。前にルネサンスで聞いたセクルードの話では、王も王子も被害者だ。その彼らと戦わなければならない。その現実が、ラフィストの中で重く圧し掛かる。

「……行こうか」

懷から、セクルードから受け取った手記を出す。それを片手に、ラフィスト達は蒼天の間に向けて走り出した。

「はあ……もう、随分走りましたわね」

延々と続く長い廊下を走りながら、ガーネットが息を切らして言う。セクルードの手記の

お陰で、迷う事無く蒼天の間へ向かう事が出来るが、それでも城の中はただっ広くまるで迷路のようだ。

「おい、あれ扉じゃねえか？」

ニックスが前方を指差す。暗い中目を凝らすと、そこには確かに物々しいほど荘厳な扉があった。漸く扉の前に到着した一同は、息を整える。扉をじっと見ていたアデルが間違いないと呟いたのを聞き、ラフィストは蒼天の間の扉を開けた。広々とした空間はしんと静まり返っており、誰かがいる様子は無い。

「誰も……いないんですの？」

「やはり、騙されたのか？」

周囲を伺うガーネットの後ろで、アデルがポツリと呟く。アデルの言葉に、ラフィストも内心どうしようかと思う。しかしこのまま立ち尽くしていても仕方が無いので、慎重に広間の中へ足を進めた。

「やっぱり、人の気配がしないな」

広間の中央辺りでこうラフィストが呟いた時、急に蒼天の間の扉がバタンと閉まる。慌て

てニックスが扉の方へと走り扉を開けようと試みるが、うんともすんとも言わない。

「くっそ！開かねえぞ！」

「ふん、客人が来たと思えば……なんだ鼠か」

広間の奥に、人影が浮かび上がってくる。黒いローブを纏ったその姿は、禍々しいオーラ

を放っていた。恐らく、こいつがダグラスという魔導士なのだろう。

「お前がダグラスか！」

「いかにも。お前達はグレイスのコマ、といった所か？くく、ご苦

「勞な事だ」

「何！」

明らかに馬鹿にした物言いに腹を立てたサードが、大剣に炎を纏わす。他の皆もそれぞれ武器を構え、既に臨戦態勢に入っている。

「おっと……やる気なのは構わないが、お前達の相手は私ではない。——……出でよ、

我が僕！」

ダグラスがサッと手を上げた瞬間、その場に二人の人間が現れる。その内の一人が、ダグラスとラフィスト達の間を遮るよう、躍り出た。

「あなたは……」

「我は、アンカースの王なり。小賢しいネズミどもめ……直に始末してくれる」

徐に空中に手を伸ばし、アンカース王が呪文の詠唱を始める。それを見て詠唱を止めよう

と、まず武闘家の二人が弾かれたように飛び出した。それを見たキルトが援護しようトラ

イジング・サンを投げ、サードが魔法を纏った剣圧を飛ばす。アデルも一撃を加えようと、

駆け出していく。ラフィストはグレイスから受け取った解呪の珠を使おうと、懷から取り

出して上空に掲げる。それを見たナディアが待っていたとばかりに詠唱を始めた。

「きゃあ！」

真っ先にアンカース王に殺到したマキノが、何かに弾かれたのか大きく後ろに吹っ飛ぶ。

打ち付けた腰を擦っていると、異変に気が付いたニックスが後ろ飛びしながらさがってく

る。キルトが投げたライジングサンも、サードが放った剣圧もこと

ごとく弾かれてしまう。

呪文を放とうとしていたナディアも、詠唱を中断した。

「何よ……もしかして、効いてないの？」

仲間の間に一瞬の動揺が走った瞬間、詠唱を終えた王の手が上がる。いち早く気が付いた

ティーシエルが、ダメージを最小限に抑えようと急いで印を切った。

「ヘル・バーン」

「ウォール！」

言霊と共に、強烈な爆炎が巻き起こる。爆炎がラフィスト達に襲いかかる前に、ティーシエルによって張られたウォールの結界が、彼らの周りを覆う。大概の呪文はこれで遮れる

はずだ。しかし、爆炎は結界を壊してラフィスト達に襲い掛かった。

「うわあああー！」

余りのダメージに、ラフィストは手に持っていた解呪の珠を地面に落とした。肩や背中に

もの凄いダメージを受け、肉が焦げたような匂いがするが、何とか剣を落とす事だけは防

げた。地面に落ちた解呪の珠は、コロコロと転がっていく。解呪の珠が効かなくとも何とか

か攻撃に転じなければと思い、転がっていく珠をそのままにラフィストは剣を支えに立ち

上がった。そこに、炎が足に当たったらしい右足を引き摺りながら、ティーシエルが歩み

寄ってくる。地面に転がっている解呪の珠を拾い上げると、その中を覗きこんだ。

「これは……きちんと発動してないみたいだ。ラフィスト、解呪は僕に任せて攻撃に専念

して。これ以上あのレベルの魔法をくらい続けるのは拙い」

結界を張ってなお、あの威力だ。ティーシエルの言う通り長期戦に

なるのは非常に拙い。

ふらつく足を叱咤し、何とか剣を構えなおすと、そこにガーネットの回復魔法が包み込んだ。さつきまで強烈に痛んだ肩や背中への痛みが、スッと和らぐ。

「皆、回復魔法かけましたわ！頑張って！」

「ガーネット……よし！皆、攻撃だ！」

ラフィストの声に、倒れこんでいた皆が起き上がる。武器を構え、ラフィストが殺到した

途端、周囲に紫炎色の光が溢れ出した。

「これは、まさか……」

光によって貫かれたダグラスが呟く。瞬間、パキッという音が鳴り響いた。それと共にマ

キノと同じように、弾かれかけていたラフィストへの抵抗も無くなった。殺到した勢いの

ままラフィストが剣を振り下ろすと、ラフィストの剣はアンカース王の胴に傷をつけた。

「いいよ、皆！解呪のついでに、魔力と守備力も下げといた！」

「なら効果の持続するうちに、倒しちまわないとな」

ラフィストの攻撃が当たったのを見て、キルトが勢い良くライジング・サンを投げる。ラ

イジング・サンがアンカース王の二の腕を裂き、確実にダメージを与えた。そこにマキノ

の攻撃が、相手の腹に上手く決まる。もう一回攻撃を仕掛けようと一旦後ろに下がったラ

フィストに、アデルが声をかける。

「俺とニックス君で間接攻撃して、敵のバランスを崩す。その隙を狙って、君とサードの

二人で一気に強力な技を放つんだ」

サツとサードの方を振り向くと、サードが一つ頷く。自然と、剣を握る汗ばむ手に、力が

入った。

「待って、体勢を崩すなら大勢の方がいいんじゃない？」

「僕とナディアもW合成魔法で援護する」

「頼むぞ、二人共」

珍しくサードが二人に声をかける。そして剣を構えなおし、技を高め始めた。ラフィスト

もいつ突っ込んでもいいように、剣に闘気を込める。未だにアンカース王に攻撃を加え続

けていたマキノをうつとうしく思ったのか、アンカース王がマキノに向かって杖を振るう。

攻撃を腹に受けて吹っ飛んだマキノを助ける為、キルトが敵に向けてライジング・サンを

投げる。そして吹っ飛んできたマキノをダイレクトキャッチした。

キルトが投げたライジ

ング・サンはかわされてしまったが、アンカース王がライジング・サンを避けた所を狙っ

て、アデルとニックスが攻撃を放った。

「真空剣！」

「閃光八卦拳！」

二人の技が、敵を襲う。そこに更に追撃しようと、ナディアとティーシェルの二人が呪文

を放った。

「バースティンブレイズ！」

「ジューテiriamオクサイド！」

二人の魔法が弾け合い、もの凄い衝撃と爆発が起こる。そこに更に先程の二人の攻撃が合

わさり、強烈な一撃が敵にお見舞いされた。しかし、これほどの攻撃の中でも敵はまだ爆

炎の中で立っている。

「今よ、ラフィー！」

ナディアが叫ぶ。同時にラフィストとサードが敵に向かい、踊りかかった。ラフィスト達を寄せ付けまいと、アンカース王の手から衝撃波が発せられる。ラフィスト達が身構える前に、先に攻撃をしたアデルとニックスが前に飛び出し、二人の壁になる。

「アデルさん！ニックス！」

「気にするな！——いけ！」

ラフィスト達の代わりに、二人が吹っ飛ばされる。二人が作ってくれた好機を逃すまいと、未だに炎に包まれているアンカース王に、ラフィストとサードが技を繰り出した。

「鳳凰神火剣！」

「神火告天破斬！」

炎を纏ったサードの剣がアンカース王を深々と切り裂いた後、ラフィストが続いて剣を振り下ろす。ラフィストの剣が一瞬、閃光のように煌いたかと思うと、

剣は荒々しいまでの雷のような軌跡を描いて、アンカース王を切り裂いていった。

「う……おおおおー！ぐ……ぐばぁはっ……！」

ゆっくりと王が崩れ落ちていく。

「やった！……っ？」

崩れ落ちた王が、みるみるうちに砂と化していく。そして、完全に砂になったかと思うと、掻き消えてしまった。

「チッ……これだから脆い生き物は……役立たずめ」

王の消えた場所を睨みながら、ダグラスが呟く。そんなダグラスをラフィストはキッと睨むと、叫んだ。

「ダグラス！貴様……」

「クク……ちよつと使いやすいように、人体改良したまでの事……それより、気を抜いている場合ではないぞ！そおら！」

広間一体に、赤黒い雨が降り注ぐ。それが身体に触れた瞬間、激痛が走りぬけていった。

何とかマントで防ごうとするが、赤黒い雨はマントに穴を開けるばかりで、ちつとも効果が

が無い。ナディアが炎で蒸発させ、赤黒い血の雨は掻き消えるが、ラフィスト達に与えた

ダメージは深刻だった。急いでガーネットが全体に回復魔法をかける。

「今のは、ブラッド・レインという魔法。くく……私はこやつらのように雑魚ではないぞ。

——が、貴様等の相手はコイツで充分。行け！ロイド王子よ！」

そう言うと、ダグラスの隣に立つもう一人の人物がラフィスト達に殺到してくる。剣に黒

い炎を纏わせ、近くにいたサードに向けて剣を振り下ろした。サードは自分の大剣でロイ

ドの剣を受け止めるが、次第に力負けし始める。

「こいつ……魔法剣士か！」

魔法剣士相手に魔法を帯びてない剣でやり合うのは分が悪いと、サードが力を込めてロイ

ドを押し返して一気に距離をとる。そこに、逃さないとばかりにロイドが剣を振り下ろし、

剣圧を放ってくる。黒い炎がラフィスト達に襲い掛かると、先程のブラッド・レインと似

た激痛が走ってきた。

「……強い！」

流石の百戦錬磨のアデルも顔を歪め、吐き捨てる。先の戦闘で消耗している上、相手には

まるで隙が無い。ラフィストも正直どう攻めていいものか、判りかねていた。

「サード、魔法剣士相手にはどう攻めたらいいんだ？」

「取りあえず、間接攻撃中心でいくのがセオリーだ……あと、くれぐれも素手では触るな。」

そいつ自身が魔法を使用する場合、痛い目を見る」

「そうか……皆、行くぞ！」

「言われなくても！」

ニックスとマキノの二人が先行してロイド王子に向かっていく。ニックスが気の攻撃を放

った所に、マキノが三節坤を振り回す。キルトも二人を援護しようと、すかさずライジング

グ・サンを投げた。しかし、ニックスの攻撃は剣圧によって相殺され、マキノの攻撃は素

早く切り返された剣によって防がれてしまう。キルトのライジング・サンも、マキノを押

しのけた後に、剣によって弾かれてしまった。

「くそ！」

突破口を見出そうと、ラフィストもロイド王子に突っ込んでいく。気を纏った剣のお陰で

何とか力負けはしていないが、剣を合わせていても一向に隙を見せない。それどころか、

剣を片手に持ち替えて魔法でラフィストに攻撃しようとしている。

青白く光る手に気が付

いたラフィストは、とっさに後ろに下がって距離をとる。だが、放たれた魔法を避けるま

では至らなく、氷の刃がラフィストに襲い掛かった。

「ラフィー！……リヒト！」

ガーネットによって放たれた光魔法によって、氷の刃が消滅する。すると、ロイド王子は

ダメージを与えられなかったラフィストではなく、魔法を放ったガーネットに殺到する。

ラフィストはガーネットの前に躍り出ると、慌ててその剣を受け止めた。

「ラファイー！」

「ガーネット、下がって！」

ガーネットが距離をとったのをみて、ラフィストも一旦距離を置く。攻撃の手を緩めまい

と、ロイド王子は更に襲い掛かってくる。キルトがライジング・サンを変形させてロイド

王子の剣を防ぐと、懷から何かを取り出してロイド王子に投げつけた。

「なっ……」

「早く毒抜きした方がいいぜ。……即効性だからな」

キルトが一気に距離をとり、ロイド王子の二の腕を指差しながら言った。ロイド王子の二

の腕には、何かの針が刺さっている。どうやら、かなり強力な毒針のようだ。ロイド王子

は乱暴に針を抜くと、呪文で治療を始める。

「アデル！それにサード。私達の魔法で、攻撃してみない？ほら、アデルとは前に一回や

ろうって言ってたじゃない。アデルは私、サードはティーシエルの魔法で……ね。属性似

てるし、上手いくわ」

ナディアの提案に、アデルとサードとティーシエルが頷く。やるならば回復に専念してい

る、今がチャンスなのだ。サードはラフィストに視線をやると、ラフィストは無言で頷い

た。ここで決めなければ、もう後は無いだろう。

「じゃあいくわよ！特大のを！」

ナディアとティーシエルの二人が杖を掲げ、詠唱に入る。

「幾多の尖光の輝きを以て炎と成す。其は灼熱の中で炎帝の祝福を受けるだろう……」

「水神から奉りし原生の雨は、水激の調べとなりて其を追撃す……」
ほぼ同時に二人の呪文が完成し、それを見たアデルとサードがロイド王子に突っ込む。

「フレア！」

「ストームダスト！」

二人の放たれた呪文が、アデルとサードの剣に宿っていく。ロイド王子は回復を中断し、剣を構えて二人の攻撃を受け止めるが、二人の攻撃はロイド王子の魔法剣を上回り、彼にダメージを与えていく。更に、相反した魔法による魔法剣は、新たな爆発を生み出してロ

イド王子を飲み込んでいった。

「今だ！ラフィス……——」

ラフィストと言いかけたサードの動きが、そして切りかかろうとしていたラフィストの動きが止まる。

「ヴ……ヴヴヴ……」

ベキベキと不快な音を立てて、爆風の中に薄っすら見える姿が變形していく。奇声を一つ

上げたかと思うと、ロイド王子を包んでいた爆風が消えうせた。そして、まるで人間から

化け物へと身を落とすかのような不気味な姿になって、ラフィストの前に現れた。

一三十三章 一くダークエビルく

突然の変貌に、ラフィスト達は言葉を失った。先程まで戦っていたロイド王子は、確かに人の姿をしていた。だが今は、恐竜のような硬い皮膚に、黄色に光る不気味な目。そして長い尾を引き摺っている獣だ。

「なっ……」

「これじゃまるで……化け物ですわ……」

ロイド王子が上を向き、耳障りな声で大きく嘶く。その声で我に返ったラフィストが、ダグラスをキッと睨んだ。ラフィストの目は怒りの色を宿しており、身体中から憤怒を露にしている。

「彼に……何をしたんだ!」

「ククク……融合の呪の反作用とでも言おうか?——それともこれは、相乗効果と呼ぶべき、かな……」

その瞬間、ラフィストは体中の血がカツと熱くなったのを感じた。人の命を弄んで笑っているこの男が、どうしても許せなかった。

「貴様……——殺す!」

冷静さを欠いたラフィストが、ダグラスに突っ込んでいく。サードが無闇に突っ込むなどラフィストに喚起するが、ラフィストの耳には届かない。

「フッ……愚かな」

バツと突き出された手から、ラフィストに向かって黒い衝撃波が放たれる。衝動に任せて

敵の懷に飛び込んでいったラフィストは無防備だ。拙いと思った時にはもう遅く、衝撃波

はラフィストの目の前まで迫ってきていた。

「ラフィスト！」

襲い掛かるであろう衝撃に備えてラフィストが目を瞑った時、ラフィストの前にニックスとキルトが躍り出る。そして無防備なラフィストを庇う為の後方へ突き飛ばした。飛ばさ

れたラフィストが前方を見た時には、ニックスとキルトは既に体中を真っ赤に染めていた。

「ニックス！キルト！」

地面についた身体を起こし、二人の元に走りよる。

「……ラフィー、無事か」

「……こん、馬鹿が！もっと、冷静でいなきゃ……駄目だ、ろ」

「ニックス、キルト……すまない。俺が……俺が……——っ！」
考えなしに突っ込んだ自分を庇ってくれただけでなく、二人はラフィストを励ましてくれ

た。ボロボロで一杯一杯だろうに、自分の事は後回しにして。それに比べて、何て自分は

弱いのだろうとラフィストは思った。あれほど皆を守りたいと思っていたのに、今自分は

守られている。大事な人達を守る、本当の強さが欲しい。そう思った刹那、ラフィストの目に闘志が宿った。

「ラフィー、危ない！」

ロイド王子の瞳が光った事に気が付いたマキノが叫んだ瞬間、獣と化したロイド王子の口

から、灼熱の炎が放たれる。このままではラフィストは避けられても、倒れている二人は

確実に巻き込まれてしまう。ティーシエルが慌てて結界を張ろうと

し、アデルとサードが

二人を後方に下げる為走り出す。しかし、ラフィストは剣を握って突っ立ったままだ。

「ラフィー、何やってるの！避けなさい！」

せめてラフィストだけでも無傷で、とナディアが叫ぶが、ラフィストは炎を避けようとは

せず、代わりに一步前に出て、すっと剣を構えた。炎がラフィストを飲み込むと思った瞬間、

ラフィストが構えた剣を振り下ろす。綺麗な軌跡を描いた剣は、灼熱の炎を切り裂い

た上、ロイド王子をも吹っ飛ばした。

「ラフィスト、大丈夫か！」

「サード……それにアデルさん、二人を頼む」

サードがラフィストに何かを言いかけるが、ラフィストの身体に纏う闘気の変化にきがつ

くと口を噤む。そして、意識を失った二人を抱えて、ガーネットのいる後方へさがって

いった。二人と入れ替わりに、ナディアとマキノがラフィストの傍に駆け寄ってくる。

「ラフィー、一斉に仕掛けていくわよ」

「ティーシェルまで回復に回ってるから、ちょっと攻撃手が少ないけどね」

武器を構えて臨戦態勢に入った二人を、ラフィストが手で制止する。

「ラフィー？」

「二人共……あいつは、俺一人でけりをつける」

「何言ってるのよ！」

「これはお笑い種ですねえ。貴様一人で片付ける？……まあ、いいでしょう！そんなに死

に急ぎたいなら、一番に殺して差し上げます！——本当は、貴様だけはじっくりいたぶ

って、最後に殺したかったのですが、ね。……まあ、貴様の存在は邪魔以外何者でもありませんし、グレイスの希望をこの手で断ち切ると思えば、気分も晴れるというものの……」

「父さんの……のぞみ？」

後方で、ガーネットと一緒に二人の回復に当たっていたティーシェルが、言葉を漏らす。

「何だ、お前達は何も知らないのか。ならば、冥土の土産に教えてやろう……奴はな、コ

イツが使える創世の剣で、世界崩壊を防ごうとしているのだよ。破壊と再生を司る剣で世界樹を倒せば、新たな世界樹が再生される。そうすれば世界の理も崩れる事無く、世界崩

壊を防げるって寸法だ……何より、それが正の世界樹との約束だから、守ろうとしている

のだろう。……だが！既に正の世界樹は消え、今存在するのは負の世界樹なのだ！世界崩

壊は世界樹の意思、即ちそれは自然の摂理！——……それを防ぐなど、可笑しな事。そう思わぬか？」

「おかしくなんか……無い！」

蒼天の間に、ラフィストの声が響く。

「生きたいと願って……大切な誰かを生かそうと願って、何がおかしいんだ！」

「おかしいですね……世界樹の正の意識が消え、負の意識となった時から、世界の破滅は決められていた事だ。全ての弱者が消え、選ばれた者だけが生き残る……これが、これらの世界なのですよ！」

「そんな世界、残された者は幸せになれない……」

ティーシエルが寂しそうに言った。

「そうよ！そんな事、誰も望んじやいないわ！」
声を荒げて、ナディアも続く。

「……周りを見て、誰もいないのは寂しいよ」

父親の事を思い、マキノが呟く。

「クッ……そのちっぽけな思想は流石人間、といった所か」

「黙れ！お前に……そんな事を言う資格は無い！」

「ヴ、ヴ……——」

ラフィストが叫んだのとほぼ同時に、先程吹き飛ばしたロイド王子が声ならぬ声を上げる。

呻きながらヨロヨロと近寄ってくる姿は、とても苦しそうに見える。目の鈍い光は、まるで

で涙を流しているように思えた。

「ロイ……ド王子？」

「ヴ……ヴヴ……ヴ……」

「何をやっている、ロイド！早くコイツを始末しろ」

「ラ、ラララ……ラフィスト」

ロイドが発した言葉に、ラフィストがハツとする。確かに今、彼はラフィストの名前を呼

んだ。もしかしたら、少し意識が戻ったのかもしれない。

「ロイド王子！」

「お、おおお……お願い……いい……いい、だ。ぼ、僕を……ころ、ころころ……殺して……」

く、れ……——」

「ロイド王——」

「何を言っている、ロイド王子！……気が迷っているだけです。こやつらを殺せば、すぐにそんな物なくなるでしょう」

ラフィストの言葉を遮るように、ダグラスが言葉を重ねる。その口調はまるで赤子をあや

すかのような物言いだ。発せられた声は猫撫で声だが、毒味を帯びたような声で、言葉の

内容とは違い、彼にロイド王子を心配している様子は全く無い。

「ダグラス！」

「も、もう嫌だ……人を殺すのは……だから、殺し……」

ここまで言うのとロイド王子は再び苦しみ始め、咆哮する。目に再び黄色い光が宿ったかと

思うと、ラフィストに殺到してきた。ラフィストは苦い表情を浮かべながら、ロイドの攻

撃を剣で受け止めながら凌ぎ続ける。彼も自分と戦っているのだ。

そう思うと、一刀のう

ちに切り伏せる事など出来なかった。

「ククク……そうだ。憎々しいフレッドなんぞ、殺せ、殺してしまえ！」

「くそ！……何とかならないのか！」

ロイド王子とラフィストの激しい攻防に割って入る事も出来ず、仲間はまだ見守る形にな

っている。各自、一生懸命自分に出来る事を模索するが、出来る事が思いつかない。些細

な事でもいい、何か役立つ事を、と一同は歯をかみ締めた。傷ついた二人を回復している

ガーネットが、ジツとラフィストを見つめる。そんなガーネットに、隣にいるティーシェ

ルが声をかけた。

「ガーネット……光魔法は、君の得意分野だ。光属性の補助的大魔法、使う気ある？」

「光？何の魔法ですか？」

ガーネットは回復の手はそのままに、視線だけティーシェルに向ける。

「強力な呪い解除の呪だよ……リリース・カーズっていうね。要領

は攻撃魔法と一緒にね、

相手の魔法防御を上回らないと効かないんだ……それに負担が大きいし、相手に免疫が出るから一回しかチャンスは無い……——同じ一回なら、光属性の君が使うべきだろ？」

ティーシエルに向けていた視線を、再びラフィストに向ける。ラフィストは、ロイド王子

を切れなくて苦しんでいる。成否ではなく、ガーネットは少しでもラフィストの力になりたかった。

「ティーシエル……私、やりますわ！ううん、やらせて欲しいの！」
「そうこなくっちゃ！」

ティーシエルはサツと印を結ぶと、自分の身体からガーネットの身体へ、呪を移していく。

ガーネットの身体が一瞬淡く光り、またその光が消える。ティーシエルはこれでよし、と
呟いた後、顔を上げた。

「二人の傷は僕が直す。君は、ラフィストを助けてあげて」

「わかりましたわ」

一歩前に出て、杖を掲げる。ガーネットは瞳を閉じて精神を研ぎ澄ませると、リリース・

カーズの詠唱を始めた。

「我、汝をその呪から解放せし光を今解き放つ。翼よ、天に舞い……光を其に導け！リリース・カーズ！」

杖から強烈な光が迸り、ロイド王子を包み込む。

「グ……グググ……グアアア！」

ロイド王子と対峙していたラフィストが、光に包まれているロイド王子を、剣を構えたま

ま伺っている。最初は悲痛な叫びだったが、次第にその声は安らい

だ声へと変化していく。

ダグラスはその様子を苦々しく見ている。術者を止めようにも、既に呪文は放たれた後な

ので無意味だ。それにどうやらダグラスは、光魔法に介入できないようだ。王子を包む光

が消失すると、そこには人の姿に戻ったロイド王子が倒れていた。それを見て、床にへば

るガーネット。額には大粒の汗が流れている。精神力をかなり消耗したのか、どこことなく

顔色も悪い。

「ガーネ……」

その時、さっきまで開かなかった扉が開き、誰かが中に入ってきた。「あの、ちょっと儀式の事で質問が――……」

後ろにいるガーネットに声をかける為、振り返ったラフィストの視界に入ってきたのは、

紛れも無く妹のジュリアだった。

「ジュリア！来ちゃ駄目だ！」

「……？お、王子！」

ラフィストの言葉も、今やってきたジュリアには意味を成さない。それどころか倒れてい

るロイド王子に気が付いたジュリアは、彼の方に駆け寄り始めた。ダグラスはそんなジュ

リアの手を掴み、自分の方へ乱暴に引き寄せる。

「ダ、グラス様？」

ジュリアは、自分の手を掴み上げるダグラスを見上げる。そして、醜い笑い顔を浮かべた

ダグラスを見た瞬間、ジュリアの顔が驚愕から恐怖に変わった。

「ジュリアアア！」

「ハハハハ！……これでも、これでもまだ齒向かう気か？呪文が使えるか？フフ、ジュリ

ア、いい子だ」

「い、嫌……」

ただ睨むだけで、一向に自分に向かって攻撃してこないラフィストを見やると、ダグラス

は満足そうにほくそ笑む。そしてゆっくり宙に手を上げ、呪文の詠唱を始めた。

「ダ、ダグラス様？ 一体、何を……」

「暗黒の雲母より生まれ出でし、紫微の輝き……。惨禍の墓標となりて、其を導く……ト

ラジック・ストーム！」

「！いけない、ラフィスト！ さがって！ ……——アブソリュート・プロテクション！」

ラフィストがロイドを抱えて下がったと同時に、ティーシエルが境界を張る。が、少し衝

撃が走る。しかし、ヘル・バーンの時よりは、遥かにダメージを食らっていない。

「全く、最上級のシールドを使う羽目になるとはね……——」

「ティーシエル、あのクソ野郎は何とかならないのか？」

気絶したロイドを床に横たわらせ、ラフィストが小声で話す。

「……あの状況じゃちよっとキツイけど、方法が無い訳じゃない」

「本当か！」

ティーシエルが、軽く頭を下げる形で肯定する。

「キルト……動けるかい？」

「ああ、何とか……——」

さっきまで気絶していたキルトが小声を出す。

「僕が隙を作る……君はまだ気絶している振りをして、僕の合図と共にダグラスの後ろ肩

に当たるように、ライジング・サンを投げて欲しい。その瞬間を見計らって、ラフィスト、

君が彼女を助けるんだ」

ばれない様こちらに視線を向けず、淡々と作戦を話すティーシエルに、わかったと小さな

声で返す。ティーシエルはキルトが気絶していないのがばれない様、ナディアにキルトの

前にいてくれるよう頼むと、ダグラスの方へ歩き出した。

「あの子、隙を作るって……どうする気かしら」

「とにかく今は、ティーシエルを信じよう」

自分の方へ近づいてくるティーシエルに気が付いたダグラスは、右手にダークネス・ボルトを構えたまま、ティーシエルへと視線を向ける。自分に対して攻

撃できないと思ってい

るのだろう。顔は終始、醜い笑みが浮かんでいる。心にある余裕ゆえ、ティーシエルが何

をしようとしているのか興味を持ったらしく、ダグラスはティーシエルに話しかけてきた。

「……おや、ティーシエル様……如何致したかな？」

「ねえ、ダグラス。取引しないかい？」

「……取引、ですと？」

ピクリと、ダグラスが眉を動かす。

「うん、僕はこんな所で死にたくないんだ……——」

「ティ、ティーシエル！」

いきなりの事に驚き、ラフィストが身を乗り出しかかる。が、ティーシエルはそんなラフ

ィストを冷めた目線で一蹴する。その目は、出会った時以上の冷たさだ。余りの冷たさに、

作戦なのか、それとも一瞬頭によぎる。しかし、ラフィストは頭を振ると、ティーシエ

ルを信じるって言ったじゃないかと、何度も頭の中で繰り返した。

「おやおや、仲間割れですか……意外と脆いものですね、人の絆とやらは……——それ

とも、容易く裏切れる所がいい所なのか？」

「絆なんてどうでもいい。僕にはそんなの関係ないしね。……それに、この旅だって好き
好んで参加した訳じゃないし」

「ティーシエル、貴様！」

余りの物言いにきれたサードが、ティーシエルに掴みかかる。ティーシエルは乱暴にそれを振り払うと、軽く魔力を当ててサードを吹っ飛ばした。

「大体ね、神様の血を引いてるこの僕が、よく今まで君達と一緒に入れたのか不思議なくらいだね！」

吹っ飛んだサードを見やり、この位の衝撃で吹っ飛ぶなんてザマないね、本当とティーシ

エルがハッと鼻で笑う。吹っ飛んだサードは、殺気を放ちながらテイーシエルを睨みつけた。今にも切りかかって行きそうなサードを、アデルが落ち着けと諭す。サードとティー

シエルのやり取りを黙って見ていたダグラスは、ニヤッと笑った後手を叩き始める。最初

は罠かもしれないと様子を見ていたようだが、サードの放つ殺気と、ティーシエルの容赦

ない魔力の波動に、疑いを消したようだ。

「ふむ……世界樹もあなたを望んでいてね、生かして連れてくるように言われていたのだ

が……痛めつける手間が省けましたね。——……いいでしょう！いや、良き判断をなさ

る！やはり選ばれた民は違いますな」

「という訳で……悪いね、皆。バイバイ」

クスリと笑ってから、ティーシエルがダグラスの方へ歩き始める。距離が近付くにつれ、

ダグラスの顔に気味の悪い笑みが、色濃く浮かび上がってくる。どうやら、事が上手く進

んでいる事に悦を感じているらしい。右手の魔法もかき消し、ジュリアを掴む力も弱くな

っている。その瞬間、ティーシエルの目が一瞬細くなる。ティーシエルの後ろ姿を見てい

たキルトが目を見開くと、さり気なくライジング・サンを投げた。

「ククク……これで後は心置きなく殺すだけ……悪いなあ、ラフィス、ト」

ダグラスの身体が微動に揺れる。手の力が抜けたのか、ジュリアがふらりと前のめりに倒

れこむ。ティーシエルが今だ、ラフィストと叫ぶよりも早く飛び出したラフィストが、倒

れこむジュリアを抱えて、床を転がっていった。

「ジュリア！……大丈夫か？」

ラフィストが優しく笑いかけ、ジュリアの頭を軽く撫でる。

「ええ……ありがとうございます」

「悪いけど、君につく気は無いよ。……ああ、サード。さっきは悪かったね」

憤怒に打ち震えているダグラスに前半の言葉を、思いつきやられてブスツとしているサ

ードに後半の言葉をそれぞれ言う。更にダグラスに対しては、あっさり騙される方が悪い

んだよ、と付け加えるのも忘れない。

「き、貴様……甘くしてやれば図にのりおって！よくもこの私を騙しおったな！……痛め

つけるなど生温い！全員、皆殺しにしてやる！」

みるみるうちに、ダグラスの姿が豹変していく。赤い目をした、全身漆黒の竜だ。

「な……何なんだ、一体！」

「こ、この姿は……ダークエビル……——！」

ティーシエルがその場に立ち尽くしたまま、息を呑む。

「ダークエビルだって！」

「闇の災い……その意を込めて呼ばれているドラゴンだよ。創世神フレッドによって倒さ

れ、魂は封印されたはずだけど……」

その時、ティーシエルの身体が真横に飛ぶ形で薙ぎ倒される。

「そう、君のお父上が封印されたお陰で、復活できたんだよ。あの時の戦いで肉体は無く

してしまっただから、こうして他の奴の身体を乗っ取ってだが。感謝しなくてね……君と、

君のお父上には！」

「うわあああ！」

「ティーシエル！」

ダグラスが今度は尾で、ラフィストに向かってティーシエルの身体を払いのける。普段は

軽いはずのティーシエルの身体が、何倍もの重さになってラフィストに襲いかかった。漸

く勢いが止まり、ラフィストが受け止めたティーシエルを見た時には、口から血を流して

グツタリとしていた。

「ティーシエル……」

「ククク……大人しく言う事を聞かないから、悪いんだ」

「この！」

素早く印を切り、ナディアが炎をダグラスに放つ。

「小賢しい奴等め！」

カッと口から吹雪を吐き出し、ナディアの炎をかき消す。

「魔法が駄目なら、直接攻撃するまでよ！」

「いくら竜皮が硬かろうと、それを上回る攻撃をすれば問題ない！」
マキノが三節坤で、ソードが魔法剣でダグラスに殺到する。ナディ

アが呪文を詠唱し、それをアデルが剣に宿してく。そして、マキノやサードの後に続いていった。しかし、どの攻撃も外皮に多少の傷を与える程度で、決定打にはならない。

「くそ……きりがないな」

ダグラスの余りの堅さに、アデルが舌打ちする。マキノも、サードも繰り返して攻撃している事もあり、すっかり息が上がってしまっている。ナディアも既然大魔法を何発も放っているし、ダグラスに魔法攻撃は、効果が見込めそうも無い。ガーネットは皆の回復を絶えずかけ続けている状態で、既に限界ギリギリであるし、キルトはまだ立てそうに無い。

ニックスやティーシエルに至っては、未だに意識が戻っていない。ダグラスは尾でマキノとサードをなぎ払うと、一気に片をつけてしまおうと身体から黒い稲妻を発し始めた。ナ

ディアが急いで結界を張り、稲妻に備える。しかし、稲妻は結界を打ち破り、ラフィスト達に襲い掛かってきた。体力のあるアデルとサードが、咄嗟に怪我人がいるガーネットの元に行き、彼等を稲妻から庇う。結界を通したとはいえ、そのダメージは決して浅くは無い。それでも比較的軽症なマキノと、重症だがアデルとサードが何とかしようと、尚も立ち上がる。そんな仲間の前に立つと、ラフィストは静かな声で言った。

「皆……さがっててくれ。後は、俺がやる」

「はあはあ……お前、一人じゃ……幾らなんでも無理だ」
剣を支えに立つのがやっとなサードが、ダグラスを見据えながら呟

く。アデルも同じ考え

のようで、支えにしていた剣を地面から引き抜くと、ふらつく足でそれを構えなおす。マ

キノも三節坤を構え、いつでも突っ込めるように準備している。

「いや、大丈夫だ。……俺、あいつには負ける気がしないんだ」

ラフィストが、仲間に向けてフツと微笑む。そして、ダグラスに向き直ると、叫んだ。

「ダグラス……俺がこの剣で、お前を裁いてやる！」

「やれるものならやってみるがいい！」

ダグラスがドスドスと地響きを立て、突進してくる。構えられたラフィストの剣から、眩

い程の光が迸り始めると、ラフィストは剣を上段に構えなおした。

ラフィストの姿を見た

ダグラスが動きを止め、驚愕に目を見開く。

「そ、その技は！」

ダグラスの脳裏に、一億年前の戦いが思い起こされる。あの時、最後に見た光の竜。その

技を放った時の構えが、これではなかったか。刹那、ラフィストの剣から絶対的な死を感じ

じ取ったダグラスの身体に、恐怖が走る。

「神技、デバインディッド！」

目にも止まらぬ速度で剣が振り下ろされ、衝撃波が巻き起こる。衝撃波に続いて、光の竜

を模した光弾がダグラスの巨体に刻み込まれた。続けざまに地面を蹴り、ラフィストがダ

グラスの頭上に飛び上がる。

「や……やめろ……——」

「はああああ！」

蒼天の間に、ラフィストの剣が唸りを上げた。ダグラスは断末魔の叫びを上げ、ラフィス

トが地に降り立つと同時に、床に倒れこんだ。

「や……った、のか？」

真っ白だった頭が、次第にクリアになっていく。ダグラスをもう一度見やると、ピクリと

も動く気配はない。感覚がなくなるまで握られた剣が、ラフィストの手から落ちる。ガラ

ンという音が響いたのを皮切りに、仲間の間にどよめきが起こった。

「やった、な！」

「ラフィー！」

後から聞こえる愛しい声。ラフィストが振り返ると、ガーネットがその胸に思いつきり飛び

び込んでくる。目からはポロポロ涙が零れている。

「ラフィー、ラフィー！」

「うん……皆、生きてる。勝ったんだ、俺達が」

そう言うと、ラフィストはギュッとガーネットを強く抱きしめた。その光景を、ナディア

がティーシエルを起こしながら見ている。アデルはサードの肩をポンツと叩き、キルトは

目を覚ましたニックスと、お互いに拳を軽く当てている。マキノは良かった、と自分のハ

ンカチをグッシヨリぬらしていた。

一三十四章 一〇創世の剣

「……終わった、んだよな」

ラフィストが、自分に言い聞かすようにこう呟く。

「いや、違うよラフィスト。これが、始まりなんだ」

「ティーシエル、もういいのか？」

ラフィストがティーシエルにこう返すと、ティーシエルはお陰様でねと答えた。そして、

フラフラした足取りで蒼天の間を歩き始めた。視線を彷徨わせる様子から、何かを探しているらしい。

「ハニー、何してんの？」

「……母さんの、魂」

「ああ、そうか。持っていく約束だもんな」

さっきまで倒れこんでいたキルトやニックスの二人も、立ち上がって探し始める。

「ラフィスト、俺達はダグラスの死体にないか確認しよう」

「そうだな」

女性陣も手伝うと言ったが、流石に彼女達に死体を触らせるのは憚られたので、死体を調べるのはサードとアデルとラフィストだけでやると告げ、彼女達には周囲の探索を頼んだ。

ラフィスト達は、声を掛け合ってダグラスの死体をひっくり返して血の中などを丹念に探し始めた。女性陣も他のメンバーが探していない所にそれぞれ散って行き、探索を始める。

入口付近を捜していたマキノが、状況を理解できず、呆けているジュリアとロイド王子に

気が付いて、彼らに駆け寄っていく。

「ジュリアちゃん、ロイド王子。大丈夫？」

「はい……えっと、あの……ありがとうございます」

「助けて頂いて、感謝しています。それより……」

「ん、何？」

そう言うときロイド王子はゆっくり立ち上がって歩き出し、何気ない壁の飾りをいじり始める。そして最後に、台座の奥にある絵を180度回転させると、ガ

コンという音が響き渡

った。続いて聞こえ始めた歯車の様な音が止むと、カチツという音と共に台座の真ん中か

ら見事な細工が施されたオーブが出てきた。

「これは、ダグラスが持っていた物なんです……僕はここに隠すのを、たまたま見えて

知っていたのですが……」

「おそらく魂ってこれの事だよな」

ラフィストがロイド王子から受け取り、マジマジと眺める。続いてサードが手を拭いなが

ら、ラフィストの手の中にあるオーブを覗き込む。

「死体に何も無かった所を見ると、そう言えるな。……また中にルーンか。古代人は芸が

細かいな。ティーシエルのルーン聖石といい、このオーブといい」

「サード……」

「とりあえず、オーブも見つけた事だしグレイスさんの所へ戻ろうぜ」

「そうですね。ジュリアちゃんも、王子も一緒に皆で、ね」

「はあ……」

ニックスやガーネットの言葉に、二人は少し気の抜けた返事を返す。ラフィスト達は扉を

開けると、激闘の地を後にした。

再び鳳凰の間に入ると、グレイスがラフィスト達を出迎えてくれた。グレイスはサツと印

を結ぶと、ラフィスト達の傷を癒す。彼の呪文によって、戦いによって付いた傷や疲れが

完全に消え去った。

「無事で、何よりだった……」

「グレイスさん」

グレイスが、ラフィストの方へ視線を向ける。彼の視線を受けたラフィストは、グレイスにオーブを手渡した。グレイスは受け取ったオーブをジュリアに手渡すと、鳳凰の間の奥

に連れて行って、儀式をするように促した。ジュリアが言霊を唱え始めたのを確かめて、

グレイスが再びラフィスト達の元に戻ってくる。

「ティーシエル……ルーン聖石が無ければ、私は創世の剣の封印を解く事が出来ない。…

…使ってくれないか？」

「父さん……」

ティーシエルは一瞬皆の顔をチラリと見たが、頷いてルーン聖石を外した。そして何やら

詠唱を始めると、ルーン聖石が輝きだす。詠唱が終わり、ルーン聖石が粉々に散ったと同

時に、グレイスの右手の甲にルーンの呪が浮かび上がった。

「ラフィスト君、待たせたね……こっちへ来たまえ」

グレイスの言葉に応じ、ラフィストが少し歩いてグレイスの前に立つ。しかし、グレイス

は右手を翳して魔力を高めているままで、一向に何かする様子が無

い。焦れたラフィストは、 그레이スに尋ねた。

「あの……創世の剣は何処に？」

「ここだよ」

そう言った途端、ラフィストの身体に変な感触が走る。余りの気味の悪さに、ラフィストは感触が走った所に視線を下げた。ラフィストの視界に映ったのは、自分の身体の中に入り込んだ 그레이スの手だった。

「ラフィー！」

思わず叫んでしまった仲間達の方に 그레이スが視線をやり、大丈夫だと告げる。それでも不安そうな顔をしている彼らに、 그레이スは説明を施した。

「創世の剣は、ラフィスト君……君の魂の中に。そしてその封印を解く鍵は、私の右手の甲に施されたルーンの呪なのだ。この二つが合わさる事で、封印が解ける」

ラフィストの身体と、ラフィストの身体に入り込んだ 그레이スの右手がカッと光る。眩し

さに目を閉じた瞬間、ラフィストの身体を何かが走り抜けていった。

「もういいぞ」

目を開けたラフィストに、 그레이スが右手に握っている創世の剣を手渡す。

「これが……」

創世の剣、皆で追い求めてきた剣。剣についた宝玉が、ラフィストに何かを伝えるように

光りだす。その宝玉に触れると、頭の中が一気に真っ白になった。

「ラフィー？ どうしたんですの！」

突然倒れた事に驚いたガーネットが、ラフィストに駆け寄る。 그레이スは静かに、と言う

と創世の剣を握ったままのラフィストを、ベッドに横たわらせた。

「おそらく、創世の剣が彼に何かを伝えているのだろう……直に目が覚める。ジュリアの

儀式もまだかかるし、君達も少し休んでいなさい」

彼が目覚めないと、色々話しようも無いしと説得され、皆は休む事に決めた。グレイスは

右手を掲げると、サツと印を切り人数分の椅子を作り出す。その椅子に座ってニックスや

マキノは完全にくつろぎ体勢に入り、サードやアデルは剣を磨き始めた。キルトも先程の

戦闘で多用したライジング・サンを磨いている。ガーネットとティーシェルとナディアの

三人は、一瞬にして椅子を出したグレイスの呪文に対して、便利な魔法だと語り合っている

。その横で、所在なさげにしていたロイド王子にグレイスが今まであった事を説明し、

融合の呪の反動が出ないよう、彼に呪を施し始めた。

ラフィストの意識が覚醒した時、目の前で創世の剣が浮かび上がっていた。創世の剣はく

るりと向きを変えると、一面真っ白の空間に宝玉から光を放った。

そこに、様々な映像が

映し出されていく。グランやフォートレス、ツアラ、アンカースといった大国同士の戦争。

その大国に踏みにじられていった、人々の嘆き。人が人に向ける恨み、憎しみ、悲しみと

いった負の感情。様々なものが、ラフィストの頭の中に一気に押し寄せてくる。人の声が

頭の中で響く度、ラフィストはもう止めてくれと心の中で叫んだ。何故、争わなくてはな

らないのか。何故、過去を受け止めるのが自分ではなくてはならないのかと。そんなラフィ

ストの脳裏に、ガーネットの笑顔が浮かぶ。ラフィストはその笑顔が何かを知っていた。

ガーネットの笑顔は、彼にとって愛その物だ。彼女がいるから、自分は勇気を振り絞って

立ち上がる事が出来るのだ。その時、ラフィストの中で一つの結論が生まれた。人は、愛

するが故に争いをするのだと。争いは、感情によって生まれるのだと。そう結論付けた時、

創世の剣は一組の男女を映し出した。

「誰だ？」

映し出されたのは、金髪の青年と、エメラルド色の髪の少女だった。映し出された二人は、

笑っていた。そこに、一人の青年がやってくる。彼の顔には見覚えがあった。少し若い感

じだが、創世神グレイスに間違いないとラフィストは思った。

「フレッド」

「兄上」

「フレッド、そろそろ戻れ。……世界樹、眠る時間だ。また次に目覚めた時に、フレッド

と話したらいいだろう」

グレイスが視線を合わせるよう、しゃがみ込んで世界樹に話しかける。世界樹は、自身の

頭にかけられた花冠をとると、それをグレイスの頭に被せた。

「グレイス、それフレッドが教えてくれた。それはとても綺麗だ……私は、それが好きだ。

フレッドはそれを被ると、幸せになれるといっていた。そしてお前

がいつも疲れた顔をしている。……お前は、幸せになったか？」

「ふ……ふふ……」

グレイスの頭に花冠を乗せた理由を説明する世界樹の後ろで、フレッドが必死に笑いを堪えている。仏頂面をした自分の兄が、可愛らしい花冠を被っているのがミスマッチで、可

笑しくてたまらないのだろう。フレッドの様子に一瞬眉を顰めて視線をやった後に、グレイ

スは世界樹の頭に優しく手を置き微笑んだ。

「私にはフレッドがいる、お前もいる……幸せだ」

「そうか。……フレッド、おやすみ。次も、起こしにきてくれるか？」

「ああ。また、一緒に話そう世界樹」

世界樹が、大きな木に手を触れる。するとそれまで少女を形作っていた物が、その大きな

木の中に吸い込まれていった。フレッドが大きな木に触れ、おやすみと呟く。グレイスは

頭の花冠を外すと、その木の前にそっと置いた。

「兄上」

「フレッド、二人の時は畏まるな。……兄さんでいい」

「……兄さん。世界樹は、俺達のような名が欲しいといっていた。

名があって、初めて一

個体として存在するように感じると、言っていた。……名を、与えてはいけないのか？」

「駄目だ」

「何故！」

フレッドが激昂して叫ぶ。グレイスは静かに立ち上がると、フレッドの腕を強く握った。

力の強さに、フレッドが顔を顰めるとグレイスは手を離れた。

「さっきお前が言った事が理由だ。名は、一個体としての存在を与えてしまう。感情を持つてしまう。今のお前のように怒ったり、憤ったりする。それじゃ駄目なんだ……世界樹

は、世界そのものだ。世界樹が怒るたびに雷が鳴り、嘆くたびに雨が降る。それでは世界は成り立たない……それ位、お前にもわかるだろう？」

「だけど、それじゃあ……」

「フレッド。私はお前の、その真っ直ぐな気性が好きだ。だが、お前はまだ若い……それゆえ持ち合わせている気性でもある。成長すれば、見えてくる事もあるだろう……視野を広げて、本当に世界樹にしてやれる事を考えてやれ」

フレッドに戻るぞ、と告げるとグレイスは踵を返して歩き始めた。その後ろ姿をフレッドがただジッと見つめながら呟いた。

「兄さん……貴方は、遠い」

ここでラフィストが見ていた映像がブツツと途切れ、違う場面が映し出される。ダークエ

ビルが現れたという報が精霊の町に入り、フレッドに後の事を託してグレイスが飛び出し

て行った。一人でダークエビルを倒すつもりなのだろう。創世の剣を手にしたフレッドが、

町の人々が非難している神殿の入口に立っていると、そこに金髪の女性が駆け寄ってきた。

「フレッド」

「テレーズ……危ないから、中にいるんだ」

「グレイス様は、どこなの？ どうしてここにいないの？」

テレーズと呼ばれた女性が、取り乱した風に頭を振る。フレッドは彼女の肩を掴んで、落

ち着けと揺さぶった。テレーズの瞳から、涙がポロポロと零れ始める。その瞳に、精気など全く感じられなかった。

「私、本当にあなたの方が好きなの……貴方と同じ位の私は、妹のようだって知ってる。でも、好きなの。……お願いよ、フレッド。あなたを死なせないで……」

助けて……お願い、お願い」

テレーズの言葉はもはや懇願に近く、意味を成していなかった。いっつもすっかりしていて、

綺麗なテレーズ。自分の理想であり、愛しい存在のテレーズ。その彼女が、形振り構わず

自分に縋っている。そうさせる自分の兄が、羨ましいと同時に憎らしかった。何より、彼

女の願いを叶えようと、兄を助けに行くであろう自分が嫌だった。

気が付いた時には、フ

レッドは町から離れた森の中にいた。森を抜けて丘に出ると、そこには黒い竜と、ボロボ

ロになりながら戦う、自分の兄がいた。兄の姿がフレッドの視界に入る。次の瞬間、フレ

ッドから出たのは、悲痛な叫び声だった。

「兄上！」

フレッドの声に、グレイスがハッとした顔をして振り向く。グレイスは体中の至る所に傷を負っており、左目からは血を流している。ダークエビルもかなりの傷を負っているとは

いえ、明らかにグレイスの方が満身創痍だった。グレイスの姿を見た瞬間、フレッドの中

からさっきまで渦巻いていた蟠りが消えていく。代わりに芽生えたのは恐怖だった。初め

からグレイスに意見して二人で戦えば、こんな事にはならなかった。そうしなかったのは、

心のどこかに兄を疎ましく思う気持ちがあったからだ。その心が、唯一無二の兄を殺そう

としていた。その事実には、フレッドは恐怖したのだ。

「フレッド、何故来た！お前は町にいろと……」

「俺も戦う！俺だってもう子供じゃない、戦えるんだ！」

「いいから帰れ！ここは私が命に代えても何とかする……だから、お前は幸せになれ。お

前は私と違って、人を大切に思う気持ちを持っている」

「それじゃ、駄目なんだ……兄上。誰一人欠けたって、幸せにはなれないんだ。……だから、一緒に帰ろう——……兄さん」

グレイスを庇うように、フレッドがダークエビルの前に立ち塞がる。そして創世の剣を構

えると、フレッドはダークエビルに突っ込んでいった。

「クク……威勢のいい小僧ですねえ。すぐに兄上のように、ボロボロにしてあげますよ」

ダークエビルが、長い尾でフレッドを攻撃してくる。フレッドは尾の攻撃を、創世の剣を

前に出す事で防ごうとした。すると、創世の剣が光を放ち始めた。

身体の前に突き出した

形になった剣が、ダークエビルの尾を切り裂いていく。

「グギャアアア！」

「な、何だ今のは……」

突然の光に、フレッドが呆然とする。グレイスに創世の剣を持っているように言われてそ

の手に持つようになってから、こんな事は一度として無かった。

「創世の剣が……主と認めたのか」

「俺が、この剣の……？」

グレイスの言葉に、未だに光り続ける剣をフレッドが見つめる。そこにダークエビルが怒り狂った視線を、ギョロリと向けた。そしてその大きな口をカパッと開いた。

「その忌々しい剣ごと死ね！」

「フレッド！」

ダークエビルの口から、灼熱の炎が吐き出される。グレイスによって発動された結界がフレッドを包み込んだ事により、フレッドに炎が達する事は無かった。フレッドはスツと剣を上段に構える。地を蹴り、宙に飛び上がるとダークエビルに向かって剣を振り下ろした。光を纏った剣は、ダークエビルを深々と切り裂いていく。

「な、何故……」

「やった……兄さん、やった！」

ダークエビルがズンという音と共に、地に倒れる。フレッドは地面に足を付くと、地に膝を付けた兄の下に駆け寄り、抱き起こした。その時のフレッドの目に入ったのは、今まで

で一番優しい眼をした兄の顔だった。父親の顔を、フレッドは知らない。兄に育てられた

に近いフレッドにとって、兄は畏怖と羨望の対象でしかなかった。

そんな兄を、フレッド

は今一番近くに感じていた。兄の優しい眼は、これから兄ともっと分かり合えるだろう。

そんな想いをフレッドに抱かせた。そう思うと、フレッドの目から自然と涙が零れてきた。

「フレッド、泣く奴があるか……」

「兄さん……一緒に帰ろう。帰って、沢山話をするんだ」

グレイスを支えて、フレッドが精霊の町に戻る為に背を向ける。そ

の瞬間、地に伏せたダ

ークエビルの眼がギリりと光った。

「ククク……お前ら二人とも、生きて帰すか！死ね！」

ダークエビルの身体から、黒い光が二人に向かって飛ばされる。理屈じゃなかった。フレ

ッドの体は自然に動いていた。瀕死の兄を後方に投げ飛ばし、その前に立ちはだかるよう

に立っていた。黒い光が止み、後ろに飛ばされたグレイスが前方を見た時、その視界に入

ったのはどンドン石化していくフレッドの姿だった。

「フレッド！」

「来るな！」

重い身体を引き摺りながら、グレイスがフレッドに駆け寄ろうとする。それをフレッドが

大声を出して制止した。

「触ったら、兄さんまで石化するかもしれない……駄目だ」

「クク……二人は仕留め損ねたが、一人は消してやったぞ……グッ」

「フレッド！……何故私を助けたのだ！お前を、お前を生かす事が、私の望みだったのに」

……私はお前が助かれればそれで良かったのに」

涙の流れない瞳の代わりに、左目からとめどなく血の涙が流れ続ける。まるでそれは、心

の傷が流している血のようだった。

「兄さん……兄さんは俺の事を、人を大切に思う気持ちがあるって言っていたけど、俺は

そんな事無いと思う……俺の心はいつも、兄さんへの劣等感や羨望、嫉妬で溢れかえって

いた……一番大切な事に気付いたのだって、つい今さっきだ」

「誰だって、そう思った思いは持っている……大切なのは、自分の心を認める勇気なんだ。」

お前は、その勇気を持っていたじゃないか」

「そうか。……やっぱり、もっと早く話してればよかった。そうすれば、きっと……」

今日と同じ日に死んだとしても、それまでもっともっと笑いあっていただろう。そう言おうとしたが、それが声になる事は無かった。声帯がもう石化しているのだ。意識があるの

も、後僅かだろう。最後にフレッドの脳裏に浮かんだのは、眠りにについている世界樹の事

だった。どうやら起こしに行く事は出来そうにない、本当は兄さんに内緒でこっそり名前

をあげるつもりだったんだとフレッドは思った。ヴァイオレットからとって、ヴァイオレットと名付けるつもりだった。小さな幸せが、少しでも君に訪れるようにと。もう一つの花

言葉が愛という事は知らず、フレッドの意識は完全に消えた。

「創世の剣……お前は、これが見せたかったのか？」

石化したフレッドを見つめながら、ラフィストが呟く。ラフィストの問いかけに答えるよ

うに、創世の剣がまた別の場面を映し出す。世界樹が眠りから眼を覚ました所だった。皮

肉にも、世界樹はフレッドの死によって、憎しみと絶望という感情が芽生えた。感情に任

せ、赤子を殺そうとする世界樹からテレーズが赤子を守り、グレイスが自身を礎として、

世界樹と共に眠りについた。そして、眠りに付く直前グレイスは世界樹に告げた。

「世界樹……負の感情は、お前自身を殺していくだろう。そうなれば、フレッドの事もお

前は忘れ去ってしまう……その前に、正のお前が残っている間に、お前をフレッドの所へ

私は導く。……約束だ」

グレイスの言葉を最後に、双方の瞳がゆっくり閉じられていく。瞳が完全に閉じられた時、

創世の剣が見せていた映像も消え失せ、その場は元の真っ白い空間に戻った。そして、創

世の剣が地面にカタリと落ちた。ラフィストは再び剣を拾い、宝玉をそっと撫でた。今の

映像はきつと、前の持ち主であったフレッドが、自分の想いを伝えたくて見せたのだろう。

確かに愛ゆえ人は憎しみ、争う。だが、愛があるからこそ希望があるのも事実なのだ。

「創世の剣……フレッド。……世界樹を、助けてあげたいんだな」それも一種の愛なのだろう。フレッド自身は、最後まで気が付く事は無かったが。ラフィ

ストはその想いを胸に刻み、再び目を閉じた。

ラフィストが目を開けると、そこはベッドの上だった。仲間達はすぐ傍に座っている。ど

うやら、そんなに長い事眠っていた訳ではないらしい。ベッドから起き上がると、仲間達

が一斉に駆け寄ってきた。

「ラフィー、大丈夫ですよ!」

いの一番に駆け寄ったガーネットが、ラフィストに声をかける。心配層な顔をしているガ

ーネットに笑顔を見せると、ラフィストはグレイスの元に近付いた。

「見ました、全部。フレッドの、願いも」

「そうか……」

そう言うと、グレイスはティーシエルの頭についているサークレッ

トを外し、それを床の

上に置いた。サークレットを壊すようにグレイスが頼むと、ラフィストは創世の剣をサークレットめがけて振り下ろした。二つに割れたサークレットは、砂のように消えていく。

一瞬、ティーシエルの身体にルーンの呪が鮮やかに浮かび上がった。

「この力、この魔力……今までとは、違う」

「それはそうだ。ルーンは我々、神族にしか扱えない代物……よって人間界では俗に禁呪

と呼んでいるらしいがな」

「禁呪とルーンは、延長線上に位置していましたのね」

感心したように呟くガーネットに、グレイスが頷く。それゆえ、人の身で禁呪を使用すると死に至るのだと付け足した。

「……ティーシエル、このルーンを持っていけ……どんな呪かは、継承すればわかる。カオスという名の呪文だ」

グレイスがティーシエルの手を取り、その手の上に、自身の手を重ねる。グレイスの身体

から発せられた光が、ティーシエルの身体へと移っていく。ティー

シエルの額に、ルーン

模様がスッと浮かび上がった後、身体の発光は消え、額に浮かんдалーン模様も消えた。

「君達の様子からすると、大体の事はダグラスから聞いたのだろう。もうじきジュリアの

儀式が終わる……それを済ませてから、残りを話そう」

ジュリアのいる奥の方へラフィスト達が行くと、ジュリアの身体が輝きに溢れ、暖かい光

を放っていた。オーブの光もどんどん強くなっていく。グレイスが何かの印を切った途端、

ジュリアの隣が光りだして何かが現れた。目の前に現れたそれは、精霊の町で見た水晶に入ったテレーズだった。水晶にひびが入り、テレーズの体が露になる。ジュリアの詠唱と共に、オーブの発する光がテレーズの身体の中にどんどん吸い込まれていった。

「闇の彼方に在りし光を今一度ここに呼び戻さん……リターン！」
ジュリアの詠唱が終わりを告げた時、オーブは最大限の光を放った。余りの眩しさに、その場にいた全員が目を閉じる。そして次の瞬間、オーブの碎ける音と共にテレーズの目が開かれていった。

「ここ……は……」

「テレーズ！」

「グレイス……っ！」

熱い抱擁を交わす二人。グレイスの頬に、涙が伝った。その様子を見て、ラフィスト達の中にも、熱いものがこみ上げてくる。ニックスなんかは、完全にもらい泣きをしてしまっており、えんえん泣いていた。

「グレイス……ティーシェルと、封印は？」

「ここにいる。封印ももう解いて、呪文も継承させた」

「そう……なら」

「ああ……もう時間が無い」

「時間が無いだって？」

ラフィストがグレイスの元へ詰め寄る。

「ダグラスに、世界樹は今負の世界樹であると教えられただろう？
負の世界樹は、一億年

前に世界を破壊しにかかった……天地崩壊の呪で」

「天地崩壊の呪？」

「魔力の過多によって天地の均衡を崩し、崩壊させる呪の事です」
テレーズによって、説明が補われる。グレイスが首を縦に振り、更に話を進めた。

「一億年前は、私の身体と共に封じる事で何とか発動を防ぐ事が出来た……だが私が目覚

めた今、世界樹はこの呪を使い、世界を一瞬にして消し去ろうとするだろう。勿論、そんな

事はさせたくない……大切な物全てが無くなってしまう」

「その為に、私が貴方達を呼んだのよ……あの時」

「あの時？」

テレーズの言葉に首を捻っていたサードが、ハツとした様な面持ちを見せる。そして、テレーズに視線を投げた。

「この声……どこかで聞き覚えがあると思ったら……！」

「何だあ、サード？」

ニックスがサードの方に不思議そうな顔を向けるが、サードはお構い無しに話を続ける。

「ティーシエルが倒れた時と、世界樹の中に入った時……あの時の声は、あんただろう？」

「その通りです。今までずっと、あなた方を見守って参りました……清く、美しい心を持

つ貴方達がここまでたどり着いてくれて、とても嬉しく思います」

テレーズが柔らかい笑みをサードに向ける。しかし、すぐにその表情は引き締まり、グレイ

スは、とテレーズはグレイスに呼びかけた。

「天地崩壊の呪は、三日かけて行いう呪だ。……つまり、早くて部屋が一瞬、唾を飲み込む音が響くほど静まり返る。」

「後……三日後におサラバか……——」

「そう、だから時間が無いの」

「ラフィスト君」

グレイスが改まってラファリストに向き直る。

「約束通り、ジュリアの記憶を……戻そうか？辛い思いをするだろうが……」

グレイスの言葉に、ラファリストは一瞬躊躇する。しかし、やはりジュリアには自分との想

い出を、覚えていて欲しかった。グレイスの言葉に、一つ頷く事で返事を返す。ラファリス

トの答えに、グレイスはジュリアに向かって指先から呪を放つ。呪が身体の中に入り込ん

だと同時に、ジュリアが絶叫を始めた。

一三十五章 一〇真実、そして

ジュリアの中で封印されていた物が、一気に流れ込んでくる。あの忌まわしき日から遡っ

ていく。彼女の、記憶が。光っていたグレイスの指先が、光を失う。それと共にジュリア

は膝から崩れ、倒れてしまった。涙が頬を伝って、ぽとりと落ちた。「ジュリア！」

ラファリストが駆け寄り、ジュリアを抱き起こす。そして、放心状態のジュリアの瞳を覗き

こんだ。次第に、ジュリアの瞳に光が戻ってくる。焦点の合っていないかった瞳がラファリス

トを捉えると、ジュリアの瞳から先程までとは違う涙が溢れ出した。「お、兄ちゃん……お兄ちゃん？お兄ちゃん！」

ジュリアがラファリストの首元に抱きつき、泣きじゃくる。ラファリストはもう二度と離さぬ

よう、ジュリアをしっかと抱きしめた。

「ジュリア……良かった」

「私……私……！」

「よく頑張ったね、ジュリア」

宥めるようにジュリアの頭を優しく撫でる。こんな風に言葉を交わすのは、一体何年ぶり

の事だろう。そう思うと、ラファリストはこの時間を尚更愛おしく感じた。

「まだ混乱しているだろう。ジュリア、もう休んだ方がいい」

グレイスが優しく声をかける。しかし、ジュリアは首を横に振った。

「でも……私、見守っていたいんです皆さんを。確かに私は、自分の中の記憶に……押し

つぶされそうです。悲しかった……それに、恐かった。――目の前で、人が……人が！」

ジュリアの泣きじゃくる声は段々大きくなる。ラフィストは何も言わず、抱きしめる手に力を込めた。

「でも、私はお兄ちゃんを……見守りたい。世界を、見守りたい。今眠ってしまうのは、

何かを失ってしまいそうで恐いんです。出来る事なら何でもします！だから……お願いします。私、待つだけなんて嫌です！」

「ジュリア……」

ジュリアの必死の訴えに、ラフィストが戸惑う。出来ればジュリアの想いを尊重してやり

たい、だが最後の戦いはなまやさしいものではないだろう。そんなラフィストの心中を察

したのか、サードがラフィストに向かって言い放つ。

「ラフィスト……わかっているな」

「サード」

「いいか、ラフィスト。妹を大事に思うのなら、ここに置いていけ。ここにはグレイスや

テレーズがいる……お前の傍にいるより安全なはずだ。はっきり言って、世界樹と戦って

生きて帰れる保証なんてどこにも無い」

サードの言葉に、沈黙が走る。

「ジュリアだけじゃない……他にも死にたくない奴はここに残れ。だが、俺は行く」

「僕も行く。これは、僕の義務だ」

ティーシェルが同行の意を示すと、その肩をナディアがポンと叩いた。

「私も行くわよ！前から決めていた事だもの」

「ナディア。悪いけど、僕は君まで守れないよ？」

「何言ってるのよ！私があんたを守るの！」

ナディアらしい言葉に、ティーシェルが軽く微笑む。

「ま、ナディアはいいとして……ガーネット、君はどうする？僕が行くから、残ってもいいんだよ？」

「私……私は……」

ガーネットがラフィストの方をチラリと見る。

「私、最後までラフィーの傍にいたい……」

「ガーネット……」——気持ちは嬉しいけど、君を危ない目に合わせたくないし、守りきる自信も無い」

「それでも、行きたいの！……お願い、ラフィー……」

必死に嘆願するガーネットを見て、ラフィストが敵わないとばかりに息をついた。

「……わかった。君には本当、敵わないよ」

「俺も行くぜ、ラフィスト！」

「おいおい、マッチョばっか格好付けるなよ。あ、勿論俺も行くぜ！」

「私もいくよ！だって、行かないとニックスが泣いちゃうでしょ？」

ニックスに抱きつき、マキノがねっと言う。みるみるうちにニックスの顔が真っ赤になり

目が潤んでいく。むしろ、今の方が泣きそうだ。

「俺はここで皆と離れるよ」

一人同行しないといったのは、アデルだ。そんなアデルに、サードがどうしてと詰め寄る。

「サード。元々俺は、ルーン聖石の行方を追ってきただけだ。グレイスには色々聞きたい

事があるし、俺にはここでやらなきゃならない事がある。……サード、君は君の道を進め。」

三日後、アンカースで会えるのを楽しみにしているよ」

「アデル……これ以上言っても、お前の考えは変わらないんだな。

……分かったよ。けど、

約束だ。三日後には必ず生きて……」

「生きて、ここで会おう。……そうだ」

アデルがポケットの中を弄りだすと、その中から一個の魔石を取り出した。そして、それをサードの手の上に乗っける。

「これをあげよう！俺の、とっておきの魔石だ。はっきり言うが、これは人類の宝だ。それをやるんだぞ。大切に使いよー？」

「……ありがとう……！」

「皆、もう行こう！時間が無い」

ラファリストが切り出すと、グレイスが世界樹の元へ行く為の説明をする。

「いいか……世界樹と戦うには、世界樹の最深部に入ってコアの所まで行かなくてはならない。……そのコアこそが、世界樹そのものだ」

グレイスの言葉に頷く一同。グレイスは何やら呪文を唱えると、白く光る宝珠を作り出した。

た。その珠を、ラファリストに手渡す。

「海底にある世界樹の前でこの珠を解呪すれば、最深部へと導いてくれるはずだ」

「じゃあ……また船を使わなきゃならないって事か」

今、アンカースには船が無い。それは即ち、ツアラから行かなければならないと言う事だ

った。ツアラから世界樹までは、ギリギリ三日以内でつく距離だ。

その事実、時間が無い

いという事をより明確にさせた。

「ラファリスト、さっさとワープでツアラに戻るぞ！最深部に敵がい

ないという保証は無い」

ジュリアとの別れは惜しかったが、今はそんな事を言っている場合ではない。急いでツァ

ラに戻る為、ラフィストはティーシエルにワープを頼んだ。ティーシエルがサツと印をき

ると、ラフィスト達の姿が掻き消えた。次に気が付いた時、ラフィスト達は既にアンカー

スからツァラまで戻っていた。出来るだけ時間を短縮しようと、港にワープしたらしい。

「皆ここで待ってろ！俺が今すぐに船を調達してくるから」
こういう残し、キルトが船着場に向かって走っていく。

「ラフィスト。さっきの珠は、僕が持つとくよ」

「ああ……頼む」

グレイスから受け取った宝珠を手渡した時、ちょうどキルトが呼びに戻ってきた。どうや

ら船は無事調達できたらしい。船の中に入ると、そこにいたのは前に船を出してくれた、

キルトの友達のグランだった。

「何か世界の命運を握ってるって聞いてね。俺もまだまだ死にたくないし、協力するよ」

キルトがグランを手伝って、船の帆を揚げる。帆が上がったのを確認して、グランが舵を

取った。今、ラフィスト達は再び世界樹の元へと出航した。

窓から外を見てみると、心なしか波が高い様な気がする。海の様子はまるで、世界が泣いているように思えてならなかった。

「おーい、ちょっと来てくれー」

操舵室にいるグランが、皆を呼ぶ。船室にいたラフィスト達が操舵室に入ると、グランが深刻な顔をしていた。

「何だか嵐の予感がするんだ……ほら、見てみる。あそこが、今目指してる所だろ？その

上空の黒い雲、分かるか？恐らく、あそこ一体で竜巻が起こってるんだろう。……もしか

したら、あそこまで近づけないかもしれない」

出来る限りの事はするが、一応考えには入れておいてくれとグランが言うとティーシエル

が考え込む仕草を見せた。海底にある世界樹まで、呪文を行使するのは彼だ。どの程度ま

で可能なのか考えているのだろう。ラフィストがティーシエルの方を伺うように見ると、

視線に気が付いたティーシエルが顔を上げた。

「ああ、呪文なら心配しなくていいよ……それより、もうちょっと速度は上がるの？」

「OK。この天候だからかなり揺れるけどな……気をつけろよ」

グランが舵を取ると、ガクンと船体が揺れた。これ以上ここにいても出来る事はないので、

ラフィスト達は船室に戻った。窓の外を見ると、水飛沫が上がる度、船の中に入ってくる

ほどに、波がかなり高くなってきている。

「結構、ヒドクなってきたな……」

ニックスが船室の窓から外を覗いて呟く。

「何か最後の聖戦にはもってこいの天気ー！」

「マキノ、ちょっと不謹慎じゃない？ま、気持ちとは分からないでもないけど」

ナディアがマキノの隣でクスリと笑う。

「いいじゃん別にー！ぷう」

ちょっと頬を膨らまし、機嫌を損ねた風にしてみせたマキノだったが、顔はナディア同様

笑っていた。そんな二人にキルトが、ちょっとは落ち着いた方がいいんじゃないかと突っ込

むが、あんたが言うなと二人同時に反論される。

「チームワークがいいな！この調子ならマジ世界樹なんて楽勝じゃない？」

「そうだなマッチョ！」

「そんな楽に勝たせてもらえないと思うけど」
ティーシエルが呆れた調子で溜息をつく。

「敵はこの世界そのもの……つまり、全てを司ってる存在なんだ。はつきり言って、さっ

き戦った魔導士なんて話にならない位強いはずだよ。何てったって、この世に存在する全

ての属性を駆使してくるんだからね」

「ふーん、そんなもんかね？」

どうやらニックスには余り実感が持てないらしい。彼の反応に、ティーシエルも説明する

のをやめたらしい。椅子に座り直して黙ってコーヒーを飲み始めた。

「ちょっとはそれ位大きい相手と戦うという、自覚が欲しいな」

さっきまでティーシエルの隣の席で、黙ってコーヒーを飲んでいたサードが、ここにきて

初めて口を開く。

「悪いが、足手まといになるようなら置いてくぞ」

「これでもやる気満々なんだぞー！」

「そうそう！皆で世界樹を倒して、帰ろうぜ！」

ニックスやキルトの決意を聞いたサードは一瞬目を丸くし、驚いたような顔をした。すぐ

に元の顔に戻ってしまったが、いつものサードでは考えられない顔だった。

「何か今のサードの顔、面白かったわよ」

ナディアがこう言って、ケラケラ笑う。ナディアに見られ、サードが顔を赤くした。そして

ナディアの顔をジロっと睨み、恨めしい視線を送った。

「今のサードの後に、ンが入るだろ……」

「あら、良く分かったわねえ」

平然とした顔でしれっというナディアに、怒る気も失せたのかサードがダンマリを決め込

んだ。所謂、これ以上言っても無駄というやつだろう。そんな彼らのやり取りを見ていた

キルトが眉を寄せ、隣に座るニックスに耳打ちする。

「なあ、マツチョー……。あいつ、サードンなんてガラじゃねえよ。誰だよ、そんなへん

てこりんなあだ名つけたのは」

「んー……。確か、ガーネットが由来、かな？」

「何い！ 姫が！ んー、いいあだ名だああ！」

「お前、ウソ臭いぞ……」

「皆……。元気だね……」

うるさい程元気なやり取りを見て、ティーシエルが肩を落とす。彼等を見ていると、気が

抜けるのだろう。溜息の回数ばかり増えていく。ラフィストは苦笑しつつも、でも安心し

ないかいと話しかけた。

「ん……。それもそうだね。っていうかラフィスト。君、ガーネットの隣にいてあげなよ。」

相変わらず船酔いしてるみたいだし、ちょっとは気を使ってみたら？ そもそも二人はもう

シーラカンス並に化石生物で、まあ簡単に言えばウブって事なんだけど。君達見てるとも

どかしいっていうかさあ……。進展してるのか分からない、微妙な関

係が続いてて……」

「わかったよ、行ってくる」

これ以上言われ続けたらたまったもんじゃないと、ティーシエルの小言を打ち切ってガー

ネットの元へ向かう。ガーネットは皆と離れた所で、窓の外をじっと見ていた。その隣に

腰を下ろして彼女に声をかけると、ラフィストに気が付いたガーネットが話しかけてきた。

「あ、ラフィー。何だか凄い天気になってきましたわね……船も揺れますし。こんな海に

落ちたら、私なんか一瞬で沈んでしまいますわ」

ガーネットが海を見つめ、憂いの表情を浮かべる。その背後では、二人に声をかけようと

したニックスが、ティーシエルに背中を蹴られているようだ。他の皆も気を利かせている

つもりなのか、こそこそと船室の外の廊下に出て行く。皆のあからさまな態度に呆れつつ

も、ラフィストはガーネットを安心させるように、そっと彼女の手の上に手を重ねた。

「ラフィー？」

「大丈夫だよ」

「え？」

「もしそうなくても、俺がまた助けるよ。俺が駄目でも……皆、助けてくれる」

「ラフィー……」

「ガーネット」

ラフィストが大きく息を吸い込んでから、言葉を綴った。

「まだ話してない事が沢山あるんだ……だから、必ず生きて帰ろう」

「ええ、私も話したい事が沢山ありますの……だから、まだこんな所では死ねませんわ」

そう言つて、ガーネットがニコリと笑つた。彼女の笑顔に、ラフィストにも笑みが毀れる。

この先何があつても、彼女の笑顔だけは絶やしたくない。

「皆で、行ける所まで行こう」

ガーネットの手をぐつと握り締め、ラフィストは自身に誓うようにガーネットに告げた。

「なあ、ティーシエル。何で俺らが船室の外の廊下に、出てなきやいけねえんだよ？おまけに背中まで蹴られるしよ……」

わけも分からぬまま背中を蹴られた後、船室の外に追い出されたからか、ニックスが不満

の声を漏らす。そんなニックスの口をティーシエルがバツと塞ぐと、ニックスに対して冷たい視線を投げかけた。

「ちよつと、五月蠅いよ……それに君って奴は、氣遣いつてやつも出来ない訳？ちよつと

はあの二人をいい雰囲気させてあげたらどう？」

「しょーがないよ、ティーシエル。ニックスに、そういう物求めても無駄だつて」

「そうかもね」

続けざまに女性陣二人から毒舌攻撃を受け、流石のニックスもへこんでいる。

「俺は客室に戻る。……覗きも大概の所で止めとけよ」

「あつ、サード……」

「つれないわね」

マキノとナディアの呼び止める声も聞かず、サードがさっさと客室の方へ戻っていく。

「んー……でもいいわねえ、ラフィー達。私も欲しいなあ、そういう人」

そう呟いて、ナディアは意味ありげにちらりとティーシエルを見た。おもいきり目が合う

形になり、ティーシエルが居心地悪そうにする。

「ふ……ふーん……ナディアもそんな事考えるんだ。じゃあもう少し、女の子らしくなっ

た方がいいんじゃない！」

そう言うと、さっと顔を背けてしまった。

「な、何よおー！」

ナディアも慌てて顔の向きを元に戻す。ナディアは何とも無い風を装いながらも、内心では何とも思われてないのかと落胆していた。その横でマキノが、そうよねと言葉を拾う。

「ガーネットはいーなー。だってラフィー、見た目は王子様みたいだし。……はあ、王子

様がいいなー」

王子様。この一言に何度ニックスはガツクリと肩を落とした事だろうか。そして今回も例

外ではなく、ガクツと肩を落としている。

「なあー……何でお前、王子様にこだわってるわけ？」

「え？何でって……見た目」

ニックスとしては、せめて気品位にして欲しかった。それ位なら、まだ矯正も可能だろう

が、見た目だけは変えようと思って易々と帰られるものではない。

「うつわ……ニックス。あんた、どうしたのよ……」

自分の事ばかり考えていて、話を全く聞いていなかったナディアにも分かる位、ニックス

が落ち込みを見せる。キルトにも肩を叩かれて同情されている程だ。「覗きはこの辺にして……もうそろそろ戻らない？僕、何か最近疲

れてて」

「そうね。……マキノ、あなたはどうするの？」

「あ、行く行くー。んぢゃね、ニックス。グッナイ！」

「あっ……」

さっさとニックスを置いて去るマキノを、悲しく見守るニックス。

そんなニックスに、テ

ィーシエルとキルトが置いていくよと声をかけると、ニックスは慌てて歩き出した。

「ナディア……」

「ん？何よ？」

皆が部屋に入り、自身も部屋に入ろうとした所で、ナディアがティーシエルに呼び止めら

れる。他の人に聞かれたくないのか、ティーシエルの声はかなり小声だ。

「ナディアはさ、世界が平和になったらどうすんの？行く所無いんでしょ？」

確かにナディアの家族は全員死んでいて、彼女の身寄りとなる人は誰一人としていない。

「んー……どーしよっかなあ」

「な、何ならまた僕の所に来る？……嫌だったら、別にいいけど」

ここまで言うのと、さっきのように顔を背けた。先程と異なっているのは、顔が赤い所だろ

う。照れくさそうにしているティーシエルを見て、ナディアの頬も自然と上気する。

「べ、別に深い意味なんてないんだからね！何となーく、ナディアが可哀想だなーって思

ったからであって……っ！」

何となくを強調し、ティーシエルが慌てて修正を入れる。しかしお互いが顔を真っ赤にし

合っている状態なので、それも無駄骨だった。

「もう……っ！もうちょつと素直になったらどうなのよ！」

「お互い様でしょ……！」

ナディアが怒鳴り、ティーシェルがそれに応戦する。二人はいつもの喧嘩状態に入りかけ

るが、それは一瞬だった。お互い顔を見合わせると、二人はプツと噴出して笑い出した。

「三十六章」世界樹

部屋の中で一人ゴロゴロしていたマキノは、ドアが開いた音を聞き視線をそっちへやった。

そこには、嬉しそうな顔をしたナディアがいた。さっき部屋の前でティーシエルに呼び止められた時、何かあったのかと推測する。

「何か嬉しそーだね、ナディア。ティーシエルと、何かあった？」

「ふふっ……別に」

そう言いつつ、ナディアはクスクス笑っている。そんな態度を取られると、好奇心が芽生えるのが人間である。

「何を隠してるのお！ずっるーい！」

「実はねえ……ふふふ、聞きたい？」

「聞きたいから聞いてんのー！何、何？」

ナディアが笑いを収める為に、深く深呼吸する。それでも顔のにやけまでは戻らなかったらしく、緩んだ顔のまま話し出した。

「あのね、私世界が平和になったら……またティーシエルの所に戻る事にしたんだ！」

「えー！そうなの？ふーん。ええっと、そういうのを出戻りって言うんだっけ？」

「違うわよ」

見当はずれなマキノの返事に、ナディアが突っ込む。

「違う？うー……でもよかったね、ナディア！でもどうして急にまた？」

その途端に、ナディアの顔が再びにやつき始める。どうやらナディアが喜んでいる原因は

ここにあるらしい。

「ティーシエルが誘ってくれたの！」

「あー、それで。だからニヤニヤしてたのね」

恐らくあのティーシエルの事だから照れながらだろうけど、それでも少しナディアが羨ま

しかった。素敵な男性が自分と一緒に来ないと誘ってくれるのは、王子様を夢見るマキノ

にとっても大きな憧れだからだ。それを自分が好意を持っている相手に言ってもらえるな

んで、幸せに違いない。

「そーいえば、マキノはこれからどこへ？」

「うーん。まだよく分かんないけど、でも取りあえず学校を卒業しないよね。それから後

の事はー……まあ、私の人生プランの中では卒業すると同時に、王子様が私を迎えにきて

くれる事になってるんだけど……」

「非現実的ねえー……あなた、王子様って具体的にどんなタイプの人なの？」

「え……」

王子様という事だけしか考えてなかったマキノにとって、ナディアの質問には言葉が詰ま

った。色々考えてみるが、具体的な事は余り出てこない。そんな中、マキノがたどたどし

く自分の王子様像を出していった。

「えっと……し、身長高くて、髪の毛サラサラで……えと……」

「ふーん……じゃあさー、ニックスでもいいわけ？」

「え……でもニックス泥臭いし」

背も男にしては高い方じゃないし、髪だって傷んでるじゃん付け加える事も忘れない。

これを聞いて、ナディアはニックスがこの場にいない事に胸を撫で

下ろす。余りの言い草

に哀れに思ったのか、ナディアがニックスのフォローを始めた。

「でも、ほら。ニックスもいい男じゃん！ね、マキノ！」

「えー？まあ、悪いとは言わないけど……もっとこう爽やかな人がいい」

この分じゃ全く脈がなさそうね、何か哀れとナディアが思っていると、マキノがその後を

更に続けて言った。

「まあ、ニックスも多少は……考えてあげてるけどね」

マキノの顔色に変化が無かった為、今の言葉の真意は図りかねるが全く脈が無いという訳

ではないのだろう。その言葉を聞いたナディアは、何だ、少しは脈ありなんじゃない。頑

張りなさいよニックスと心の中で呟いた。

「はあー、若いモンはいいよなあ」

「お前だってまだ二十歳だろ！」

「……俺を数に入れるな、キルト」

部屋に戻ってきたニックスとキルトの二人がベッドに座り、とうにここへ戻ってきていた

サードを巻き込んで話をしている。

「それよりさ、二人共！二人は全部ケリが付いたら、何するんだ？」
新しい話題をキルトが切り出し、興味津々な顔してせまっていく。

「俺はトラートに戻って、もう一回武術学校で訓練をやり直す！」
そしてマキノと、と心の中で握りこぶしを固めるが、キルトはその先まで興味が無かった

らしい。あっさり話の矛先をサードに向けてしまった。一番聞いて欲しかった所を聞いて

もらえなかったからか、ニックスが撃沈する。

「……俺は、また旅に出る」

サードの言葉に、二人はじっとサードの方を見る。その視線が何を言いたいのかわかったのか、サードがまた喋り始めた。

「ガーネットの事はいいいんだ。彼女にはラフィストがいるし、奴に
なら安心して任せられ

る。取りあえず二、三年旅をしたら、またアンカースに戻ろうと思
う」

「アンカース？」

「見習いとはいえ元々アンカースの軍属だった訳だし、今更故郷に
戻る気もないしな。そ

れに、アデルの手伝いもしたい」

「なるほどなあ……っておい！キルト、お前まだ言ってるぞ！」
言いだしっぺのくせにとニックスが噛み付くが、キルトは愉快そう
に笑っている。まるで

話の内容が、自分と無関係といわんばかりの態度だ。

「俺は変わんねえよ。今はお前らと旅してっけど、元々トレジャー
ハンターなんだし、ま

た旅に出るに決まってるさ」

「……寂しい人生だな」

「お前にだけは言われたかねえよ、サード」

「ま、どっちもどっちだな！」

二人の間に割って入ってニックスが言うと、双方からお前に言われ
たらおしまいだな、と

そろって反論された。何だと、と腹を立てるニックスを見てサード
とキルトが笑い出す。

そこに、大きな溜息をついてティーシエルが部屋の中に入ってきた。

「ふー……」

「あれ？」

異変に気付き、ニックスがティーシエルに近付く。

「何かさ、お前顔赤くねー？」

「あ、ホントだ！どうしたんだ、ハニー！」

「風邪か？」

サードの風邪説に、ちよつとねと言ってティーシエルが視線を逸らす。いつも以上に勘が

冴えていたニックスが、彼の態度に何か気付いた顔をした。大抵、いつも以上に冴えてたりするところくな事が無いというのが常だが、ニックスはお構い無しに突っ込んでいく。

「って事はよー、サードの風邪説じゃないんだろ？他に顔が赤くなるって事はあ……お前、もしかして！」

「もう、ほつといてよ！」

ムキになって自分のベッドの中に入り、話を終わらせようとしたが、むしろそれが逆効果

だった。他の人間の興味まで誘ってしまったらしい。

「ハニー！何があったー！」

「おいっ！教えろよお！」

「あーもー……うるさいなあ」

ニックスに続いてキルトまで騒ぎ出した事で、ティーシエルが耳を塞ぐ。こうなったら力

づくで黙らせるか、と布団から這い出て彼らにいい笑顔を向けた。

その笑顔に不穏な物を

感じ取ったキルトは黙ったが、ニックスは尚もしつこく言え言えと迫ってくる。そんなニ

ックスの頭を鷲づかみにし、笑顔のまま一言告げた。

「水の中入る時、空気抜くよ？」

「げっ！」

ちよつとの興味が自身の命の危機となり、ニックスが慌てて押し黙

る。

「ハニー……冷たい」

「僕は元々冷たいし」

「お前ゼってえー友達少ねーよ」

「……悪かったね」

ぶうぶうと文句を言う二人に、ティーシエルが反論する。余りの言
いように落ち込む二人

を尻目に、サードがティーシエルにこの先どうするのか尋ねた。ベ
ッドに腰をかけてしば

し考えた後、そうだなといって口を開く。

「やっぱり、カダンツの司祭に戻るかな？ 仕事も溜まってるだろう
し。……後は、僕の人

生プランなんだけど」

「何？」

「ツアラかアンカースの、宮廷お抱え魔導士になる」

さらりと野望を言っただけのけるティーシエル。にやりと笑うその顔に、
真正面から見たニッ

クスがヒィッと小さく叫び声を上げる。

「あれ？ でもハニー、カダンツからはグラン王国が一番近いんじゃない
……」

「んー……あそこはツアラやアンカースよりでかくないし、フォー
トレスじゃ魔導士優遇

されないし」

何より、その二国には奴等がいるから嫌なんだよと小さく呟くが、
幸い誰の耳にも届いて

いなかったらしい。キルトやサードはそうかと納得しているが、ニ
ックスだけは目を逸ら

して、野心家だこいつとこっそり呟いている。

「で、最終目標とかあるのか？」

聞いてはならないような事が、サードの口からあっさり出てくる。

何聞いてんだサード、

お前はあの真っ黒い笑顔を見ていなかったのか、とニックスが心の中で叫ぶが、どうやら

本人は答える気満々らしい。話を中断する為にキルトに助けを求めようにも、キルトはテ

ィーシエルの顔を嬉しそうに見ているだけだから、役に立ちそうにない。

「フフ……特別に教えてあげるよ。カダンツの司教、宮廷のお抱え大魔導士、世界一の術

士の肩書きを持つ事かなー」

お前、事故を起こして最初の肩書きとるなよと思っているニックスの横で、キルトが、夢

が大きくていいねと笑っている。キルトの言葉に、ティーシエルはこれ位当然じゃないと

言っただけのけたのを見て、こいつだけは敵に回したくないと三人共同時に思った。

「まあ、こっちの方もいいが……お前は精霊の町へは帰らなくていいのか？」

「今更って感じだし、こっちの方が好きだし……皆にも会えるし」最後の言葉だけ、小さくなる。その反応に、キルトが可愛いなハニ

ーは、と言って抱きつく。ニックスがそこにちょっと凶悪けどなと付け足すと、ティー

シエルがニックスうるさいと言ってニックスの枕を鷲づかみ、彼に向かって思いっきり投げつけた。

「いってー！何すんだよ！」

「……寝るぞ」

「お休みー」

「悪い、お先に」

さっさと電気を消して、三人が眠りに入ってしまう。あまりに早い

三人の切り替えの早さに、ニックスが一人ポツンと虚しく取り残された。何でこいつらはマイペースというか、こんなに切り替えが早いんだよと愚痴りながらも、残されたニックスも眠りに付いた。

翌朝、一行はグランの叫び声で目が覚めた。急いで身支度を整えて操舵室に向かうと、世界樹のあった場所のかなり近くまで来ている事が分かった。

「風がかなり酷いからな……悪いがここから先は進めそうに無い」

「本当だ、酷いな……ティーシエル、ここからなら大丈夫か？」

ラフィストが外の様子を確認し、ティーシエルに声をかける。それに対して、ティーシエ

ルは思った以上に進んでくれたし、大丈夫だよと答えた。武器などを確認し、ラフィスト

達が甲板に出る。甲板の外は暴風が吹き荒れ、支え無しではきつい程だった。ティーシエ

ルが詠唱を済ませると、一向はグランに別れを告げて海の中へと入っていった。迷わない

ように灯している魔法の明かりを頼りに進んでいると、前方に世界樹が見え始める。

「皆……生きて帰ろう！」

ラフィストの言葉に、全員が頷いて返す。思いは皆同じだった。世界樹の前に着くと、テ

ィーシエルがグレイスから受け取った珠を取り出して詠唱を始める。彼が何事か呟いたの

とほぼ同時に、彼の手の中にある珠が強く光った。眩しさに一同が目を閉じると、目を開

けた時には既に海底でない場所へと移動していた。

「何か……不気味な感じが致しますわ」

辺りを見回し、呟く。根の様な物が、蜘蛛の糸のように周り中に張り巡らされている。し

かも、ところどころ脈打つ所があるようだ。そんな中を、ラフィスト達は一抔の不安を抱えながら歩き始めた。

「ラフィー！後ろ！」

「……ったあ！」

創世の剣が、敵を切り裂く。かれこれ五十匹以上は軽く倒してきたラフィスト達であったが、一向にコアへたどり着けない。

「あー、もう疲れたー！」

ペタンとマキノが床に座り込む。

「マキノ、しっかりしなさいよ！」

「ナディア、見た事も無い魔物達と戦い続けているんだ……仕方ないよ」

真っ先に敵陣に切って進むラフィストとサードの二人の顔には、既に疲労の色が色濃く出

ている。これでは無理して先を進んでも、世界樹と戦いにすらならないだろう。

「なー、ラフィストー。休もーぜ？」

マキノに続いて、ニックスまでもがダウンする。ラフィストがサードに目線をやると、サ

ードが少しだけなど言っただけでその場に腰を下ろした。何だかんだ言っただけで彼も疲労が蓄積して

いたのだろう。ティーシエルが周囲に結界を張ると、ガーネットが

少しでも皆の疲労を消
そうと回復魔法を施した。

「皓々たる癒しの光。無数の羽と共に、彼の者に舞い降りよ。ライ
トフェザーグライド！」

全員の身体を癒しの光が包み、みるみるうちに傷を治していく。少
しだけ疲労も薄れたよ

うだ。ラフィストがガーネットに礼を言うと、ガーネットは笑いな
がら私にはこれ位しか
出来ませんし、と返した。そこに、キルトがニヤニヤ笑いながら二
人にお茶を持ってくる。

「ほら、二人共」

「すまない、キルト」

「いーって、いーって！それより頑張れよ、ラフィスト！」

「は？……何が？」

ラフィストの返事に、思わず滑ってこけそうになったキルトだった
が、めげずにラフィス
トの耳へ耳打ちする。

「……ってんだろ」

「何、聞こえない」

「だから、ガーネットの事だって……——」

ここまで言うと、キルトが一旦言葉を切り大きく息を吸う。嫌な予
感がしたラフィストは

急いで離れようとしたが、時既に遅かった。

「言ってるんだろーが、タコ！」

耳を思いっきり引っ張られ、そこに大きな声で叫ばれた為ラフィス
トの耳がキーンとする。

余りの痛さに蹲っていると、お間拔けな反応するからだと言って、
キルトはさっさと他の
皆の所へ戻っていった。

「ラフィー、大丈夫？」

「だ、大丈夫……大丈夫」

ラフィストが顔を上げると、顔を覗き込んでいたらしいガーネットとバチツと目が合った。

驚いてラフィストが二、三步さがるが、ラフィストを心配するガーネットが負けじとラフ

イストの方へ詰め寄ってくる。すると、ガーネットがプツと噴出し、笑い出した。

「何か変」

「何が？」

「私達」

「俺達……？」

こくりとガーネットが頷く。

「だって、何だか遊んでるみたいで」

「ぷっ……確かに」

ガーネットの言い方が面白くて、ラフィストも思わず噴出してしまふ。こうしたやり取り

をしていると、何だか疲れが取れたような気分になった。ラフィス

トがそろそろ行こうか

と声をかけると、皆が頷く。戦闘体勢を整えた後結界を解くと、同時に数多の敵が出てき

た。体力温存の為に出来るだけ戦わずに避けていったが、その全てを避けられる程敵は少

なくなかった。次第に敵の数もどんどん増えていく。木の根も複雑に絡み合っており、コ

アが近い証拠だった。人一人がやっと通り抜けられる程度の根の間を抜けると、少し広い

場所に出た。その中心から黒い光が漏れている。そこには何かの球体が、根によって隠さ

れるように存在した。恐らくあれがコアなのだろう。ラフィストの持つ創世の剣が光りだ

すと、急に球体から激しい光が放たれた。

「きゃあ！」

「うわあっ！」

光と共に風圧の様な物が、ラフィスト達を襲う。それによって軽く十メートルは飛ばされ

てしまった。ガーネットが皆に回復魔法を施すと、癒しの光がラフィスト達を包んでいく。

前にあったコアが突如消え失せたかと思うと、代わりに一人の女性が姿を現した。

一三十七章 一〇最終決戦

「……私の邪魔をするのは誰じゃ。お前は……そうか、グレイスメが私の邪魔立てをしよう

と、そちらを寄越したのか」

突如目の前に現れた女性が、ラフィスト達を見据えて言った。

「お前は……」

「おめーは何者だ!」

一歩前にズイッと踏み出し、ニックスがラフィストの言葉を遮って女性に突っかかる。こ

の状況で考えられる答えは一つしかないだろうに、ニックスはわかっていないらしい。そ

んなニックスを見て、サードとティーシェルが脱力している。

「ニックス……。君って、本っ……当に馬鹿!」

「ここまでくると、怒る気も失せるな……!」

「ほう、そちらは気付いているようじゃな。我は世界樹……世界を司るもの。即ち、全

の源である。……わかったか? 愚かなる者よ」

「な、にー!」

世界樹の物言いにいきり立ったニックスが、突っかかっていく。世界樹は身体から風圧の

ような物を放つと、いとも容易くニックスを吹き飛ばした。

「愚者に話す事など無い。我は今忙しいのだ……邪魔をするな」

「ニックス!」

マキノとガーネットが急いでニックスに駆け寄る。幸い怪我は深くなく、軽く地面とぶつ

かった程度であった。心配する二人に、ニックスは大丈夫だと答え、立ち上がる。

「時にラファリスト。今一度選択権を与えてやろう……生き残り、世界再生後の民となるか、

今この場で我に殺されるか。選べ」

「俺達はこの世界を守る為にここにきたんだ！答えは決まってる！」
創世の剣を構える。ラファリストが戦闘体勢をとったのを見て、仲間達も一斉に戦闘体勢に入った。それを見た世界樹は、無表情のまま、ふむと呟いた。

「あくまで我と戦うと言うのじゃな？ならば、我から行くぞ！」

「うわっ！」

凄まじい衝撃が、ラファリスト達を襲う。それでも世界樹は、掌を前に突き出したただけだ。

たったこれだけの動作で、衝撃波を生じさせたのだ。身体中に無数の切り傷が走り、一行

の身体が根に当たって転がりながら、地面にぶつかる。

「……この調子だと、回復が間に合いませんわ……っ！」

ガーネットが必死に回復魔法を唱えて皆にかけるが、直に第二撃、三撃が放たれてしまい

一向に回復の意味を成さない。ティーシエルもガーネットと同時に回復をかけながら、皆

に防御を高めるシールドを張る。そんな中、体勢をいち早く立て直し、ラファリストが世界

樹へと詰め寄った。

「愚か者め……人間ごときが我を斬る？冗談も大概に……」

手をラファリストの方に向け、指先を軽く上へ上げる。それと同時に、ラファリストの身体がひとりでに宙へ浮く。

「うわっ！」

「しろ」

指先をクイッと下に向けると、ラファリストが落下する。

「ラファィー！」

ガーネットが急いで駆け寄ろうとするが、キルトにそれを止められる。回復手のガーネット

トが前に出るのは危険だからだ。ガーネットは離れた所から呪文を詠唱すると、ラフィス

トに回復を施していく。

「いくぞ、キルト！ニックス！ぼさつとするな！」

アデルに貰ったとおきおきの魔石を大剣に装着し、サードが世界樹へ向かっていく。それ

と共にキルトがライジング・サンを投げ、ニックスが気孔弾を放つ。そこに、マキノが三

節坤でダメージを与えた。三人の攻撃に割って入る形でサードが世界樹に接近し、右腕を

切り落とした。もう一撃加えようとサードが剣を返すと、世界樹が左手でそれを受け止め

サードごと後方に投げ返した。そして左手の人差し指を落した右手に向けると、指先から

炎が放たれた。落ちた右腕が一瞬にして灰になる。

「フン……この位のハндеはくれてやってもよいが……それでは気に食わんのだろう？」

そう呟くと、世界樹の身体が淡い色に包まれていき、あっという間に右腕が再生した。

「我は全ての源……分かるか？お前達は、我には勝てぬ。そうだ、世界は我が前に平伏す」

「くそ！」

折角与えたダメージが一瞬にして無になってしまい、サードが悔しそうに歯軋りする。

「サード。そういえばアデルさんから貰った魔石、炎も何も出ねーな？一体何の魔石だ？」

「分からねー！だが今は戦いに専念しろ！」

「死ね」

世界樹の手から、同時に五つの炎が出てサードに向かって放たれる。猛スピードで迫って

くるそれに避けようが無いと思ったサードは咄嗟に剣を前に、防御体勢をとった。しかし、サードに当たると思ったそれは、サードではなく剣に飲み込まれていく。

「そうか……これは相手の攻撃を吸収し、増幅させる魔石なのか！」世界樹から吸収した炎の上に、氷の魔石を使えばかなりの攻撃力が期待できる。そう思っ

たサードは氷の魔石を発動させ、剣に伝わらせていった。

「ティーシエル、ナディア！俺とラフィストが時間稼ぎをするから、呪文詠唱しろ！」

二人が呪文詠唱を始めたのを見計らい、再び世界樹とやりあっているラフィストを手助けする為飛び出していく。

「サード！」

「ラフィスト！協力していくぞ！」

「ああ」

ラフィストとサードが、交互に技を繰り出していく。しかし技は一向に決まらず、避けら

れてばかりだ。目配せして渾身の一撃を二人同時に繰り出すと、世界樹が両手を剣に変形

させ、易々とその攻撃を受け止めた。

「くっ……」

「ふ、む。他とはレベルが違うな……——面白い！暫くはお前達相手に遊ぶ事にする！」

二人の剣を同時になぎ払い、サードの肩とラフィストの胴に向かって剣を繰り出す。二人

は間一髪の所で避けると、再び間をつめて世界樹に剣を繰り出していく。

「す……ごい」

「おい、こら！ニックス、マキノ！ぼけっとしてねえで、俺らも加勢するんだよ！」

二人を促しながら、キルトがライジング・サンを投げる。それに続いてニックスとマキノが攻撃を仕掛けていった。

「流星天地破甲弾！」

「はああああ……やあ！」

三人の攻撃が綺麗に決まった事で、一瞬世界樹の動きが止まる。その一瞬の間に、ラフィストとサードは剣に全ての力を集め、振り下ろした。

「ぐっ……——邪魔だ！」

「キルト、ニックス、マキノ！」

ラフィストとサードの攻撃をくらいながらも、世界樹はその手から攻撃を放つ。放たれた

光は、キルトやニックス、マキノに直撃する。吹っ飛ばされた三人の下にガーネットが駆

け寄ると、そのダメージの深さに眉を寄せた。

「酷いですわ……ライトフェザーグライドでも、完治するのに時間がかかりそうですわね」

世界樹に傷を負わせる代わりに三人が大ダメージを負ったが、ラフィストとサードが付け

た渾身の一撃は、またもやあっという間に消え失せてしまった。もう一度攻撃を、とラフ

イストとサードが剣を構えなおす。

「くそ……こっちが疲弊する一方だな」

ラフィストが呟いた独り言が聞こえたのか、世界樹がニヤツと笑う。そして再び手を変形

させた剣で切りかかってきた。どうやら二人を交代ごうたい相手する事にしたらしく、二

人がかりで折角隙を突いても、腕を盾に変形させられてしまい全て防がれてしまう。決め

手にかけていた時、背後から声が聞こえた。

「ラファリスト、サード、さがって！」

「特大なのプレゼントしてあげるわ！」

ラファリストとサードが剣を跳ね返し、後ろへ飛びのくと、ティーシエルとナディアの手から合成魔法が放たれた。

「リアクション・エクスプロード！」

「……これは合成魔法合体の、反合成か……」

世界樹が右手を上げた途端に、魔法が消え去る。

「我に魔法は効かぬ」

上げた右手をゆったりとした仕草で二人の方へ向けると、光を放った。

「きゃああああ！」

「ナディア！」

軽く五、六メートル以上は吹き飛ばされ、ナディアが後方にあった根に衝突する。ティー

シエルが叫び声を上げると、その場からヒールをかけた。

「……おかしいな……我は貴様にも光を放ったはずなのだが……？」

くるりと向きを変え、ティーシエルの方を見やる。その時、世界樹の右腕から血が滴り落

ちる。世界樹は右腕に視線をやると、そこを不思議そうに眺めた。

「しかも魔法は効かぬはずの我に傷が……——」

「余所見をするな！」

サードが隙だらけの世界樹に、剣を振り下ろす。

「静かにしろ……」

易々と一撃がかわされ、サードの身体が掌圧によって吹き飛ばされる。

「サード！」

「う……む、お主の顔には見覚えがあるぞ……——はて、誰であったか」

一瞬にして、ティーシエルの前へと移動する。サードの方に気が逸れていたとはいえ、突

然目の前に現れた世界樹にティーシエルが身体を強張らせる。

「のう、フレッド……いや、ラフィスト。教えてはくれぬか？こやつを……」

首を掴み、上へとティーシエルを持ち上げて指差す。

「ティーシエル！」

「ティーシエル……は……あ、グレイスの子供か？ククク……似てないのう、全く」

そう言うときティーシエルの方を見て、首を掴んでいる手に力を込めていく。

「く……あ……」

「ティーシエル。今一度聞く。我の為に力を使うか？」

「つ……かわないって……言ったら？」

ティーシエルが苦しいだろうに、余裕ありげに尋ね返す。

「この首をへし折る。お主は味方に欲しい奴じゃが、敵にはまわせん」

おそらくルーンによって、魔力の質が根本的に異なった物になった事が原因だろう。ティ

ーシエルは薄れる頭でボンヤリそんな事を思っていた。だから大抵の魔法は効かないし、

世界樹にダメージを与える事が出来るのだ。

「ティーシエルを放せ！」

ラフィストがティーシエルを助けようと、切りかかっていく。しかし、もう片方の手によ

ってなぎ払われ、逆にラフィストが体勢を崩す形となった。その時、ラフィストの耳にザ

シュツという音が聞こえる。ティーシエルを掴んでいた左腕が切り

落とされたのだ。それ

と共に、ティーシエルが地面へと放り出される。

「ゲホッ……ゲホォ……」

ティーシエルが咳き込む中、世界樹が無言で後ろを振り向いた。その視界に、先程掌圧で

吹き飛ばしたサードが入る。左腕を再生させながら、世界樹はサードを睨みつけた。

「貴様か……生かしておくと厄介になるかもしれん。だから……――死ね」

再生させた左手をサツと上げた数秒後、サードの身体に無数の深い傷が刻み込まれる。叫

び声を上げ、サードがついに倒れこんだ。傷はかなり深く、辛うじて意識がある程度で――

目見て瀕死だと見て取れる。まだ息がある事に気が付いた世界樹が、更に追撃をかけよう

とする。させるかとはかりにラフィストが飛び出し、世界樹に切りかかった。ラフィスト

と世界樹が応戦している間に、ティーシエルが咳き込みながらもワープの印を切って、サ

ードをガーネットの元へ転送した。

「サード！ 大丈夫ですか？ ああ、回復が間に合いませんわ！」

「大丈夫……だ……それより、他の奴を回復しろ……！」

「で、でも……」

「早く！ 俺はこれで充分だ」

腰のポーチを弄り、その中から回復の魔石を取り出す。魔石で得られる効果のキュアでは、

とてもサードの傷は回復しように無い。それどころか魔石を使う精神力さえ危うい感じだ。

「サード、ガーネットに回復してもらいなさい！」

先程までガーネットの回復を受けていたマキノが、サードを諭す。

ティーシエルも後ろに

下がり、後は僕が治療するから心配するなと付け足した。ガーネットがサードに回復魔法

をかけ始めると、ティーシエルがマキノとニックスとキルトの三人にグロースヒールをか

ける。回復を受けた三人はそれぞれ武器を手に立ち上がると、前線へ向かった。

「ラファイー、ゴメン！もう大丈夫！」

「俺もだぜ！」

マキノが三節坤で殴りかかり、それと入れ替わるようにニックスがナックルで殴りかかる。

そして絶妙のタイミングでキルトのライジング・サンが入り、攻撃手が増えた事によって

出来たチャンスに、ラファリストが攻撃を加えていく。

「ハ……雑魚が幾らかかってきても同じ事よ。そうだな、やはり大きいものから順に潰すか」

そう言って左手でラファリスト達の攻撃を一手に防ぎながら、右手でサツと印を結ぶ。そし

てその手を、まだ苦しそうにしているティーシエルの方に向けた。

「ティーシエル！」

「なっ……！」

「潰れろ」

「ダメーッ！」

世界樹の印が解かれ、呪文が放たれた瞬間、ナディアが飛び出した。自分に覆い被さるナ

ディアが、まるでスローモーションのように見える。そんなティーシエルの脳裏に、私が

あんたを守るのと言ったナディアの言葉がよぎった。次の瞬間、今までに無いくらい的大量の光が放たれた。

「っ……!!」

思わず瞑ってしまった目を、ティーシエルがゆっくりと開く。そして目の前の光景を見た
ティーシエルは声にならない声を上げた。ナディアがティーシエルを庇い、彼の頭を抱えながら血みどろになっていたのである。

「あ、あ……ああ……」

「だい、じょう……ぶ?」

「ナ、ナディ……」

「よかった……」

「この小娘、余計な事を……」

ナディアが薄く微笑んで、力なく倒れこむ。ティーシエルは目を見開き、彼女の姿を見て
いるだけだった。そこに激昂した世界樹が、再び手を剣に変え殺到してくる。

「直に潰してくれる……」

世界樹がティーシエルの前に立ち、剣を振り下ろそうとする。その時、違和感を感じたらしい世界樹の注意が足元に逸れた。倒れこんでいるナディアが、ティーシエルを殺させまいと必死に足首を掴んでいたのだ。その様子を、まるで汚らしい物でも見るかのように、
世界樹が睨む。そして放せと、乱暴にナディアを足蹴にした。ラファエルはその隙を見逃さず、剣を振り世界樹の手の剣をなぎ払う。

「邪魔をするな!」

「ティーシエル!今のうちにナディアを……!」

「……う、うん」

呆然としていたティーシエルが我に返り、ナディアの身体を抱えて後方へさがる。

「ティーシエル……」

「ナディア、喋らない方が……——」

「私は、いいの……大丈夫。それより、皆を助けてあげて……」
微笑むナディアに、頷く。

「ガーネット、ナディアを……よろしく」

「ええ……」

ガーネットにナディアを託し、ティーシエルが詠唱を始める。カオスはまだ使えない。最大限の威力で放つには、まだ早すぎるのだ。カオスとまではいかないが、少しでも大きなダメージを与えられるよう、今使えるうちの中で最高の呪文を詠唱した。

「古の光の筋の集結、その輝きは太古の水鏡により増していくだろう……浄化の光を彼者に注げ！ホーリー！」

一筋の光が世界樹に直撃し、辺りを焦がしていく。近くにいたラフイストにも、その光の熱が伝わってきた。

「っ……凄い！」

余りの熱に、ラフイストがティーシエルの近くまでさがる。

「禁呪文の中でも、最高ランクの魔法だからね」

少しはダメージを与えられればいいけどという期待を込めて、眼前に広がる光の柱をティ

ーシエルがじっと見守る。すると、光の中から聞き取れない程の聲が聞こえた。その声に、

え、と呟くと、眼前の光がどんどん集約していく。先程まで世界樹を焦がしていた光は、

世界樹の右手に集められていた。それも増幅させられているらしく、右手に集まるパワーが大きくなっていく。

「つもらぬ……な」

「何！」

右手に膨大なエネルギーをためたまま、世界樹がポツリと呟く。

「ラファリストにティーシエルにサード……だけじゃな。我に傷を負わせたのは……――」

弱者は、不愉快じゃ」

そう言うと、世界樹がスッと後ろにさがる。何をするのかと思うラファリストが剣を構える

と、世界樹は右手のエネルギーはそのままに何もせず見ているだけだった。

「どういうつもりだ……？」

「時間をくれてやるからさっさと回復せい……」

ラファリストは世界樹の右手を気にしつつも、千載一遇のチャンスだと思いガーネットとテ

ィーシエルの二人に皆の回復を促した。淡い光に包まれ、瀕死だったサードやナディアに

至るまで、全員の傷が見事に癒えた。ラファリストがもう一度右手を垣間見ると、先程より

光の大きさが小さくなっていた。しかし、その分輝きが増したように思える。

「よいか……？」

「ああ」

行くぞ、と皆に声をかけラファリストが踊りかかろうとすると、世界樹の左手がバツと前に

突き出される。その仕草に、思わずラファリスト達は動きを止めてしまった。

「まあ、待て」

制止の声と共に、右手の光がラファリスト達に向かって放たれる。その光はラファリスト達の

身体を貫いていった。眩しさの余りに目を閉じるが、襲い掛かって

くる痛みが無く、身体
にはダメージが全く無い。今のは何だったのだろうと思っていると、
ガーネットの叫び声
がラフィストの耳に届いた。

一三十八章 救いの光

「ラファイ！マキノとナディアが……っ！」

ガーネットの叫びに、視線をマキノとナディアの方へ向けると二人がその場に倒れている。

周りを改めて見回してみると、立っているのはラフィストを含めサードとティーシエル、それにガーネットだけだった。

「何とも無かったのに……一体何が……」

こう呟き、ラフィストがちらりと世界樹を見ると、世界樹はこちらを見て笑っていた。や

はりこうなったのは、先程の光によるもので間違いないとラフィストは確信する。

「世界樹、これはお前の仕業だろう！」

「……我の攻撃に耐えられる者に、眠ってもらったまでの事。ルーンの呪によってな。」

…ふふ、我は優しいからな。回復している小娘には当てないでやったぞ」

「何でこんな事を……っ！」

「折角の楽しみに、横槍を入れて欲しくないからのう……それから、我の邪魔をした罰だ。」

我は、煩わしい虫けらは嫌いなのでな」

その言葉にラフィストがカッとした表情で、世界樹に剣を向ける。

世界樹はそれを戦いの

再開の合図と取ったのか再び手を剣に変え、迫ってきた。ラフィストは世界樹の攻撃を受

け止めると、それを乱暴に押し返す。小競り合い状態になっている二人を見てサードは剣

を握り直すと、ガーネットとティーシエルに皆の事を頼むと告げて飛び出していった。

「でも二人だけじゃ……」

「ガーネット、そう思うなら一刻も早くルーンを解く事を考えないと」

世界樹とやりあう二人を見つめながら、ガーネットがポツリと呟く。そんなガーネットに

ティーシエルが一声かけて、倒れこんでいる仲間の元へ駆けて行った。ティーシエルの言

葉に、ガーネットが今自分に出来る事をしなければとティーシエルの元に行く。するとテ

ィーシエルは、倒れた仲間を見ながら何やら考え込んでいるようだった。

「ティーシエル、どうかいたしまして？」

「……このままじゃ、四人の命が危ないかもしれない」

驚くガーネットに、ティーシエルがある一点を指し示す。示されたのはニックスの腕の部

分だ。そこには、何かのルーン文字が刻まれている。ガーネットはそれが何のルーンなの

か理解できなかったが、恐らく何らかの意味があるもので、ティーシエルにはそれが分かっているのだろう。

「これは徐々に生命を奪っていくルーンだ……早々に解呪してやらないと、いずれは生命

力を奪いつくしてしまう。……どうやら、僕やラフィストはルーンに加護と創世の剣があ

るし、サードはあの魔石があるから何とかなったみたいだな」

「……解呪なら、リリース・カーズはどうかしら？」

ガーネットの提案に、ティーシエルが静かに首を振る。

「効果が得られる可能性が低すぎる……それよりも、全てを相殺す

るオフティライNZと、
無効化するヴォイドを合成させた方がいいと思う。僕はラフィスト
とサードの加勢に向か

うから、出来れば君に任せたい……頼める？」

「オフティライNZと、ヴォイド……」

ガーネットは合成なんて一度もした事が無い。しかもティーシエル
が言ったオフティライ

NZとヴォイドは、両方とも上級クラスの呪文だ。それ自体を扱う
のも一苦労なのだから、

合成魔法の難しさは自ずと計り知れた。それをぶっつけ本番で完成
させなければならぬ

と思うと、ガーネットの身体に震えが走る。だが、誰かがやらなけ
ればこのまま仲間は死

んでしまうのだ。そう奮い立たせ、ガーネットは大きく頷いた。

「やって、みますわ……」

ガーネットの言葉に、ティーシエルが笑って任せたよと声をかける
と、ラフィスト達のい

る前線へと走っていった。そこにラフィストが、後ろに飛びながら
一旦さがってくる。

「ティーシエル、四人の方は……？」

「何とかなりそうだよ」

「そうか……くっ！」

朗報にラフィストが一息つく、そこに向かって容赦の無い一撃が
振り下ろされる。辛う

じてそれを剣で受け止めた所に、サードがもう片方の剣をなぎ払っ
て脇に一撃を入れた。

サードの攻撃に世界樹がさがると、サードがラフィストを叱咤する。

「ラフィスト！……今はこっちに集中しろ！」

「ああ……すまない、サード」

「僕も魔法の手数を増やして、隙が出来るよう援護する……二人は

そこを攻撃していった」

そう言うと、ティーシエルは身体の周囲に無数の氷の刃を作り出し、世界樹に向けて絶え

間なく放ち始めた。呪文の威力を抑えている事もあり、世界樹は一つ一つ相殺せずにそれ

らの攻撃をかわす事でやり過ごしていく。ラフィストとサードは、世界樹が避けた所を狙

って攻撃を仕掛ける。攻防にキリが無いと見た世界樹が身体全体から風を巻き起こし、ラ

フィスト達の攻撃を一気に退けた。

「……なかなかやるな。フフ……ではもう少し、力を出すとするか」
世界樹から発せられる威圧感が、一気に大きくなる。周りの空気がびりびりと震えたのを、

ラフィスト達は肌で感じた。

「どこまでついてこれるかな……？」

身体から掌圧が放たれる。それは故意に発せられた物ではなく、力を解放したが為に巻き

起こったような物だった。だがその掌圧は、ラフィスト達に大きなダメージを与えるのに

は十分な威力であり、三人は傷を負いながら地面に転がっていく。

「くっ……！」

「今回復を……グロースヒール！」

サードの魔石と、ティーシエルの呪文が三人の傷を一気に癒す。そしていつでも応戦出来

るよう、三人はすぐさまガバツと立ち上がった。世界樹は攻撃するでもなく、それを面白

そうに笑って眺めている。

「ところでティーシエル。いつカオスを使うつもりなのだ？このままでは、使う前に全滅
してしまうのではないか……ん？」

世界樹の軽い挑発に、ティーシエルが沈黙で返す。彼の様子を不思議に思ったサードが、

ちらりと一瞬視線を投げかけると、剣を握り直しながら口を開いた。

「使わないのか……？」

「まだ不完全なんだ……このまま使っても、魔力が空っぽになるだけで大したダメージに

ならない。……せめて、もう少し時間を置かないと」

「なら、それまで何とか粘らないとな……ティーシエル、補助頼む！」

ラフィストの言葉にティーシエルが頷き、右手で世界樹に向けて呪文を放ちながら、左手でラフィスト達の身体に身体能力を増強する呪をかけていく。それを待たずに、ラフィス

トとサードは世界樹に向けて突っ込んでいった。

ガーネットが右手にオフティライNZの光を出した後、すぐさまヴォイドの詠唱に取り掛かろうとする。その時、ラフィストの苦痛に耐える声が聞こえた事で、ガーネットの注意

が一瞬逸れる。それとともに左手にかすかに現れ始めた光が突然消えてしまった。

「あ！……すぐに上手くは、いきませんわね」

気を取り直して再び呪文の詠唱を始めたガーネットは、オフティライNZとヴォイドを右

手と左手に形成する。今度は呪文の形成に成功し、ガーネットの顔に笑みが浮かぶ。早速

二つの呪文を合成しようと両手を合わせようとしたところ、その光は相殺してしまった。

「もう一度！」

ガーネットは呪文を唱えながら、倒れている目の前の四人を見る。一見眠っているようだ

が、先刻より顔色がかなり悪い。こうしている間にも、彼らの生命はどんどん削られてい

っているのだろう。気持ちに焦りが生じたのか、二つの呪文の力加減が上手く均一になら

ない。焦ってはいけなさと自分に言い聞かせるが、それが逆効果となり余計な力が入って

しまう。その瞬間、手に溜められた呪文が四散すると同時に、行き場を失った力が暴走を

始めてガーネットに襲い掛かった。

「きゃっ！」

「ガーネット！」

ガーネットの声によってラフィストの注意が彼女に向く。その隙をつかれ、ラフィストは

世界樹の攻撃を防御しきれず、腕に傷を負ってしまう。

「ラフィー、大丈夫ですわ！」

ラフィストに心配かけてしまったせいで、負う筈の無い傷を彼に負わせてしまったとガー

ネットは自分を責めた。前線で戦っている三人に視線を向けると、ギリギリの戦いを強い

られながらも、後方にいるガーネット達に攻撃の余波がいかないよう、仲間の盾になりな

がら戦っていた。自分が呪文に集中できるのも、彼らが前で今自分に出来る事をやってい

るからなのだ。前で戦っている三人の為に、仲間の為に、今自分に出来る事は合成魔法を

成功させる事だと言い聞かし、ガーネットは再び呪文に取り掛かった。

「古の英知を今ここに成さん……」

オフティラインズとヴォイドを慎重に合わせていく。一瞬、手の中がカッと光り辺り一帯

に眩い光が走った。失敗かと思わず目を瞑ったガーネットが恐る恐る目を開けていく

と、手の中には一つの光が残っていた。

「これが……合成、魔法……？」

手の中の光りを倒れている四人に向け、魔法を発動させる。

「皆、目を覚まして……」

倒れている四人を、淡い光りが包み込んでいく。光りが消えるとともに、四人の瞳がゆっ

くりと開かれていく。ガーネットは喜びの余り、一番近くに寝ていたナディアに涙を浮か

べながら縋りついた。

「ガーネット……？」

「ラフィー！上手くなりましたわ！」

成功した旨を戦っている彼らに告げると、ラフィストと視線を交わした後に、サードが一

旦後方へと下がってきた。そしてマキノに接近戦で、ニックスに中距離間で、キルトに遠

距離間でのラフィストの援護を手短に頼んだ。三人がラフィストの元へ行ったのを見届け

た後、サードがナディアの方へ向き直った。

「なかなか決定的なチャンスが作れない……そこでナディア、お前に頼みがある」

「何よ」

落ちていた杖を拾い上げ、自分の肩にトンと乗せる。

「もうそろそろ、ティーシエルがカオスという呪文を使うはずだ。

その前にカオスを避け

きれない、カオスの後の攻撃を直撃させる状態にしたいんだ」

「でも、呪文は意味無いわ……補助しか出来ないわよ？」

ナディアの返答にいや、と答えサードが軽く首を振る。

「魔法ならな……だが、俺の魔法剣は効いてる」

ここまで言われれば、ナディアも彼が何を言わんとしているのか理解できた。何の呪文が

いいのと尋ねると、サードは一番強いのをぶっ放せと答えた。ナディアが現時点で使える

一番強い呪文は、弟が残してくれたメテオだ。ナディアがメテオを詠唱している間も、ラ

フィスト達は世界樹と激しい攻防を繰り返していた。

「ほう、やっとお目覚めか……」

「うっせー！くられ、ライジング・サン！」

「くっ！」

避けづらい所に投げられたせい、世界樹が少しバランスを崩す。

それを見逃さずに一気

に間を詰めたニックスが足払いをし、バランスを立て直す時間を与えぬよう一撃を入れる。

その後ろから飛び出したマキノの攻撃がクリーンヒットし、そこを狙ってラフィストも続

いていった。

「くっ……！小賢しいわ！」

「わっ！」

「きゃあ！」

「うお！」

回復の間を与えずに一気に畳み込もうとしていたラフィスト達が、身体から放たれた掌圧

によって吹き飛ばされる。身体中がどんどん切り刻まれていくが、それをガーネットの回

復魔法がラフィスト達の傷を一気に癒していく。

「ガーネット！すまない！」

「いいえ!……でも、流石にもう魔力が空っぽですわ」

ガーネットの魔力が尽きた事により、ラフィスト達の戦況はより悪化した。まだティーシ

ェルの回復魔法や、サードの魔石があるとはいえ、無駄に傷を負う事が出来なくなったか

らである。相対する世界樹の方は、先程負わせた傷も癒えきっている。身体を取り巻く威

圧感のような物も、どんどん大きくなっていつているのが分かった。「とうとう向こうも、本気になってきたな……」

ラフィストは荒くなってきた息を整え、額から流れ落ちる汗を袖でグツと拭いながらポツ

リと呟く。そんなラフィストの言葉に、ニックスが同意を漏らす。

「何っーか、身体を取り巻く威圧感みたいのが凄え……」

「でも後は、やれるだけやるだけよ!」

そう言うのと、マキノがいの一番に世界樹に踊りかかっている。ラフィスト達も遅れじとそ

れに続いた。世界樹はマキノの攻撃をヒラリと避け、続いて飛んできたキルトのライジン

グ・サンを殺到してきたニックスに向かって弾き返す。仕掛けようとしていたニックスは、

回避に切り替えて後方に飛びさがった。攻撃に転じようと、手を剣に変えた世界樹の足元

を狙ってティーシェルの無数の氷刃を放って足止めをした所に、ラフィストが一撃を放つ。

「貴様ら……」

ラフィストの攻撃を辛うじて受け止めた世界樹の目に、ナディアが詠唱している姿が映る。

それを妨害しようと、攻撃を受け止めているのとは反対の手で、掌圧を放った。掌圧の放

たれた先に気が付いたキルトがナディアの盾となり、代わりに掌圧

をその身に受ける。吹

き飛ばされたキルトの元に、慌ててガーネットが駆けつける。

「キルト、大丈夫ですよ！」

「ああ、そんなに酷くない……」

ガーネットに笑って見せた後立ち上がりとしたキルトの元に、ティーシエルが前線からさがってくる。ティーシエルはキルトに回復魔法をかけると、彼にカオスの詠唱を始める

と告げた。キルトは一つ頷くと、再び前線へと戻って行く。ティーシエルは杖を地面に置

き、手を覆った布を破り取ると詠唱を始めた。彼の詠唱と呼応するように、手の甲にルー

ンの紋様が鮮明に浮かび上がっていく。前線で繰り広げられる激しい攻防は、回復手がい

なくなった事で一気に激しさを増した。決定打が無いまま、身体に受ける傷だけがどんどん増えていく。

「見苦しいな……！」

「わっ！」

「きゃあ！」

世界樹と競り合う形になっていたラフィストとマキノが、軽く掌圧を当てられた事で飛ばされる。しかし、二人共素早く体勢を立て直し、再び立ち向かっていく。

「無数の光は神々の涙となり、汝の体へと流れ落ちるだろう。其の輝きは裁きの炎となり、

彼の者に罰を与えん……メテオ！」

ラフィスト達が再び世界樹に向かって行った時、詠唱を終えたナディアの呪文が、サード

に向かって放たれる。サードはメテオに向かって剣を向けると、一

気に魔石の力を解放させた。大剣につけられた魔石が光り、メテオをどんどん吸収していく。吸収された魔法は増幅され、剣へと伝っていった。攻撃を仕掛けようと剣を構えたサードに、ティーシエルが視線で合図を送る。

「皆、退け！……ラフィスト、攻撃の準備を！」

サードの声に、ニックスが足払いをかける。世界樹の体勢が崩れたのを見計らい、一同は一気にその場から離れた。そこにサードが殺到し、全身全霊を込めて剣を繰り出す。サードの剣は世界樹の右肩を捉え、バツサリと一刀両断する。世界樹がサードを吹き飛ばして右肩の再生を始めたと同時に、ティーシエルの口から言霊が発せられた。

「カオス」

黒い光が辺り一面を覆いつくし、ラフィスト達の視界を奪った。視界が闇に奪われていたのは一瞬だったのか、それとも長い時間だったのか、ラフィスト達にはわからなかった。

しかし視界がクリアになった時、目の前には黒い光に包まれて血まみれになっている世界樹が立ちつくしていた。

「これが、カオス？……何じゃ、傷が塞がらん……」

「その呪文の副作用が、構成の破壊だからね——……カオスを受けた以上、傷の再生はもう出来ないよ」

「そんな……我が、我が……壊レテイク……」

身体が自然再生される度に、世界樹の身体からどんどん血が流れ落ちていく。そしてつい

に、残った左手までも腐り落ちてしまった。狂ったように自身の身体を見ている世界樹を見つめながら、ラフィストが創世の剣をスッと構える。構えられた剣に、眩いほどの白い光が迸った。

「コレハ……ヒカリ……？」

「もう、苦しまなくていい……これで終わりにしよう、世界樹」

「ラフィー！」

仲間の声を背に受け、一筋の光を背負ったラフィストが地を蹴り、飛び上がる。

「あああああ！」

振り下ろした剣圧が何重にも走り、剣の光が竜となる。光がこの空間を覆い尽くした時、世界は一瞬白の世界となった。

沈黙、孤独。いつも自分の隣にあるもの。希望や生、そんなものは存在しない。夢？ 一体

何を望むというのだ。光？ 眠りにつく時、全てが暗黒の世界だった。そう、私は一人。私

の傍には誰もいない。名も無く、満たされる事など永遠に無いのだ。

「生きたい？」

「死にたい？」

「生きたい？」

「死にたい？」

「生きる？」

「死ぬ？」

「生きる？」

「……——死ぬ」

あの日から、永遠に近い時間の中で繰り返されてきた自問自答。

「本当は寂しいのではないか？」

「……………否」

「本当は何かを望んでいるのではないか？」

「……………否」

「本当は……生きたいのではないか？」

「……………否！」

「否、否、否、否、否、否っ！」

全ての疑問を懸命に否定してきた世界樹に、ラフィストは自分にもう苦しまなくて良いと

言った。苦しんでなど、いないと言うのに。ならば何故、自分はあの光に安堵していたの

だろうか。そう思った時、世界樹は差し伸べられた手を見た気がした。ラフィストが自分

に向かって手を差し伸べながら、微笑みかけて立っている。不意に、世界樹の中から熱い

物がこみ上げてきた。忘れかけていた大切な何かを、思い出した気がしたのだ。刹那、ラ

フィストの姿が違う人物をかたどり始める。その人は優しく微笑み、世界樹に告げた。

「もういい、行こう」

その言葉が届いた瞬間、世界樹の身体をラフィストの剣が切り裂いていた。世界樹の身

体が淡い光に包まれていき、どんどん形が無くなっていく。

「そうか……我は、ずっと……サミシカッタ……ノカ」

「っ！……世界樹！」

悲痛な表情をしたラフィストが、叫ぶ。視線をやってラフィストを見た世界樹は、何故ラ

フィストがそんな顔をするのか分からなかった。世界樹自身は、穏やかな気持ちだったか

らだ。光の先でフレッドが待っているという事が、世界樹をそういう気持ちにさせていく。

全てから開放された心地良さに瞳を閉じると、一筋の涙が零れ落ちた。

「よい、よいのだ……コレデ。フフ……こんなに穏やかにいけるとは……。死ハ、ヤサシイのだな……ラフィスト……」

光が空気に溶け、完全に世界樹の身体が消える。世界樹が消えてもなお、ラフィスト達はボンヤリと宙を眺めていた。

「終わった……んだよな？」

「ああ……」

「もう、クタクタだよー！」

マキノがゴロリと地面に寝そべる。

「疲れた……」

漸く緊張が解けたのか、他の仲間も続けざまに寝そべり始める。

「世界樹も……。さ。寂しかったんだよな」

「そう、ですわね……」

突如、地面がガクンと揺れ、その後に身体感覚が軽くなる。突然の異変にサードがガバツと起き上がり、辺りを見回し始める。

「何だ！まだ他にも……」

「落ち着いて、サード。封印が解けて、この島が地上へ戻ってるんだよ……大丈夫」

「戻ろうか……俺達の地上へ」

自分達のあるべき場所へ、人々の元へ戻る為、ラフィスト達は立ち上がった。

―エピソード1―

ワープによって一瞬のうちにグランの船に戻ると、丁度甲板に出ていたグランがラフィスト達に走りよってくる。

「キルトー！生きて帰ってきたんだなー！」

再開を喜ぶように、グランはキルトの頭を抱え込むと、再開を喜ぶように己の拳でグリグ

リする。キルトも痛えなこの野郎、と文句を言いつつもそれを振りほどかないのは、こそ

ばゆい気持ちがあったのかもしれない。このようなやり取りを続けながら、グランは視線

だけラフィスト達の方へ向けると、これからツアラの港に戻ればよいのか尋ねた。彼にア

ンカースに向かって欲しいと告げると、グランは了解の返事をし、操舵室へと戻っていつ

た。キルトがその隣を歩き、二人で泊まれる港について話し始める。これからただ、ア

ンカースまでのんびりと向かうだけだ。何て平和なのだろうと、ラフィスト達は思う。

「……海が、穏やかだな」

「何かこういうの……落ち着くわね」

「でも、この旅も……終わりですわ」

「まあね。でも、会えない訳じゃないし？」

「そうだな」

眼前に広がる穏やかな海を眺めながら、各々の気持ちを呟く。暫く甲板でそうやってぼん

やり海を眺めていると、船が動き出した。それと共にラフィスト達

の眼前の景色も、少し
ずつ彩りを変えていった。海が様々な色に、キラキラと輝く。頬を
撫でる潮風が、とても
心地良い。時折聞こえる海鳥のさえずりが、美しく響き渡る。世界
に元の輝きが戻ってき
たのだと、ラフィストは感じていた。

一向は何事も無くアンカースに到着すると、グランと別れて城下町
を歩いていく。元凶で
あった魔導士がいなくなったとはいえ、相変わらずアンカースの城
下町は未だ活気が無く、
閑散としたものだった。すぐに元通りになるのは無理だろうが、こ
れから先この城下町に
も活気が戻る事だろうと、ラフィストは思う。

「もっと勇者って、人々に歓迎されるもんだと思ってたぜ」
ラフィストと異なり、ニックスが素直に不満を漏らす。そんなニッ
クスの背をバンと叩き、
マキノが笑って慰める。

「いーじゃん、こーいうのもさ！世界を救ったのは、確かよ？」

「皆、御苦労だったな」

城の前に到着すると、城門の前で、グレイスとテレーズの二人が出
迎えてくれていた。二

人はラフィスト達に労いの言葉をかけると、優しい笑みを彼らに向
けた。

「グレイスさん……あ！ジュ、ジュリアは！」

「落ち着け、ラフィスト君。あの後、彼女は大分混乱してしまっ
てね……今プギューのス

リープガスで眠っている所だ。城内で休ませているから、起こしに

行ってくるという……

君は、充分に役目を果たした。これからは君の想いのままに、生きるというだろう」

「ラファイー、行ってあげてくださいな」

ガーネットや仲間達に口々に諭され、ラファリストは軽く頷いてその場を後にした。もうこ

れからは、何のしがらみに囚われる事も無い。兄妹の空白を埋める時間も、充分にある。

そう思うと、自然と足取りが軽くなる。そんなラファリストの背を見つめ、それぞれがこれ

からの己が身の降り方に、想いを馳せていく。

「これからの生活かぁー……。ニックス、あんたはやっぱり……」

「学校、だよな！」

「そ……だね！」

今までの生活を再開させようとニックスとマキノが話している横で、テレーズがティーシ

ェルの手を取り、微笑みかける。

「ティーシエル、よく頑張ったわね……」

「母、上……」

テレーズはゆっくりと我が子を引き寄せると、しっかりとその胸に抱きしめた。そこにグ

レイスが近寄り、そっとティーシエルの肩に手を乗せる。寄り合う親子の姿を少し羨まし

く思いながらナディアが眺めていると、その視界の隅に城の中に駆けて行くサードが映る。

「サード、どうしたのよ……って……あー、アデルか」

ナディアの声にも振り返らず一目散に城に駆けて行ったサードは、城の中を駆けずり回り

アデルの姿を探す。すると薄暗い部屋の中に、それらしき姿を見つけた。彼の名を呼ぶと、

部屋の中の人影が自分の方に振り返った。部屋の中からサードの方へ歩み寄ってくる彼の

姿は、紛れもなくアデルのものだ。

「おー！サードじゃないか！よく頑張ったな！」

暢気そうに笑うアデルに向かって、サードが突進する。これは予想外だったらしく、アデル

はその当たりをもろに受ける。

「ゲフ！いい、痛いじゃないかー！ゲホッ！」

「ハハ……ハハハハハ！ハハハ……」

「何だよ、サード……失礼な奴だな。フフ……ハハ……！」
彼らの笑い声が、辺り一帯に響き渡る。

「はー、おかし……こんなに笑うのは久々だよ。あ、あの魔石は役に立ったかい？」

「ああ、凄く。……ところでアデル、やる事って？しかも、食料庫で……」

「おー、そうだった。んーと……だね」

徐に後ろの袋に手を伸ばし、サードの眼前に突き出す。そしてにんまりと笑いながら、こ

れ何だ、とサードに問いかけた。突然のアデルの問いに、サードが頭に疑問符を浮かべて

いると、アデルはチツチと手を振ってサードは相変わらず鈍いなど言う。自分は鈍かった

のだろうかとサードが自問自答していると、アデルが質問の答えを述べた。

「食料に決まってるじゃないか」

「でも、何の為に……」

「はあ？旅するんだろう？今までの旅の続きだよ。この三日間の間に、城内外での戦後処

理はロイド王子と共に済ませてあるし、旅の許可もちゃんととってある。――……まあ、

男二人つてのも何とも哀しいがねえ。今、他の隊員はいないが……」
「ああ。俺は別に満足だ」
お互い顔を見合わせ、笑みを浮かべながら軽く拳を合わせた。

「ティーシエル……やはり、考え直さないのか？」

ここに残ると言うティーシエルに対し、何度もグレイスが問いかける。

「うん……やっぱり僕は、カダンツの司祭だしね。今更よく知りもしない神界に行くって
いうのもなんだし」

それに、と付けたし、チラリとナディアの方を見る。

「ナディアが、傍にいるしね」

「ティーシエル……」

二人の様子を複雑そうに眺めてから、グレイスがゆっくりと頭を振り再度口を開いた。

「わかった……もはや何も言わん」

「ティーシエル、いつでも遊びにいらっしゃい……勿論その子もつれて」

少し寂しそうにそっぽを向き、ムスツとするグレイスの隣でテレーズが微笑む。そして続

けざまに、あなたが私達の息子である事に変わりはないのだと告げた。

「ああ、そうだ。ラフィスト君に伝えておいてくれないか。創生の剣は、再び神界において封印しておく」

「わかりました」

「では、また会える事を祈っている……」

「素敵な大人になってね」

そう言い残し、二人はその場から姿を消した。ティーシエルの横で、ナディアがポツリと

行っちゃったねと呟く。それに対してティーシエルは、いいんだよ、と言った。

「だって、いつでも会えるんだから」

こう言い切り、ふわりと笑う。その笑みにつられて、ナディアの顔にも笑みが浮かぶ。

「ナディアには、色々手伝ってもらうからね」

「何よそれ」

先程までの笑みが消え、ナディアの眉間に皺がよる。

「ん？うちにいる限りは当たり前でしょ？」

彼の言葉に眉間の皺をより一層深くし、大きく口を開いて抗議をしようとするが、口から

出てきたのは怒声ではなく溜息と苦笑だった。もう、仕方ないわねと告げると、彼女はに

っこりと微笑んだ。

皆がそれぞれのおもいに浸っている時を見計らい、キルトは踵を返して一人アンカースの

城下町を歩いていた。自分がやるべき事はもはやないし、彼らと関わる事ももう無いだろ

う。グランには既に話をつけてあるから、彼はまだ港で待っているはずだ。後は、船に戻

ってアンカースを発ち、このまま姿を眩ますだけだ。そう思って鼻歌交じりに歩いている

と、背後から誰かに呼び止められた。

「キルト……何処へ行くんですの？」

キルトには振り返らずとも、この声の主が誰だか分かった。ばれな

い様注意は払ったつも

りであったが、そう上手くはいかなかったらしい。振り返り、その人物と向かい合う。

「姫君か……誰にも気付かれないように行こうと思ったんだが……」
「？」

「失敗だな」

ニヘッと、顔に愛想笑いを浮かべる。

「誤魔化さないで」

愛想笑いを浮かべたキルトに、厳しい目を向けるガーネット。彼女は人の汚い部分を知らない。自分自身の心に偽る事無く、いつだって真っ直ぐだ。だからこそ強く、眩い光を瞳に宿しているのだろう。まるで自分とは正反対だと思い、さっと目を逸らす。いつも何

処かに逃げ道を用意している弱い自分に、その瞳を直視する事は憚られた。ほんの少し自

嘲の笑みを浮かべながら、キルトは口を開く。

「トレジャーハンターに戻って、旅に出るのさ。それが元々俺の仕事なんだし、当然だろう？」

口から出たのは、ただの口実だった。仲間だ何だ偉そうな事を言っておきながら、その実

強い繋がりを持つ事を一番恐れていたのは、他の誰でもない自分だ。繋がりや想いが強け

れば強いほど、それを失った時の喪失感は計り知れない。もう二度と、そんな想いをする

のはごめんだった。だから、離れられるうちに離れようと思った。

それなのに、その繋がり

りがまだ、目の前にいる。ここで彼女を突き放して、断ち切るのは簡単だ。幼い彼女を突

き放すだけの術を、キルトは持っている。しかし、彼女の瞳がキル

トにそうさせなかった。

「何故……キルトはトレジャーハンターなんか……？」

「……そういや、トレジャーハントの目的言った事無かったな。な
った理由は、前にサー

ドとアネさんに言ったけど」

キルトは不思議だと思った。彼女は理屈じゃなく別の部分で、彼女
よりも口が達者なキル

トから、言葉を引き出している。こういった己のありのままをさら
け出させる力は、一種

の才能だと思う。彼女の想い人であるラフィストにも、そういった
所がある。この二人が

共に歩めば、きっとグラン王国は良い国になるのだろうと、頭の片
隅でぼんやりと思った。

「幻の霊鳥、ルーの羽と、伝説の秘宝、オーガニックルビーを探し
てんだ。一応後者の方

は見つかったんだが、前者はまだ……な」

「その二つを、どうするんですの？」

「羽飾りを作って、ある人にあげるのさ……まあ、そいつはもうい
ないけどな」

「それって……」

「そう、無意味だろ？ 別段、意味があって探してるんじゃない。こ
れは俺の自己満足なん

だ……あの人への未練を断ち切る為の、ケジメでもあるけどな」

「キルト……」

「じゃ、そろそろ行くぜ姫さん！ ラフィストと仲良くしろよ」

くるりと踵を返し、今度こそ振り向かず歩き出す。そんなキルト
の背に、ガーネットが

大きな声で叫んだ。

「キルト！ また、皆で会いましょう！ ……二年後。そう！ 二
年後に世界樹の島で！」

振り返らず、キルトがどんどん歩いていく。ガーネットはその背に、何回もキルトと名を

呼び続けた。キルトの右手が上がり、その手が振られる。諦めに似た表情が浮かんだガー

ネットの耳に、覚えとくよという言葉が届いた。きっと、それが彼の精一杯の誠意なのだ

ろう。その言葉を最後に、彼の姿はガーネットの視界から掻き消えた。

「約束……ですわよ」

キルトの耳に届く事が無いと分かっているが、ガーネットは彼に向かってこう呟いた。

彼女は信じていた。自分達は離れていても繋がっている。今は別れたとしても、いつかま

た、再び会う日が訪れる。その想いは、きっとキルトにも伝わっている。

城内の長い廊下には、ラフィストの足音だけが響いている。その音は、最初はゆっくりで

あったが、少しずつ早くなる。そのリズムが、これからの日々を待ち遠しく思うラフィス

トの心情を、切に表していた。廊下の角を曲がると、突然ラフィストの眼前にもの凄いス

ピードで何かが飛び出してくる。急な事に避けられるはずもなく、ラフィストはそれと顔

面激突してしまった。

「うわっ！」

「プ……プギュー……」

反動で後ろに倒れたラフィストが前を見ると、そこにはプギューが

申し訳無さそうに鳴き

ながらフワフワと浮いていた。苦笑しながら立ち上がると、プギューの頭をポンツと叩い

てやる。微かにプギューを呼ぶマキノの声が聞こえたので、ラフィストが行ってこいと一

撫ですると、プギューは再び猛スピードでその場から去っていった。プギューを見送った

後、ラフィストはジュリアがいると聞いた部屋の中に入る。ベッドで眠っているジュリア

にそっと近づき、ラフィストは優しく呼びかけた。

「……ジュリア」

「……んっ……」

ジュリアの瞳が、ゆっくりと開かれる。

「ジュリア、おはよう……大丈夫だったかい？」

「お、お兄ちゃん！夢じゃない……んだよね？消えたりなんか、しないよね？」

「勿論さ……これから沢山、話をしよう」

ぼろぼろ涙をこぼし始めたジュリアをそっと抱きしめてやると、それを皮切りにジュリア

はえんえんと泣き始めた。今まで心の内に抑えていたものがあふれ出したのか、ラフィス

トの頬にも自然と涙が伝う。暫くそのまま抱きしめた後、自身の涙をジュリアに見えぬよ

う袖口で拭い、ラフィストは指の腹でジュリアの涙をそっと拭ってやる。そして、ジュリ

アにニツコリと笑いかけた。

「ジュリア、行こうか」

「うん！」

ジュリアに仲間達を紹介してやろうと、ラフィストはジュリアの手を取った。気の良い仲

間が多いから、きっとジュリアも話が弾む事だろう。部屋を出て廊下を歩きながら、仲間

の中にはあのニックスもいるのだと、ジュリアに教えてやった。懐かしい名前に、ジュリ

アの顔から笑顔がこぼれる。ジュリアと二人、話しながら歩いていると、その途中でロイ

ド王子とばったりと出くわした。

「あの、ラフィスト……」

「……ロイド王子」

「改めてお礼を申し上げます……この度は本当に、ありがとうございました」

ロイド王子に深々と頭を下げられ、ラフィストは思わず恐縮してしまふ。

「いえ、俺は何もしていません。貴方が強い意志と、優しい心を持っていたから……貴方を助けたのは、貴方自身です」

「そんな……」

「それより王子。これからは王子が王となって、この国を立て直すのでしょうか？……お一人で、大丈夫なのですか？」

ラフィストの言葉に、ずっとロイド王子の傍にいたジュリアが、心配そうな目でじつと彼

を見つめる。しかしラフィストの心配を余所に、ロイド王子の返答は迷いなどなく、確固としたものだった。

「私は大丈夫です。いつかはアデルとサードが旅から戻ってきますし、それまではカダン

ツの司教のアルベルト様が御力を貸して下さると……それに、私はこの国が好きですから。

この国の為なら、いくらでも頑張れます」

どうやら、ラフィストが心配するまでも無いようだった。彼の決意を聞き、心配そうに見ていたジュリアが安心したように笑う。どちらとなく手を出すと、ラフィストとロイド王子は固く握手を交わした。

「これから発たれるのでしょうか？せめて、お見送りだけでもさせて下さい」

「ロイド王子……ありがとうございます」

見送ってくれるというロイド王子と三人、城内を歩き城門前まで出ると、そこでは仲間達が話をしているようだった。ニックスが真っ先に気付き、ラフィストの元へ駆け寄ってくる。ニックスがジュリアに声をかけている時に皆の顔をさっと見渡すと、ラフィストはいない人物がいる事に気が付いた。

「……あれ、キルトは？」

「さあ？」

知らないと言った後、その辺にいるんじゃないかとニックスが返す。他の皆に聞いてみて

も、返ってくるのは生返事だけだった。流石に気になり始めた仲間達が周囲に目を走らせ

始めると、ガーネットがポツリと口を開いた。

「キルトなら……もう行ってしまいましたわ」

「え？」

「もう行っちゃってどういう事？」

「……トレジャーハンターに戻ったという事か？」

突然の事に皆が疑問符を浮かべる中、サードが落ち着いた様子でガーネットに聞き返すと、

ガーネットはコクリと頷いた。

「ええ、幻の霊鳥の羽を探しに……一応、引きとめはしたんですけ

ど」

「駄目だった、か」

今いないという事は、そういう事なのだろう。そう思い、ラフィストはふうっと一つ溜息を漏らす。その事実、他の仲間も複雑そうな表情を浮かべる中、でも、と力一杯叫びながら、ガーネットが更に言葉を続けた。

「二年後に、また皆で世界樹の下で会いましょうと、言っておきましたわ！——……ですから、私達も」

「……そうだな」

「二年後、か……。うっしゃー！それまでにもっともっと強くなつてやるぜ！」

ニックスがガッツポーズをし、叫ぶ。

「じゃあ二年後に、女の子以外の皆でフォートレスの大会に出るっていうのは？」

「んんー？いいのかよ、ティーシエル！お坊ちやまなお前がそんな事言つて！……はつきし言つて、勝ち目は無いぜ？」

「は？何言つてんの！カダンツに帰ったら、修行や新しい術を作ったりするに、決まってるでしょ！僕の優勝だね」

ははんと鼻で笑いながら、ティーシエルがニックスの言葉に非を唱える。その瞬間、一同の間に笑い声と、ニックスの苦虫を噛み潰したような声が響き渡った。

「……二年後か。楽しみにしている」

サードがアデルに声をかけ、荷を肩にかける。そして、そろそろ俺達も行くと、ラフィスト達に告げた。

「……ラフィスト。また二年後に、一戦交えよう」

「サード……ああ！今度は負けない！」

不敵な笑みを残し、サードとアデルが去って行く。

「サードー！頑張れよー！」

ニックスの大きい声が、響き渡る。それに続くかのように、他の仲間達もサード達の姿が見えなくなるまで別れの言葉を叫び続けた。サードの姿が見えなくなった途端、ニックス

を中心に他の仲間達がワイワイと騒ぎ始める。ラフィストはその様子を笑ってみていたガ

ーネットの手をそつと握ると、ガーネットに向き合い、話し始めた。
「ガーネット……グラン王国に帰ったら、君のお父さんに言おうと思ってる事があるんだ」

「何……？」

ガーネットが息を呑む。少しの沈黙が下りた事で、二人の間に緊張が走る。

「ガーネット……君を、俺に下さい……って」

「ラフィー！」

目に涙をいっぱい浮かべ、ガーネットがラフィストに抱きつく。ラフィストは彼女の身体を抱きしめると、その耳元に囁いた。

「ガーネット、好きだ。——……やっつと、言えたね」

「私も、私も大好きよ！ラフィー！」

「いよ！御兩人！」

「おめでとー！」

いつから聞いていたのか、先程まで騒いでた仲間達が次々に祝福の言葉をかける。二人は真っ赤になりながらも、満面の笑みを浮かべてその言葉を受け取った。

「いーなー。私にもいつか王子様が……」

ラフィスト達の幸せそうな笑顔を見てマキノがポツリとこう呟き、
一人空想の世界へ旅立

つ。それは、隣にいたニックスの耳にもちゃんと届いていた。それを聞いたニックスは、

ロイド王子に近付いていく。

「王子！ちよっ……耳を貸してくれ……じゃない。貸して下さい！」

「は、はい？」

ニックスは不思議そうな顔をするロイド王子を手招きして、ほんの少し屈めせると、その耳にそっと耳うちする。

「あ、あの！その……アンカース産のルビー、持っていらっしゃいませんか！」

「はあ……ルビーですか……」

「声がでかい！」

実際には、ロイド王子より耳うちしているニックスの声の方が大きいのだが、そうと気付

いていないニックスは急に驚き、ロイド王子の耳元で叫ぶ。突然耳に入ってきた大音量に

ロイド王子が頭を抱えると、彼らのやり取りに気が付いたマキノが近くへと寄って来た。

「だ、大丈夫？王子さん！ちよっとー、ニックスウー！何すんのよー！」

「う……すみません！」

慌ててニックスが謝る。そんなニックスにロイド王子は気にするなと述べると、自身が身

につけているブレスレットを外して、ニックスに手渡した。

「へ？」

「どうぞこれを持って行って下さい」

「い、いや！こんな高そうな……」

「いいんですよ。あなた方にはいくら礼を言っても、言い足りない

位なのですから。これ

位、取っておいて下さって構いませんよ」

「わー！ありがとうございます！」

最初は遠慮していたニックスだったが、ロイド王子の言葉でありがたく受け取る事に決め

たらしい。ニコニコ笑いながらブレスレットを受け取っていた。そんなニックスを、マキ

ノが嫌そうな顔でジッと見つめている。

「ちょっとー……さっきから聞いてたら……何よ、ニックスったらはしたないわねー」

「いい！マキノ、ほら！」

ニックスは急に向きを変え、ブレスレットをマキノに差し出す。その行動が予想外だった

らしく、マキノはニックスをポカンとした表情で見ていた。

「その、ルビー……欲しいんだろ？」

黙り込んでいるマキノを伺うようにニックスが尋ねるが、マキノは一向に口を開こうとは

しない。そのやり取りを遠目から眺めていたティーシエルとナディアは、心の中で何て馬

鹿な男と毒づいた。どんなにちっぽけな物でも、本人からの贈り物に価値があるのだ。い

くら高価なルビーでも、こんなプレゼントではロマンの欠片もないだろう。どうなる事や

らと周囲が眺めていると、マキノがそっとルビーのブレスレットを手を取った。

「本当は、ニックスのを貰いたかったんだけど……貰い物じゃなくて！……ったく、ロマンの欠片も無いのね！」

マキノの言葉に、ニックスがあからさまに肩を落とす。そんなニックスの姿を見てマキノ

は苦笑すると、更に続けた。

「……でもそこがニックスらしいわ。うむ、このルビーはあずかる！」

「あず……かる？」

「そ。ニックスが自分の力で手に入れたルビーをくれるまで、ね。

あー……それと、私に

言いたい事は？」

ニックスの顔が赤くなったり、青くなったりする。マキノにばれて
いた事実ニニックスが

ドモリ始めると、顔を真っ赤にしながら口を開いた。

「好ーき……でだあ……」

マキノの反応のなさに、ニックスの顔が赤から青へとどんどん変化
していく。少しの沈黙

の後、マキノは笑ってもう少し痩せたらね、と答えた。ニックスは
その意味を理解した途

端、急に元気になって辺りを飛び回り始める。それをキリが無いと
ばかりに、ティーシェ

ルが杖で小突いて止めに入った。

「嬉しいのは分かったから、少し落ち着きなよ。……ああ、それと
一国の王子から物をせ

びり取ったのは、君が最初で最後だろうね……」

「なっ！……わ、悪かったな！」

「ははは……さ、そろそろ俺達も帰ろう！……ロイド王子、それで
はまた」

「ラフィスト。……ええ、また会いましょう」

ロイド王子に見送られながらラフィスト達がワープした場所は、ト
ラートだった。久々に

見る故郷の風景に、ニックスがうおー、と叫んでいる。その横では、
女の子三人がそれぞ

れ別れを惜しんでいるようだ。

「ラフィストも、もつと強くなれよ!」

「ニックス、お前もな」

「ま、僕の足元には及ぶ位になってよね」

「な!……お前、最後までそんな調子だよな……」

ニックスの言葉で気を悪くしたのか、ティーシエルが僅かに眉を寄せる。手招きでガーネ

ットとナディアを呼び寄せると、簡潔に別れを述べてさっさとワープで行ってしまった。

「あっ!……いっちゃまいやがった……——」

「ニックス!」

「何だよマキノ」

振り向いた所を狙い済ましたかのように、マキノのデコピンが当たる。

「ボーっとしてるヒマ、ないでしょ!ほら、修行するわよ!」

「お、おう!」

二人にとって、これからが全ての始まりであり、スタートなのだろう。己が求める強さも、

恋も全てはまだ始まったばかりなのだ。

「二年後、応援してあげるから優勝しなさいよ!」

「任せとけ!」

青い空の下、二人は一斉に走り出した。

—エピソード2—

旅をしている時は長い道のりを歩いたが、戻ってくるのは一瞬だった。目の前の光景はト

ラートではなく、グラン城が聳え立っている。最初に旅立った地であるこの城を見上げる

と、何やら感慨深い物があつた。ここでガーネットやサードと出会い、ニックスと再会し

て旅に出たのだ。そしてまた、この地で冒険も終えるのだ。他の皆と一緒に王の所へ行く

か尋ねたが、皆は応接間で待っているから、ラフィストとガーネットの二人で行ってこい

と言った。ラフィストがスツと手を差し伸べると、ガーネットが微笑んでその手を取る。

「行こうか、ガーネット」

「ええ……」

応接間を出て、王の間の前に立つとドクンと心臓が強く鳴った。握り合う互いの手も、心

なしか強くなる。緊張しながらもラフィストは扉に手をかけると、それは重い響きを立て

ながら開いていった。中に入ると、グラン王は笑顔で二人を出迎えてくれた。

「おお、ラフィスト！……ガーネット、よく無事で帰ってきたな。

お前がアンカースの調

査に参加していた事は、アルベルト司教から聞いた。済んだ事とはいえ、全く無茶をする」

「ごめんなさい、お父様」

グラン王が王座から二人の元へ歩み寄る。

「ガーネット……大人になったな。見違えたぞ」

先程まで不安そうにしていたガーネットの顔に、笑みが浮かぶ。グラン王はラフィストに

向き直ると、そういえばお主に褒美を授けなければいかんなどと続けた。何なりと申せとい

う王の言葉に、ラフィストはちらりとガーネットの方を見ると、ガーネットもまたラフィ

ストの顔を不安そうに伺っていた。

「あの……褒美は、いりません」

「何？」

「えと、その……僕は……王様！ガーネットを僕に下さい！」

思い切り、頭を下げる。じっとグラン王を見つめるガーネットの視線で、王も二人の気持

ちが分かったらしい。やれやれと言いながら、大きく溜息をついた。

「お父様、駄目……かしら」

「おい！誰か！ガーネットとラフィストを連れて行け！」

二人が驚いていると、王の間に続々と兵が入ってくる。兵がグラン王に一礼すると、グラン

王は更に言葉を続けた。

「街一番の仕立て屋の所へな。そして、最高の衣装を見繕え！」

「あ、ありがとうございます！」

グラン王の言葉にラフィストが礼を述べると、ガーネットが泣きながらラフィストに抱き

ついてくる。ラフィストも嬉しさの余り、ギュッと彼女を抱きしめ返した。その時、よか

ったわねという声が入る。ラフィストが視線をそちらに向けると、入口にはティーシ

エルやナディア、それにジュリアがいた。この様子からすると、立ち聞きしていたらしい。

「ラフィスト。お主さえよければ、お主の家族も城に呼ぶがいい」

「王様……本当に、ありがとうございます」

「さ、衣装を選んでくるがいい」

グラン王に促され、数人のお付きと共にラフィストとガーネットは城下町へと向かった。

その様子を見ようと、彼らの後をナディアとジュリアが追っていく。やはり女性として、

こういった物には興味があるのだろう。人がはけていき、王の間にはグラン王とティーシ

エルだけが残された。

「……ティーシエル、そなたも大儀であつた。どうじゃ？この国の
お抱え魔導士に……」

「お断りしますよ」

「と言うと思つたわ……はっはっは！やはりお主は面白い奴じゃ！
……本当はラフィスト

がいなかったらお主とガーネットを……と言っても、昔の話だな」

「グラン王……ラフィストは彼女にとって、最高のパートナーになりますよ。僕なんかよ

りも。彼には不思議な力がある……彼に会って、僕が変わったようにね」

「お主が言うなら、絶対だな」

グラン王が満足そうな笑みを浮かべ、大きく頷く。

「式の時には、僕も呼んでください」

「帰るのか、もう？」

「ええ……仕事をいつまでも放つてはおけないので。あ、ナディアには先に戻ったと伝えておいて下さい」

「式は一週間後に執り行うからな」

王の言葉に微笑むと、ティーシエルはサツと印をきりワープを唱えた。グラン王は相変わ

らずマイペースな彼の行動に笑みを漏らすと、窓の外の空を仰いだ。

「ガーネット……幸せになれ」
今日のように晴れ晴れとした青い空は、我が子の旅立ちに相應しいだろうと思う。どうか
一点の曇りの無い青空の心のまま幸せになって欲しいと、グラン王は願った。

一週間後、空は澄みやかに晴れ渡っていた。陽射しも心地良い。その空の下、慌しく一組の男女が宿を飛び出した。

「ああん！もうバカー！早くしてよー！」
「うるせー！」

文句を言いながら走るのは、チャイナドレスに身を包んだマキノだ。その後ろには、ちょっと不恰好にタキシードを着ているニックスがいる。

「はやくしないと、式の前に皆に会えないでしょー！」

「この服……首が苦しすぎる……吐く」

「吐くなー！少しは我慢なさい！あ、あそこあそこ！」

前方に見えてきたのはグラン大聖堂。陽の光が窓に反射し、キラキラと美しく光っている。

その時、時を告げるかのように鐘が鳴った。

「あー！鐘が！急げー！」

さっき以上にスピードを上げ、大聖堂に駆けていくと入口前に見慣れた姿が映る。赤のドレスに身を包んだナディアと、タキシードを着ているティーシエルだ。ナディア達が走っ

てくる二人に気付き、手を振る。二人が大聖堂についた途端、ナディアの口から檄が飛ぶ。

「ニックス！遅いわよ！」

「何で俺だけなんだよ、ナディア！」

ニックスは負けじと反論するものの、だってシミュレートして考えたら原因はアンタしか

いないでしょ、の一言に撃沈する。

「そういえばさ、ティーシエル。サードやキルトは……やっぱ駄目だった？」

「うん。全大陸中に使者を走らせたけど、見つからなかった」

「そっか……ちよつとサミシイよね」

「皆さーん！」

大聖堂から出てくる人、ジュリアの声に一同が振り向く。

「ジュリアちゃん、久しぶりー！……で、ラフィストの奴、どうしてる？」

「控え室で、凄く緊張してる」

控え室にいるその人物を思い描き、プツと一斉に吹き出す。ジュリアに中に入りましょう

と促され、ぞろぞろと大聖堂へと入っていった。外から見た大聖堂も美しかったが、中は

ステンドグラスから差し込む光が、より美しい色となっている。

「フフ……二人共、さぞかし素敵なんだろうーな」

「何か外がガヤガヤしてるわね」

「もう皆、集まってきたんだなー！」

「でも……」

何かを言いかけたナディアが、ふいに後ろを振り返る。

「何かサードもキルトも、こっそり見にきてそう」

「えー、どーかなー？」

「でもよ、サードなんか式の直前に、バラの花束を匿名で送ってそうじゃねーか？」

「アンタのサードに対するイメージって何なのよ……」

ナディアの言葉にひとしきり笑った後、皆はふいに喋るのを止める。穏やかな顔つきでそ

れぞれ考えている事は、恐らく同じだろう。

「色んな事……あったよね」

「そうだなー」

「何よ、もう過去の話なの？」

控え室の前に立つ。

「じゃあ、私とマキノとジュリアちゃんはガーネットの所ね」

「じゃ、僕はラフィストの所に行くよ」

そう言っ、それぞれの扉を叩いて中に入った。ガーネットの控え室に入った三人を、ウ

エディングドレス姿のガーネットが出迎える。

「皆……来てくれてありがとう」

白い衣装を着て微笑む姿は、まるで天使のように綺麗だった。そこにキヤーと騒ぎながら、

マキノが駆け寄っていく。

「ガーネット、きれええー！ね、ね！」

「やだ、マキノったらはしゃぎ過ぎですわ」

「もう！おめでたいんだから、はしゃいでもいいの！——いいなああ……私もいつか着

たい！そして……」

「ニックスと？」

「やーだ、もう！」

その頃ラフィストの控え室に入ったニックスとティーシエルは、ガチガチに緊張している

ラフィストと向かい合っていた。

「ラフィスト！いいじゃん、いいじゃん！よ、男前！」

「ニックス、おやじ臭いよ……」

騒ぎまくるニックスを、変な目で見るティーシエル。

「皆。き、きてくれて……その、あの、あ、ありがとう……」

「何そんなにキンチョーしてんだよ！お前、最終決戦の時よりキンチョーしてないか？」

「ハハ、言えてる」

「そ、そ、そんな事言ったって……」

控え室の外から、そろそろ時間ですと兵士が告げる。その言葉にラファリストがビクツと身

体を跳ね上がらせ、驚きを露にした。ラファリストの態度に笑いながら、ニックスとティー

シェルの二人はじゃあ、と言って控え室を後にした。廊下で他の三人と落ち合い、他愛無

い話をしながら五人は大聖堂へと移動する。彼らが椅子に座ると暫くして、奥から今日の

主役である二人が出てくる。ヴァージンロードを歩く為に移動するラファリストの足は、手

と足が同時に出てしまっているようだ。その様子に五人は小さく噴出すと、同時に始まり

を告げる鐘が鳴る。グラン王に手を引かれたガーネットがラファリストの隣に立つと、まる

で二人を祝福するかのようにヴァージンロードに光が射した。二人は手を繋ぎ、ゆっくり

とその道を歩いていく。これから二人で歩いていく、光の道を。

剣が鋭い音を放ち、綺麗な線を描く。

「ラファイ、そろそろ休憩なさったら？」

「ああ……そうするよ」

剣を鞘にしまい、テラスにいるガーネットの元へと歩いていく。テラスにつくと、ガーネ

ットが入れてくれたらしいお茶と、添えつけのお菓子がテーブルの上に置かれていた。剣

を立て掛け、ラファリストは椅子に座るとお茶を口に含んだ。こうし

た時間を共に過ごすと、改めて幸せなのだと思う事が出来た。ラフィスト達がそんな時間を共に過ごして、間もな

く二年になろうとしている。確かめるように、ラフィストはガーネットに話しかけた。

「もう……二年になるな、あれから……——」

「ラフィー、覚えてる？明日……」

「世界樹の下で、皆と会う！」

二人の声が重なり、一瞬二人で顔を見合わせたような形になる。似たもの同士のようなお

互いの行動に、ガーネットが悪戯っぽく笑う。

「やっぱり、覚えてましたのね」

「当たり前だろ。……そういえば、最近サードとアデルさんがアンカースの方に戻ってき

たって、ティーシエルが言ってたな」

「ええ。アデルさんが白騎士団長、サードが黒騎士団長でしたわね」しみじみと懐かしむように話すガーネットは、どこか嬉しそうだ。

「サード……強くなってるんだろ。俺、勝てるかな？」

ははは、と苦笑しながら言うと、ガーネットがクスリと笑った。

「大丈夫。ラフィーは、誰よりも強いですわ」

暖かい日が当たるテラスから、幸せそうな笑い声が響き渡った。

「ニックスせんせー！」

数人の子供が、ニックスの元へと走り寄る。

「せんせー！今日は何するのー？」

「んー……じゃあ、今日は受身の取り方を教えてやるか！という訳で皆、武術場に移動！」

「わーい！」

無邪気な顔で笑いながら、再び子供達が走っていく。転ぶなよと声をかけ、走っていく子

供達を微笑ましく見つめていると、突然身体に衝撃が走る。

「いって……」

「あっははー、すきありー！」

「マキノ！……てめえ、何すんだいきなり！」

涙目で背中をさすって、ニックスが訴える。

「いや……ニックスも変わったよねー！まさかあのニックスが、
武術学校の先生やって

るなんてさー！あ、私も今年卒業か……」

二年経った今、既に学校を卒業したニックスは武術学校の先生となり、マキノはそこを今

年卒業する予定という現状だ。

「そういやよ……明日だな」

「そだね」

二年前の約束が、二人の頭を過ぎる。

「と……、ポケットとしてる場合じゃないか！ほら、ニックスせんせー！行ってこーい」

「いってー！だから叩くなって言ってるだろ！」

「ナディアー、ご飯出来たよ」

大広間から食器を並べながら、ティーシエルが声をかける。その途端、バタバタと慌しい

音が響き、ナディアが階段を駆け下りてきた。

「きゃー！おいしそー！流石ティーシエルね！」

並べられた料理の数々を眺めて、いそいそと椅子に座る。そんなナディアを見つめるティ

ーシエルは、完全に呆れ顔だ。

「全く……もうちょっと落ち着いて食べられないわけ？……あ、今日の午後にアンカースの方へ行って来るから」

「わかってるわ。気をつけてね、大魔導士様！フフ……すっかり世界の中から御用達になってるわね」

ナディアは料理を口に運びながら、ティーシエルは一々その手を止めながら会話をする。

「ま、当然でしょ？」

フツと自信に満ち溢れた笑みを浮かべる。

「一応……二児の父な訳だし……」

と少し赤くなりながら、ポツリと付け加える。彼らもラフィスト達が結婚した暫く後に結婚し、双子に恵まれた。男の子と女の子一人ずつだ。

「頑張れ！新米パパ！」

「茶化すな！」

真っ赤になってムキになるティーシエルに、ナディアが手を振って笑う。

「照れない、照れない！あ、明日忘れないでよね！」

「わかってるよ。僕が、忘れる訳無いでしょ？」

「それもそうね」

暫くして、出かけていたアルベルト卿とリーサの二人が帰ってくる。人が増えた大広間は、笑いで満ち溢れていた。

「はあ……サード様、カッコいいわよね」

「あのクールな所とか」

「時々見せる笑顔とか」

「素敵」

アンカース城内では、既にサードのファンが大量に存在しているほどに、サードの人気や評判は高かった。そのざわめきの中、アデルとサードが連れ立って歩いていく。

「いや、サードは人気者だねえ」

「アデル！」

からかう様なアデルの言葉に、サードが噛み付く。黒騎士団長となつてアデルと肩を並べた今も、サードはアデルに敵わないと思う。そんなアデルにからかわれると、まだまだ子供だと言われている様な気がして、サードとしては悔しいものがある。サードの心情を知

つてか知らずか、アデルはなおもサードをからかう。

「随分モテモテじゃないか」

「そんな事は無いさ。……それよりアデル、悪いが……」

「明日、休ませてくれ……だろ？」

面食らったような顔をしているサードに、相変わらずだねと言って、アデルがその頭をポンと叩く。そしてにっこりと笑った。

「だって、明日は君にとって大切な日だからね」

「アデル……」

アデルの方をじっと見ていたサードの手に、大量の荷物がドンツと乗せられる。これは先

程までアデルが持っていたものだ。サードがそれを見つめ疑問符を浮かべていると、すた

こらとアデルが先に行く。

「ま、今日は明日の分まで働いてもらうから……それ、よろしくな！」

「……っ！アデルー！」

サードが叫んだと同時に、アデルが手を振りながら走り出す。その背を追い、サードも城内を駆けて行った。

薄暗い洞窟の中、ジリジリと行き詰まりの方へ追い詰める者と、追いつめられる者の影二

つ。追い詰める方はニヤリと笑うと、懷から網を取り出した。

「フフフ……もう逃がさねーぜ……とりゃ！」

巨大な網が後者に覆い被さり、その動きを封じる。男はそれから羽を一つ取り、捕獲したそれを解放した。

「よっしゃー！ ついに幻の靈鳥、ルーの羽をゲットしたぜー！」

そう叫んだ後、彼はその場に倒れこんだ。

「もうあれから二年近く経つんだよなあ……ラフィストに姫君にサードにマツチヨ、マキノにハニーにアネさん……皆、どうしてっかなー」

この二年、彼にも様々な事があったのだが、それ以上に彼の頭を占めるのは二年前に彼らと共に過ごした日々だった。そんな自分に、繋がってのはそう簡単

に切れないもんだな、

と苦笑する。一度出来た絆は、切れるものじゃないのかもしれない。そうぼんやり考えて

いると、彼はある事を思い出した。

「そういや……明日じゃねえか？ 約束の日！」

ガバツと起き上がり、周囲に散らかった自分の荷物を適当に突っ込んでいく。

「急げー！……間に合えよ！」

袋を背負い、走り出した。彼、キルトは緑の髪をたなびかせながら、

約束の地へと向かう。

どんなに歳月が流れても、変わらない物がある。それは彼らにとって、二年前のあの時に育んだ友情、愛情、信頼、絆であった。人はただそれだけの事というかもしれない。けれど、時間は常に流れる。それは変える事が出来ないのだ。それと比例するかのように、彼ら自身もまた、変わっていく。変わらない物が在るように、変わってしまう物も存在するのだ。でもこの一時だけ、あの時のままでもいいと欲しいと願う。

——…あの緑溢れる大きな木の下、約束の地で。

The End

―エピローグ2―（後書き）

長い小説となっ^てしまいましたが、ここまで読んで頂きありがとうございます
ございました。作者が運営しているサイトでは、登場人物設定画な
ども載せておりますので、もし宜しければ作者紹介ページのLIN
Kから飛んで覗いてみて下さい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7522b/>

ユグドラシル

2011年8月26日00時18分発行